

名古屋市中川区

せん の ん じ  
千音寺遺跡

第9次発掘調査報告書

2023

名古屋市緑政土木局  
名古屋市教育委員会





1区全景空撮 南から



3区全景空撮 西から



1区 063SE 大井戸出土状況



1区 063SE 大井戸出土の埋納物(奥左手から時計回りに、青瓶・赤瓶・小曲物)



1 区 063SE 大井戸出土小曲物内容物



横櫛 (木 23)・須恵器皿 (063)



須恵器皿 (063) 裏面の墨書

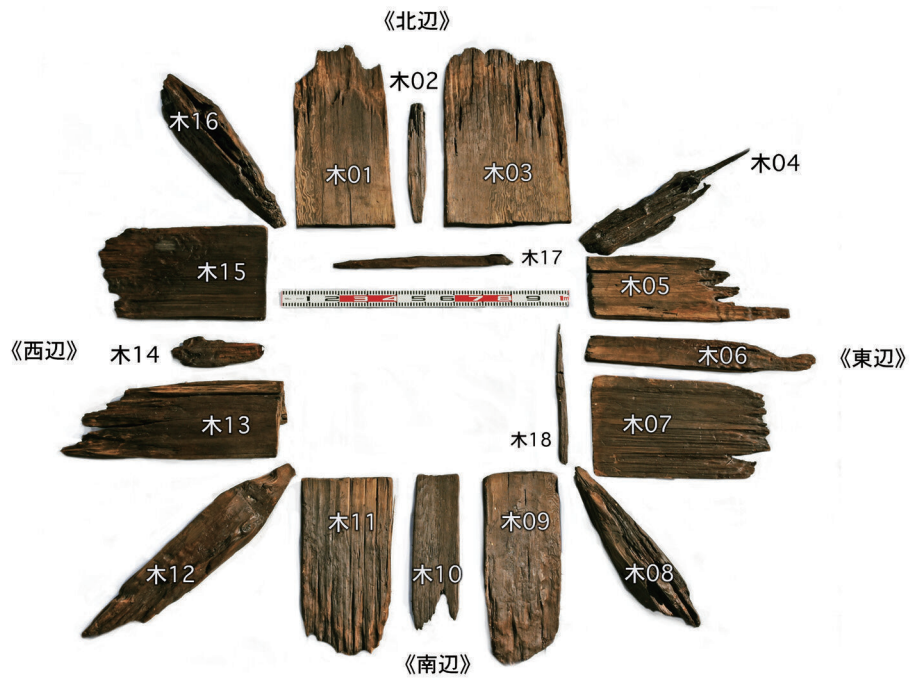


第四の長頸瓶

第三の長頸瓶の口縁部

その他の口縁部  
(全て別個体)

1 区 063SE 大井戸出土の埋納物



1区 063SE 大井戸井戸材



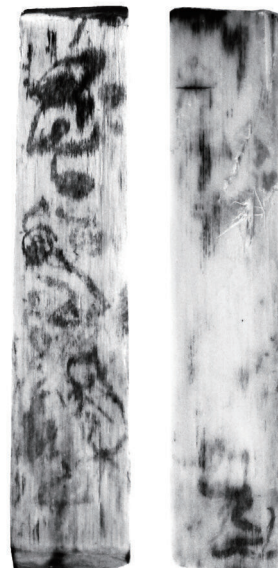
手斧による加工痕がみられる板材



大井戸井戸材出土状況 西から



064SE 木筒 (木27)



064SE 木筒 (木27) 赤外線画像

1区 出土木製品 (上段・中段：063SE、下段：064SE)



1区包含層出土 灰釉皿(046)【墨書】



1区122SE出土 山茶碗(098)【墨書】



1区001SD出土 灰釉皿(003)【赤色顔料付着】



1区017SD出土【昆虫化石】



040SE 曲物(木26)



040SE 曲物(木26)内面綴じ合わせ部分拡大



2区 001SK 出土遺物



3区 139SD 出土遺物



名古屋市中川区

せん の ん じ  
千音寺遺跡

第9次発掘調査報告書

2023

名古屋市緑政土木局  
名古屋市教育委員会

# 例 言

1. 本書は愛知県名古屋市中川区富田町千音寺平毛（ひらげ）、無田居（むらい）、上前田畔（かみまえだぐろ）・猪ノ木（いのき）に所在する千音寺遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査および一次整理作業（出土遺物の洗浄・注記作業など）については、「市道千音寺線第1号外1路線道路改良工事に伴う千音寺遺跡第9次発掘調査業務委託」として、名古屋市緑政土木局道路建設課が発注し、名古屋市教育委員会文化財保護室の指導・助言のもと、株式会社四門名古屋支店が受託して実施した。  
二次整理作業（出土遺物の接合・復元・実測作業や資料分析）および発掘調査報告書の作成については、「市道千音寺線第1号外1路線道路改良工事に伴う千音寺遺跡第9次発掘調査報告書作成業務委託」として改めて名古屋市緑政土木局道路建設課が発注し、名古屋市教育委員会文化財保護室の指導・助言のもと、株式会社四門名古屋支店が受託して実施した。
3. 令和3年度は、発掘調査を令和3年（2021年）9月6日から同年12月28日まで実施し、一次整理作業を令和4年（2022年）1月4日から令和4年3月15日まで実施した。  
令和4年度は、二次整理作業及び発掘調査報告書の作成を令和4年（2022年）9月29日から令和5年（2023年）3月17日まで実施した。  
調査面積は以下のとおりである。  
1区（1地点）：2,340㎡  
2区（2地点）：450㎡  
3区（3地点）：1,390㎡  
合計調査面積　　：4,180㎡
4. 調査体制及び参加者は以下の通りである（主な人員のみ）。
  - 令和3年度（2021年度）  
監督員 下田 旭（名古屋市緑政土木局道路建設部道路建設課道路係）  
野澤則幸（名古屋市教育委員会事務局生涯学習部文化財保護室）  
現場代理人 樋田泰之  
主任調査員（主任技術者・現場作業） 樋田泰之・坂野俊哉  
計測員（主任技術者・測量作業） 樋田泰之・金子堅二  
調査補助員 伊藤 眸・磯谷充子
  - 令和4年度（2022年度）  
監督員 下田 旭（名古屋市緑政土木局道路建設部道路建設課道路係）  
林 順（名古屋市教育委員会事務局生涯学習部文化財保護室）  
現場代理人 樋田泰之  
主任調査員（主任技術者・整理作業） 樋田泰之・坂野俊哉  
調査補助員 伊藤 眸・磯谷充子
5. 調査にあたっては、名古屋市千音寺土地区画整理組合、中部地域整備株式会社、株式会社山田組、愛知県埋蔵文化財調査センター、公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センター、株式会社イビソクなど関係各位の御協力を賜った。
6. 報告書作成にあたっては、城ヶ谷和広氏（愛知県埋蔵文化財調査センター）・鈴木正貴氏・鬼頭 剛氏（愛知県埋蔵文化財センター）・中野晴久氏・山本智子氏・寺井崇浩氏（愛知学院大学）・河野あすか氏（刈谷市歴史博物館）・小栗康寛氏（とこなめ陶の森資料館）・鈴木敏則氏（元浜松市博物館長）・大杉規之氏にさまざまな

助言および協力を頂戴した。ここに記して御礼申し上げる次第である。

7. 一次・二次整理作業および出土遺物の実測・デジタルトレース作業は、大谷舞菜・熊谷洋子・清水香枝・藤森紀子・嶋田育世・滝瀬彩菜・中島真華・永津良子・丸木理子の協力を得た。
8. 発掘現場および出土遺物の写真撮影は、樋田泰之・坂野俊哉が行なった。
9. 今回出土した遺物、作成した図面、写真などの記録および各種資料はすべて名古屋市教育委員会で保管している。
10. 本書は、下田 旭(道路建設課)・林 順(文化財保護室)の監督の下、樋田が編集した。執筆分担は以下のとおりである。

第1章第1節 林 順(名古屋市教育委員会事務局生涯学習部文化財保護室)

第1章第2節～第5節、第2章第4節～第7節、第4章第3節 樋田泰之(株式会社四門)

第2章第1節～第3節、第8節～第10節、第4章第1節・第2節 坂野俊哉(株式会社四門)

第3章第1節・第2節 株式会社パレオ・ラボ

付載 鬼頭 剛(愛知県埋蔵文化財センター)

## 凡 例

1. 調査記録の方位及び座標は、国土交通省告示に定められた国土座標の平面直角座標第Ⅶ系に準拠し、世界測地系(測地成果2011)にて表記している。メートル(m)単位での表記を基本とする。
2. 標高は全てT.P.(東京湾平均海面高度)による。(T.P.-1.412=N.P.(名古屋港基準面))
3. 土層の土色に関しては『新版標準土色帖』(2021年版 日本色研事業株式会社)を用いた。
4. 本書で使用する遺構は、遺構記号や遺構番号を用いず遺構の性格での表記とした。  
遺物番号は遺物実測図の通番を基本に、地点上げ遺物の場合は出土地点を表す「d」を先に記し、そのあとに通し番号を付した。なお、番号は調査区毎に採番した。
5. 遺構図や遺物実測図の縮尺は、個々の図に表示してある。遺物の出土分布図に関してはその種類によって縮尺が統一されていない場合もあるが、各図に表示した。
6. 参考文献は必要に応じて本文脚注などに記したのものもあるが、巻末にも目録として一括して掲載した。
7. 出土遺物の時期及び分類について参考した文献については、目次の後ろに編年表とともに示した。
8. 遺構の表記に関するものについては、下記文献を参考にした。  
文化庁文化財部記念物課『定本 発掘調査のてびき』2016 同成社

# 目 次

巻頭図版

序

例言・凡例

第1章	調査の経緯と遺跡の環境	1
第1節	調査にいたる経緯	1
第2節	遺跡の位置と地理的歴史的環境	1
第3節	千音寺遺跡における既往の調査	5
第4節	発掘調査の方法	10
第5節	調査経過	13
第2章	調査成果	20
第1節	1区の基本層序	20
第2節	1区の主な遺構と遺物	47
第3節	1区のまとめ	83
第4節	2区の基本層序	88
第5節	2区の主な遺構	93
第6節	2区の主な出土遺物	93
第7節	2区のまとめ	95
第8節	3区の基本層序	99
第9節	3区の主な遺構と遺物	116
第10節	3区のまとめ	132
第3章	自然科学分析	136
第1節	千音寺遺跡の放射性炭素年代測定	136
第2節	千音寺遺跡出土の灰釉陶器に付着する赤色顔料の分析	139
第4章	まとめ	141
第1節	千音寺遺跡第9次発掘調査成果について	141
第2節	1区 063SE 大井戸に関する小考	142
第3節	1区 070SE 出土の暗文土師器について	146
引用・参考文献		150
付載	千音寺遺跡で確認される崖地形について	1
図版		

## 挿 図 目 次

第 1 図	千音寺遺跡の位置	1	第 33 図	南側個別遺構図 (101SK・102SK・123SK)	79
第 2 図	周辺遺跡配置図	2	第 34 図	116SK・117SE・122SE 平面図・断面図	81
第 3 図	調査区配置図	6	第 35 図	南側個別遺構図 (125SD・126SD・128SK・129SK・134SD・136SK・137SK)	82
第 4 図	調査区グリッド図	8	第 36 図	2 区平面図	89
第 5 図	『尾張国富田荘絵図』	12	第 37 図	2 区セクション図 1	91
第 6 図	1 区平面図 (1/7)	23	第 38 図	2 区セクション図 2・001SK・004SK	94
第 7 図	1 区平面図 (2/7)	25	第 39 図	他遺跡の祭祀遺物の例	96
第 8 図	1 区平面図 (3/7)	27	第 40 図	伊勢型鍋を伴う中世墓の例	97
第 9 図	1 区平面図 (4/7)	29	第 41 図	3 区概念図	99
第 10 図	1 区平面図 (5/7)	31	第 42 図	3 区平面図 (1/4)	101
第 11 図	1 区平面図 (6/7)	33	第 43 図	3 区平面図 (2/4)	103
第 12 図	1 区平面図 (7/7)	35	第 44 図	3 区平面図 (3/4)	105
第 13 図	1 区セクション図 1	37	第 45 図	3 区平面図 (4/4)	107
第 14 図	1 区セクション図 2	39	第 46 図	3 区セクション図 1	109
第 15 図	1 区セクション図 3	41	第 47 図	3 区セクション図 2	111
第 16 図	1 区セクション図 4	43	第 48 図	3 区セクション図 3	113
第 17 図	1 区セクション図 5	45	第 49 図	3 区セクション図 4	115
第 18 図	1 区周辺環境概念図	48	第 50 図	020SK 平面図・断面図	117
第 19 図	道路状遺構遺物出土状況図	49	第 51 図	111SD 平面図・断面図	119
第 20 図	008SD・土堤状況図	53	第 52 図	112SD・141SE 平面図・断面図	123
第 21 図	掘立柱建物プラン	55	第 53 図	137SK・150SD・160SK・168SP 平面図・断面図	125
第 22 図	土堤下層遺構平面図	57	第 54 図	138SE 平面図・断面図	126
第 23 図	017SD 平面図・断面図	58	第 55 図	139SD 平面図	128
第 24 図	030SE 平面図・断面図	60	第 56 図	121SD・127SD・128SE 平面図	129
第 25 図	040SE 平面図・断面図	64	第 57 図	東部平面図・断面図	131
第 26 図	089SD 周辺平面図	65	第 58 図	マルチプロット図	138
第 27 図	063SE 平面図・断面図	67	第 59 図	暦年較正結果	138
第 28 図	064SE 平面図・断面図	70	第 60 図	赤色顔料の蛍光 X 線分析試料写真	140
第 29 図	070SE 平面図・断面図	72	第 61 図	赤色顔料の蛍光 X 線分析結果	140
第 30 図	074SE 平面図・断面図	74	第 62 図	暗文土器の県内出土遺跡	146
第 31 図	127SE 平面図・断面図	75	第 63 図	暗文土器の出土例 (名古屋市内中心)	148
第 32 図	南側個別遺構図 (103SK・104SK・105SE・106SD・107SK・108SK・112SD・113SD・114SK・115SD)	77			

## 付 表 目 次

第 1 表	周辺遺跡一覧表	3	第 7 表	測定試料および処理	136
第 2 表	既往調査一覧表	7	第 8 表	放射性炭素年代測定および暦年較正の結果	137
第 3 表	遺構一覧表 (1 区)	84 ~ 86	第 9 表	分析資料の詳細	139
第 4 表	伊勢型鍋を伴う中世墓一覧表	97	第 10 表	暗文土器の出土例 (名古屋市内中心)	149
第 5 表	遺構一覧表 (2 区)	98			
第 6 表	遺構一覧表 (3 区)	133 ~ 135			

## 卷頭図版目次

卷頭図版第 1  
卷頭図版第 2  
卷頭図版第 3

卷頭図版第 4  
卷頭図版第 5  
卷頭図版第 6

## 図版目次

図版第 1 ～図版第 18	実測図 (1) ～ (18) 【1 区】	図版第 32	土器観察表・石器観察表
図版第 19	実測図 (19) 【2 区】	図版第 33	木製品観察表
図版第 20 ～図版第 25	実測図 (20) ～ (25) 【3 区】	図版第 34 ～図版第 63	遺物写真
図版第 26 ～図版第 31	土器観察表		

## 付 載 図 面

第 1 図 1 区深掘実施地点……………4      第 2 図 P1・P2 柱状図…………… 5

# ◆須恵器・灰釉陶器

窯跡略称(猿投山西南麓古窯跡群=猿投窯、尾北古窯跡群=尾北窯)  
 猿投窯(東山地区=H、岩崎地区=I、折戸地区=O、黒笹地区=K、井ヶ谷地区=IG、鳴海地区鳴海支群=NN、鳴海地区有松支群=NA)  
 尾北窯(篠岡地区=S、下原地区、高蔵寺地区=C)

西暦	時代	猿投窯 時期区分
		(伊勢山中学校遺跡)
450	古墳時代	東山111号窯式 H-111
		東山48号窯式 H-48
		城山2号窯式
500	欽明	東山11号窯式 H-11
		東山10号窯式 H-10
550	敏達 用明 崇峻	東山61号窯式 H-61
		蝮ヶ池窯式
600	推古	東山44号窯式 H-44
650	飛鳥時代	東山15号窯式 H-15
		岩崎101号窯式 I-101
700	舒明	岩崎17号窯式 I-17
		岩崎41号窯式 I-41
750	奈良時代	高蔵寺2号窯式 C-2
		岩崎25号窯式 I-25
800	元正 聖武 謙仁 称徳 光仁 桓武	鳴海32号窯式 NN-32
		折戸10号窯式 (折戸80号) (黒笹7号) O-10
850	嵯峨 淳和 仁明 文徳 清和	黒笹14号窯式 K-14
		黒笹90号窯式(前半) K-90
900	醍醐 光孝 宇多	黒笹90号窯式(後半) K-90
		折戸53号窯式 O-53
950	平安時代	東山72号窯式 H-72
		百代寺窯式

編年表については、下記文献を参考にした。

〈参考文献〉

## ●尾張須恵器・緑釉・灰釉陶器

城ヶ谷和広「第1章 総論 第3節 編年及び編年表 土師器・須恵器・施釉陶器(緑釉・灰釉)」『愛知県史 資料編4 考古4 飛鳥～平安』2011 愛知県

城ヶ谷和弘・井上喜久男「第4章第5節 編年論 須恵器・瓷器」『愛知県史 別編 窯業1 古代 猿投系』2015 愛知県

## ●弥生～古墳期土器編年

早野浩二「知多式以前-松崎遺跡・上浜田遺跡の脚台式製塩土器-」研究紀要第14号 2013 愛知県埋蔵文化財センター

## ●古代煮沸具(鍋・甑)

永井宏幸「尾張平野を中心とした古代煮沸具の変遷」『鍋と甑そのデザイン』第4回東海考古学フォーラム 1996 東海考古学フォーラム 尾張大会実行委員会

## ●山茶碗

藤澤良祐「第1章 総論 第2節 灰釉陶器から山茶碗生産へ」『愛知県史 別編 窯業2 中世・近世 瀬戸系』2007 愛知県 山本智子「第3章 山茶碗」『新版 概説 中世の土器・陶磁器』2022 真陽社

## ●常滑焼(常滑窯、渥美焼(渥美窯))

中野晴久「編年表」『愛知県史 別編 窯業3 中世・近世 常滑系』2012 愛知県

## ●古瀬戸、瀬戸・美濃大窯製品

藤澤良祐「編年表」『愛知県史 別編 窯業2 中世・近世 瀬戸系』2007 愛知県

中野晴久「第5章 中世陶器」『新版 概説 中世の土器・陶磁器』2022 真陽社

## ●中近世鍋類

北村和宏「尾張の伊勢型鍋」『鍋と甑そのデザイン』第4回東海考古学フォーラム 1996 東海考古学フォーラム尾張大会実行委員会

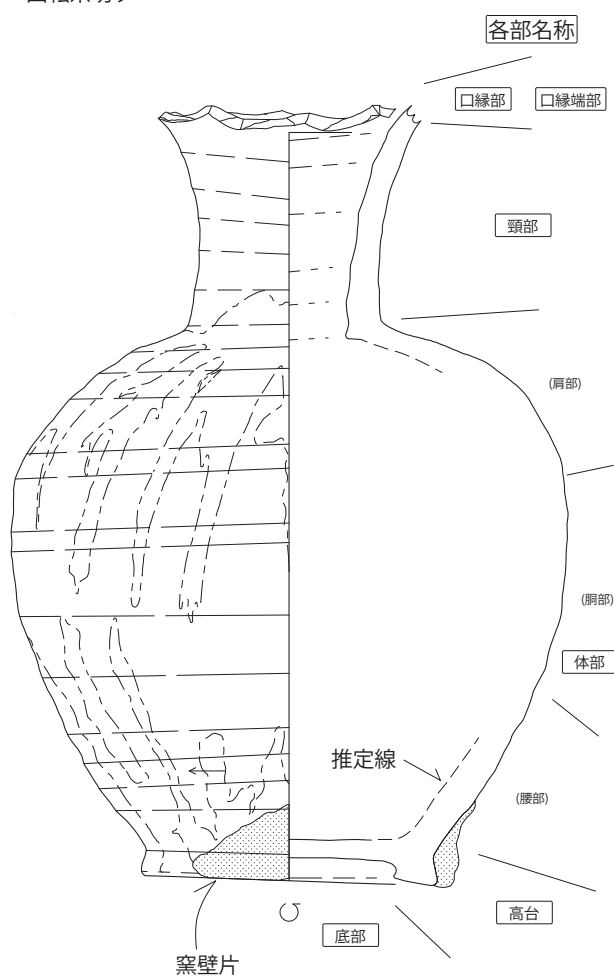
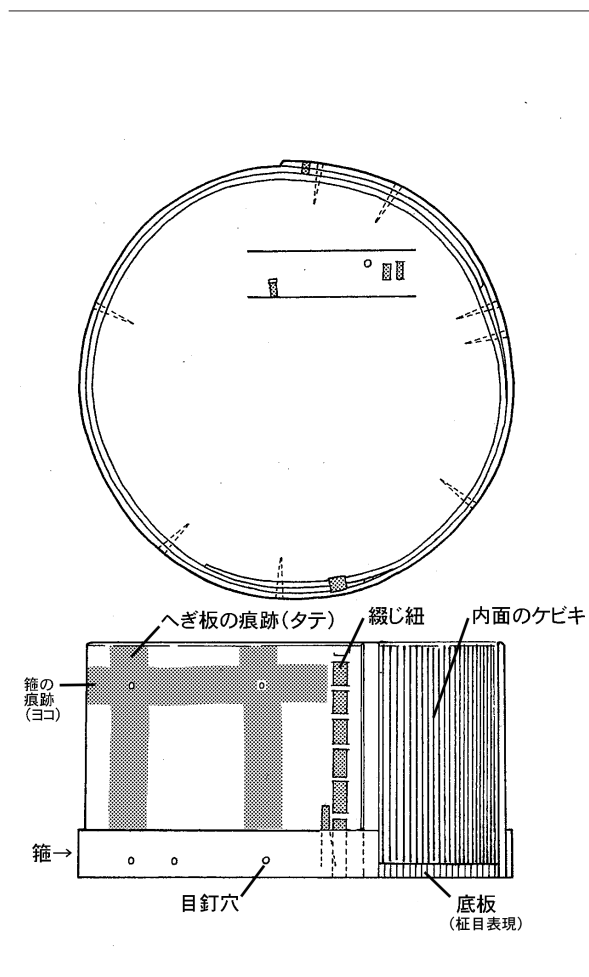
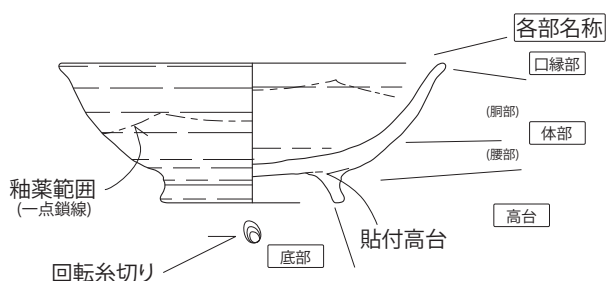
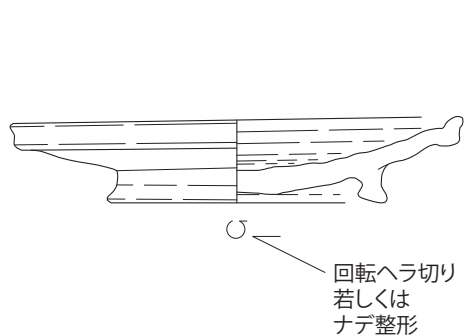
# ◆中世陶器

西暦	時代	(尾張型)山茶碗	常滑窯	渥美窯	古瀬戸・大窯	鍋	羽釜
1100	平安時代	堀河 鳥羽	第3型式	常滑1a型式	渥美1a型式	伊勢型鍋A1類	
			第4型式	常滑1b型式			
1150	鎌倉時代	崇徳 近衛 後白河 二条 六条 高倉 安德	第5型式	常滑2型式	渥美1b型式	伊勢型鍋A2類	
			第6型式	常滑3型式			
1200	鎌倉時代	後鳥羽 土御門 順徳 仲恭	第7型式	常滑4型式	渥美2a型式	伊勢型鍋A3類	
			第8型式	常滑5型式			
1250	鎌倉時代	後堀河 四条 後嵯峨 後深草 龜山	第9型式	常滑6型式	渥美2b型式	伊勢型鍋A4a類	
			第10型式	常滑7型式			
1300	鎌倉時代	後宇多 後伏見 後二条 花園	第11型式	常滑8型式	渥美3a型式	伊勢型鍋A4b類	羽釜A1類
			第12型式	常滑9型式			
1350	室町時代	後醍醐 後村上 長慶 後龜山	第13型式	常滑10型式	渥美3b型式	伊勢型鍋A5類	羽釜A2類
			第14型式	常滑11型式			
1400	室町時代	後小松 称光	第15型式	常滑12型式	渥美3c型式	伊勢型鍋A6類	羽釜A3類
			第16型式	常滑13型式			
1450	室町時代	後花園 後土御門	第17型式	常滑14型式	後IV期古段階	内耳鍋A1類	羽釜B1類
			第18型式	常滑15型式			
1500	室町時代	後柏原 後奈良	第19型式	常滑16型式	大窯 第1段階前半	内耳鍋A2類	羽釜B2類
			第20型式	常滑17型式			
1550	室町時代	正親町 後陽成	第21型式	常滑18型式	第2段階前半	内耳鍋A3類	羽釜B3類
			第22型式	常滑19型式			
1600	室町時代		第23型式	常滑20型式	第3段階前半		
			第24型式	常滑21型式			

### ◆実測遺物の凡例について

実測図については、基本的に土器・石器はS=1/3、木製品はS=1/5で統一をしているが、その他の縮尺で掲載する際には、適時スケールや文章にて示している。

実測図の表現については、下に示した。



(なお、この頁の土器はS=1/2、木製品についてはS=2/5で示している。)



## 第1章 調査の経緯と遺跡の環境

### 第1節 調査にいたる経緯

本調査は、名古屋市緑政土木局（以下、緑政土木局）が名古屋市<sup>とみだちょうせんのみち</sup>中川区富田町千音寺地内で実施した市道千音寺線第1号外1路線道路改良工事によるものである。

当該地は、周知の埋蔵文化財包蔵地である千音寺遺跡の北半部にあたる。令和3年(2021年)2月12日には、緑政土木局より2土建第395号で文化財保護法（以下、同法）第94条第1項に基づく埋蔵文化財発掘の通知が提出された。既往の調査（第6次～第8次発掘調査）では、工事計画範囲及びその周辺において遺跡が良好に残存している状況が確認されているため、工事計画範囲の一部については発掘調査の実施が必要である旨が、愛知県県民文化局文化財室（以下、愛知県）より4月15日付け3文芸第214号で通知された。

発掘調査業務については入札の結果、株式会社<sup>しもん</sup>四門名古屋支店（以下、四門）が選定され、令和3年8月12日には緑政土木局、四門、名古屋市教育委員会（以下、教育委員会）の三者において協定が締結された。8月13日には四門より同法第92条第1項に基づく届出が愛知県に提出され、8月30日付け3文芸第1355号にて受理通知を受けたため、9月6日より調査を開始した。

整理作業及び報告書作成業務については、令和3年度中の完了が難しいことが想定されたため、2ヶ年で進めることとなった。令和3年度には、四門が発掘調査と併行して遺物の洗浄・注記作業まで実施した。令和4年度には、緑政土木局が出土遺物の接合・復元・実測から報告書作成までの業務を改めて発注し、再び受託した四門が教育委員会の指導・助言のもと実施した。

### 第2節 遺跡の位置と地理的歴史的環境

#### 遺跡の位置

千音寺遺跡は、古代から中・近世にかけての複合遺跡であり、名古屋市域の西側に位置する中川区の中でも北西部分にある（第1図）。遺跡の存在する富田地区は中川区のうち<sup>しょうないがわ</sup>庄内川の西側に位置し、歴史的には江戸時代まで<sup>かいとうぐん</sup>海東郡に属していた。

千音寺遺跡は、現在約2.5km東側を南北に流れる庄内川の堆積物によって形成された標高2m以下の沖積平野に位置する。



（行政界について令和4(2022)年1月1日時点）  
上記図面は国土地理院作成の「数値地図(国土基本情報)」の行政区画データから整備した。

第1図 千音寺遺跡の位置



県遺跡番号	包蔵地名	ふりがな	市町村名	遺跡の種類	時代
008005	宿跡町遺跡	しゆくあとちょう	名古屋市市中村区	散布地	平安・中世
008006	稲葉地東遺跡	いなばじひがし	名古屋市市中村区	散布地	平安・中世
008007	稲葉地城跡	いなばじ	名古屋市市中村区	城館跡	中世
008010	岩塚1号墳	いわつか1ごうふん	名古屋市市中村区	古墳	古墳
008011	岩塚2号墳	いわつか2ごうふん	名古屋市市中村区	古墳	古墳
008012	岩塚3号墳	いわつか3ごうふん	名古屋市市中村区	古墳	古墳
008013	岩塚城跡	いわつかじょう	名古屋市市中村区	城館跡	中世
013012	伏屋遺跡	ふしや	名古屋市中川区	散布地	平安・中世
013013	前田城跡	まえだじょう	名古屋市中川区	城館跡	中世
013014	助光城跡	すけみつじょう	名古屋市中川区	城館跡	不明
013015	千音寺遺跡	せんのおんじ	名古屋市中川区	散布地	古墳・奈良・平安・中世
013017	戸田A遺跡	とだA	名古屋市中川区	貝塚/散布地	平安・中世/平安・中世
013019	榎津城跡	えのきづじょう	名古屋市中川区	城館跡	中世
013020	包里遺跡	かのさと	名古屋市中川区	散布地	平安・中世
013032	戸田遺跡	とだ	名古屋市中川区	貝塚/散布地	平安・中世/平安・中世
090046	増田長盛邸跡	ましたながもりてい	稲沢市	城館跡	中世
090047	郷前遺跡	ごうまえ	稲沢市	散布地	弥生
090048	土田遺跡	つちだ	稲沢市	集落跡	弥生・古墳・奈良・平安・中世・近世
090207	中之庄海道遺跡	なかのしょうかいどう	稲沢市	散布地	奈良・平安・中世
210002	清洲城下町遺跡	きよすじょうかまち	清須市(旧清洲町)	城館跡	中世・近世
210003	廻間遺跡	はさま	清須市(旧清洲町)	集落跡	弥生・古墳・奈良・平安・中世
210005	土田遺跡	つちだ	清須市(旧清洲町)	集落跡	弥生・古墳・奈良・平安・中世
213001	清洲城	きよすじょう	清須市(旧清洲町)	城館跡	中世
21Y001	武衛家居城	ぶえいけ	清須市(旧清洲町)	城館跡	中世
220002	外町遺跡	そとまち	清須市(旧新川町)	集落跡	中世
220003	清洲城下町遺跡	きよすじょうかまち	清須市(旧新川町)	城館跡	中世・近世
280001	牧野遺跡	まきの	津島市	散布地	弥生・古墳・奈良・平安・中世
280002	寺野廃寺	てらのはいじ	津島市	社寺跡	奈良
280003	寺野遺跡	てらの	津島市	散布地	弥生・古墳・奈良・平安・中世・近世
280004	蛭間遺跡	ひるま	津島市	散布地	弥生・古墳・奈良・平安・中世
280009	持竿遺跡	もちざお	津島市	散布地	平安
280010	大木遺跡	だいぎ	津島市	散布地	古墳・奈良・平安・中世
280011	元屋敷遺跡	もとやしき	津島市	集落跡/散布地	弥生/古墳・奈良・平安・中世
280012	光正寺遺跡	こうしょうじ	津島市	散布地	弥生・古墳・奈良・平安・中世
280014	大坪遺跡	おおつぼ	津島市	散布地	古墳
280031	神守元屋敷遺跡	かもりもとやしき	津島市	散布地	古墳・奈良・平安・中世
280032	郷前遺跡	ごうまえ	津島市	散布地	中世
293001	深田城	ふかだじょう	あま市(旧七宝町)	城館跡	不明
293002	桂城	かつらじょう	あま市(旧七宝町)	城館跡	不明
300018	うしや遺跡	うしや	あま市(旧美和町)	散布地	古墳・奈良・平安・中世
300026	沢遺跡	さわ	あま市(旧美和町)	散布地	中世
300027	篠田廃寺跡	しのだはいじ	あま市(旧美和町)	社寺跡/散布地	平安/弥生・古墳・中世
300028	元柳遺跡	もとやなぎ	あま市(旧美和町)	散布地	古墳
300029	山ノ神遺跡	やまのかみ	あま市(旧美和町)	散布地	中世
300034	三分寺遺跡	さぶでら	あま市(旧美和町)	—	平安・鎌倉
300035	堂東遺跡	どうとう	あま市(旧美和町)	—	平安・鎌倉
310006	方領遺跡	ほうりょう	あま市(旧甚目寺町)	散布地	中世
310007	屋敷遺跡	やしき	あま市(旧甚目寺町)	散布地	中世
310008	阿弥陀寺遺跡	あみだじ	あま市(旧甚目寺町)	集落跡	弥生・中世
310010	法性寺跡	ほっしょうじ	あま市(旧甚目寺町)	社寺跡	奈良・平安
310011	大淵遺跡	おおぶち	あま市(旧甚目寺町)	集落跡	弥生・古墳・奈良
310012	甚目寺遺跡	じもくじ	あま市(旧甚目寺町)	社寺跡	奈良・平安・中世・近世・近現代
310013	清林寺遺跡	せいりんじ	あま市(旧甚目寺町)	社寺跡/その他の遺跡(集落跡?)	奈良・平安/中世
310017	庚申塚	こうしん	あま市(旧甚目寺町)	不明	中世
310018	金山塚	かなやま	あま市(旧甚目寺町)	不明	中世
310019	銭神塚	ぜにがみ	あま市(旧甚目寺町)	不明	中世
310020	八剣塚	やつるぎ	あま市(旧甚目寺町)	不明	中世
310021	反魂香塚	はんごんこう	あま市(旧甚目寺町)	不明	中世
310022	白髭塚	しらひげ	あま市(旧甚目寺町)	不明	中世
310023	無明塚	むめい	あま市(旧甚目寺町)	不明	中世
310024	一里塚	いちり	あま市(旧甚目寺町)	不明	中世
310025	山伏塚	やまぶし	あま市(旧甚目寺町)	不明	中世
323001	松葉城	まつば	大治町	城館跡	不明
333001	蟹江城	かにえ	海部郡蟹江町	城館跡	中世
370058	郷浦遺跡	ごううら	愛西市(旧佐屋町)	散布地	中世
370059	郷西遺跡	ごうにし	愛西市(旧佐屋町)	散布地	中世・近世
370060	郷前遺跡	ごうまえ	愛西市(旧佐屋町)	散布地	中世
373002	大野城	おおの	愛西市(旧佐屋町)	城館跡	不明

第1表 周辺遺跡一覧表

沖積平野は自然堤防(微高地)・旧河道・氾濫平野などの地形的要素によって構成されており、現在の表層地質図によれば、1区の北端、2区の西側、3区の東側は自然堤防上に位置し、それ以外は氾濫平野に属していることになる(第2図・第3図)。但し、自然堤防地形は1区の北端部のみの確認に留まり、その他は6～7次調査以後に工事等によって削平されてしまったものと考えられる。

遺跡周辺の自然堤防分布を見ていくと、①千音寺遺跡南西部の<sup>にいえ</sup>新家3丁目周辺、②東側の千音寺集落(行雲寺・圓乗寺・長禪寺<sup>すなご</sup>周辺)、③大治町砂子集落(②の東側で自性院<sup>じしやういん</sup>周辺)がある。このうち①・③では分布調査などにより古代の須恵器、中世陶器(灰釉陶器・山茶碗・古瀬戸等)が採集されている<sup>註1</sup>。なお、遺跡名の「千音寺」は明治22年(1889年)の大合併までの村名でもあり、千音寺集落に今もある行雲寺の前身である聖徳山千手観音寺を略した名称が地名として残存したとする説が有力である<sup>註2</sup>。寺伝によれば「聖徳山千手観音寺」は、聖武天皇(701～756)の勅願により右大臣藤原豊成(704～766)により天平19年(747年)に天台宗の寺院として創建されたと言われる。鎌倉期の<sup>ふじわらのとよなり</sup>嘉禎元年(1235年)に浄土真宗に改宗し、江戸期の<sup>まんじ</sup>万治元年(1658年)に今の一音山行雲寺の名称となった。

### 周辺の歴史的環境

千音寺遺跡が形成される以前、弥生時代から古墳時代にかけての濃尾平野は伊勢湾が内陸深く入り組んでおり、遺跡を含む沖積平野の多くの部分は浅海底にあった。いちはやく陸化の進んだ地域では、海成の<sup>ひんてい</sup>浜堤上や河川の堆積により形成された微高地上に集落が作られていった。周辺地域の様相としては、津島市の<sup>てらの</sup>寺野遺跡(弥生時代中期朝日式～古墳時代初頭廻間式期、県遺跡番号280003。以下6桁の番号は県遺跡番号)や<sup>ひるま</sup>蛭間遺跡(弥生時代後期山中式期、280004)などがある。北側には清須市の<sup>あさひ</sup>朝日遺跡(弥生時代前期から始まる大集落遺跡、003004・200001・210001・220001)が存在する。隣接して<sup>はさま</sup>廻間遺跡(弥生時代後期山中式期～古墳時代初頭廻間式期が主体で前方後方墳・墳丘墓を検出。210003)、土田遺跡(古墳時代初頭廻間式期方形周溝墓・<sup>ひがしやま</sup>後期東山61号窯式期の墳丘墓など。090048・210005)、<sup>あみだじ</sup>阿弥陀寺遺跡(弥生時代中期貝田町式期～弥生時代後期山中式期の大規模環濠集落。310008)、<sup>たかくら</sup>大淵遺跡(弥生時代中期高蔵式期を主体とする小集落。310011)などが知られる。また、北東には庄内川対岸の<sup>しちしよしゃ</sup>七所社境内に古墳時代後期の<sup>いわつか</sup>岩塚古墳群(008010～008012)が存在する。

古代になると沖積平野の拡大にともなって台地の縁辺部や沖積平野の微高地上にも集落は拡散していった。<sup>きよす</sup>清洲城下町遺跡(210002・220003)では6世紀末頃から集落が営まれはじめたようで、10世紀後半の東濃系灰釉陶器の墨書土器の出土などから寺院関連施設の存在も想定される<sup>註3</sup>。廻間遺跡では古墳時代末期から中世にかけての河道から<sup>おりど</sup>折戸53号窯式期前後の灰釉陶器や<sup>あんもん</sup>暗文土師器皿が出土している。大淵遺跡では引き続き集落が継続し、6世紀末から10世紀前半まで遺物が出土しているほか、8世紀後半折戸10号窯式期の須恵器と共伴する木簡1点が溝から出土している。

古代は6世紀半ば欽明朝に仏教が伝来して以降、地方豪族を中心に寺院建設も進められた時代でもある。尾張国においても7世紀半ばに<sup>おわりがんごうじあと</sup>尾張元興寺跡(名古屋市中区)に<sup>がんこうじ</sup>「願興寺」が創建された。その後、程なくして<sup>じもくじ</sup>甚目寺遺跡(310012)・<sup>ほつしようじ</sup>法性寺跡(310010)・<sup>せいりんじ</sup>清林寺遺跡(310013)で寺院が創建されたと考えられる。ほかに<sup>てらの</sup>寺野廃寺(280002)・<sup>しのだ</sup>篠田廃寺跡(300027)等で古代瓦が採集されている。

中世に入ると千音寺遺跡、その2km南にある戸田遺跡(013032)・戸田A遺跡(013017)も含めた地域一帯は、『尾張国富田荘絵図』(臨済宗門覚寺に伝わる。観応2年(1351年)前後に成立<sup>註4</sup>)に表された。今も残る小字や地割、明治17年地籍図等から千音寺遺跡は絵図北側の「嶋山郷」「石丸」「御品田山後」の一部に含まれ、戸田遺跡・戸田A遺跡は絵図のうち中央付近の「横江里」に相当するものと考えられている。戸田遺跡では12世紀末～14世紀の尾張型第5～第8型式の山茶碗・皿、伊勢型鍋や古瀬戸が出土し、戸田川の度重なる洪水に伴う河道変化やそれに伴う貝殻を伴った整地跡等が確認されている。山茶碗を中心に墨書土器も各地で見られ、清洲城下町遺跡・廻間遺跡・土田遺跡・大淵遺跡・阿弥陀寺遺跡での出土例は井戸や溝からのものが多いようである。

千音寺遺跡のすぐ北側に松葉城(320001)・深田城(293001)、庄内川を挟んだ東側に稲葉地城跡(008007)が登録されているが、近世初期に成立した『信長公記』の天文21年(1552年)萱津合戦の記事にその名がみられる。いずれも江戸時代前期に整備されたとされる佐屋街道に比較的近い部分に位置することから、中世末には付近に尾張と伊勢を繋ぐ陸路があった可能性がある。

註1：愛知県埋蔵文化財センター中・近世研究部会「尾張国富田荘の考古学的研究 - 成願寺を中心として -」『研究紀要第5号』2004 愛知県埋蔵文化財センターより

註2：富田のあゆみ編集委員会「第二章 富田のあゆみ 四 江戸時代 (三) 各字の由来」『富田のあゆみ』1985 富田地区名古屋市合併三十周年記念事業実行委員会より

註3：62J区で検出された庇付き掘立柱建物SB81周辺の包含層から出土し、「沙中房」「大師寺」「堂司」「法」「副嘉」「大福」「生徳」などの寺院や吉祥句が記される。(鈴木正貴・城ヶ谷和広他『清洲城下町遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第17集 1990 愛知県埋蔵文化財センター)

註4：新修名古屋市史編集委員会「第四章 荘園・公領制下の人々の生活 第一節「富田荘絵図」の世界へ」『新修名古屋市史 第2巻』1998 名古屋市

### 《参考文献》

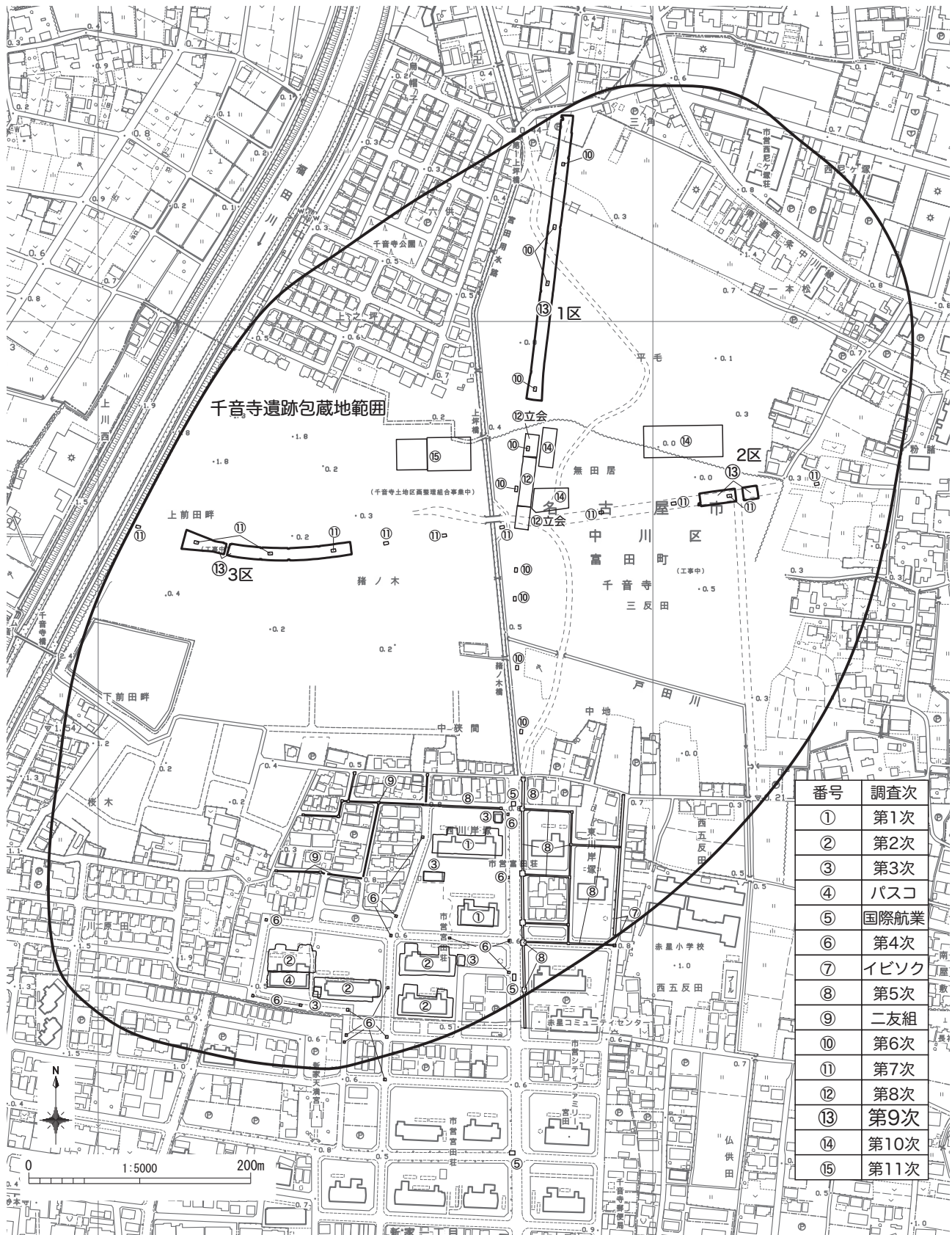
- 津島市史編さん委員会『津島市史(資料編)』1970 津島市教育委員会  
 新修名古屋市史資料編編集委員会『新修名古屋市史 資料編 考古1』2008 名古屋市  
 新修名古屋市史資料編編集委員会『新修名古屋市史 資料編 考古2』2013 名古屋市  
 愛知県史編さん委員会『愛知県史 資料編1 考古1 旧石器・縄文』2002 愛知県  
 愛知県史編さん委員会『愛知県史 資料編2 考古2 弥生』2003 愛知県  
 愛知県史編さん委員会『愛知県史 資料編3 考古3 古墳』2005 愛知県  
 愛知県史編さん委員会『愛知県史 資料編4 考古4 飛鳥～平安』2010 愛知県  
 愛知県史編さん委員会『愛知県史 資料編5 考古5 鎌倉～江戸』2017 愛知県

## 第3節 千音寺遺跡における既往の調査

千音寺遺跡は名古屋市教育委員会(以下市教委と略す)によって行われた平成10年(1998年)の市営宮田荘関連の発掘調査をはじめとして、今年度までで市教委主体で7回、民間調査会社主体で8回、計15回の調査が行われている。うち5回は下水道工事にとまなう調査のため調査面積は極めて限定的であり、遺跡範囲内の南部が主であった。

近年になり遺跡範囲内の北部では、今回の第9次発掘調査の事前調査として、道路建設予定地部分の試掘調査が市教委主体でおこなわれ(第6次・第7次)、本報告1区の南隣で第8次調査が行われた。また、本報告の調査と前後して1区の東西にて第10次・第11次の民間調査が行われ、千音寺遺跡の様相が解明されつつある。

第1章 調査の経緯と遺跡の環境



番号	調査次
①	第1次
②	第2次
③	第3次
④	パスコ
⑤	国際航業
⑥	第4次
⑦	イビソク
⑧	第5次
⑨	二友組
⑩	第6次
⑪	第7次
⑫	第8次
⑬	第9次
⑭	第10次
⑮	第11次

※下図は名古屋市住宅都市局都市計画部発行の名古屋都市計画基本図  
(縮尺 2,500 分の 1 R2「七宝・大治・万場・新家」の4図郭)を使用した。

第3図 調査区配置図

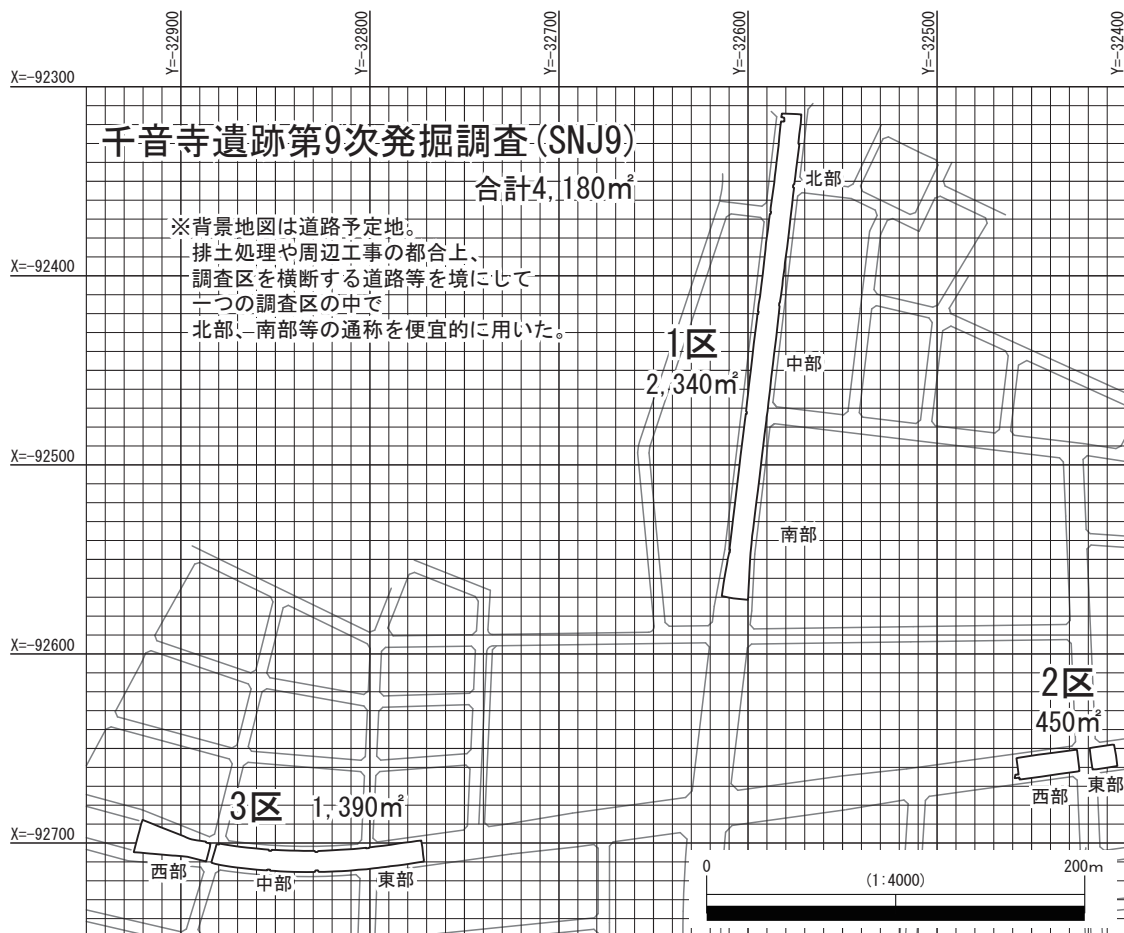
調査名	報告書	調査主体	調査面積 (m <sup>2</sup> )	調査原因	調査期間	主な時代	主な遺構 / 遺物	特記事項	
①	第1次	名古屋市 教育委員会	1,826	市営住宅 建設	平成10年 11月9日	～ 平成11年 3月19日	古墳時代 ～中世	溝・建物跡・井戸・鳥畑 状遺構 / 須恵器・土師器・ 灰釉陶器・山茶碗・輸入 磁器・中近世施釉陶器・ 近世磁器	中世屋敷地
②	第2次		4,268	市営住宅 建設	平成11年 5月17日	～ 平成11年 12月24日	古墳時代 ～中世	溝・建物跡・鳥畑状遺構 / 須恵器・土師器・灰釉 陶器・山茶碗・輸入磁器・ 中近世施釉陶器・近世磁 器	中世屋敷地
③	第3次	名古屋市 教育委員会	356	市営住宅 建設	平成12年 7月31日	～ 平成12年 9月21日	古代～ 中世	溝・土坑 / 須恵器・灰釉 陶器・山茶碗・常滑甕・ 中近世施釉陶器・近世磁 器・土師器・輸入磁器	
④	パスコ (2001)	名古屋市 住宅都市局	550	市営住宅 建設	平成12年 10月24日	～ 平成12年 11月24日	古墳時代 ～中世	溝・土坑 / 須恵器・土師器・ 山茶碗・常滑甕・伊勢型鍋・ 瓦・磁器・中近世施釉陶 器	中世屋敷地
⑤	国際航業 (2001)	名古屋市 上下水道局 下水道本部	50.4	下水道 築造工事	平成13年 3月26日	～ 平成13年 3月29日	中世	なし / 須恵器・山茶碗	
⑥	第4次	名古屋市 教育委員会	77	下水道 築造工事	平成13年 7月2日	～ 平成13年 7月31日	中世	なし / 須恵器・灰釉陶器・ 山茶碗・中近世施釉陶器・ 土師器	
⑦	イビソク (2004)	名古屋市 上下水道局 下水道本部	153	下水道 築造工事	平成15年 11月10日	～ 平成15年 11月27日	中世	土坑 / 山茶碗	
⑧	第5次	名古屋市 教育委員会	810	下水道 築造工事	平成15年 11月11日	～ 平成16年 3月31日	中世～ 近代	土坑 / 山茶碗	
⑨	二友組 (2004)	名古屋市 上下水道局	300	下水道 築造工事	平成16年 4月6日	～ 平成16年 7月1日	古墳時代 ～中世	溝・土坑 / 山茶碗	
⑩	第6次	名古屋市 教育委員会	100	土地区画 整理事業 に伴う 範囲確認	平成25年 2月28日	～ 平成25年 3月20日	古墳時代 ～中世	土坑・ピット / 須恵器・ 緑釉陶器・灰釉陶器・山 茶碗・土師器・輸入磁器・ 土錘・陶錘・金属製品	範囲確認調査
⑪	第7次		110	土地区画 整理事業 に伴う 範囲確認	平成25年 11月1日	～ 平成26年 1月31日	古墳時代 ～中世	土坑・ピット / 須恵器・ 灰釉陶器・山茶碗・土師 器	範囲確認調査
⑫	第8次	11	531 (本調査) 472 (常時立会)	宮田 用排水路 移設工事	平成29年 9月1日	～ 平成29年 11月1日	古代～ 中世	溝・土坑・ピット・鳥畑 状遺構 / 須恵器・土師器・ 土師質土器・緑釉陶器・ 灰釉陶器・山茶碗・輸入 磁器・土錘・瓦・砥石・鏡・ 馬の歯	和鏡「山吹双 鳥鏡」が出土
⑬	第9次	本報告	4,180	道路 改良工事	令和3年 9月6日	～ 令和3年 12月28日	巻末報告書抄録を参照		
⑭	第10次	-	3,111	商業施設 建設	令和3年 11月8日	～ 令和4年 3月28日	2023年刊行予定		
⑮	第11次	-	1,932	商業施設 建設	令和3年 12月9日	～ 令和4年 4月7日	2023年刊行予定		

第2表 既往調査一覧表

※報告書の番号は次頁参照

《千音寺遺跡既刊報告書》

- 1 山田鉦一・野口泰子『千音寺遺跡発掘概要報告書』1999 名古屋市見晴台考古資料館
- 2 山田鉦一・野口泰子・新山雅広・鈴木茂「千音寺遺跡(第1・2次)」『埋蔵文化財発掘調査報告書35』名古屋市文化財調査報告47 2000 名古屋市見晴台考古資料館
- 3 野澤則幸「千音寺遺跡第3次発掘調査」『埋蔵文化財発掘調査報告書36』名古屋市文化財調査報告49 2001 名古屋市見晴台考古資料館
- 4 伊藤雅乃『千音寺遺跡(北宮田団地)発掘報告書』2001 株式会社パスコ
- 5 東園千輝男『下水道工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書千音寺遺跡』2001 国際航業株式会社
- 6 村木誠「千音寺遺跡第4次発掘調査報告」『埋蔵文化財発掘調査報告書41』名古屋市文化財調査報告54 2002 名古屋市見晴台考古資料館
- 7 近藤真人・新山雅広・山形秀樹『千音寺遺跡発掘調査報告書 ー第4次中川区富田町千音寺付近下水道築造工事に伴う調査ー』2004 株式会社イビソク
- 8 田原和美『千音寺遺跡第5次発掘調査報告書』名古屋市見晴台考古資料館 2005
- 9 大浜良介『千音寺遺跡発掘調査報告書 ー第6次中川区富田町千音寺付近下水道築造工事に伴う調査ー』2004 株式会社二友組
- 10 木村有作「千音寺遺跡(第6次・第7次)」『埋蔵文化財発掘調査報告書73』名古屋市文化財調査報告90 2015 名古屋市教育委員会文化財保護室
- 11 佐野貴紀・田中夕佳・竹原弘展『千音寺遺跡第8次発掘調査報告書 ー宮田用水排水路移設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書ー』2018 株式会社イビソク



第4図 調査区グリッド図



前節でも述べた通り、遺跡は沖積層の上に形成されているが、北部と南部でその様相は異なる。北部は南北方向の自然堤防が現在の福田川沿いにみられ、現在は福田川の西側を流れる小切戸川が遺跡の北端を東から西へ流れていた名残の東西方向の自然堤防がそれぞれ残っており、それ以外は氾濫平野が占める。福田川・小切戸川や付近の蟹江川・新川などは庄内川の水害対策や新田開発の為に江戸時代後期になって開鑿や整備されたものである。

一方、南部は中央を大きくL字状に旧河道が占めるほかは氾濫平野によって構成されている。庄内川や五条川などの幾度とない流路変化の痕跡であると考えられる。

北部では、第6次・第7次の範囲確認調査で、主として尾張型第5～6の型式の山茶碗が確認されたほか、古代の須恵器が第8次調査のすぐ西側、第9次調査(本報告)の1区中央北側・3区西側に該当する部分で出土し、3区西側においては暗文土師器皿が出土している。また、出土量は少ないながら白磁・青磁や土錘も検出されている。

第8次調査では、東西方向に延びた自然堤防の高まりを利用した島畑状遺構が2面にわたって確認されている。下層からは北西-南東方向の畝構が検出されたほか、中間層掘削時に和鏡(山吹双鳥鏡)が出土しており、中世墓が存在した可能性もある。遺物は、尾張型第5～6型式の山茶碗・山皿や伊勢型鍋A4類が多く出土していることから13世紀後半のものが主体を占めるが、古代の須恵器や黒笹14号窯式・折戸53号窯式期の灰釉陶器や8世紀半ば～9世紀の濃尾型甕、10世紀・12世紀の清郷甕が出土している。また、陶錘・土錘が多く出土しており、第6次・第7次調査同様に青磁・白磁も数点出土している。第6次～第8次調査いずれも土師器の割合が少ないことや建物に関する遺構が少ないことから、集落の中心部からは外れた部分に相当することが推測される。

南部では、古墳時代～古代の須恵器片は少量出土するものの、中世の山茶碗などと混じる例が大半であり、遺構時期の主体は中近世であると理解されよう。特に遺跡南東部は、第3次～第5次・国際航業(2001)・イビソク(2004)の各調査結果などから、中世以前は湿地や水田であったと推定される。二友組(2004)の調査区でも同様に遺構及び出土遺物も希薄であることなどから、湿地や水田であったものと推定される。

対する宮田荘側の微高地では、第1次B区で2間×1間の桁行5.3m、梁間4.65mの掘立柱建物跡1棟とそれに付随すると思われる柱穴列が4組、区画溝と思われる溝が北側と東側で見ついている。尾張型第4～第5型式の山茶碗・皿や白磁碗が出土したことから12世紀半ば頃の屋敷地と考えられる。第2次E区で2間×1間の桁行4.8m、梁間2.65mの掘立柱建物跡1棟とその周辺で多数の柱穴が見ついている。遺構周辺の柱穴や溝から尾張型第6～7型式の山茶碗・皿や東濃型の皿が出土することから13世紀前半の屋敷地の可能性がある。ほかに井戸が第1次A区で時期不明1基、B区で屋敷地と同時期のものが2基、第2次E区で屋敷地と同時期のものが1基確認されている。その後再び空白時期となるが、第1次A区・B区、第2次C区で現代の水田や畑の耕作土の下層より、近世の島畑状遺構、第2次D・E・F区で同じく近世と思われる水田が検出された。これらの状況などから、中世の屋敷地が長くは続かず、度重なる水害に悩まされたことや地下水位が高く居住には不向きであったことなどが推察される。遺跡西側を流れる福田川が江戸時代後期に整備されたのちに、微高地の中でも高い部分は畑地として、低い部分は水田として昭和期まで使われてきたようである。

## 第4節 発掘調査の方法

今回の調査は道路予定地部分の調査であり、調査区は全部で3か所に分かれており、北側より順に時計回りで1区・2区・3区と設定されていた(第4図)が、工程の都合上、2区→1区→3区の順で調査に着手した。

三者協定後に事前準備として現地を確認したところ、歩道予定地部分のガス管・水道管・排水路の一部はすでに敷設済で、周辺区画の盛土工事も終了していたため、調査区予定地が周囲に比べて一段低く降雨による水が集まりやすい状況であったこと、海拔ゼロメートル地帯で位置することから周辺の敷設工事の際はウェルポイントを使用しての作業を行っている事実や第6・7・8次調査でも湧水に悩まされた記述があること、調査期間が夏季にあたることから地下水位の上昇が見込まれることなどから湧水対策としてウェルポイントの導入を検討したが、周辺工事との工期の兼ね合いや設計上の問題で対応することが出来なかった。また、1区・2区・3区ともに既に下水施設としてマンホールや下水管が調査区際や調査区を分断するように10数ヶ所設置されていた。いずれにしても十分な調査が出来なかったことは残念である。

各地点における調査用グリッドは、愛知県埋蔵文化財センター(以下、愛知埋文)の『愛知県埋蔵文化財センター 基本マニュアル2021』「1 発掘調査編 B 発掘調査の手順 d 座標・グリッド」に基づき、1辺5mの小グリッドを最小単位として設定・打設し、グリッド数字は6桁とした。座標は「平成14年国土交通省告示第9号」に定められた平面直角座標系第VII系(世界測地系)に準拠している。また、メートル(m)単位での表記を基本としている。

基準点を付近の電子基準点から3級基準点・4級基準点を設置したのちに、4級水準点を設定し、各調査区の設定をおこなったうえで監督員の承認を受けた。土量計算が必要だった為、横断図の作成をおこなったのちに、重機を用いて表土及び攪乱層の掘削除去をおこない、人力による掘削を開始した。主に第6・7次調査のデータをもとに現況観察をおこないながら表土除去に努めたものの、前回調査後に水田床土採取が目的の掘削や埋設管の敷設が行われており、土地の改変が一部の箇所で行われていた。

千音寺遺跡としては通算13回目の調査で第9次発掘調査にあたるので、遺跡記号としては「SNJ9」とし、調査区名と遺構名、取上日を付して、遺物の取上げをおこなった。遺構名は、調査区毎に3桁の遺構番号+遺構記号で構成し、遺構台帳で管理をしている。

なお、遺構の種類は、以下の記号を用いた。

SD：溝、SE：井戸、SK：土坑、SP：柱穴・ピット、SX：その他、NR：自然流路

現場で出土した重要遺物や特定の遺物に関しては、地点上げ遺物として、調査区毎にd-001から番号を付し、トータルステーションを用いて出土位置を記録した。この成果は遺物の分布状況把握に極めて有用である。このd番号は遺物観察表及び実測図でも共通して使用している。

各調査区壁面及び遺構の土色は愛知埋文の『愛知県埋蔵文化財センター 基本マニュアル2021』「1 発掘調査編 B 発掘調査の手順 e 土層の認識」に基づき、「色(『新版標準土色帖』(2021)) + 粒度区分(Wentworth(1922)) + 混入物など」で表示をおこなっている。概ね上位層から付番したものの、大きなセクションについては左方より番号を付している。

各地点では、デジタル一眼レフを主として撮影記録をおこない、状況に応じて記録保存用で35mm及び6×7判フィルムカメラも併用した。各調査区後の完掘時にはドローンを用いての撮影記録もおこなった。使用したドローンは、DJI社製「Mavic Mini」である。ドローン本体の機体重量は199gであり、撮影当時は航空法規制の対象外であったため手軽に使用出来たが、令和4年(2022年)6月20日からの法律改正から100g～199gの機体も規制対象になったことや、12月5日よりドローン国家資格(操縦ライセンス制度)が始まったことから、現在ではドローンの使用に一定の知識・経験が必須とされる。ドローンの使用は、フォトグラメトリーやLiDAR技術との併用も含めて文化財調査に対してかなり有用であることは世界的に証明されており、今後、ドローンの資格や経験による一つの専門的な職掌も構築されていくであろう。

《参考文献》

- ・文化庁文化財部記念物課『定本 発掘調査のてびき—集落遺跡発掘編—』2016 同成社
- ・文化庁文化財部記念物課『定本 発掘調査のてびき—整理・報告書編—』2016 同成社
- ・愛知県埋蔵文化財センター『愛知県埋蔵文化財センター 基本マニュアル2021』2021



ドローン仕様

DJI社製 Mavic Mini  
 有効画素数：1200万画素  
 全長：245×289×55mm  
 重量：199g  
 スマートフォンアプリ「DJI Fly」で操作  
 (使用スマートフォン：Apple社製 iPhone12 Pro)

■調査体制

●令和3年度(2021年度) 発掘調査・1次整理作業

監督員 下田 旭(名古屋市緑政土木局道路建設部道路建設課道路係)

野澤則幸(名古屋市教育委員会事務局生涯学習部文化財保護室)

受託者 株式会社四門 名古屋支店

現場代理人	樋田泰之
主任調査員(主任技術者・現場作業)	樋田泰之・坂野俊哉
調査員	塚本和弘・辻 弘和・日紫喜勝重・平井美典・古川 登
計測員(主任技術者・測量作業)	樋田泰之・金子堅二
ドローン撮影	樋田泰之
安全管理責任者・施工管理技士	山田文彦・川口洋次郎
調査補助員	伊藤 眸・磯谷充子
作業員	飯尾 勉・磯部定雄・稲葉高志・犬飼和枝・宇佐見真・牛田多江子・内山富美・江場邦正・大森良樹・小椋保夫・北出和男・佐藤睦雄・篠田晃徳・鈴木勇也・砂畑勇一・竹田あみ・田中達也・永井陽子・西田康祐・二村直美・林 里己・平野武邦・福富秀昌・古橋 勇・松永良夫・松名瀬俊治・宮川 岳・宮川浩一・宮崎裕代・武藤悠作・森朋子・森川理香・矢神ふじ子・山崎裕子・山本敏男・吉木秀時・ライアン幸
重機オペレーター・大型運転手	有村和昭・池谷 巧・岸本 正・岸本竜也・杉浦要司・館勝利・松本誠児・松本好明・山本一也

第1章 調査の経緯と遺跡の環境

●令和4年度(2022年度) 2次整理作業・報告書作成作業

監督員 下田 旭(名古屋市緑政土木局道路建設部道路建設課道路係)

林 順(名古屋市教育委員会事務局生涯学習部文化財保護室)

受託者 株式会社四門 名古屋支店

現場代理人

樋田泰之

主任調査員(主任技術者・整理作業)

樋田泰之・坂野俊哉

調査補助員

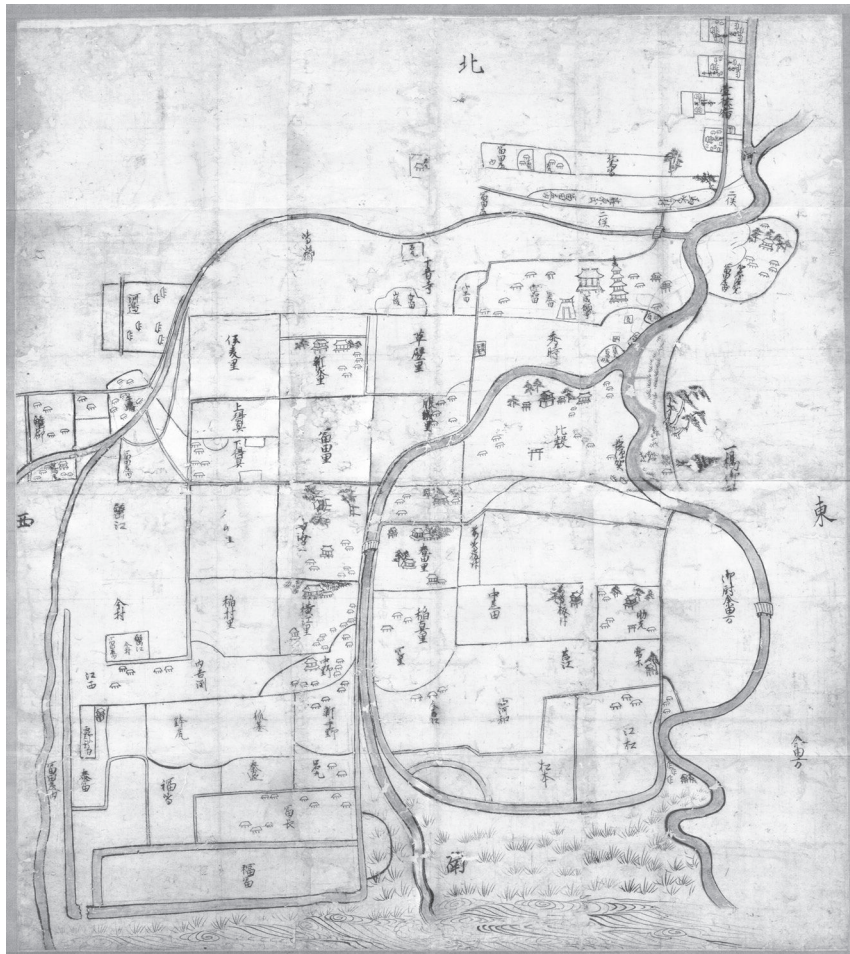
伊藤 眸・磯谷充子

実測作業

磯谷充子・熊谷洋子・嶋田育世・坂野俊哉・藤森紀子・樋田泰之

デジタルトレース作業

大谷舞菜・清水香枝・中島真華・永津良子・丸木理子・樋田泰之



第5図 『尾張国富田荘絵図』(上段:全体、下段:部分)

「一 円覚寺領尾張国富田荘絵図」『新修名古屋市史 第2巻 付図』1998 名古屋市に一部加筆

## 第5節 調査経過

千音寺遺跡第9次発掘調査(正式名:市道千音寺線第1号外路線道路工事に伴う千音寺第9次発掘調査業務委託)は令和3年(2021年)8月4日に緑政土木局と四門との間で業務委託契約を締結し、8月12日に緑政土木局、四門、教育委員会の三者において協定を締結した。発掘調査は9月6日に開始、12月28日に3区ともに終了し、翌年3月14日に納品、3月15日に完了検査を受けた。

整理・報告書作成業務については、年度が代わった令和4年(2022年)9月15日に緑政土木局と四門との間で業務委託契約を締結し、9月28日に出土遺物その他を受け取り、業務を開始、翌年3月17日に納品・完了検査を受け業務は終了した。

主な作業工程は以下の通りである。(調査日誌抄録を兼ねる)

《調査日誌抄録》

令和3年(2021年)

8月4日(水):晴(35℃) 発掘調査予定地を事前確認し、2区中央部・3区西側においてマンホールが敷設されていることを確認。名古屋市千音寺土地区画整理組合と翌日付でプレハブ用地と排土置場用地、合計1,593坪分の土地借用契約を締結する。バックホウによる連続した作業が見込まれるため、条例に基づき特定建設作業実施届出書を港区公害対策室に提出し、承認を得る。

8月5日(木):晴(35℃) 0.45m<sup>3</sup>バックホウ1台搬入。敷鉄板(5×10m)搬入。仮設事務所プレハブと仮設トイレ設置。

8月6日(金):晴(35℃) 名古屋市上下水道局・西部管路センターにて、発掘調査予定地の水道・下水道の埋設管設備の現況をヒアリングした結果、1区中央部に東西方向に下水道埋設管が敷設済だが調査時掘削深度より深いため問題ない、2区中央部にマンホール及びコンクリート柵が敷設済で掘削時の掘方から離隔を設けて掘削するよう指示、3区西部に南北方向にマンホール及び下水道埋設管が敷設済で掘削時の掘方から離隔を設けて掘削するよう指示、同じく東部に南北方向に下水道埋設管が敷設済だが調査時掘削深度より深いため問題ない、その他1区・3区の周囲にマンホール敷設箇所が多数あり、マンホール蓋の位置がずれる可能性がある箇所は離隔を設けるようにとの指示があり、対応策も含め資料を作成したうえで緑政土木局に報告をおこなう。

8月7日(土):晴(35℃) 仮設事務所内電気工事。

8月12日(金):雨(27℃) 0.4m<sup>3</sup>バックホウ1台搬入。基準点・水準点の使用のため、要綱に基づき測量標等仕様承認申請書を緑政土木局の道路利活用課に提出し、承認を得る。

8月23日(月):曇(32℃) 基準点測量・水準点測量(～24日)。東邦ガスと発掘調査予定地の埋設管の確認をおこない、埋設管は予定地にはかかっていないとの判断を得て、緑政土木局に報告をおこなう。

8月25日(水):曇(33℃) 水中ポンプ・発電機搬入。道具類搬入。

8月26日(木):曇(35℃) 敷鉄板(5×10)搬入。2区の調査範囲の設定をおこない、監督員の承認を得た。

8月27日(金):晴(35℃) 0.45m<sup>3</sup>バックホウ1台搬入。

8月28日(土):晴(35℃) Wi-Fi・HDD・LAN設備などを構築。

8月30日(月):晴(36℃) 水中ポンプ・発電機・コードリール搬入。仮



## 第1章 調査の経緯と遺跡の環境

設資材(ガードフェンス)搬入。

8月31日(火):晴のち曇(34℃) ノッチタンク搬入。

9月1日(水):曇(32℃) 作業員新規入場者教育をおこなう。3日にも分割開催する。

9月2日(木):曇のち雨(28℃) 1区の調査範囲の設定。調査区の周囲にガードフェンスを設置。

9月6日(月):晴(31℃) 0.12m<sup>3</sup>バックホウ1台搬入、2区西部、重機による表土掘削(以下、重機掘削)開始。

9月7日(火):曇(27℃) 2区西部、重機掘削。西側で排水溝掘削。

9月8日(水):曇時々雨(24℃) 2区西部、重機掘削。北西隅に排水釜場設置作業。

1区の調査範囲の設定について、監督員の承認を得た。

9月9日(木):雨(31℃) 2区、降雨により調査区を越流して道路部分全域が水に漬かった為、終日排水作業に努める。急遽3時ポンプを搬入したことで排水作業は進捗。

9月10日(金):晴(31℃) 2区西部、作業員17名作業開始。機材移動、テント設営、調査区外周養生ほか、排水溝掘削。遺構検出面からの湧水が激しく、作業難航。

0.25m<sup>3</sup>バックホウ1台搬入し、1区北部より重機掘削開始。

9月11日(土):雨のち晴(28℃) 2区西部、重機掘削完了。

9月12日(日):曇(27℃) 2区西部、排水作業。

9月13日(月):晴(30℃) 2区西部、人力掘削・遺構検出。遺構は極めて希薄な状況。

1区北端部・南端部2箇所にて重機掘削。

9月14日(火):晴(25℃) 3時ポンプ追加搬入。

2区西部、調査区南西で排水溝掘削中に鎌倉時代の土鍋(伊勢鍋)、山茶碗を確認。再度周辺を精査した結果、土坑(001SK)を確認した。

1区北部、表土掘削作業。

9月15日(水):晴(30℃) 1区北部、作業員新規18名追加、人力掘削開始。

2区西部、完掘。

9月16日(木):晴時々曇(29℃) 仮設事務所への水道引込工事。

2区西部、完掘写真撮影と壁面精査。2区東部、重機掘削開始。

排水に使用する常時電源を確保する為、1区仮設電源設置工事。1区北部、重機掘削と清掃作業を並行しておこなう。

9月17日(金):雨時々曇(26℃) 1区北部・南部、重機掘削。1区中部は近代の水田跡の低地部分に到達。

3区草刈り。

9月21日(火):晴(29℃) 1区北部、清掃作業。1区南部、重機掘削・排水作業。

2区東部、表土掘削と並行して遺構検出、排水溝掘削。

9月22日(水):曇(28℃) 2区西部、完掘写真真空撮。2区東部、遺構検出写真撮影。

1区北部・南部、重機掘削。

9月24日(金):晴(29℃) 2区東部、遺構掘削ののち、清掃をおこない、遺構完掘写真撮影、空撮も同時におこなう。

1区北部、清掃作業と遺構検出。

9月27日(月):曇(27℃) 2区東部補足調査として、下層確認のため重機掘削をおこなう、湧水のため排水溝を再度掘削。

1区北部、清掃作業と遺構検出、重機掘削を継続。

9月28日(火):晴時々曇(28℃) 2区東部、下層の精査をおこなったが



遺構は確認出来なかった。全景撮影。断面測量と下層の平面測量をおこなう。調査区周囲のガードフェンスを解体。2区から1区北部へ機材を、3区へ仮設トイレを移動。

1区北部、清掃作業と遺構検出。

9月29日(水):晴(30℃) 1区北部、清掃作業と遺構検出。

2区東部から1区南部へ足場板移動。1区南部、南壁面清掃と排水溝掘削。

9月30日(木):晴時々曇(28℃) 1区北部、遺構検出。1区南部、遺構検出と排水溝掘削。

3区の調査範囲の設定。

10月1日(金):曇(28℃) 水中ポンプ・コードリール搬入。1区北部、遺構検出。

10月4日(月):晴(30℃) 2区完了検査(教育委員会)。

1区北部・南部、遺構検出と遺構掘削。1区北部の自然堤防上の地山面ではほぼ平行する複数条の溝を検出し、遺構掘削開始。1区中部・南部、継続して重機掘削。

3区の調査範囲の設定について、監督員の承認を得た。

10月5日(火):晴(30℃) 2区完了検査(緑政土木局)。

1区中部・南部、重機掘削、遺構検出と遺構掘削。

10月6日(水):曇(31℃) 1区中部・南部、重機掘削、遺構検出と遺構掘削。

10月7日(木):晴時々曇(29℃) 1区中部・南部、重機掘削、遺構検出と遺構掘削。

10月8日(金):晴(30℃) 1区中部・南部、重機掘削、遺構検出と遺構掘削。午後、10月安全大会を実施。

10月11日(月):晴(29℃) 1区北部の遺構完掘写真、南部検出写真空撮。

1区中部・南部、重機掘削、遺構検出と遺構掘削。

午前、伊奈和彦氏(あいち朝日遺跡ミュージアム館長(当時))来訪。

10月12日(火):曇(30℃) 1区中部・南部、重機掘削、遺構検出と遺構掘削。

午後、鬼頭剛氏・蔭山誠一氏(県埋文)来訪。

10月13日(水):曇時々雨(25℃) 1区北部、重機で攪乱部分を除去後に重機掘削。

10月14日(木):晴(28℃) 1区北部、自然堤防に残った攪乱土を重機で除去。遺構掘削と清掃作業をおこなう。

10月15日(金):晴(27℃) 1区北部・南部、遺構掘削と清掃作業をおこなう。

10月18日(月):曇(18℃) 1区北部、重機掘削、遺構検出と遺構掘削。ところどころに須恵器が出土することから、地山面には古代の遺構が存在することを確認する。

10月19日(火):晴のち曇(21℃) 1区北部・中部、重機掘削。2回目の検出写真空撮。

10月20日(水):晴(19℃) 1区北部・中部、重機掘削。

10月21日(木):曇(18℃) 1区中部、重機掘削、遺構検出と遺構掘削。

3区、南西部より表土掘削開始。約80cmの厚みのある表土と盛土を除去後、灰白色の細粒砂が面上に検出された。試掘データには存在しておらず、試掘後に造成された可能性が考えられる。

10月22日(金):晴時々曇(20℃) 1区、遺構検出と遺構掘削、重機掘削。大型井戸の可能性のある遺構プラン(063SE)を検出。すぐ西側には畝溝残欠が複数条存在する様子を確認した。

10月25日(月):雨(15℃) 雨天のため、1区の作業は中止。

3区西部、重機掘削、21日に検出した灰白色の細粒砂を再度深掘したところ、GL-1.8m程で基盤層と思われる黄褐色のシルト層が検出された



## 第1章 調査の経緯と遺跡の環境

ものの崩落の危険から安全勾配を40度ほど確保して作業をおこなう。

10月26日(火):晴(23℃) 1区、昨日の雨の影響で調査区の水が引かず、作業中止。1区中部、3回目の検出写真空撮。

3区西部、重機掘削を継続、遺構検出面直上の砂層より水が湧き出る。関係各所に確認したところ、第7次調査と前後して、3区全域を含んだ広範囲で水田の床土と庄内川の浚渫土砂・ゴミなどを入替える造成工事がおこなわれたことを確認した。

10月27日(水):曇(22℃) 1区中部、重機掘削、遺構検出し、低地部で複数の井戸跡(大小が存在)や畝溝を確認。1区南部、遺構検出。

3区西部、重機掘削と排水溝掘削。

10月28日(木):晴(23℃) 1区中部・南部、遺構検出と遺構掘削、重機掘削。1区南部で検出写真撮影。

3区西部、重機掘削、排水溝掘削。

午後、伊奈和彦氏(あいち朝日遺跡ミュージアム館長(当時))来訪。

10月29日(金):晴(22℃) 1区中部・南部、遺構検出と遺構掘削、ほぼ重機掘削は完了。

3区西部、重機掘削、排水溝掘削。灰白色砂層の崩落対策で法面に土嚢を置いて土留めとし、さらにブルーシートで保護する。

11月1日(月):曇(24℃) 1区中部・南部、遺構検出と遺構掘削、中央部北寄り自然堤防の名残である微高地を確認。上面は近世以降の水田で削平されているが縁辺には古代～中世の遺構が分布している。微高地縁辺部には複数の井戸跡が存在する。

3区西部、重機掘削。

11月2日(火):曇時々晴(23℃) 1区中部・南部、遺構検出と遺構掘削。

3区西部、重機掘削。新たに掘削した部分の法面の保護作業をおこなう。

11月3日(水):晴(23℃) 排水に使用する常時電源を確保する為、3区仮設電源工事。

11月4日(木):晴(22℃) 1区中部・南部、遺構検出と遺構掘削。

3区西部、重機掘削。

11月5日(金):晴(22℃) 1区中部・南部、遺構検出と遺構掘削。小型土坑のひとつが曲物井戸(030SE)であることが判明した。

3区西部の重機掘削は完了し、3区東部の表土掘削を開始。

11月8日(月):曇時々晴(25℃) 1区中部・南部、遺構検出と遺構掘削。

3区西部、排水溝掘削と壁面整形。3区東部、重機掘削。

2区北側で第10次調査(担当:イビソク・岡田有司氏)開始。

11月9日(火):雨(20℃) 雨天のため、1区、3区の作業は中止。

11月10日(水):晴(18℃) 1区、昨日の雨の影響で調査区の水が引かず、作業中止。排水作業をおこなう。

3区東部、引き続き重機掘削。

11月11日(木):晴(18℃) 1区中部・南部、遺構検出と遺構掘削。

3区東部、重機掘削と排水溝掘削。

午後、11月安全大会を実施。

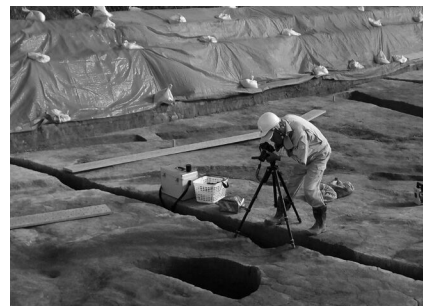
11月12日(金):晴(17℃) 1区中部・南部、遺構検出と遺構掘削。微高地周辺で竈由来の焼土塊や大量の炭を検出。2基目の曲物井戸(040SE)を検出。

3区中部・東部、重機掘削と壁面養生。

11月13日(土):晴(16℃) 3区東、重機掘削。

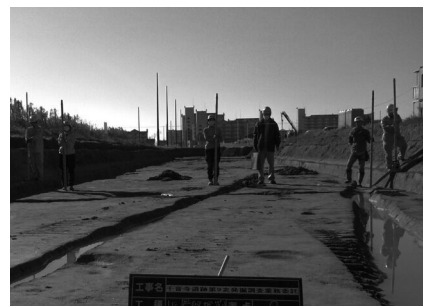
11月15日(月):晴(20℃) 1区中部、遺構検出と遺構掘削。1区南部、写真前清掃開始。

3区中部、重機掘削。





- 遺物洗浄作業を開始、以降継続しておこなう。
- 午後、石黒立人氏・小坂延仁氏（愛知県埋蔵文化財調査センター）来訪
- 11月16日（火）：晴（20℃） 1区中部、遺構掘削と写真前清掃。1区南部、写真前清掃。各遺構の精査や測量作業をおこなう。
- 11月17日（水）：晴（19℃） 1区中部、遺構掘削と写真前清掃。1区南部、写真前清掃。各遺構の精査や測量作業をおこなう。
- 11月18日（木）：曇のち晴（18℃） 1区中部、遺構掘削と写真前清掃。1区南部、写真前清掃と東壁面撮影。
- 11月19日（金）：晴のち曇（19℃） 1区北部・南部、遺構完掘写真空撮。1区中部、遺構掘削と写真前清掃。3区中部、重機掘削。
- 11月20日（土）：晴（20℃） 1区中部、遺構掘削と写真前清掃。3区中部、重機掘削。
- 11月21日（日）：晴（20℃） 1区、遺構完掘写真空撮。
- 11月22日（月）：雨（16℃） 雨天のため、1区、3区の作業は中止。
- 11月23日（火）：曇のち晴（14℃） 1区、排水作業と遺構精査。3区中部、重機掘削。
- 11月24日（水）：曇（13℃） 1区中部・南部、排水作業、清掃、掘削作業。3区西部、遺構検出。3区中部、重機掘削と排水溝掘削。3区東部、排水溝掘削。
- 11月25日（木）：晴（16℃） 0.12m<sup>3</sup>バックホウ1台搬出。1区中部、排水作業、清掃、掘削作業。3区西部、遺構検出。3区中部、重機掘削と排水溝掘削。午後、鈴木正貴氏・武部真木氏（県埋文）来訪。
- 11月26日（金）：晴のち曇（15℃） 1区中部、排水作業、清掃、掘削作業。3区西部、遺構検出終了。3区中部、重機掘削。3区東部、遺構検出。
- 11月27日（土）：曇時々雨（12℃） 3区西部、重機掘削と遺構検出。
- 11月29日（月）：晴時々曇（14℃） 1区完了検査（緑政土木局・教育委員会）。1区補足調査で井戸を中心に湧水で水没している遺構を重機で掘削。調査区周辺の機材撤収作業。調査区周囲のガードフェンスを解体。3区西部、遺構検出後、検出写真空撮。3区中部、重機掘削。3区東部、遺構検出。午後、鬼頭剛氏・蔭山誠一氏（県埋文）来訪。
- 11月30日（火）：晴（15℃） 0.45m<sup>3</sup>バックホウ1台搬出。1区、前日に重機で掘削した遺構埋土を集中的に精査し、加工木や陶器類を回収。1区での作業終了。3区東部、遺構検出。3区中部、重機掘削。
- 12月1日（水）：雨のち晴（13℃） 水中ポンプ・コードリール搬出。雨天のため、3区の作業は中止。遺物洗浄作業は継続。
- 12月2日（木）：晴（12℃） 3区中部・東部、重機掘削、調査区清掃と遺構検出。3区の重機掘削は完了。
- 12月3日（金）：晴（14℃） 1区測量作業。1区仮設電源撤去。3区中部・東部、調査区清掃と排水溝掘削と遺構検出。
- 12月6日（月）：雨（11℃） 3区西部、排水溝掘削、排水釜場整備。雨が強まってきたため、作業中止。
- 12月7日（火）：雨（12℃） 雨天のため、作業中止、整理作業をおこなう。
- 12月8日（水）：晴のち曇（16℃） 昨日の雨の影響で調査区の水が引かず、作業中止。排水作業。
- 12月9日（木）：晴（17℃） 3区西部、排水作業と遺構掘削、北壁面測量。3区中部、調査区の水が引かず、排水作業と並行して遺構の再検出をお



## 第1章 調査の経緯と遺跡の環境

こなう。

1区南西で第11次調査(担当:イビソク・澤田孝氏)開始。

12月10日(金):晴(16°C) 3区西部、遺構掘削。3区中部、排水作業と遺構検出。

午後、12月安全大会。

12月11日(土):晴(18°C) 3区中部、遺構掘削。

12月13日(月):晴(12°C) 3区西部、遺構掘削と測量作業。3区中部、遺構検出と遺構掘削。北西-南東方向の溝(111SD)を中心に中近世の遺物が混じるようである。

12月14日(火):晴(12°C) 0.06m<sup>3</sup>バックホウ1台搬入。3区西部、遺構掘削と測量作業。3区中部、遺構検出と遺構掘削。3区東部、0.06m<sup>3</sup>バックホウを一部用いて遺構掘削。

12月15日(水):晴(14°C) 3区西部、遺構掘削。3区中部、遺構検出と遺構掘削。3区東部、遺構掘削。

12月16日(木):曇時々晴(15°C) 0.25m<sup>3</sup>バックホウ1台搬入。3区西部、遺構掘削完了。097SXは竪穴住居の壁溝状ではあるが、柱穴・焼土・貼床などは確認出来なかった。3区中部、遺構掘削と一部精査。3区東部、遺構掘削。

12月17日(金):晴(13°C) 現場作業は中止。遺物洗浄を継続。

12月18日(土):晴(7°C) 3区東部、遺構掘削。

12月20日(月):晴(11°C) 3区西部、写真前清掃。3区東部・中部、遺構掘削。

12月21日(火):晴(13°C) 3区西部、残ったシート・土嚢を撤去し、写真前清掃終了し、完掘写真空撮。3区東部、遺構掘削。3区中部、遺構掘削。111SD上層は近世遺物の出土が多い、中層以下は中世遺物が出土するため開削は中世後期か。

12月22日(水):晴(15°C) 3区東部、遺構掘削、写真前清掃。3区中部、139SD東端部から土器集積を検出。

12月23日(木):晴(13°C) 0.06m<sup>3</sup>バックホウ1台搬出。3区東部、完掘写真空撮。3区西部、土層注記。

12月24日(金):晴(14°C) 3区中部、遺構掘削と写真前清掃、完掘写真空撮、測量作業。午後から機材撤収、整理作業。

12月27日(月):雪(13°C) 大雪のため作業中止。3区完了検査(緑政土木局・教育委員会)。

12月28日(火):晴(8°C) 3区にて補足調査、現場での作業は終了。機材撤収作業。

### 令和4年(2022年)

1月4日(火):雨のち晴(9°C) 備品など機材撤収作業。遺物洗浄・整理作業。

1月5日(水):晴(8°C) 0.25m<sup>3</sup>バックホウ1台搬出・0.45m<sup>3</sup>バックホウ1台搬入・0.7m<sup>3</sup>バックホウ1台搬入。3区西部より埋め戻し開始。

1月6日(木):雪のち曇(6°C) 仮設資材(ガードフェンス)搬出。遺物洗浄・整理作業。

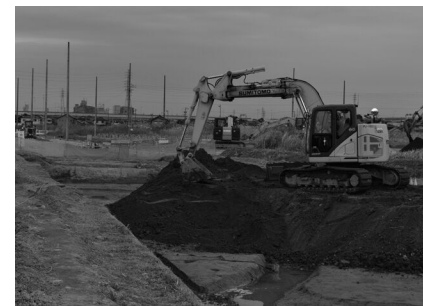
1月7日(金):晴(8°C) 注記マシン搬入、遺物への注記作業開始。

1月11日(火):雨(7°C) 備品返却。遺物洗浄・接合・注記作業。

1月12日(水):晴(6°C) 3区西部、埋め戻し完了。教育委員会来訪。

1月13日(木):曇のち晴(8°C) 3区全体埋め戻し完了。緑政土木局来訪。前後の工事の関係から名古屋市上下水道局・東邦ガス・中部電力パワーグリッドに対して区画整地組合地内での発掘調査作業完了報告。

1月14日(金):晴(5°C) 水中ポンプ・発電機・コードリール搬出、



0.7m<sup>3</sup>バックホウ1台搬出。遺物の接合・注記作業。  
 1月15日(土):曇(9℃) 0.45m<sup>3</sup>バックホウ1台搬出。3区仮設電源撤去。整理作業。  
 1月17日(月):曇(10℃) 0.4m<sup>3</sup>バックホウ1台搬出。遺物接合・注記作業。整理作業。  
 1月18日(火):晴(7℃) 遺物接合・注記・整理作業。～28日(金)作業員による遺物整理終了。  
 1月21日(金):晴(6℃) 教育委員会宛に発掘調査完了届・発掘調査完了報告票・埋蔵文化財保管証を提出。愛知県中川警察署に埋蔵物発見届・埋蔵文化財保管証を提出し、埋蔵物受領書(受理番号005374)を受領。  
 1月31日(月):晴(10℃) 注記マシン撤去、搬出。  
 2月2日(水):晴(9℃) 愛知県庁文化芸術課文化財室より「埋蔵文化財の発掘について(通知)」(3文芸第2294)を受領。  
 2月9日(水):晴(12℃) 木製品納入。  
 2月18日(金):晴(10℃) 土器納入。  
 2月23日(水):晴一時雪(9℃) 仮設事務所内電気撤去。  
 2月24日(木):晴(9℃) 仮設トイレ汲取り。水道撤去工事  
 2月25日(金):晴(10℃) 仮設事務所プレハブと仮設トイレ撤去。  
 2月28日(月):晴(15℃) 廃棄物撤去。  
 3月11日(木):晴(18℃) 成果品仮納品。  
 3月14日(月):晴(22℃) 成果品本納品。  
 3月15日(火):晴(19℃) 完了検査を受け合格。  
  
 9月15日(木):『市道千音寺線第1号外路線道路工事に伴う千音寺第9次発掘調査報告書作成業務委託』として受注。  
 9月28日(水):(株)四門清須支店にて報告書作成業務に着手。

令和5年(2023年)  
 3月17日(金):本書刊行



## 第2章 調査成果

### 第1節 1区の基本層序

#### 1 調査の経緯

1区の表土掘削は2021年9月10日に調査区北端部から開始した。当初試掘データや現地形などを参考に、1m近い表土の存在を予想していたが、調査区北部は度重なる道路工事によって広範囲に攪乱がみられ、また遺物包含層も分厚いRC舗装によって覆われていることが判明した。

調査区より地盤の高い両側の住宅地や耕作地では、現状表土から中世陶器等の破片が散見される状況でもあり、中世以降の遺物包含層は既に滅失している可能性もあった。強固なRC碎石による舗装や地盤改良剤によって固められた表土を破碎しつつ除去すると、直ちに地山が現れる様子が観察され、周辺の平均標高は+30cm前後であった。

北端から約45m地点で試掘坑1を検出した。試掘データによると、地山と推定される層までは表土と遺物包含層を含み1m近い深度が報告されており、現地の状況とは整合しなかった。その後も慎重に遺物包含層と地山の深度を確認した結果、北端部から50mの地点で調査区内に5m×5m以上の大規模な攪乱があらわれ、それ以南は試掘データに近い1m以上の表土が分布する状況となったが、除去後の標高は-50cm前後となったため、北側の標高30cm前後の地山面は自然堤防の表面と判断した。

以後、調査区が長大なため南端部にも重機を投入し表土掘削を続けた結果、調査区のほぼ中央部、北端から120m～140m地点で数十cmの地山の高まり(微高地)を検出し、南端部分では遺物包含層の存在が確認できなかった。試掘坑は全部で4ヶ所を確認している。

遺跡の堆積状況については、北端から35m地点までは攪乱によって東側の情報が失われていたためと、北部の自然堤防から低地部にかけての連続した情報を得るために西壁で(西セクション=全長約57m)確認し、北部の自然堤防南端からは東壁で観察と測量をおこなった(東セクション)。

#### 2 北セクションの様相(第17図下段)

30cm近いRC碎石層の下に僅かに現代水田の床土(1層)が残っていたが、直下の2層は地山の砂質シルト層であった。セクション面での遺物包含層は確認出来なかった。

#### 3 西セクションの様相(第13図)

調査区北側、即ちセクション図の後半部分より解説をはじめ。

表土掘削前の現状はRC碎石による舗装が露出しており、同時にところどころに地盤改良剤を使って固められた客土層が一体化していた。それらを除去すると、北側の一部には水田の床土と思われる粘土層が確認された。わずかであるが陶磁器類の破片が出土することから、昭和期までに営まれた水田の痕跡と判断した。表土層・碎石層・水田床土の下は直ちに砂質シルトの地山であり、標高30cm前後でほぼ水平に分布する。なお地山層中には標高-20～30cmあたりに中粒砂・細

粒砂からなる砂層(層厚5cm前後)が観察された。この部分の地山は全体が河川の堆積による自然堤防である可能性が高いことから、地山中の砂層は洪水などの成因によるものと推定される。

この自然堤防の高まりは、調査区北端から40m地点(西セクション図の南端から17m、東セクション図の北端から5m地点)で切り取られたように末端が消滅していた。西セクション図の南端から15m地点にその様子を見ることができるが、自然堤防上の平坦面では古代の溝群や土坑が検出された。17・18・25層が溝群の埋土である。いずれも褐色の砂質シルトであり、地山層との区別は極めて難しい。セクション図で示した19・22・23・26・28・29～31・33・34層は中世以降の遺構埋土である可能性が高いが、調査区内では平面プランがほぼ削平されてしまっていたことや、遺構の残存部分の多くが壁面より奥の調査区外にしか存在しない状況などから、実態を把握するには至らなかった。

次に西セクション図前半について述べる。

急角度で切り取られた自然堤防末端から南側には、断面台形の大規模な溝(008SD、底面幅10m以上)が存在する。11～13層がその埋土であるが、上半(11・13層)と下半(12層)では大きく様相が異なる。下半は砂質シルトやシルト、中粒砂の斑土であり、下底に粗粒砂や部分的に炭化物の堆積がみられ、わずかに中世遺物が出土する。上半は砂質シルトの斑土であり、南側から北側に向かって人為的に埋積していった単位(層厚20～30cm)を観察することができ、中世陶器のほか近世陶磁器、被熱した礫などが出土した。この溝の南側には人工的な幅約4mの土堤が存在し、その構造を観察出来た。即ち、土堤の構造は上半(4・5層)と下半(6・7・10層)に分かれ、上半には地震によると思われる噴砂痕がみられた。下半は厚さ5～10cmの版築層が数層存在し、土堤の基礎となっている。なお14層に関しては噴砂痕などもみられることから地山層の一部かとも考えたが、001SD埋土である17層を切り込んでいることから遺構埋土として扱った。土質が土堤上半を構成する5層と類似するため、008SDに付随する遺構の一部として理解しておきたい。

1層は近年まで存在した水田の床土であり、2層は中世以前の遺物包含層である。

#### 4 東セクションの様相(第14図～第17図上段)

調査区北端部の攪乱で消失した部分の影響が及ばない地点を選び、断面図を東壁に移した。東セクションは自然堤防の南端部分から観察と測量をおこなった。西セクション同様、自然堤防の末端が急角度で削り取られ、008SD大溝の北斜面を形成している。東セクションで観察された008SD大溝と土堤の関係は西セクションのそれと少し違っており、土堤の内側(北側)に幅3.5mほどの平坦面が存在する(後述)。008SD大溝の埋土下半である10層は西セクションと同様の斑土であり、上半(5～9層)の8層では南側土堤方面からの埋め立て土の単位が観察された。

なお8層を切り込み5～7層で形成される断面三角形の部分は近世以降の別遺構断面である可能性もあるが、調査範囲側の遺構本体が消滅しており、性格は不明である。

土堤の本体は12、18層の盛土と考えられるが、基礎部分の版築層(12～15層)は土堤裾部分の北側に広がっており、最大幅3.5mほどの平坦面を作りだしている。平坦面の北側はほぼ垂直に掘り込まれて008SD大溝の下半となっているが、このような平坦面は西セクションではみられなかった。版築層の14層は直接地山層の上に形成されていたが、地山面では古代の所産と考えられる畝溝群が検出されており、20～24層はその埋土である。

## 第2章 調査成果

東西セクションにみられた土堤の本体に関してはその大部分が巨大な攪乱によって消失していたが、東壁側には幅数m分が残存していた。土堤の南斜面には二本の地滑りによる段差がみられたが(第20図)、下層の版築部分にズレはみられなかった。このような現状を見る限り、版築で造られた基礎の上に盛られた盛り土が地震などの影響で地滑りを起こし、南斜面に断層状の段差を生じさせたものと推定される(P52写真参照)。

次に土堤以南の部分だが、25層は最近まで耕作のおこなわれていた水田床土であり、これより南側にはほぼ全面に存在する。26層は古代の遺物包含層であるが、上層との相違は顕著であり分離は容易であった。26層上面の標高は-30cm前後であることから考えると、中世以降の遺物包含層は既に近代の水田整備時に削平されてしまった可能性が高い。

27～32層は017SD自然流路の埋土と考えられる層である。調査区を北西から南東に横切る流路で、埋土下半の32層からは8世紀前半の須恵器が検出されており、大量の木質(加工木断片・自然木の枝葉や種子類)とともに昆虫化石(コガネムシなどの甲虫類の羽根など)や炭化物が含まれていた。また28層や30・31層はいずれも細粒砂を伴う砂質シルトであるが、数ミリ単位のラミナ構造が認められた。自然流路がゆるやかに蛇行しつつ、古代を通じて次第に埋積されていった様子を想像することができる。

東セクションの北から70mあたりまでは、表土下は現代の水田床土である25層が広がり、以下には古代の遺物包含層である26層(層厚30cm前後)が安定的に存在し、19層の地山に至る層序を呈する。

同じく75m地点から95m地点にかけては、25層直下に更に一層の水田床土層が存在した。固く締まった砂質シルトで25層と区別するために旧水田跡と呼称するが、遺物に乏しく時代を特定できなかった。微高地を面的に削平していることや、不整形で小規模の平面プランが想定されることなどから、中世以後のものと推定できる。

80m地点手前からは地山の高まりが観察され、周囲に比べて数十cmほどの高まりだが、小規模な微高地の範囲は95m地点を越えたあたりまで広がっていた。推定される南北幅は20m以上であるが、最頂部でも現在の標高は-40cmである。

38層は微高地の末端から南南西に向かう溝130SDの埋土であり、地山に掘り込まれている。

39～42層は074SE(素掘りの大型井戸)の埋土である。

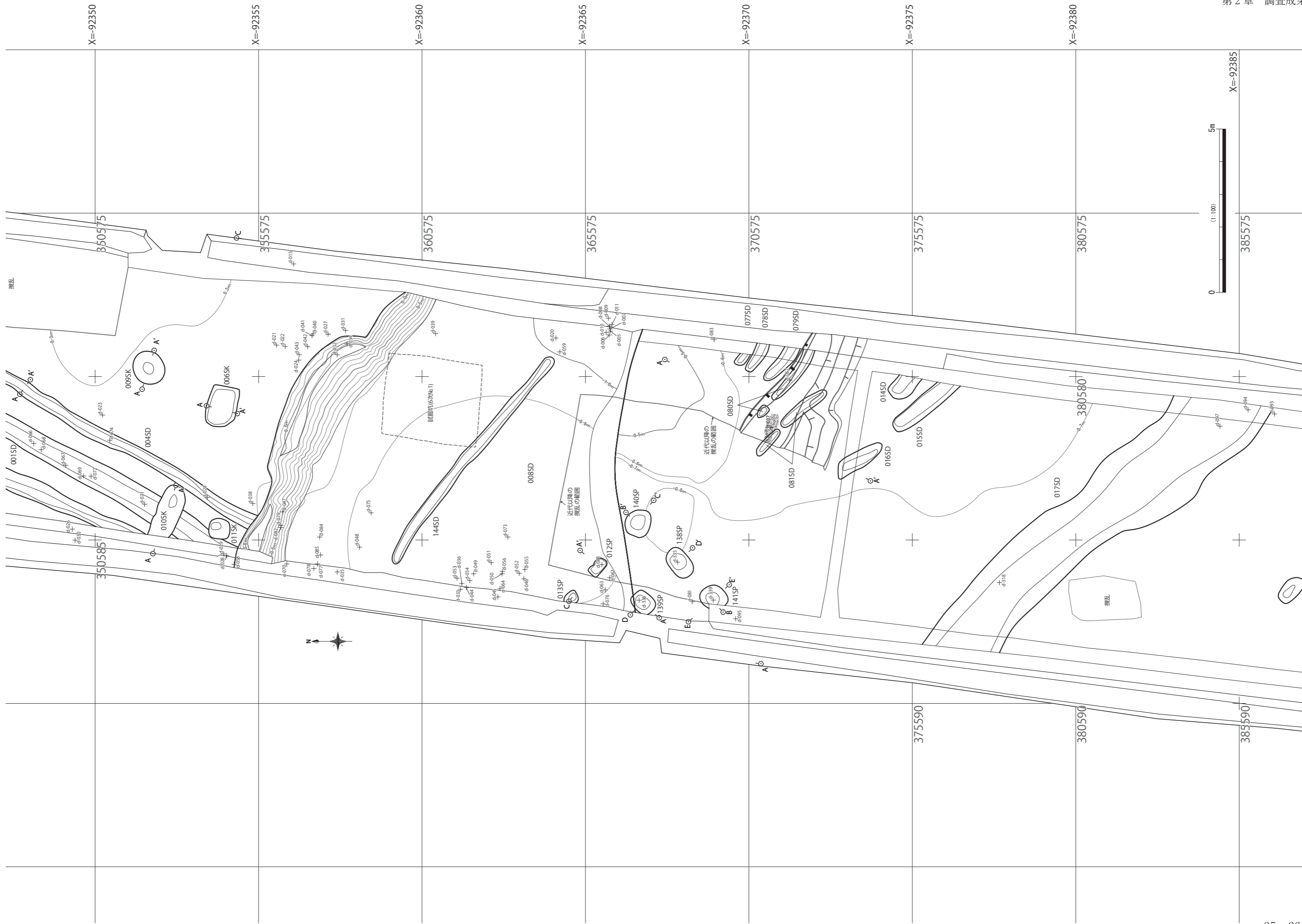
120m地点以南は25層水田床土以下に層厚20cm前後の遺物包含層(26層)が存在していたが、出土する遺物は中世と古代のものが混在し、層序での時代把握は困難であった。

175m～205mの範囲には表層地質図によって微高地の存在を想定していたが、顕著な高まりは確認出来なかった。中世以前に削平されていた可能性がある。

### 5 南セクションの様相(第17図中段)

表土直下は現代の水田床土(25層)となり、その下の62層は地山層である。遺物包含層は確認出来なかった。



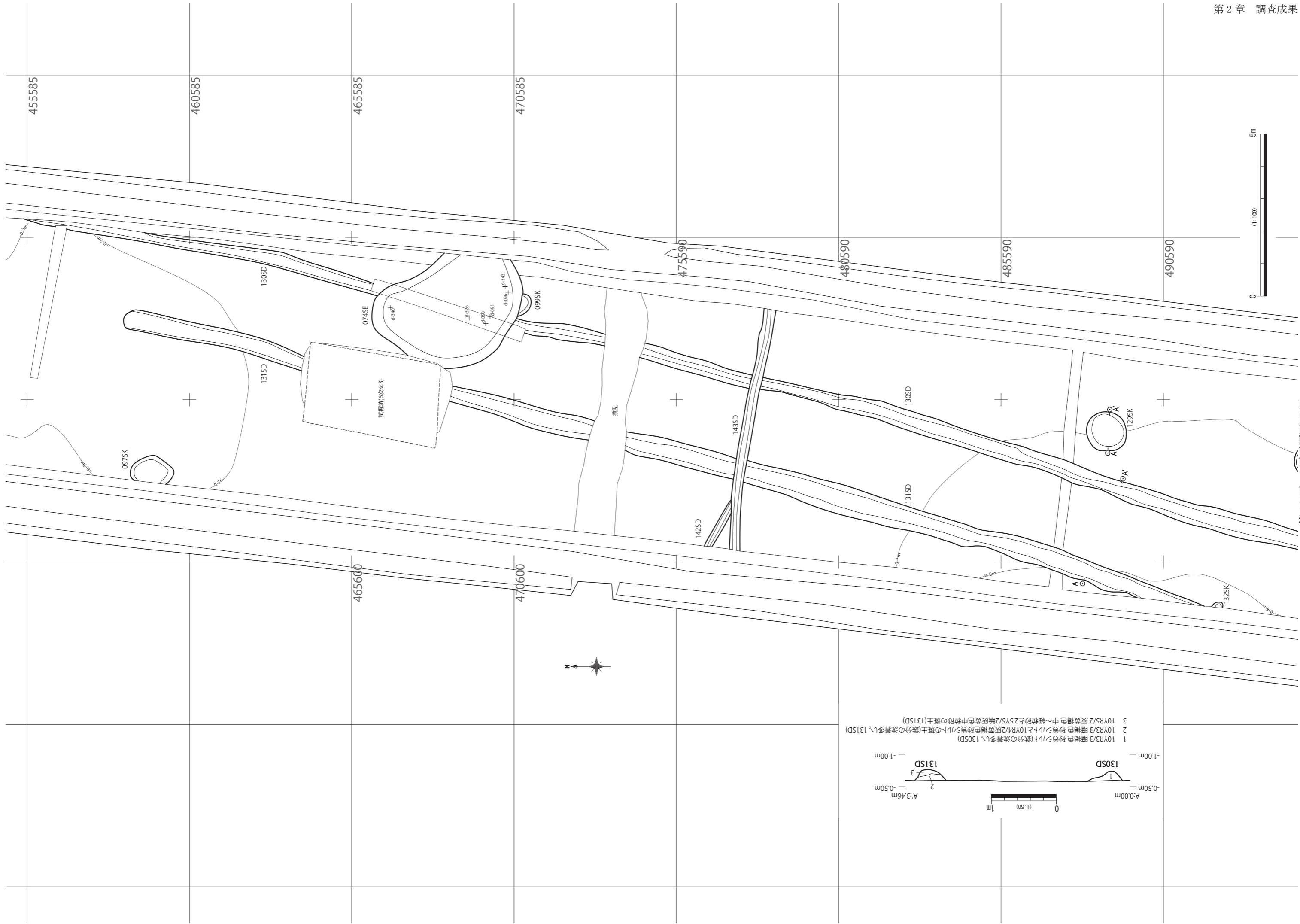


第7図 1区平面図(2/7)

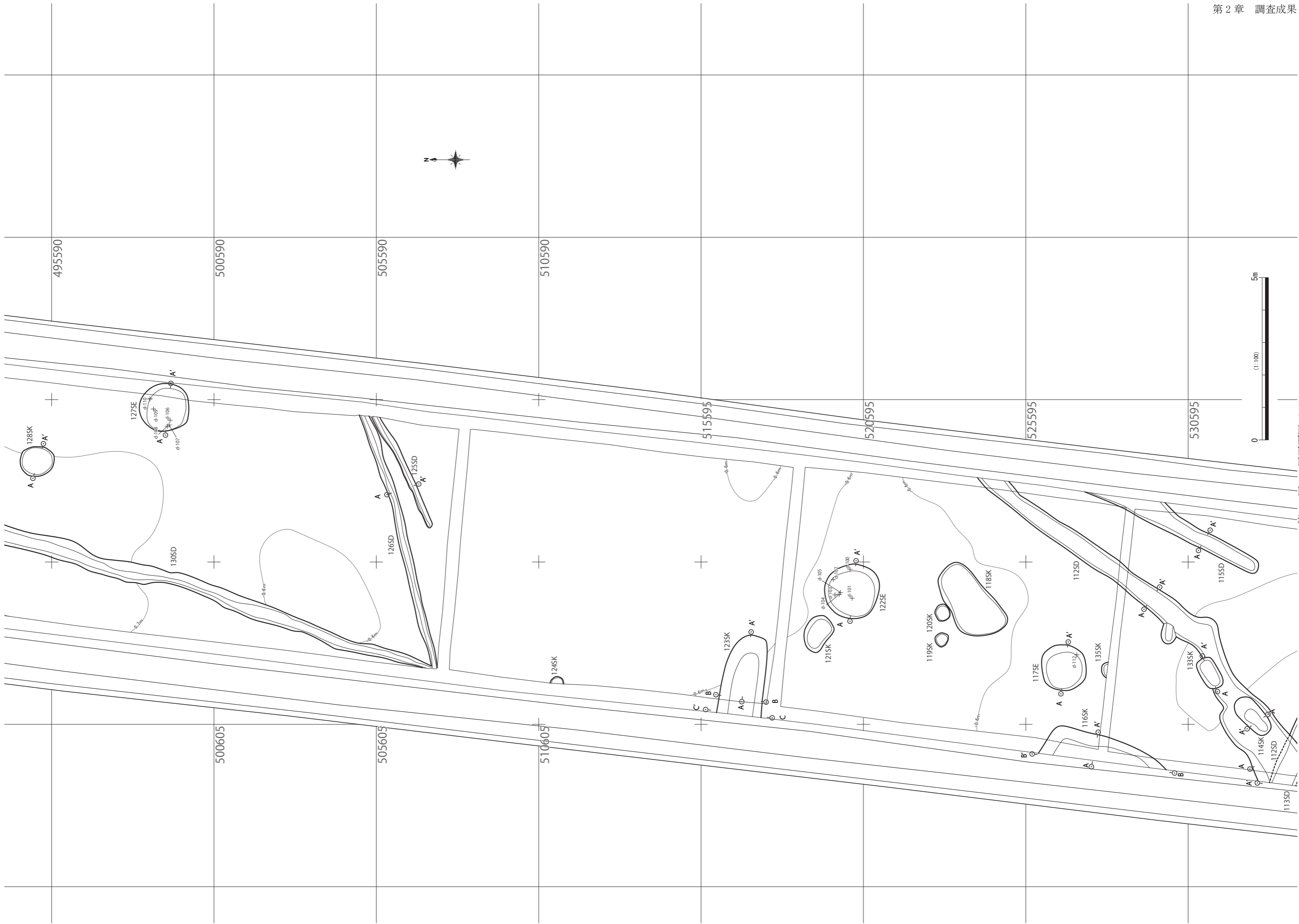




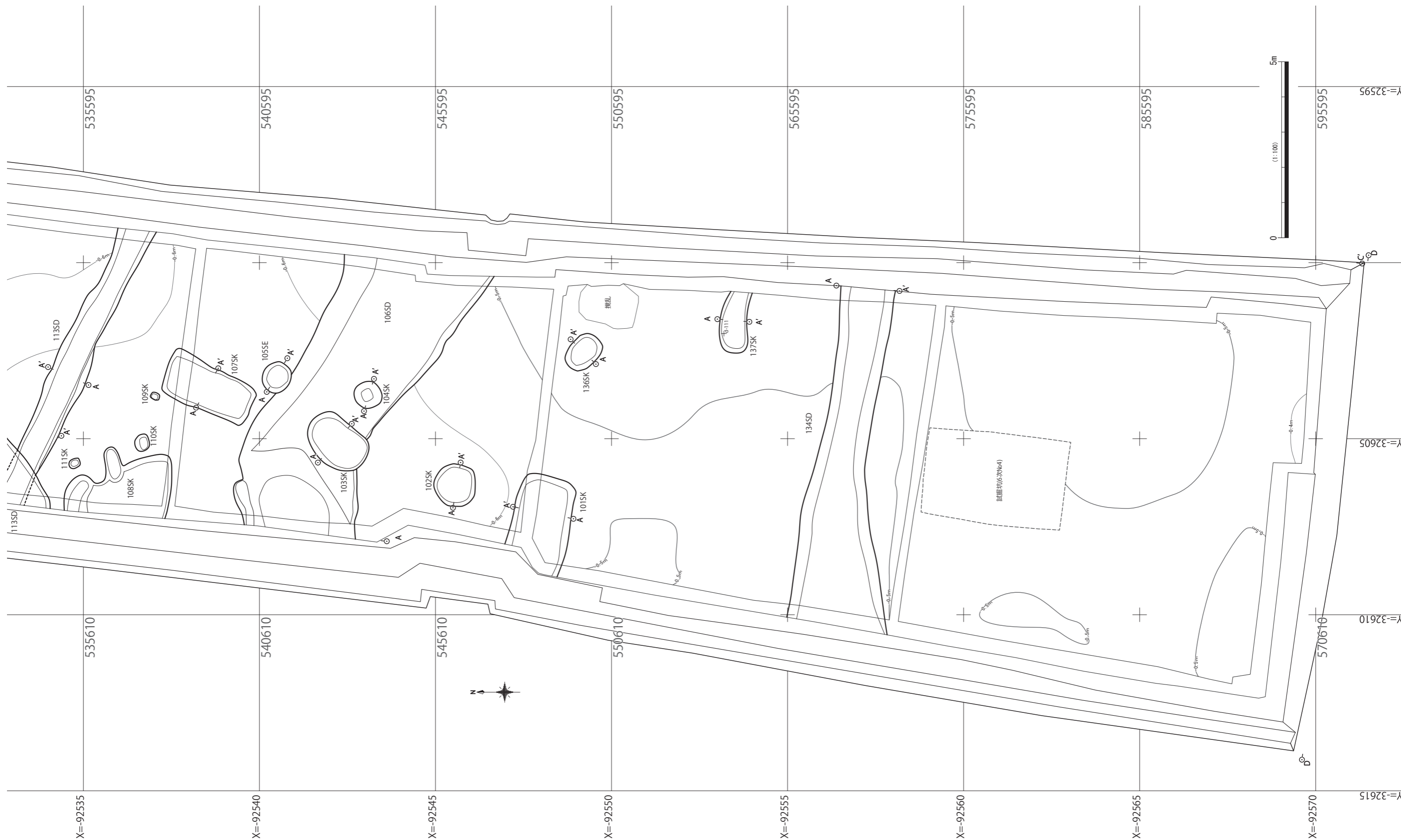




第10図 1区平面図(5/7)



第11图 1区平面图(6/7)



第12图 1区平面图(7/7)

Y=-32615

Y=-32610

Y=-32605

Y=-32595

Y=-32595

X=-92570

X=-92570

X=-92565

X=-92560

X=-92555

X=-92550

X=-92545

X=-92540

X=-92535

Y=-32595

Y=-32595

Y=-32595

Y=-32595

Y=-32595

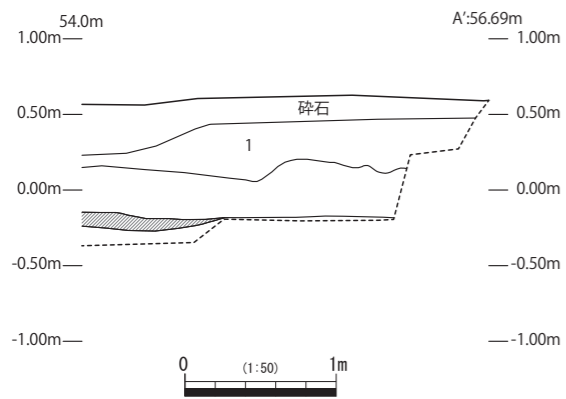
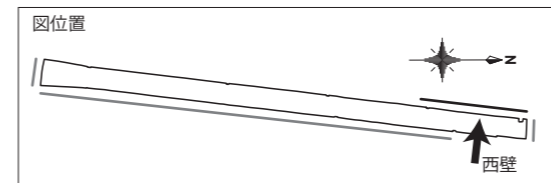
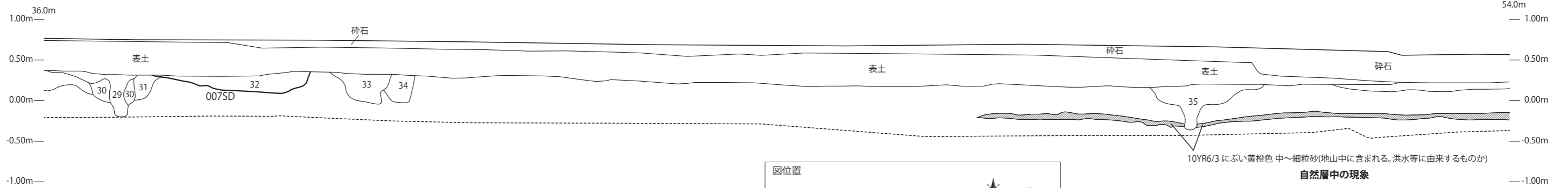
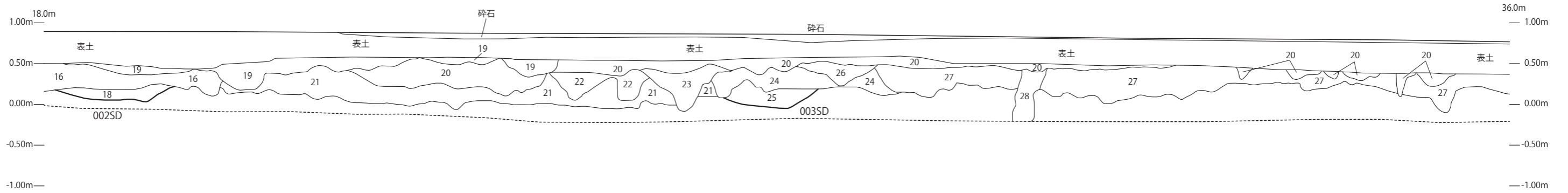
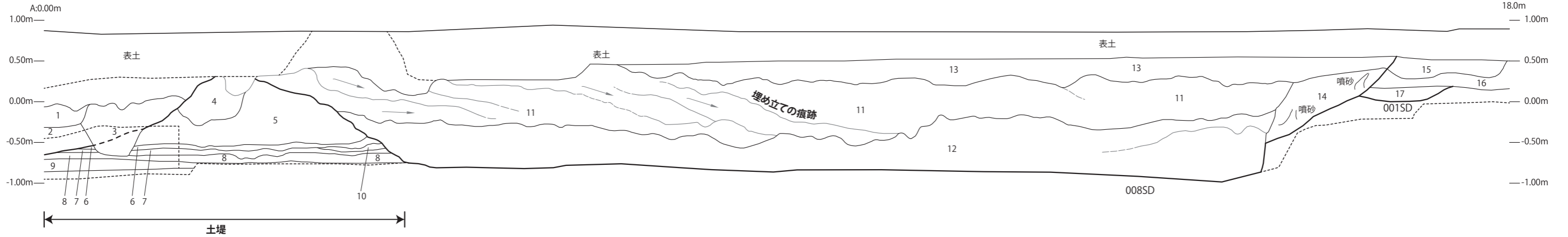
Y=-32595

Y=-32595

Y=-32595

Y=-32595

1区 西壁壁面図

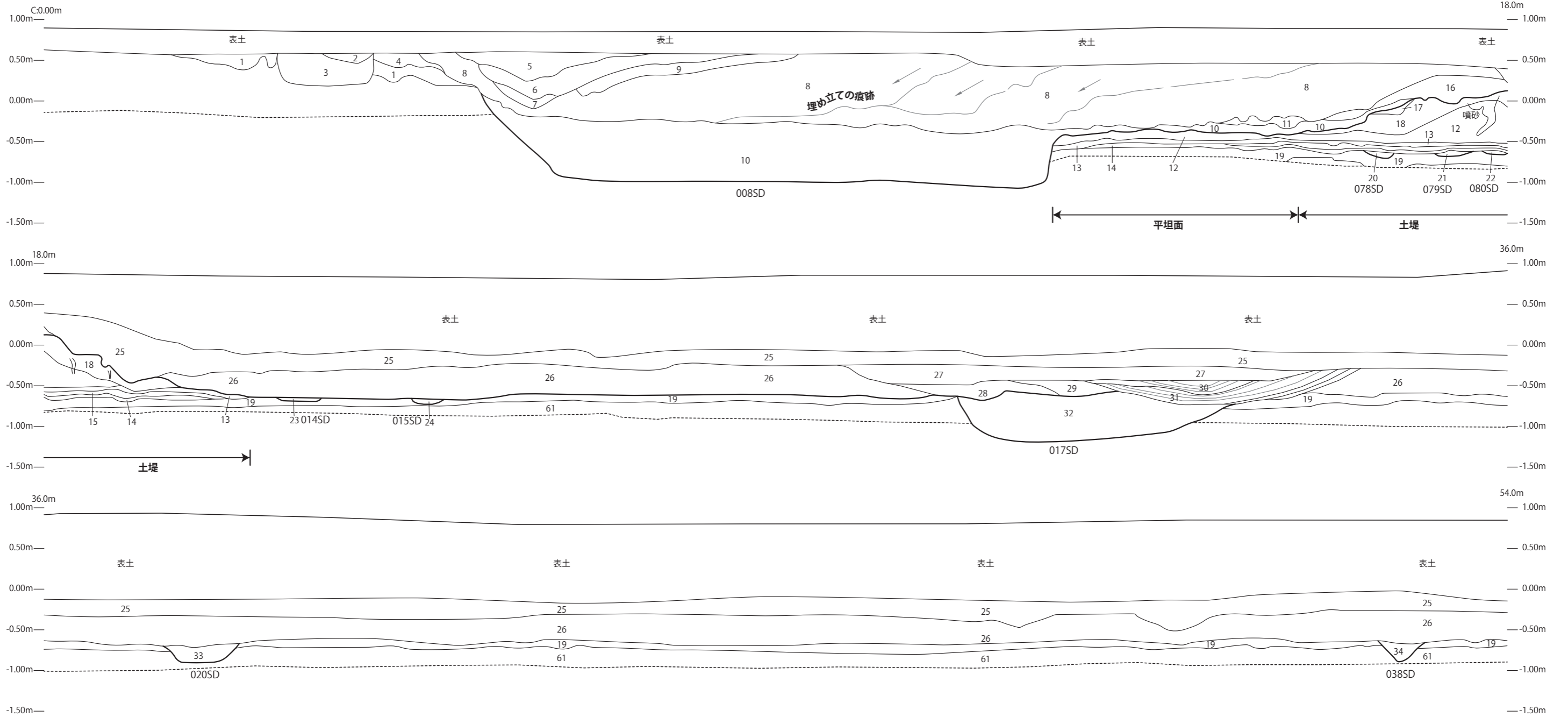


- 1 5Y3/1 オリーブ黒色シルト (水田床土、固く締まる)
- 2 10YR4/3 にぶい黄褐色 砂質シルト
- 3 2.5Y4/1 黄灰色シルト
- 4 10YR5/4 にぶい黄褐色 砂質シルト
- 5 2.5Y4/3 オリーブ褐色 砂質シルトと10YR4/4褐色砂質シルトの斑土(とところどころに噴砂脈や地割れ痕がみられる)
- 6 10YR5/3 にぶい黄褐色 砂質シルト
- 7 2.5Y6/4 にぶい黄色 砂質シルト
- 8 10YR3/4 暗褐色 砂質シルト
- 9 2.5Y4/3 オリーブ褐色 砂質シルト
- 10 10YR4/2 灰黄褐色 砂質シルト
- 11 10YR3/4 暗褐色 砂質シルトと10YR4/4褐色砂質シルトと2.5Y5/3黄褐色砂質シルトの斑土(大溝埋め立て時の単位や土を捨てた方向を観察できる)中～近世か
- 12 10YR3/4 暗褐色 砂質シルトと2.5Y5/2暗灰黄色シルトと2.5Y6/4にぶい黄色中粒砂の斑土(全体に鉄分の沈着著しい。下底に5Y5/1灰色粗砂層と炭化物の堆積がみられる部分がある)中～近世か
- 13 10YR3/4 暗褐色 砂質シルト
- 14 10YR3/2 黒褐色 砂質シルト (垂直方向に噴砂脈がみられる)
- 15 10YR4/2 灰黄褐色 砂質シルト
- 16 10YR4/3 にぶい黄褐色 砂質シルト
- 17 10YR4/4 褐色 砂質シルト (001SD埋土)
- 18 10YR4/4 褐色 砂質シルト (002SD埋土)

- 19 10YR4/3 にぶい黄褐色 砂質シルト
- 20 10YR4/3 にぶい黄褐色 砂質シルト
- 21 10YR4/3 にぶい黄褐色 砂質シルト (同色の細～中粒砂が混在する)
- 22 10YR4/4 褐色 砂質シルト
- 23 10YR4/4 褐色 砂質シルト
- 24 10YR4/3 にぶい黄褐色 砂質シルト
- 25 10YR4/4 褐色 砂質シルト (003SD埋土)
- 26 10YR4/1 褐灰色 砂質シルト
- 27 10YR4/3 にぶい黄褐色 砂質シルトと10YR6/3にぶい黄褐色細粒砂と2.5Y4/2暗灰黄色砂質シルトの斑土
- 28 10YR6/3 にぶい黄褐色 細粒砂 (土坑の埋土か)
- 29 2.5Y5/2 暗灰黄色 砂質シルト
- 30 2.5Y5/2 暗灰黄色 砂質シルトと10YR4/3にぶい黄褐色砂質シルトと10YR5/1褐灰色中粒砂の斑土
- 31 10YR4/3 にぶい黄褐色 砂質シルトと2.5Y4/2暗灰黄色砂質シルトの斑土
- 32 10YR4/4 褐色 砂質シルト (007SD埋土)
- 33 10YR3/2 黒褐色 砂質シルト
- 34 10YR3/3 暗褐色 砂質シルト
- 35 2.5Y5/3 黄褐色 砂質シルトと2.5Y6/2灰黄色細粒砂の斑土

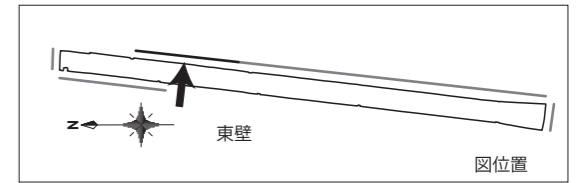
第13図 1区セクション図1

1区 東壁面図(1/4)



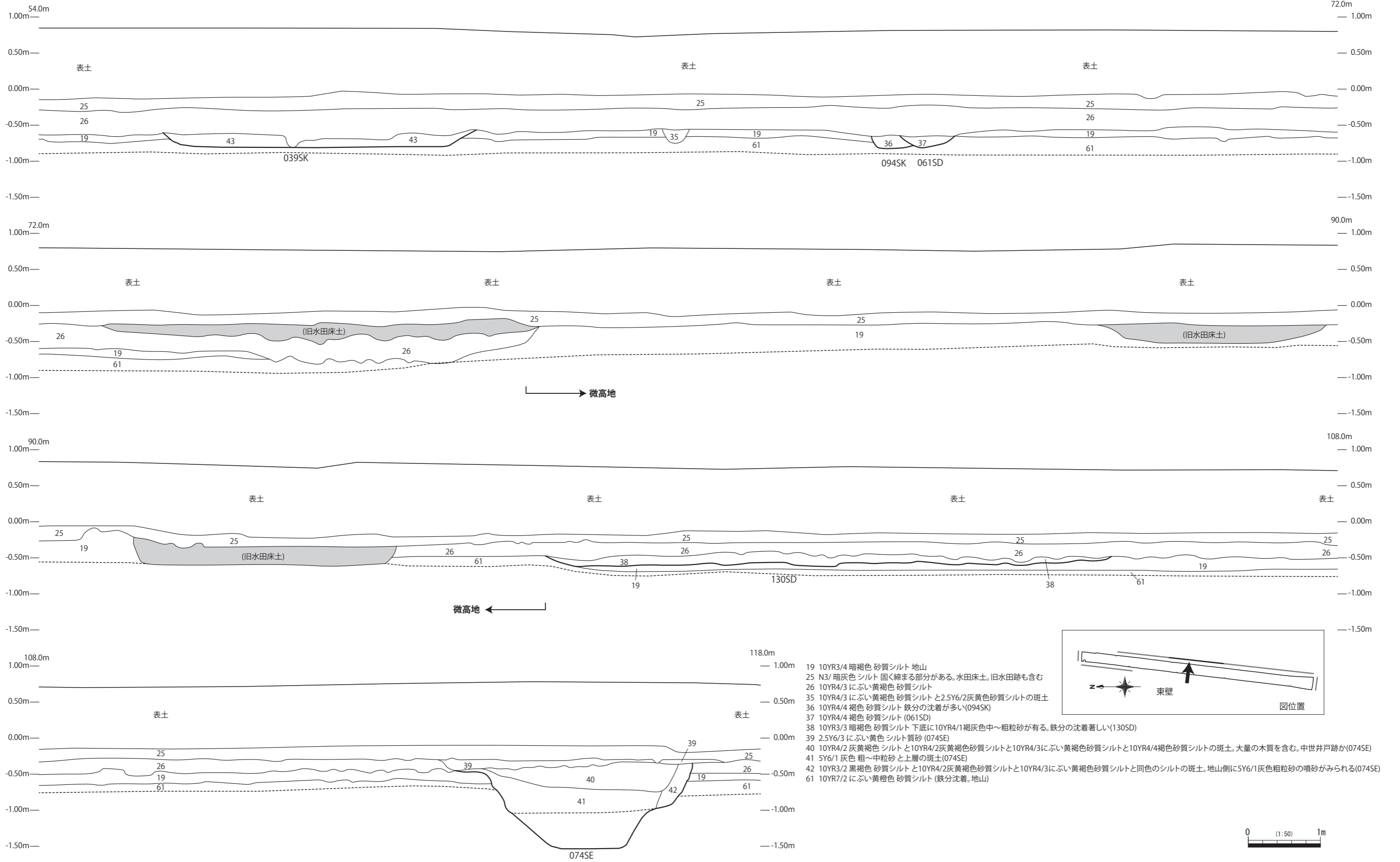
- 1 10YR4/2 灰黄褐色 砂質シルト
- 2 10YR6/3 にぶい黄褐色 砂質シルトと細粒砂の斑土
- 3 10YR5/3 にぶい黄褐色 砂質シルト 2層とともに近世以降の土坑埋土の可能性が高い
- 4 10YR4/3 にぶい黄褐色 砂質シルト
- 5 2.5Y5/3 黄褐色 砂質シルト
- 6 2.5Y4/3 オリーブ褐色 砂質シルト
- 7 10YR5/3 にぶい黄褐色 砂質シルト
- 8 10YR3/4 暗褐色 砂質シルトと10YR4/4褐色砂質シルトの斑土、大溝埋め立て時の単位や土を捨てた方向を観察できる。中～近世か
- 9 10YR4/4 褐色 砂質シルトと2.5Y4/3オリーブ褐色砂質シルトの斑土
- 10 10YR3/4 暗褐色 砂質シルトと2.5Y5/2暗灰黄色シルトと2.5Y6/4にぶい黄色中粒砂の斑土、全体に鉄分の沈着層がみられる。下底に5Y5/1灰色粒砂層と炭化物の堆積がみられる部分がある。中～近世か(008SD)
- 11 10YR3/4 暗褐色 砂質シルトと2.5Y5/2暗灰黄色シルトの斑土(008SD)
- 12 2.5Y4/3 オリーブ褐色 砂質シルトと10YR4/4褐色砂質シルトの斑土、ところどころに噴砂脈がみられる
- 13 10YR5/3 にぶい黄褐色 砂質シルト 版築土か
- 14 2.5Y6/4 にぶい黄色 砂質シルト 版築土か
- 15 10YR4/2 灰黄褐色 砂質シルト 版築土か
- 16 10YR4/3 にぶい黄褐色 砂質シルトと2.5Y5/2にぶい黄褐色砂質シルトの斑土(008SD)
- 17 10YR4/3 にぶい黄褐色 砂質シルト
- 18 2.5Y4/3 オリーブ褐色 砂質シルトと10YR4/4褐色砂質シルトの斑土

- 19 10YR3/4 暗褐色 砂質シルト (地山)
- 20 10YR3/3 暗褐色 砂質シルトと10YR4/3にぶい黄褐色砂質シルトの斑土(078SD)
- 21 10YR3/3 暗褐色 砂質シルトと10YR4/3にぶい黄褐色砂質シルトの斑土(079SD)
- 22 10YR3/3 暗褐色 砂質シルトと10YR4/3にぶい黄褐色砂質シルトの斑土(080SD)
- 23 10YR3/3 暗褐色 砂質シルト (014SD)
- 24 10YR3/3 暗褐色 砂質シルト (015SD)
- 25 N3/ 暗灰色シルト 固く締まる部分がある。水田床土。旧水田跡も含む
- 26 10YR4/3 にぶい黄褐色 砂質シルト
- 27 2.5Y5/3 黄褐色 砂質シルトと同色細粒砂の斑土、ラミナ状に鉄分の沈着層がみられる。
- 28 2.5Y5/3 黄褐色 砂質シルトと10YR5/3にぶい黄褐色砂質シルトと同色細粒砂の斑土、ラミナ状に鉄分の沈着層がみられる。
- 29 2.5Y5/3 黄褐色 砂質シルトと2.5Y7/4浅黄色砂質シルトと同色細粒砂の斑土、ラミナ状に鉄分の沈着層がみられる。
- 30 10YR6/3 にぶい黄褐色 砂質シルト ラミナ状に鉄分の沈着層がみられる
- 31 10YR6/3 にぶい黄褐色 砂質シルトと2.5Y5/3黄褐色砂質シルトと同色細粒砂の斑土、ラミナ状に鉄分の沈着層がみられる。
- 32 10YR4/2 灰黄褐色シルト 大量の木質、加工木、植物種子、昆虫化石、炭化物を含む。下底に2.5Y6/1黄灰色中粒砂層がある。古代(017SD)
- 33 10YR5/2 灰黄褐色シルト質砂と10YR6/3にぶい黄褐色シルトの斑土(020SD)
- 34 10YR4/4 褐色 砂質シルト (038SD)
- 61 10YR7/2 にぶい黄褐色 砂質シルト (鉄分沈着。地山)



第14図 1区セクション図2

1区 東壁壁面図(2/4)

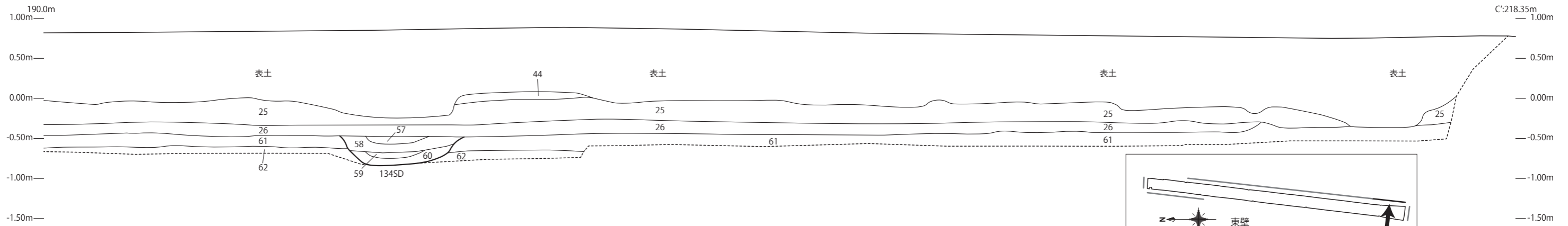
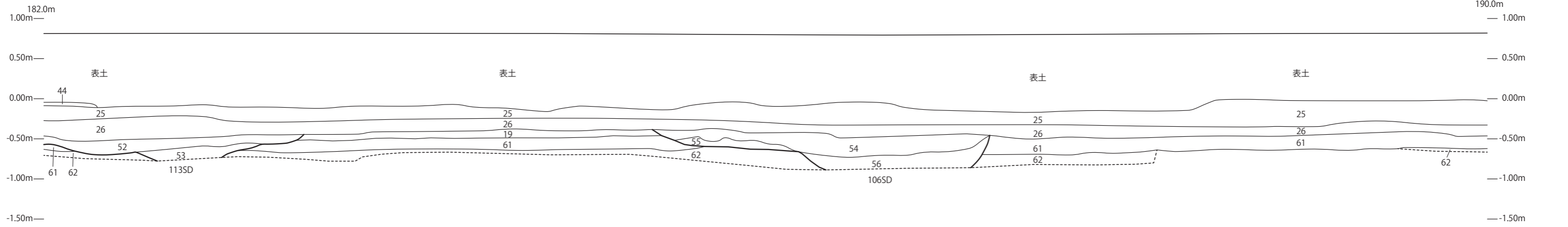


第15図 1区セクション図3





1区 東壁壁面図(4/4)

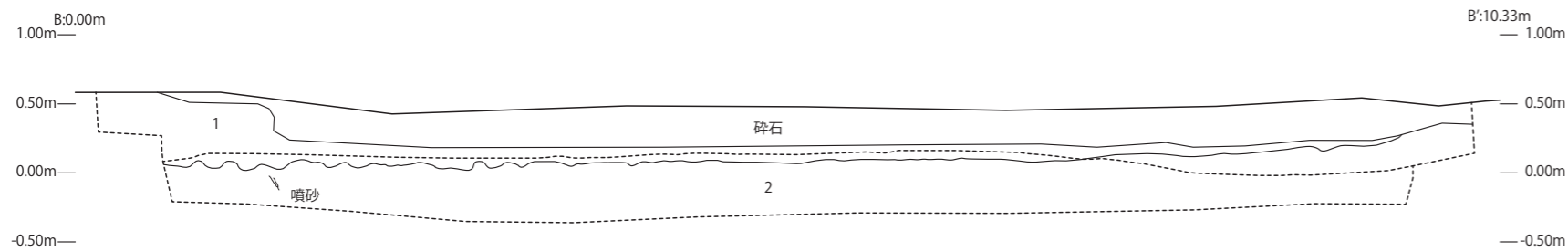


1区 南壁壁面図

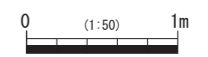
- 19 10YR3/4 暗褐色 砂質シルト 地山
- 25 N3/ 暗灰色 シルト 固く締まる部分がある。水田床土。旧水田跡も含む
- 26 10YR4/3 にぶい黄褐色 砂質シルト
- 44 N3/ 暗灰色 シルト (軟質。植物質含む。水田耕作土)
- 52 10YR6/1 褐灰色 砂質シルト (113SD)
- 53 7.5YR4/1 褐灰色 粘質シルト (113SD)
- 54 10YR6/2 灰黄褐色 砂質シルト (鉄分沈着。106SD)
- 55 5YR4/2 灰褐色 砂質シルト (鉄・マンガン分沈着。106SD)
- 56 10YR6/1 褐灰色 砂質シルト (106SD)
- 57 10YR5/1 褐灰色 粘質シルト (134SD)
- 58 10YR6/1 褐灰色 粘質シルト (134SD)
- 59 10YR6/3 にぶい黄褐色 粘質シルト (鉄分沈着。134SD)
- 60 10YR5/2 灰黄褐色 シルト (鉄分沈着。134SD)
- 61 10YR7/2 にぶい黄褐色 砂質シルト (鉄分沈着。地山)
- 62 10YR7/2 にぶい黄褐色 細粒砂と砂質シルトの斑土 (地山)

25 N3/ 暗灰色 シルト 固く締まる部分がある。水田床土。旧水田跡も含む  
62 10YR7/2 にぶい黄褐色 細粒砂と砂質シルトの斑土 (地山)

1区 北壁壁面図



- 1 5Y3/1 オリーブ黒色シルト (水田床土、固く締まる)
- 2 10YR4/3 にぶい黄褐色 砂質シルト (上半に噴砂脈が垂直方向にみられる)



第17図 1区セクション図5

## 第2節 1区の主な遺構と遺物

1区は全長260mにも及ぶ長大な調査区であるため、便宜上北部(調査区北端から017SD自然流路まで)、中部(017SD南岸より中央の微高地まで)、南部(微高地より南)に分けて説明する(第18図)。またそれぞれの区を必要に応じ、北から更にA、Bなどに小分して記述する。

### 1 北部

#### A 自然堤防上の溝群(001～004,007SD)と出土遺物(第6図～第7図、第19図)

自然堤防表面で検出された、ほぼ同一方向に走る溝群である。001SDは幅70cm前後で平均的な深さ30cm、N-30°-Eの方向に伸び、調査区内で全長15mほどが検出されている。溝埋土からの遺物出土量が溝群の中でいちばん多かった。002SDは幅60cm前後で平均的な深さ20cm、N-26°-Eの方向に伸び、調査区内で約20mが検出された。003SDは幅60cm前後で平均的な深さ15cm、N-25°-Eの方向に伸び、調査区内で約14mが検出された。検出されたプランは北端が消滅したように表現してあるが、上層の攪乱の影響でその部分が周囲より削平されていたことによるもので、本来は更に北に伸びていた可能性が高い。004SDは幅40cm前後で平均的な深さ20cm、N-30°-Eの方向に伸び、調査区内で約13mが検出された。007SDは幅45cm前後で平均的な深さ15cm、N-24°-Eの方向に伸び、調査区内で断続的に約13mが検出された。北端部はやや北寄りに角度を変えるようである。



溝群の検出状況 南西から

方向性から見ると溝a群:N-30°-E方向の001SD・004SDと、溝b群:N-24°-E方向の002SD・003SD・007SDの二群に分けることができるが、両群の先後関係はその南端が調査区外であるため不明である。

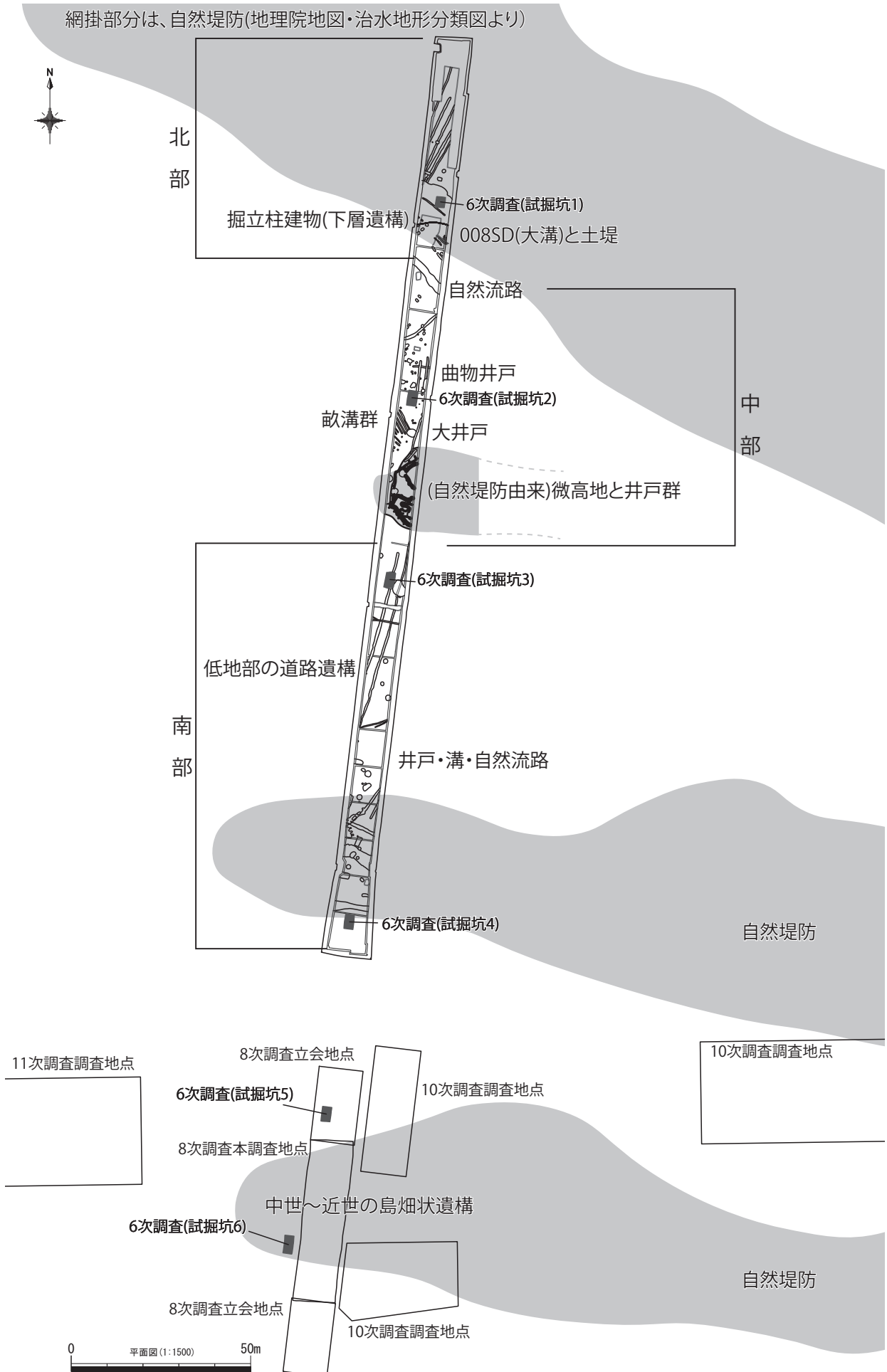
溝と溝の距離は001SD/004SDが溝上端で80cm、溝中心線からは1.3mである。同様に002SD/003SDは上端が1.6mで中心からは2.2m、003SD/007SDは上端が1.8mで中心からは2.4mである。

これらの溝群がいったい何であるか、いくつかの可能性を検討してみた。例えばN-24°-E方向のb群002SD/003SDと003SD/007SDの場合、両者とも幅約1.8mの間単位を想定しよう。畑地の畝溝としては些か広すぎる間隔であり、道路の側溝という印象が強い。しかしN-30°-E方向のa群001SD/004SDに関しては実質幅80cmであり、道路と判断するには狭すぎる印象があるが、現時点では暫定的にいずれの溝も道路側溝と考えておきたい。

次に溝埋土および遺構周辺から検出された主な遺物であるが、量的には001SD埋土からの出土がいちばん多い。001は須恵器の坏でK-14号窯式期のもの。003は灰釉陶器の皿でK-90号窯式期と考えられるもの。口縁部を欠くが糸切り痕の残る高台見込みにベンガラ塗布がみられた。目的等は不明である。005は須恵器の鉢で8世紀後半以降のものであろう。006・007は灰釉陶器

第2章 調査成果

網掛部分は、自然堤防(地理院地図・治水地形分類図より)



第18図 1区周辺環境概念図



の皿で O-53 号窯式期のもの。出土遺物の時期としては 9 世紀後半から 10 世紀にかけてが中心と考えられる。これら古代の土器の他に、004 小碗(尾張 4 型式)、002 土師皿、008 常滑片口鉢、011 常滑大甕なども検出されているが、概ね 12 世紀中頃の資料であり、上層からもたらされたものであろう。

石器としては石 1 や石 3 のような棒状のものが検出されている。後者には被熱の痕跡もみられ竈の支柱などの転用も考えられるが、前者は端部の叩打痕や体部の平滑な様子から手に持つ道具としての用途が考えられる。いずれも叩石と推測されるものである。

並行する 004SD 埋土からは 014 灰釉陶器の鉢が検出されており、高台部分のみのため厳密に時期を特定できないが、O-53 号窯式期の可能性も考えられるので、10 世紀前半の遺構であると推定できよう。

次に溝 b 群に伴う遺物であるが、溝埋土からの出土に乏しく、溝周辺からも希薄である。003SD 埋土から 012 の緑釉素地と思われる皿と 013 の灰釉陶器の碗が出土している。いずれも K-90 号窯式期のものと考えられる。また溝 b 群の検出時に発見された遺物として 038、039、040、041 などの灰釉陶器があり、おおむね K-90 号窯式から O-53 号窯式の資料であり、溝 a 群出土遺物との際立った相違は認められない。

次に溝群と重なるように存在するいくつかの遺構について述べる。**005SK** は直径約 1m の円形プランで、深さも 1m。遺構底面で湧水があった。出土遺物は須恵器や土師器の細片など 5 片であった。埋土は黄褐色の砂質シルト部分が多く、002SD によって切られている。**010SK** は長楕円形のプランで、001SD によって切られている。片側が浅くなる断面形状の土坑で、出土遺物は須恵器や土師器の細片が数点であった。底面で湧水がみられた。**009SK** はにぶい黄橙色細粒砂で充填された柱穴様の土坑で、底面で湧水があった。溝群の東側で検出されており、埋土中に遺物はみられなかった。**011SK**(出土遺物無し)は溝との先後関係が不明瞭な浅い土坑。これらの土坑は溝群に先行して存在した可能性が高いが、個々の性格は不明である。**006SK** は円と長方形を組み合わせたような形状の土坑だが、山茶碗や小皿の底部など中世遺物が 5 点、他に土師器細片や小石などが出土した。埋土や出土遺物の様相などから、中世以降に掘削された土坑の下半部分であった可能性が高い(第 19 図)。

## B 008SD と土堤およびその下層遺構と出土遺物(第 7 図、第 20 図～第 22 図)

**008SD** は断面形状逆台形の大規模な溝で、底面の幅は西壁側で 10.5m、東壁側では 6m を測る。北側は自然堤防末端を急角度で掘削して造り出されており、南側は自然堤防裾部に幅 4m、高さ 1m 以上の土堤を築いて構築されていた。底面はほぼ水平で標高は -1m 前後であり、西北から南東方向の軸線をみることができる。底面のほぼ中央には同方向に幅 30cm、深さ 5～10cm の小規模な溝 **144SD** を検出したが、性格は不明である。溝の底部は湧水激しく常にぬかるみ、地山層や他の遺構の検出が難しかったが、一部に竹などの形状を保った炭を含む炭化物がみられた。溝の掘削完了直後に溝の底で火が焚かれた痕跡かもしれない。

溝の南岸は人工的に造成された土堤によって画されていた。土堤の規模は底部幅約 4m で、セクション図で把握した高さは 70cm ほどであったが、堆積状況や後世の削平を考慮すれば、完成当初は 1m 以上の高さを有していたものと推定される。土堤の基礎部分には厚さ 5～8cm の版築層

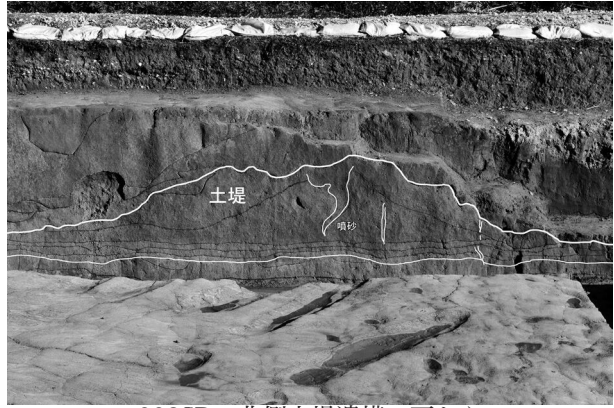
## 第2章 調査成果

が数枚みられ、その基礎の上に盛土して構築されたようである。

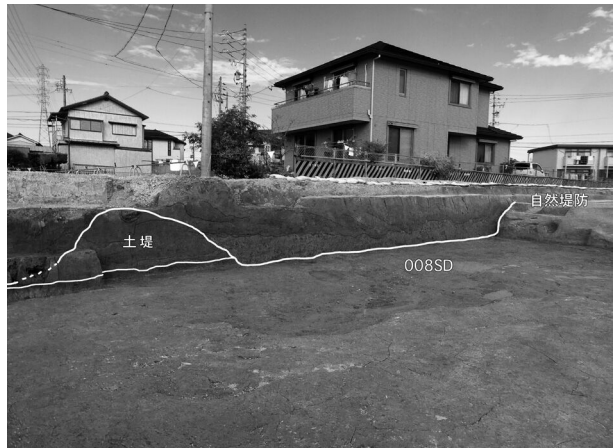
この土堤に付随し、北側の 008SD の内側には平坦面が設けられていた。平坦面の中央から西側は大規模な攪乱によって失われていたため平面プランの三分の二近くは推定線となるが、東壁で観察された幅は 3.5m で、北側末端はほぼ垂直に約 60cm 掘り下げられ 008SD の底に繋がっていた。西壁にはこのような平坦面が認められず、どのような機能を期待して設けられたものか結論は出せなかった。なお平坦面上も 1～2 枚の版築層で覆われており、構築当初の土堤の基礎とも思われたが、その場合溝の幅が 6m なのに対し土堤の幅が 7.5m にも及ぶことや、西壁側に同様の構造が認められないことから、あくまでも土堤に付随する施設としての理解に留まった。

008SD からの出土遺物としては、南側の土堤上に集積された須恵器 (020 など) も含め、古代の遺物と中世遺物、そして主に埋土上半では少量の近世遺物が混在する様相であった。また石 2 をはじめ、拳大またはそれより一回り大きな礫 (いずれも石器ではない) が 20 個ほど、上層の下底レベルで検出されている。これらの状況や東西セクションの観察結果などから、溝本体と土堤は 13 世紀頃に掘削・築造され、しばらくの間溝または自然堤防に沿う堀として機能したのち、何らかの理由で平坦面レベルまで埋め立てられ、その後近世になって急激に埋め立てられた様子を想像しうる。原地形を考慮すれば、北側即ち地盤の高い自然堤防面から埋め立てる方が効率的と思われるが、セクション面では南方の土堤側から埋め立てられた客土の単位が何条も観察出来ることから、南側に広がる低地部のどこからか土が運ばれてきたことになる。その理由は不明である。

土堤部分の調査において、人工的な盛土を除去した上であらためて地山面の確認をおこなった結果、西側では柱根や礎板を伴う柱穴群 (012SP・013SP・138SP～141SP) を検出した (第 21 図)。



008SD 北側土堤遺構 西から



008SD 西側断面 南東から



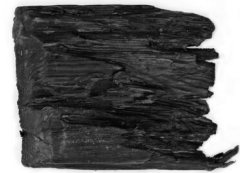
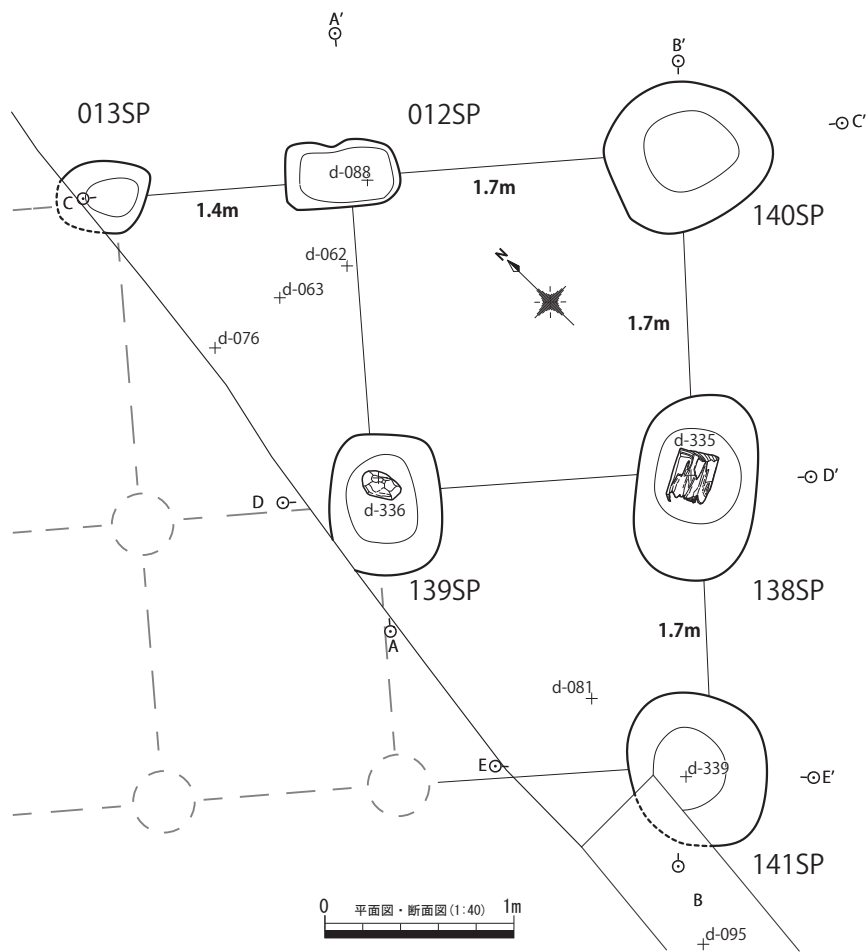
008SD 東側断面 西から



008SD 東側断面近景 南西から

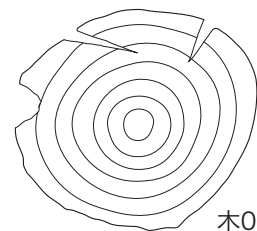
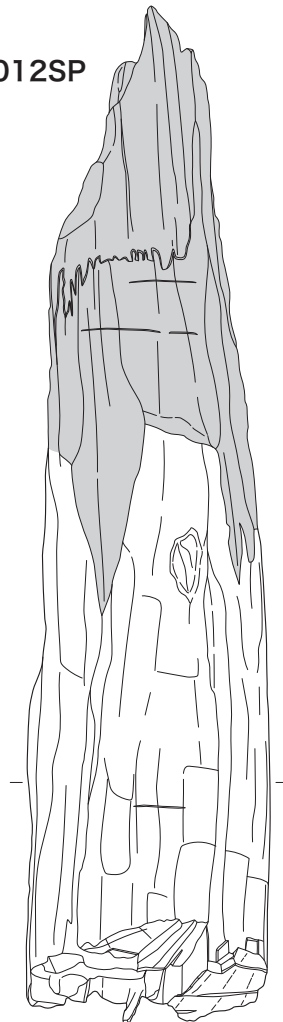




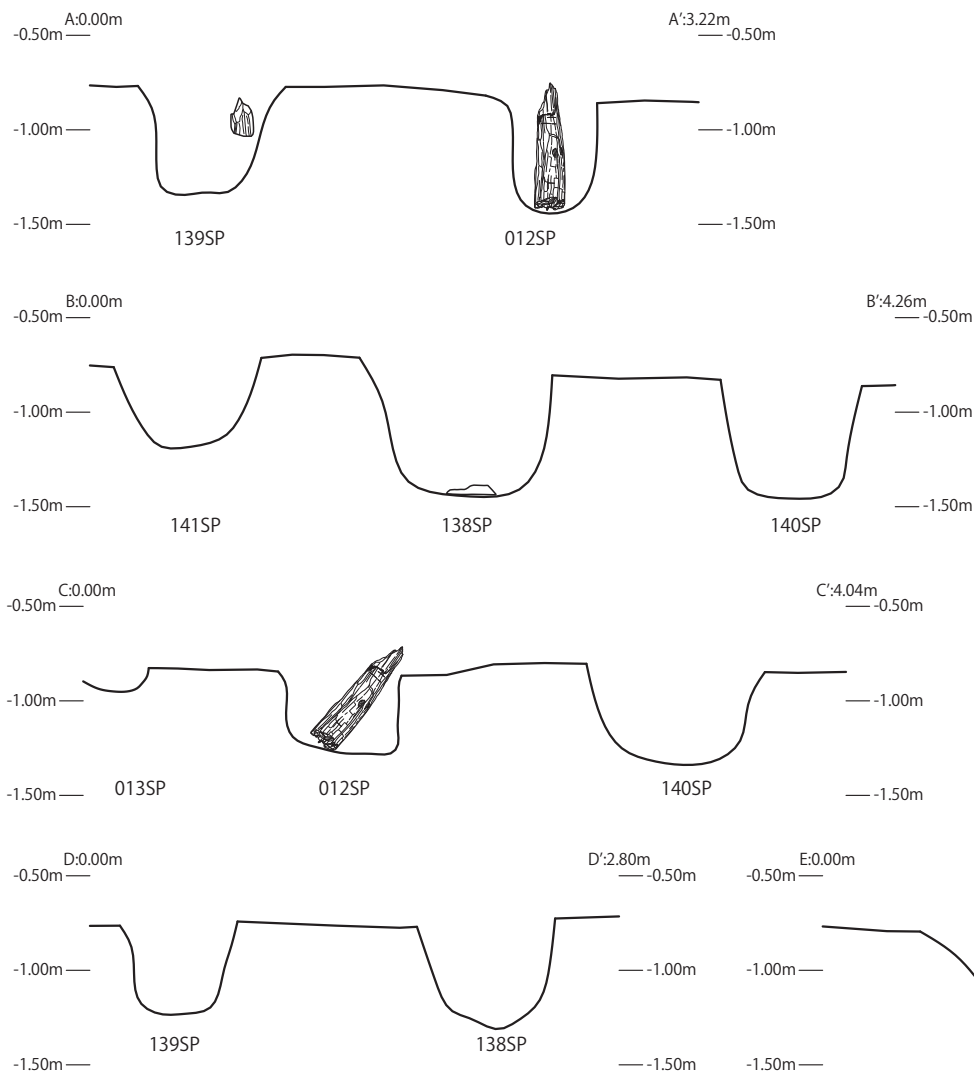


138SP:d-335  
礎板

012SP



木05  
:d-088  
柱根



第 21 図 掘立柱建物プラン

## 第2章 調査成果

柱根 (d-088・336) や礎板 (d-335) を伴うものもあり、各々の間隔は 1.5～1.6m であった。調査区内では二間×二間のプランのみだが、柱穴の様相などからプランは調査区外にも続く可能性が高く、その場合二間×三間または二間×四間の掘立柱建物を想定できる。建物の軸線は W-40°-N であり、後の 008SD とほぼ同じ方向性を示している。これは自然堤防の走る方向とも合致することから、自然堤防裾部の緩斜面を削平して建てられた建物であったことを示している。

これらの柱穴群に関し、012SP に残されていた保存の良い柱根 (d-088：木 05) の年代測定をおこなった結果、暦年較正結果は 552-609 cal AD (82.55%) という数値で、6 世紀中頃～7 世紀前半に伐採されたヒノキの柱である可能性が指摘された (年代測定結果の詳細は第 3 章参照)。今回の 1 区の調査では 6 世紀代の遺物は発見されおらず、7 世紀代の遺物も数点とその可能性があるものが散見される程度である。当地にいち早く建てられたと思われるこの建物の性格は、検討を要する。なお土堤北側の 008SD 西側に平坦面が存在しないことは、この掘立柱建物建造時に自然堤防裾の緩斜面が削平されてしまった結果とも考えられる。

次に東壁側の土堤撤去後には、地山面で小規模かつやや不規則な畝溝群 (077～081SD) を検出した。また、先行して遺構検出をおこなっていた土堤南側では 014～016SD の溝群が検出されており、これらは先に述べた掘立柱建物に関連した時期の遺構である可能性が高い。ただし残存した遺構埋土は数 cm から 5cm 程度であり、まったく遺物を伴わない遺構群であったため時期等は不明である。

土堤及び掘立柱建物および溝群より南側は遺構・遺物ともに希薄で、017SD までの間はほぼ空白地帯となっていた。

017SD は幅 2.0～2.5m で緩やかに蛇行しながら北西から南東へ流れる自然流路で、自然堤防



掘立柱建物 (ドローンより撮影)



012SP(d-088) 柱痕出土状況 北東から

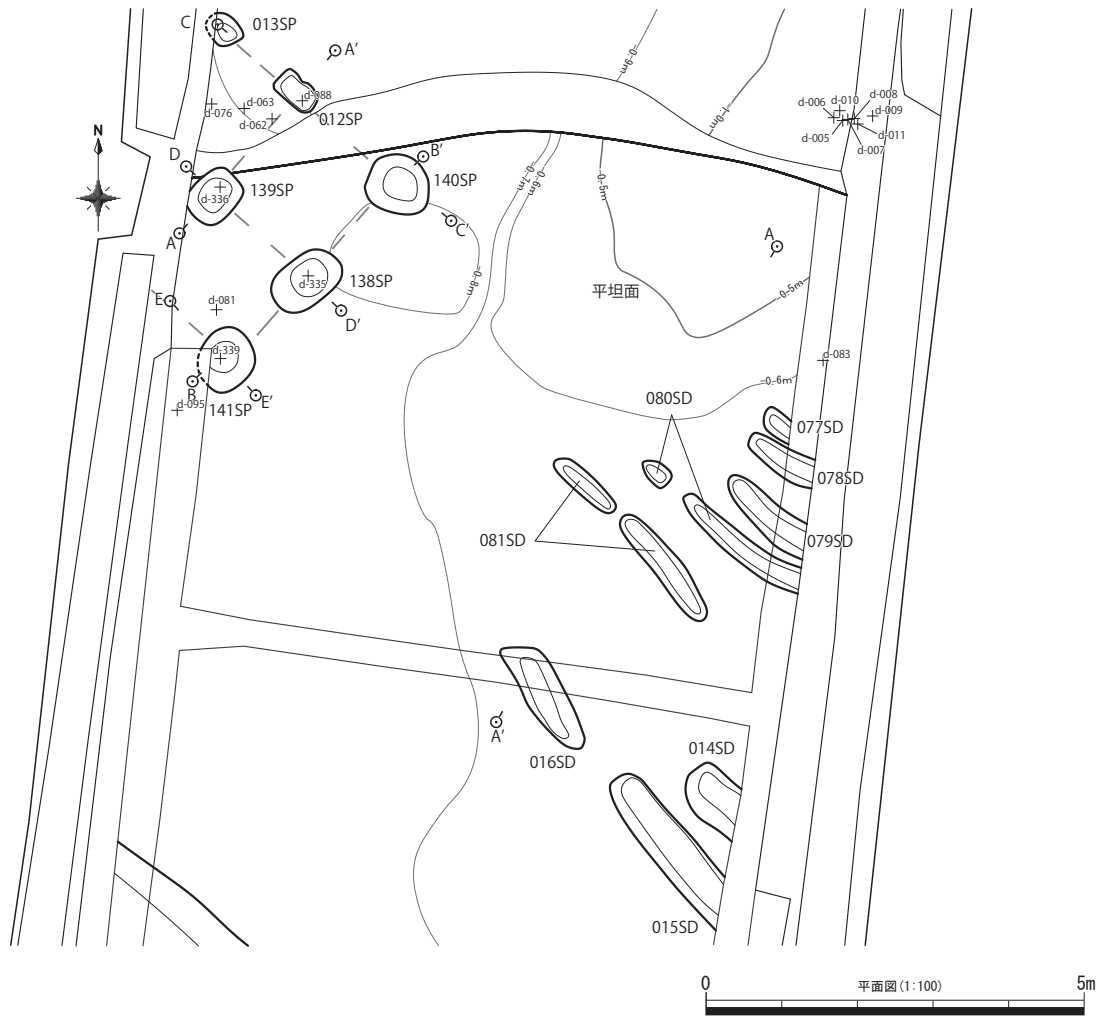


017SD セクション 北西から



017SD 出土 自然遺物 (小型種子類)

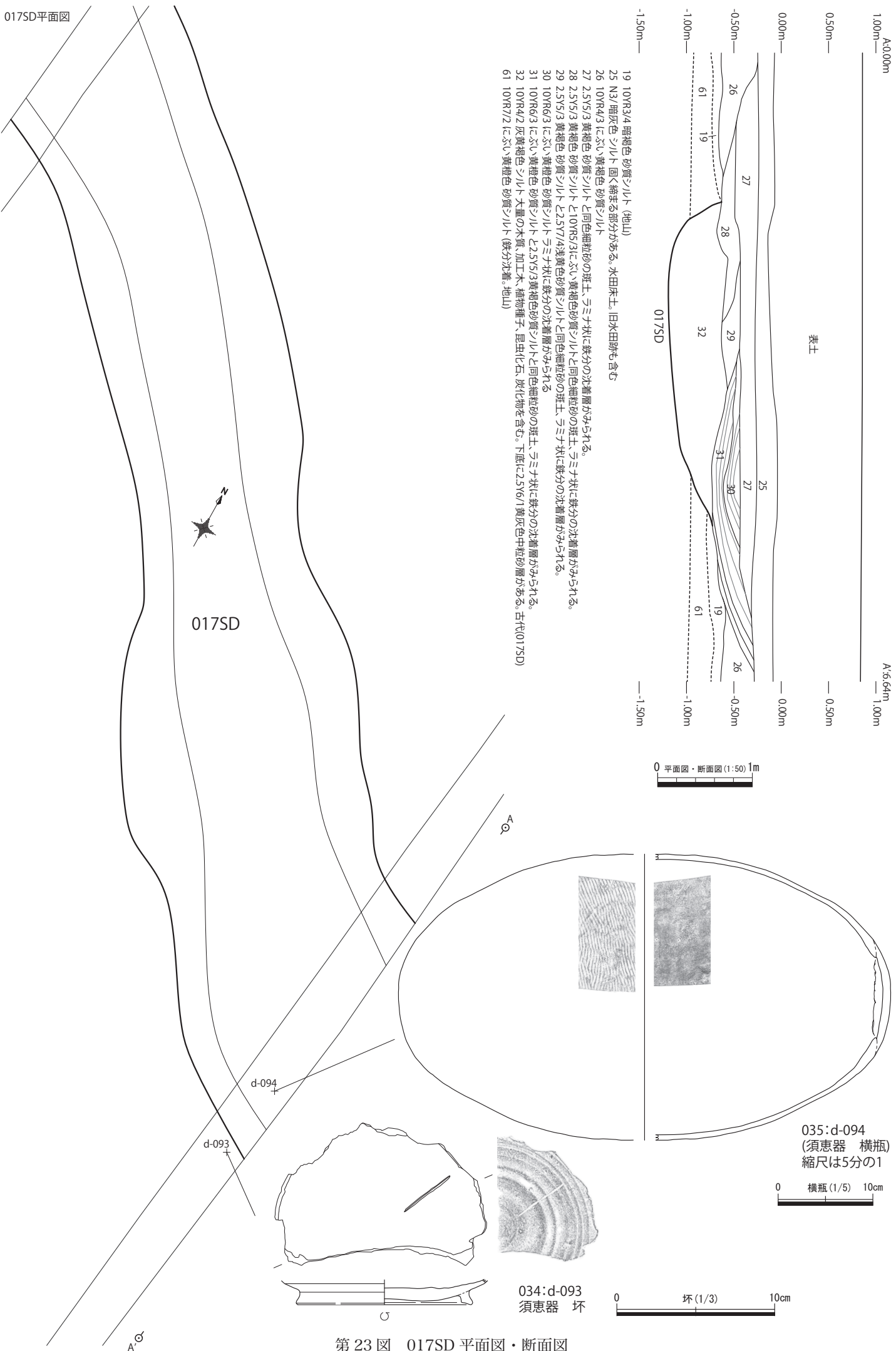
土堤下層(古代面)平面図



第22図 土堤下層遺構平面図



掘立柱建物 (ドローンより撮影)



第23図 017SD 平面図・断面図

裾部に自然発生したものと考えられる(第23図)。埋土下半には大量の木質(加工木断片・自然木の枝葉や種子類など)が堆積しており、シルト化した埋土中からは昆虫化石(コガネムシなどの甲虫類の羽根など)が検出されており、シルト中に沈殿したような様相などからあまり水流の無い自然流路であったことが推測される。調査区内では上半の土層が失われており、規模や堆積状況が不明であったが、東壁ではこの流路の埋積過程の一端を観察することができた。即ち埋土上半には砂質シルトと細粒砂およびシルトからなるラミナ構造がみられる層(28・30・31層)があり、31層底からは8世紀前半の須恵器034が検出されている。恐らく7世紀以前から先に述べた掘立柱建物と共に存在した自然流路が次第に埋まり、徐々に河床が上がり緩やかに蛇行してその中心軸をやや南に移した痕跡が、皿状の断面を呈する30、31層ではないかと考えられる(中心線の移動距離は2m弱)。

## 2 中部

### A 017SD 南岸から試掘坑2までの主な遺構と出土遺物(第8図、第24図～第26図)

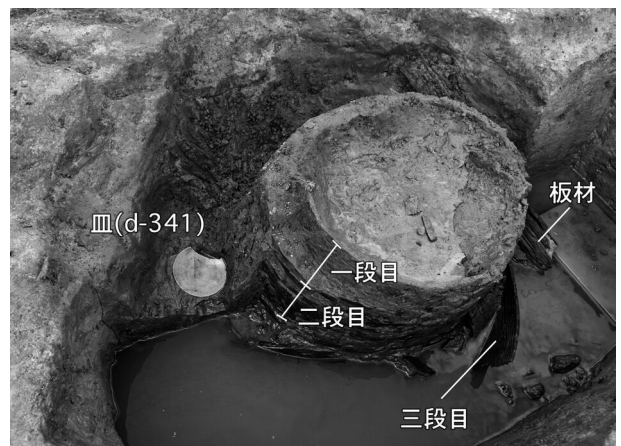
この区域では溝や土坑、時期を確実に特定できる遺構が少なく、遺物の集積などもみられなかった。重要な遺構としては、時期の異なる時期の2基の曲物井戸が検出されたので、先ずそれらについて紹介する。

030SEは古代の曲物井戸では、時期を特定しうるいくつかの遺物を検出した。遺構プラン及び残存した曲物最上段検出面の標高は-70cmである。土坑の大きさは1.4m×1m、東側の短辺が円形を呈する長方形で、中心から東南寄りに曲物が埋設されていた。最上段の曲物は直径約40cmの円形にその存在が確認されたが、掘削を進めるにしたがって木質の劣化が著しく、遺物としての取り上げは不可能な状態であった。遺構の断面模式図で示したように(第24図)、埋土第1層である鉄分を多く含む灰黄褐色シルト層中での木質は概ね劣化が著しく、存在の痕跡が鉄分の多寡によって目視できるのみであった。なお、第2層の黒褐色シルト層中では表面の溶解が進み劣化した木材と、ほぼ原形を保った木材が混在していた。この第2層掘削と同時に湧水が始まったのだが、木質の状態については地中の水分量や含まれる鉄分の影響も大きいと推測される。

掘り進めるうちに曲物が積み重なるように検出されたが、そのいずれもが割れて開いた状態であることが判明した。また曲物と同時に数枚の板材が出土したが、曲物を積み重ねる部分に挟み込まれた状態で検出されたものもある。特に最下段は湧水著しく、ポンプで排水すればするほど底面の砂層が崩れて拡張し、更なる湧水を呼ぶような状



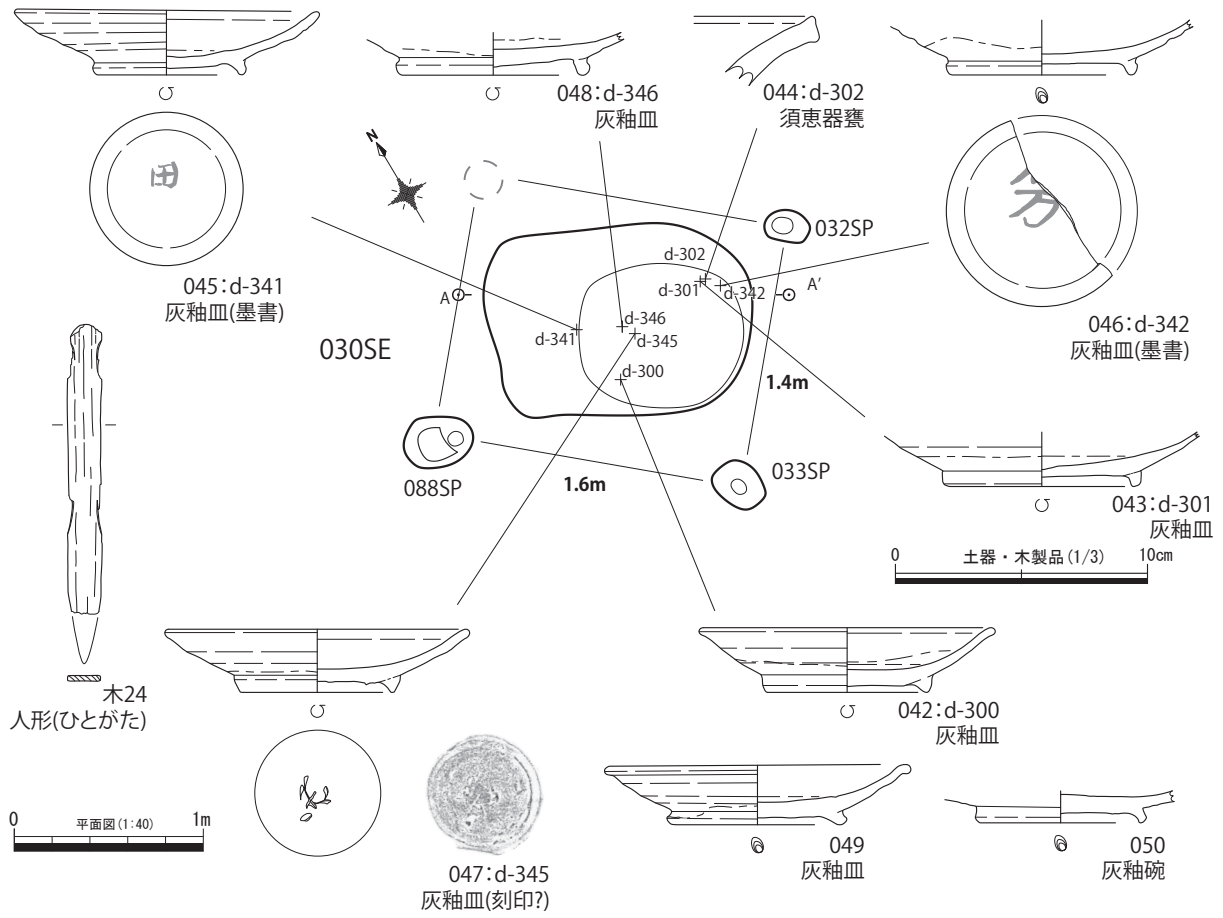
030SE 曲物井戸調査状況 南西から



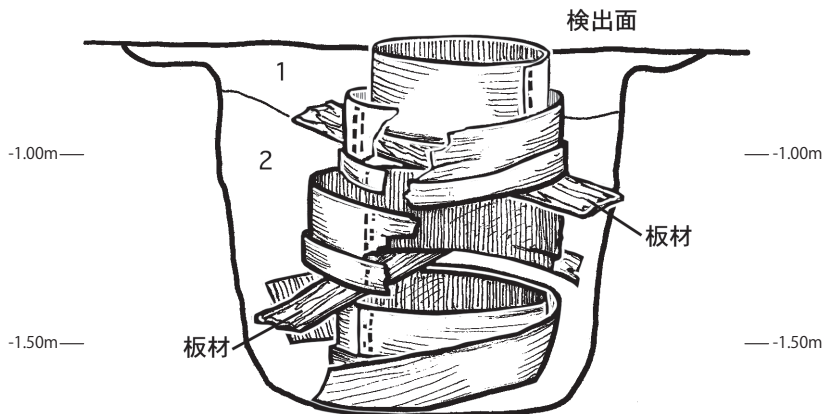
030SE 曲物検出状況 西から

第2章 調査成果

030SE平面図



A:0.00m -0.50m A':1.75m 0.50m



- 1 10Y4/2 灰黄褐色シルト (鉄分含む)
- 2 10YR3/1 黒褐色シルト 自然遺物(自然木・ハマグリ・シジミ等)を含む埋土

遺構断面と曲物検出状況模式図

0 断面図 (1:20) 0.5m

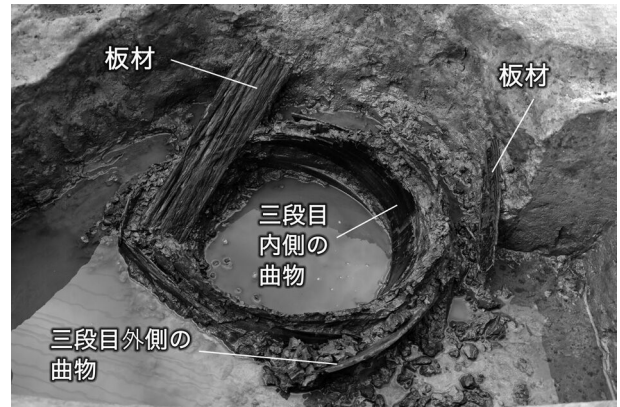
第24図 030SE 平面図・断面図

況であったが、完全に綴じ部分が開いてしまった  
 板材の内部に、曲物が入り子状態になって検出された。これらの状況から、曲物が何段積み重ねられていたのかは正確に検証することはできなかったが、出土状況などから推測すると、三段の曲物が積み重ねられていた可能性が高い。最上段の直径は約40cmだが、中段の曲物は推定直径は約56cm、最下段から出土したものの推定直径は62cmとなり、下に行くほど大きな曲物が使われていたことになる。そのままでは積み重ねが不可能なことから、各段の中間に板材を噛ませて井戸筒を構築していたようだが、その不安定部分から地震や土圧の影響で曲物が破損し、開いて折り重なるように崩落した状態で検出されたと考えられる。

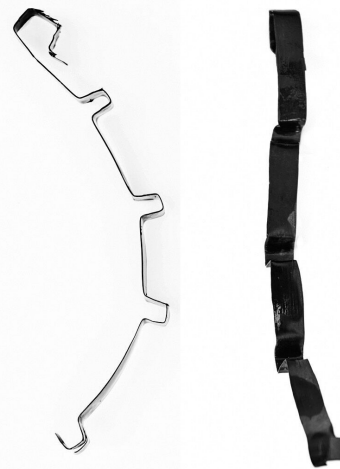
曲物の綴じ紐に関しては本体に比して保存状態が良好で、時に真鍮のような光澤を呈するものもあった。中段の曲物から採取した綴じ紐の年代測定をおこなった結果、暦年較正結果は878-979 cal AD (88.89%) という数値を得た。詳細は第3章を参照されたい。

上記のような検出状況であったため、曲物本体の埋設に伴う裏込め土の堆積状況については細かな観察ができなかったが、埋土中からは腐朽した木質とともに大量のハマグリとシジミが出土した。ただし貝殻本体は土壌化しており、それぞれ表皮や薄皮部分だけの検出である。これらが単なる日常の廃棄物利用であったのか、それとも井戸に対する何らかの効果(浄水または呪術的な要因)を期待した上での埋め立てかは判断出来なかった。

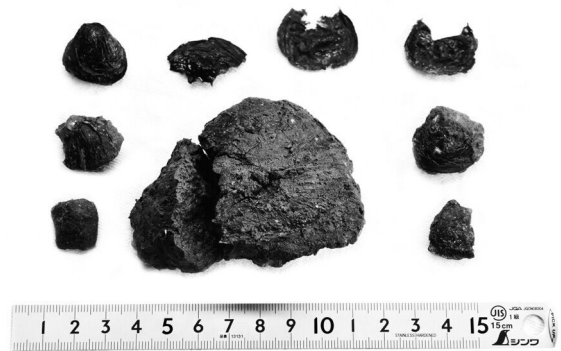
次に030SEで検出された主な遺物は、曲物の内外から灰釉陶器が発見されている。器形としては皿が多い。046は高台見込みに「□万」が、045は「田」の墨書が確認された。いずれも最上段と最下段の中間部分、曲物の裏込め土からの出土である。047はK-90号窯式期と思われる皿であるが、高台見込みに刻印のような刻みがみられた。細片としては、長頸瓶の口縁破片や肩部また、埋土中から1点、経木で作られた人形(次頁写真)が発見された。先端を欠くが推定長15cm、幅1.5cm厚さ約1mmで、対称的な位置に切り込みがあり、極めて省略的であるが人の形を意識して作られている。



030SE 3段目曲物検出状況 南西から



030SE 出土 曲物綴じ紐



030SE 出土 ハマグリ・シジミ類

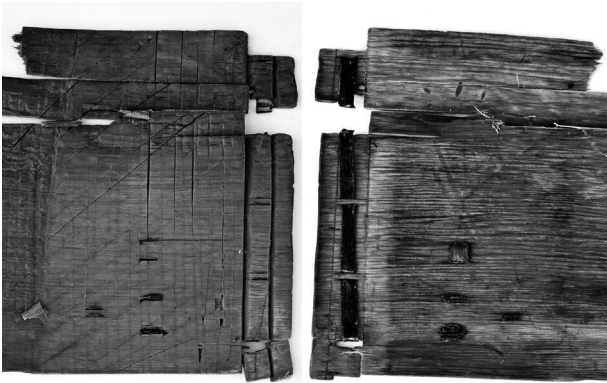
第2章 調査成果



030SE 3段目外側の曲物(白い部分は剥板・箍痕跡)



030SE 剥板(縦置き)と箍(横置き)



030SE 曲物綴合わせ部分(左:裏面 右:表面)



030SE 3段目外側の曲物(裏面)



030SE 出土人形(ひとがた)



030SE 3段目外側の曲物全体



030SE 出土板材



最終的には灰釉陶器や須恵器小片を含めて60片ほどが遺構から出土しているが、中には須恵器大甕や甗の破片もあった。遺物の時期はおおむねK-90号窯式後半またはO-53号窯式期から百大寺窯式期までのものであり、やや時期幅があるが、井戸が構築されたのは10世紀末または11世紀初頭と推測される。なお、030SEの周囲には032SP・033SP・088SPの三基のピットがあり、井戸に関連した小規模な覆い屋などの柱穴である可能性もある。

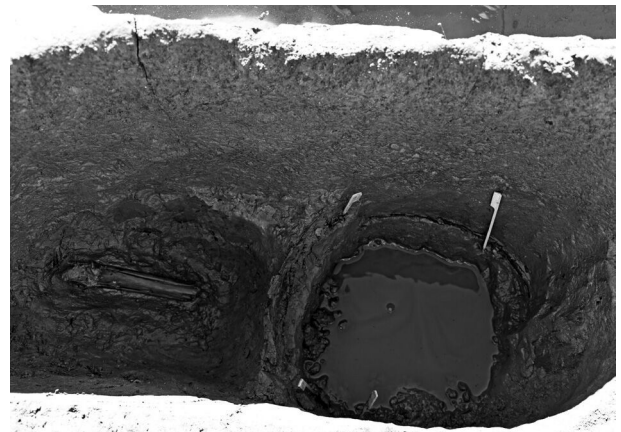
040SE(第25図)は調査区東壁近くで検出された曲物井戸で、直径1mのほぼ円形のプランを検出した。先の030SE同様、検出面でみられた最上段と思われる曲物は木質がほとんど土壌と一体化しており、存在の確認のみであった。遺構埋土は上半が全体的に鉄分沈着の多いオリブ褐色のシルト層で、土層底面には鉄分が沈殿し凝固した層が確認された。この凝固層を除去すると、湧水があった。最上段以下の曲物は大量に腐植物を含む褐灰色シルト層に埋没していたが、保存状態が極めて悪く、最下段以外の曲物を取り上げることはできなかった。また激しい湧水により、曲物裏込め埋土が掘削後短時間で泥濁化してしまい、堆積状況は図化できなかった。埋土からは自然木の枝葉や少量の貝殻(痕跡)、短く切られた竹(d-314)が1本検出された。この竹に関しては単独の出土であり、短いことや曲物内部からの出土ではないことなどから、井戸埋め戻しのまじないに用いられたものではないようである。また曲物内部の埋土からは自然木の枝葉の他、コガネムシなどの昆虫化石も多くみられた。

曲物は土坑の南西寄りに設置され、曲物は上中下三段から構成されていたようだが、中段の曲物は箍部分が緩み本体が破損して開いた状態を確認した。また、中段と下段の間からは板材が検出され、やはり上段曲物の落ち込みを防ぐために用いられていた可能性が高い。それぞれの直径は33~36cmと考えられ、最下段がやや大きい。残存状況や綴じ部分の詳細は第25図を参照されたい。なお、この下段の曲物に使われていた綴じ紐の年代測定をおこなったが、1160-1221 cal AD (95.45%)という結果を得られた(年代測定結果の詳細は第3章参照)。

次にこの井戸からの出土遺物としては、裏込め埋土には須恵器や灰釉陶器小片も含まれていたが、三筋壺小片、尾張型4型式の片口鉢や同5型式の山茶碗(051)、山皿(052)も出土し、主体を占め



040SE 曲物検出状況 東から

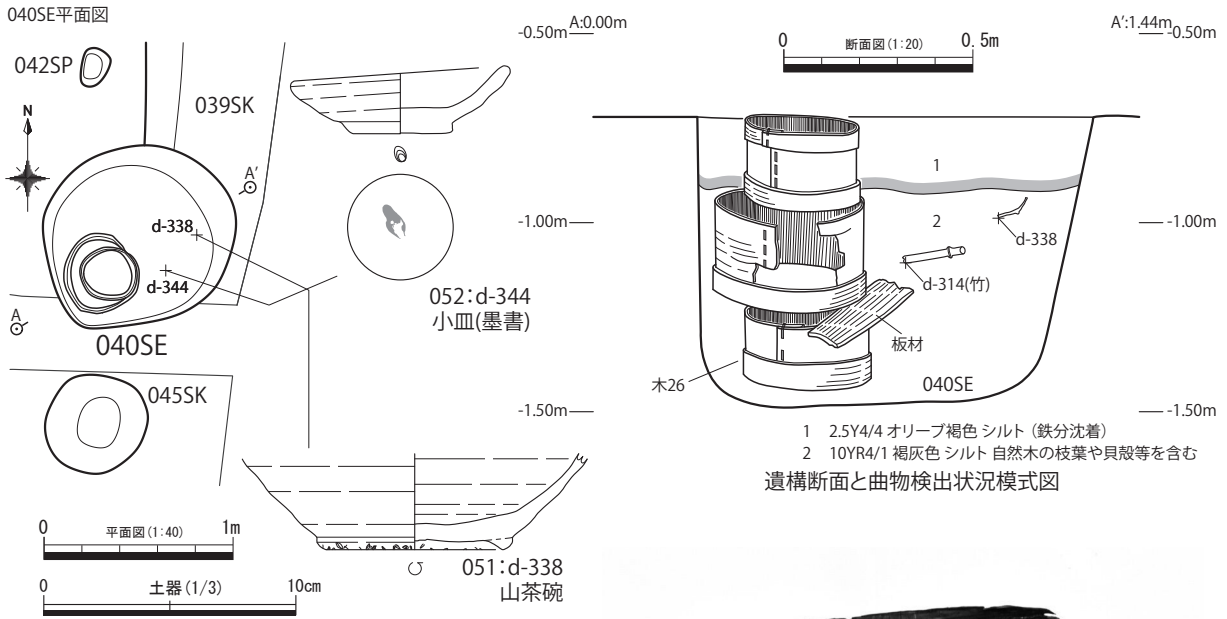


040SE 竹(d-314)検出状況 北西から

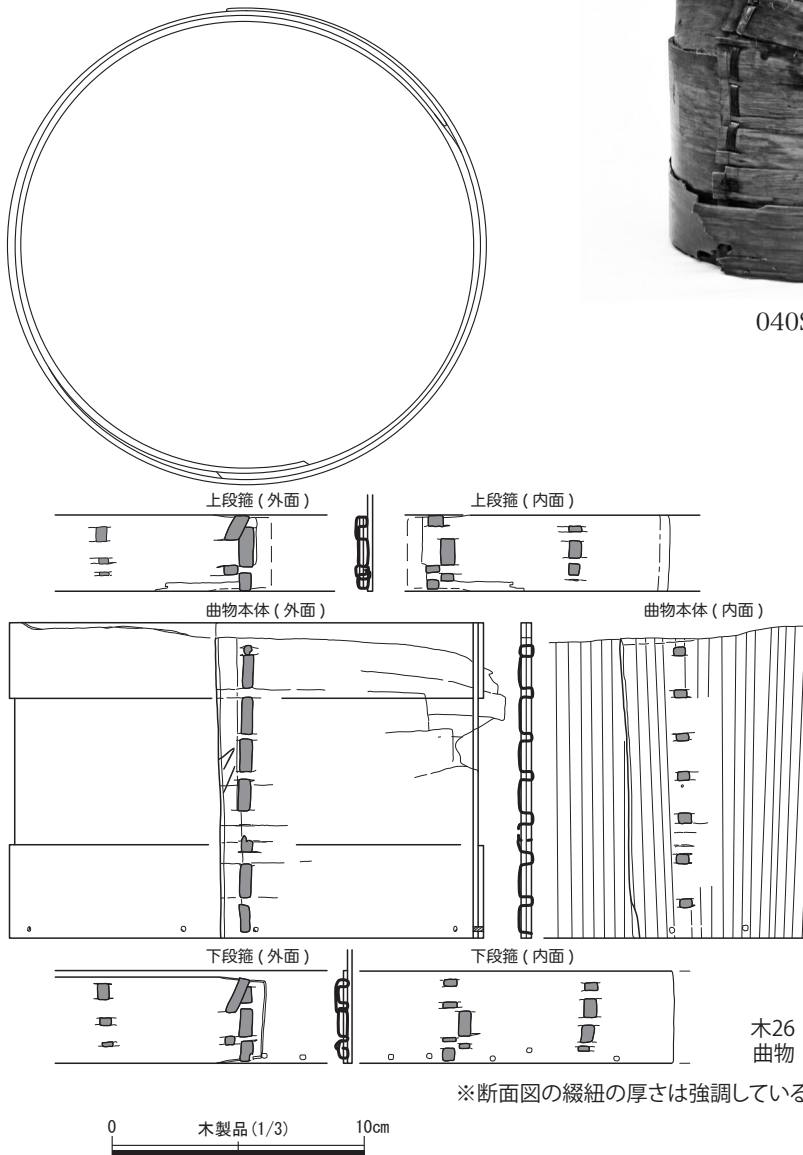


040SE 出土 自然遺物(大型種子類他)

第2章 調査成果



040SE 曲物(最下段)



040SE 曲物綴じ合わせ部分(拡大)

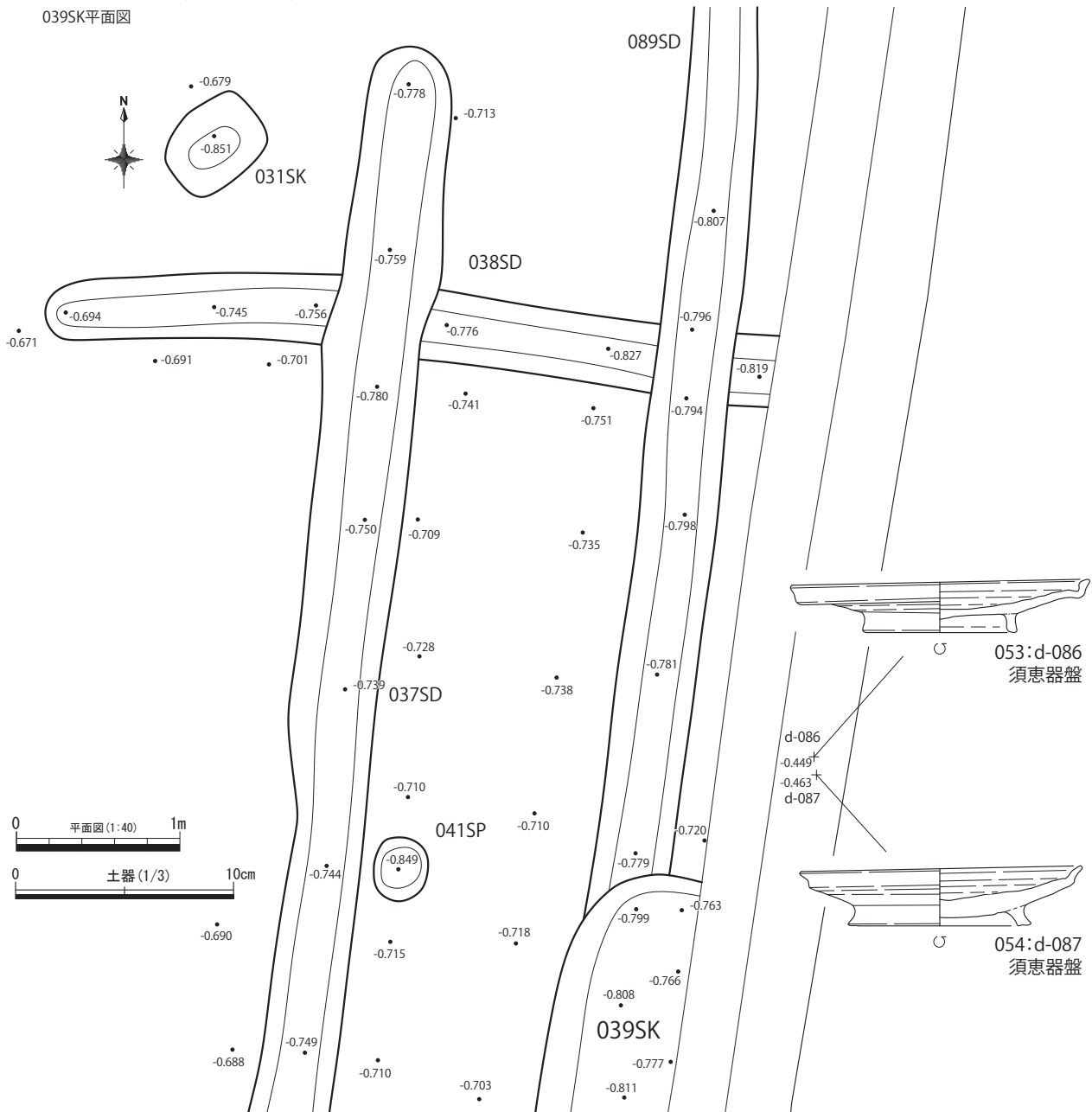
第25図 040SE 平面図・断面図

ていることから、12世紀末から13世紀初頭の遺構と判断した。年代測定結果と整合する内容である。なお、042SPと045SKが井戸を挟んで曲物とほぼ一直線に並ぶ位置にあるが、井戸に伴う遺構であるかは判断できなかった。

その他の遺構としては、南北に並走する溝037SDと089SDがある。主軸はN-14°E方向で、それぞれ幅50～60cm前後、深さ数cmから5cm以内で、両上端の間隔は1.4m、中心線同士の間隔は1.8mである。南北端は滅失しており、037SDは全長8.5m、089SDは南端を別遺構に切られ、6mほどを検出した。両者は道路の側溝とも考えられるが、出土遺物も無く、詳細は不明である。これらの溝とほぼ直交する038SDも、性格不明である。

他にいくつかの土坑が検出されているが、建物プランを呈する位置関係にあるものは確認されていない。

出土遺物は089SD東側の調査区犬走り段から8世紀後半の須恵器盤(053・054)が2点並んで出土している(第26図)。



第26図 089SD周辺平面図

**B 試掘坑2から微高地までの主な遺構と出土遺物(第8図～第9図、第27図～第30図)**

この区域では微高地を中心に大型の井戸遺構がいくつも見つまっている。

微高地の存在に関しては、表土掘削開始以前に、国土地理院のウェブサイト※において「治水地形分類図」として詳細なデータが公開されており、それらの地理院地図を参考に調査範囲内にも数箇所での存在を予想していた。また、1区の南側の過去の発掘調査において、自然堤防の微高地を利用した島畑の存在が報告されており(第8次調査)、同様の状況に留意しながら作業を進めた。その結果、調査区北部Aで言及したように、調査区北端では遺構検出面の標高+40cm前後、削平前の推定標高+90cm前後の自然堤防が確認された。地理院地図によれば、この自然堤防は東西に幅約600mほどで細長く分布し、現在の千音寺集落北部に至り、南北幅は約100mである。一方、調査区中部で検出されたものは南北幅約25m、水田に加工された上面の標高は+40cm前後で、元は標高+60cmほどだったと推定される。このように極めて小規模な微地形のためか、地理院地図では表示が無かったもので、成因は同じであり、同意味になるが、本稿においては便宜的に規模の大きな北端の高まりを「自然堤防」、中部の高まりを「微高地」と呼び分けることとする。

この地区で特筆すべき遺構は063SEの大井戸である。標高-70cm前後の遺構検出面において直径約2.5mの円形プランが検出された。その時点で既に、数カ所で半ば土壌化した木質が露呈する状況にあったことから井戸枠の存在が予想された(第27図)。

木質の残存状態を確認しながら掘削を進めると、埋土1層のシルト層下底に厚さ数cmの鉄分が凝固した鬼板層が存在し、その下層は褐灰色のシルト層となったが、掘削と同時に湧水があり、3層以下は常に水没状態となった。掘り進めた結果、板材を井戸側に、角と中間に杭を使って構築された井戸であることが判明した。シルト層に埋もれた井戸側の板材と杭を順に取り外すと、井戸底部分に曲物や土器が存在することが判明し、複数台のポンプで排水を試みたが、曲物井戸の掘削時同様、排水すればするほど底面周囲の地層が水を呼び連続的に崩落し、埋土が泥濁化する状況になった。

井戸底には水溜めとして埋設されたと考えられる大曲物(破損)があり、その内部から口縁部の欠損した原始灰釉陶器の長頸瓶2点と小曲物を取り出すことができた。更に、小曲物内部からは横櫛(短く割られていた)の乗った須恵器の皿(破損品)が納められたそのままの状態で検出された。井戸底の泥濁は可能な限り掬い上げ、5mm目の篩がけをおこなった結果、斎串数本と白色の玉石の他、長頸瓶の口縁部破片や何点かの土器がみられた(巻頭カラー写真ほか)。

これらの遺物はいわゆる「井戸仕舞い」に伴う埋納物と思われるが、詳細は別項(第4章)で考察する。

残存していた井戸材は18点あり、うち井戸側の板材が木01・03・05・07・09・11・13・15の8枚(各辺2枚)、四隅の杭(木04・08・12・16)は角材や丸太で4本、各辺の板材と板材の接合部分外側に打ち込まれた杭が木02・06・10・14の4本、これらとは別に、井戸側内側から木17・18の2本の細い杭状の木材からなる。井戸

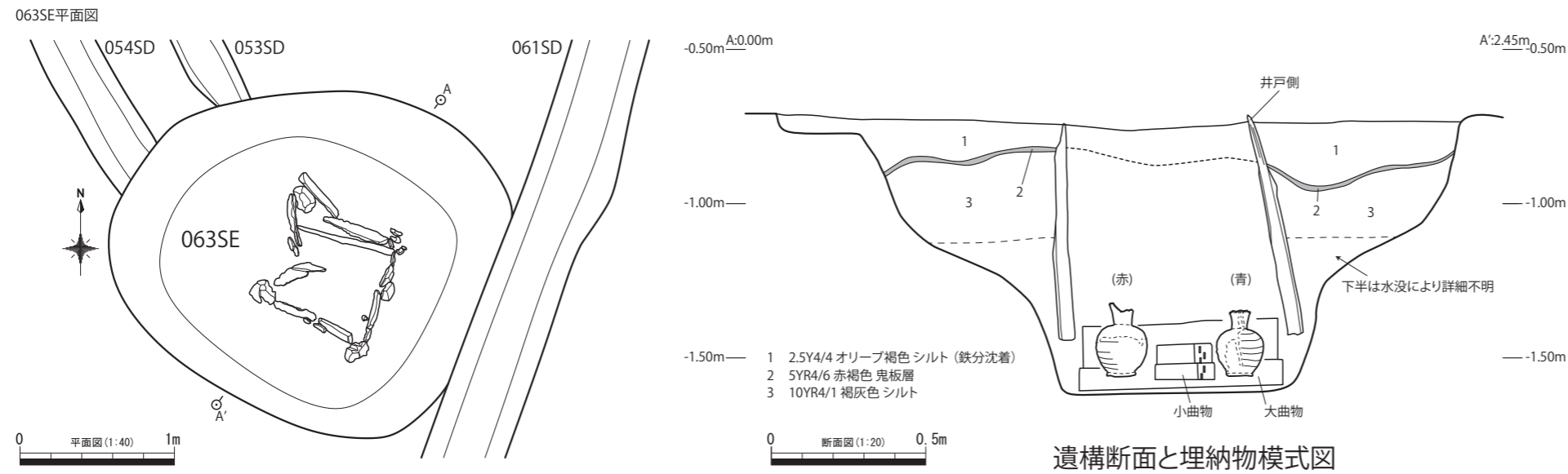


063SE 全景(ドローンより撮影)

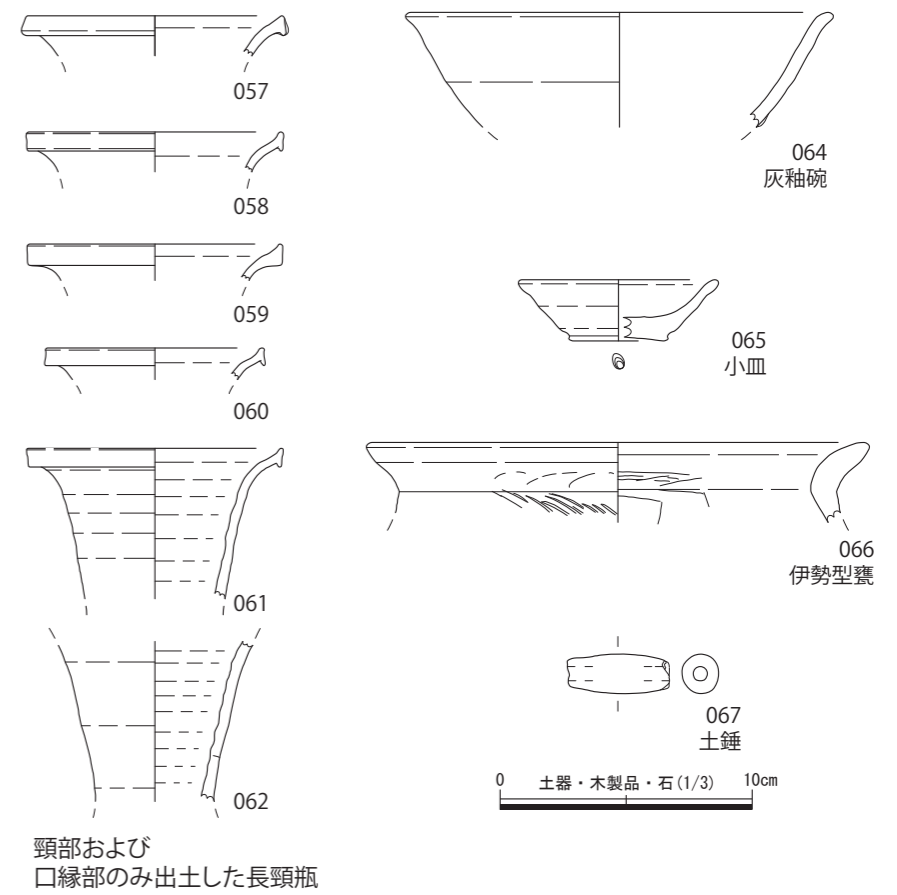
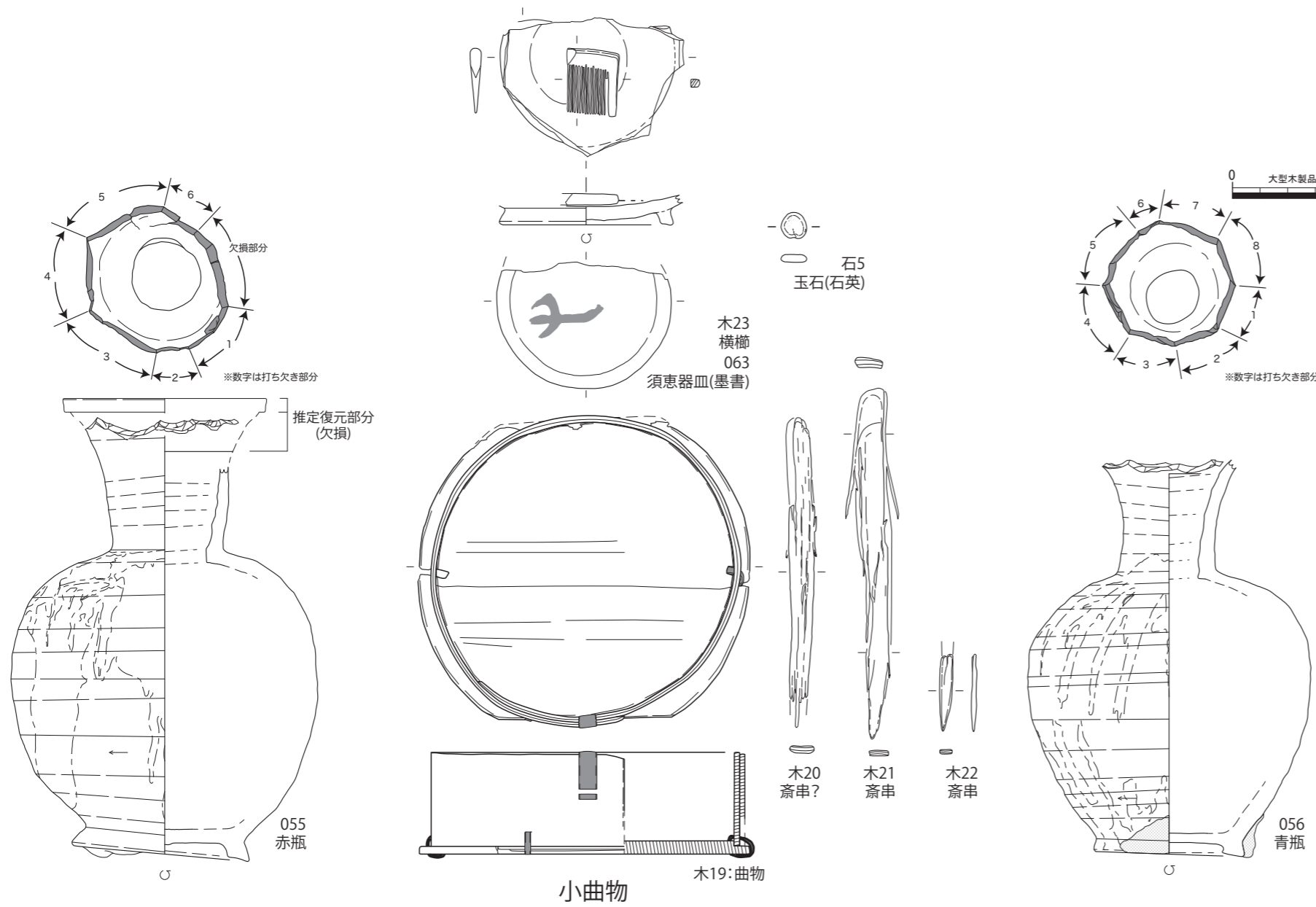
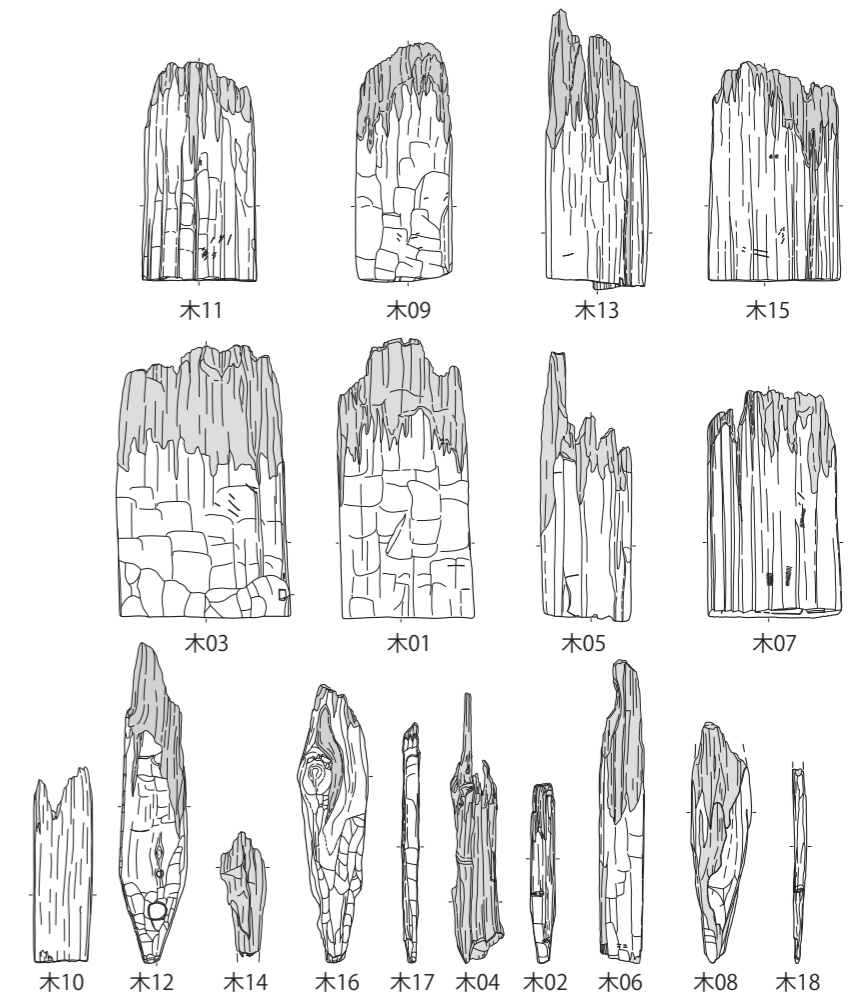
※国土地理院“地理院地図(電子国土Web)” URL: <https://maps.gsi.go.jp/> (参照: 2023年2月1日)

(地図の種類 トップ>土地の成り立ち・土地利用>治水地形分類図>更新版(2007～2021年))

《大井戸の構成材》



遺構断面と埋納物模式図



第27図 063SE 平面図・断面図

側の板材はいずれも縦方向に使われており、上半は溶解しており全長は不明であるが、残存した材が最長 85cm ほどあることから、井戸側材はそれぞれ 90cm ほどの長さを有していたものと思われる。滅失した部分は旧表土の高さを想定しても、段積みは無く井戸側一段の井戸と推定される。木材の樹種は多くがヒノキで、下半は保存状態が比較的良好であり、多くの材表面には手斧による加工痕が観察出来た。板材の厚さは 5cm 前後あり、木 01・03 には下端隅に方形の小穴があげられており、木 12 の杭先端には貫通しないほぞ穴が穿たれていた。これらの様相から、井戸材の多くがそれ以前に存在した建築物等からの転用材であり、中には樹皮を剥いだままの甲丸も使われており(木 05・13)舟材が転用された可能性もある。

構造的に見ると、残された井戸側と角に杭および、各辺中間の杭(一部は矢板)だけでは井戸としての形状は保持できない。井戸内側から出土した木 17、18 はいずれも先端を尖らせた細い角材で、どのように使っても分厚い板材を内部から支えるには不十分である。このような状況から、井戸材のうち井戸側の内側を支えていた木柱などの構造材は井戸仕舞いの前に抜き去られたものと考えられる。

なお、保存状態の良好だった杭(木 12)については年代測定をおこなったが、暦年校正結果は 673-774 cal AD (95.45%) であった(第 3 章参照)。個々の材の特徴に関しては観察表(図版第 33 木製品観察表)を参照されたい。

出土遺物については、埋納された 2 本の長頸瓶(055・056)がいずれも K-90 号窯式期後半のいわゆる原始灰釉陶器と考えられることや、井戸内部から検出された灰釉陶器碗 064 や土師甕 066 も同時期のものと思われるため、8 世紀末または 9 世紀初頭までに埋納されたものと推定される。先の井戸材の年代測定結果とは半世紀以上の時期差が認められるが、井戸材は一部を除きほとんどが転用材と考えられ、年代測定結果を木材の伐採年代とすれば、さほど違和感の無い年代観となる。なお 065 の小皿は尾張 3 型式型式のものだが上層埋土からの出土である。なお、井戸周辺では建物跡に関連するような遺構は検出されていない。

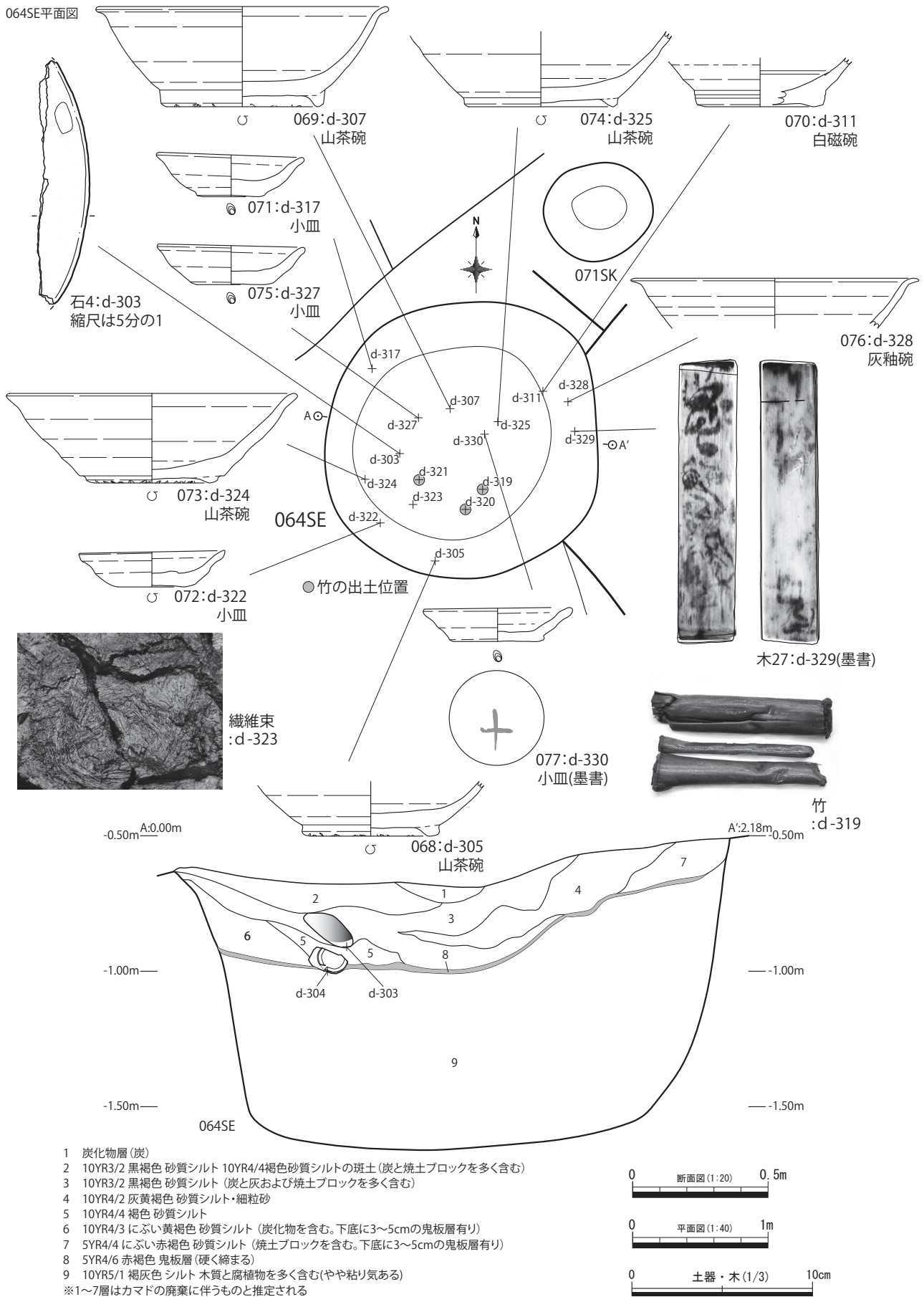
063SE プランは西側で畝溝群を切るように構築されていた(第 8・9 図、第 27 図)。053～060SD の 8 本からなる溝群であるが、N-29°-W 方向に延び、いずれも幅 30cm 前後、溝間は 40～50cm で深さは数 cm から 5cm ほど。痕跡程度の畝溝群であるが、063SE 大井戸以前の遺構である可能性が高いものの、時期を特定できる遺物は出土していないため詳細は不明である。なお、遺構検出面の標高は -65cm 前後であった。



063SE 西側 畝溝群 南から

次に 064SE であるが、微高地緩斜面で検出された素掘りの井戸である(第 28 図)。遺構検出面の標高は -50cm 前後で、先の 063SE 大井戸より 20cm ほど高い位置であった。当初は鉄分の凝固した鬼板層(第 8 層)が遺構底部と考えていたため、上層を細かく分層していたが、掘り上げ以後に底面から水が滲出する様子が見られ、念のため鬼板層を割って掘削したところ、下半は木質と腐植物を大量に含みやや粘り気のある灰褐色シルトで充填されていることが判明し、掘削を継続した。しかし他の井戸遺構同様、シルト層の掘削と同時に大量の湧水があり、やはり下層は泥濁化した遺

第2章 調査成果



第28図 064SE 平面図・断面図

物包含層から遺物を掬い上げるような作業となった。

平面プランは約2mの円形で、最終的な深さは約1m、寸胴に近い形状である。鬼板層より上の層は焼土ブロックや炭化物、大小の焼土ブロックや被熱礫を含む様相から、竈の造り替えなどに伴う一括の廃棄物層である可能性が高い。出土した遺物に関しては、数十片の須恵器小片やK-14号窯式期の灰釉陶器碗076の他に8世紀後半の濃尾型甕の破片も何点かみられるが、これら以外は尾張4～5型式の山茶碗と小皿が多い。中間の鬼板層より上の遺物包含層からもほぼ同時期の山茶碗が出土しており、厚さ数cm以上の鬼板層の形成にどれほどの時間を要したもののなのか、検討を要する。

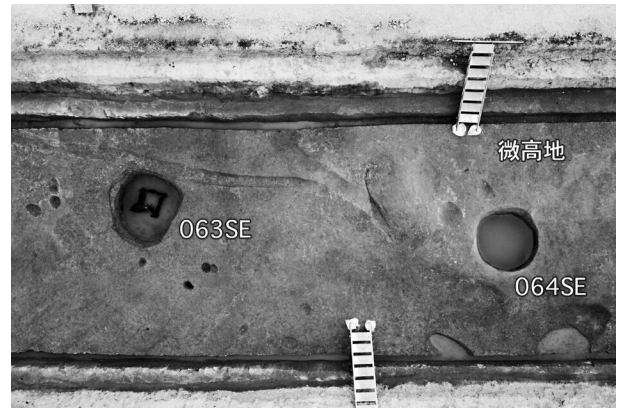
埋土下半の灰褐色シルト層には自然の枝葉や腐植物に混ざり、3本以上の竹(d-319～321)も検出されたが、出土状況を見る限りいわゆる井戸の息抜きなどに用いられたものではないようである。また繊維束のような塊(d-323)も出土し、発見時は藁束にも見えたが、洗浄後の観察では芋茎などを束ねたもののようにも見える(未検証)。

木製品の残欠と思われる木質も何点か出土したが、墨書された木簡：木27(d-329)が1点出土している。折敷などの底板を利用した可能性もあるが両端は削がれており、表面には文字とも絵画ともつかぬものが全面に描かれている。赤外線フィルタを用いた撮影画像では裏面の両端にも文字のようなものがみられたが、いずれも解読出来ていない。

次に070SEであるが、微高地緩斜面で検出された直径2mの円形プランを持つ素掘りの井戸である(第29図)。遺構検出面の標高は-60cm前後で、断面形状は上半が開き下半は寸胴形だった。埋土第2層の褐灰色シルト層掘削時より湧水があり、鬼板層は介在しないまま下半の灰色シルト層へと移行する。いずれの層も鉄分の沈着が著しいが、この遺構では鬼板層が形成されておらず、それがどのような要因によるものかは不明であった。第4層以下は激しい湧水によってシルトの泥濘化が激しく、底面までの確認は出来ていない。

遺構埋土からは078灰釉陶器碗(K-14号窯式期)、080灰釉陶器段皿(K-14号窯式期)、079須恵器盤(8世紀末)が出土した。また遺構埋土周辺からは8世紀代と思われる081暗文土器土師皿(推定直径24cmで見込み部分には文様を意図したような連続した螺旋が施文されている)や、周辺からは尾張5型式の山茶碗082が出土しているが、遺構は9世紀までに掘削されたものと推定される。いずれも遺構検出のための遺物包含層からの出土である。

061SDは063SE大井戸の東側で検出された溝である。幅50cm前後でN-20°E方向に延びる。深さは5～10cmで、調査区内で全長10mほどが検出されているが、南端部は微高地にかかり緩斜面に掘削されている。南端で切り合いを見る067SDは全長5m弱であり、緩斜面に位置する。



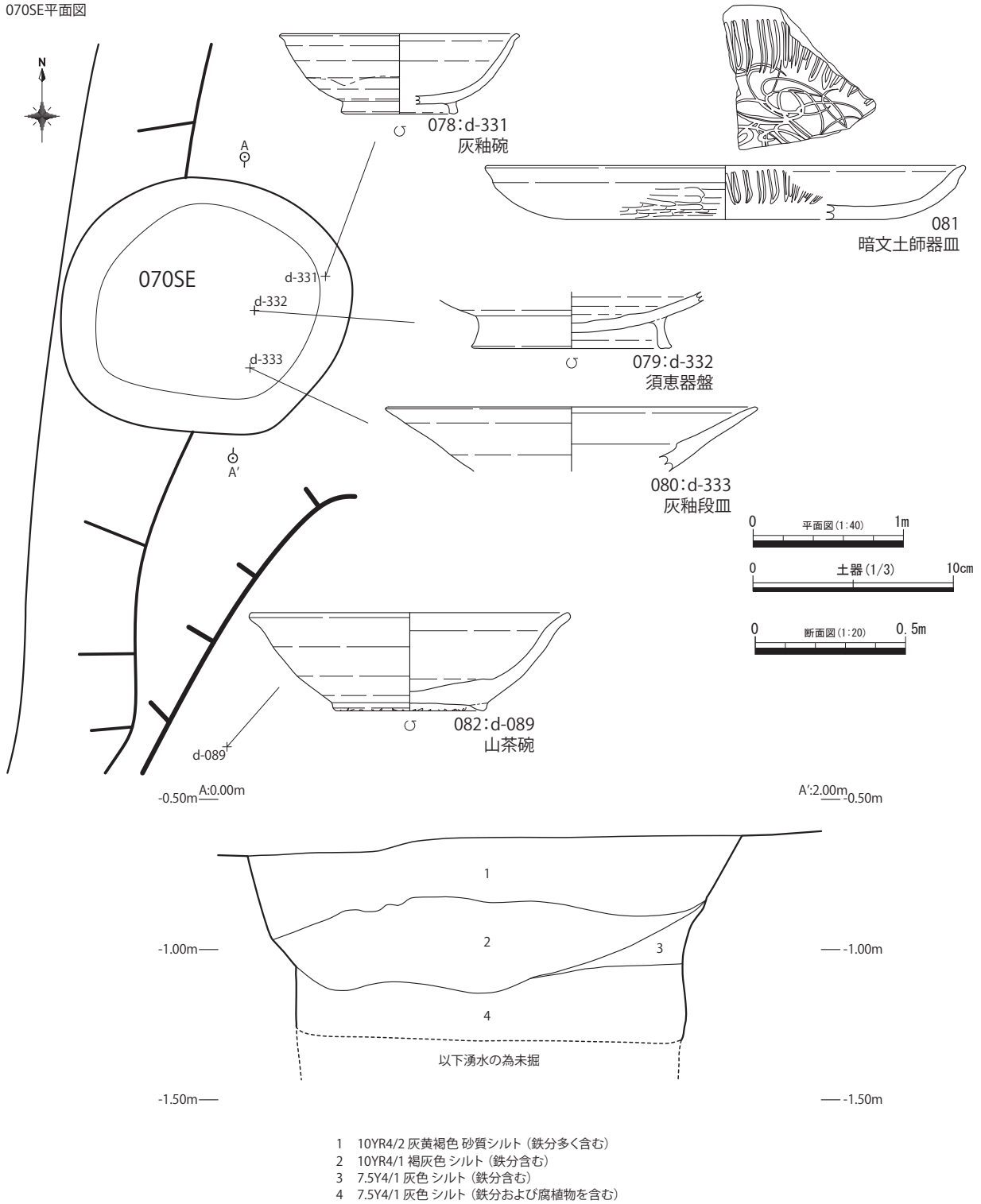
大井戸～微高地周辺(ドローンより撮影)



064SE 断面(埋土上半) 南から



070SE平面図



第29図 070SE 平面図・断面図

両者の関係は不明だが、いずれも道路側溝または排水溝としての機能が推測できる。いずれも遺物は未検出であり、時期共に不明。

次に**微高地**の様相について述べる。調査区範囲で検出された微高地の規模は、南北約 25 m で一番高い地点の標高は -50cm である。微高地表面の地山層を直接掘り込むように作られた部分もあり、いずれも小規模で不整形な水田が数枚造成されており、畦畔と思われる高まりも検出した(東セクション 90 m 地点)。床土と耕作土の判別は出来なかったが、20cm 前後の埋土からは数点の中世陶器が検出されており、中世以降の水田跡と推定される。濃尾平野各地では、自然堤防や微高地に周辺のの上面はしばしば島畑として利用されることが知られているが、その多くは畑地である。本例の場合、微高地の規模が小さかったことや標高の低さと同時に、地下水位の高さによって水田としての利用も可能であったのだろう。このような水田面に隣接して存在する 064SE との関係は不明であるが、埋土上半にみられた竈の廃棄物と併せて考えれば、微高地には住居も存在した可能性が高い。前述の 2 基の井戸はいずれもこの微高地西側縁辺に営まれた遺構であり、中世以前からの微高地利用が推察される。西側は上層の攪乱によって滅失した部分もあるが、微高地は西側に向かって低くなる様相を観察出来ることから、東側に広がっている可能性が高い(第 18 図)。

なお、前述の 061SD や 067SD は、微高地北斜面に乗り上げるようなかたちで収束している。

### 3 南部

#### A 微高地から南で 130SD 南端までの主な遺構と遺物(第 9 図～第 11 図、第 30 図～第 31 図)

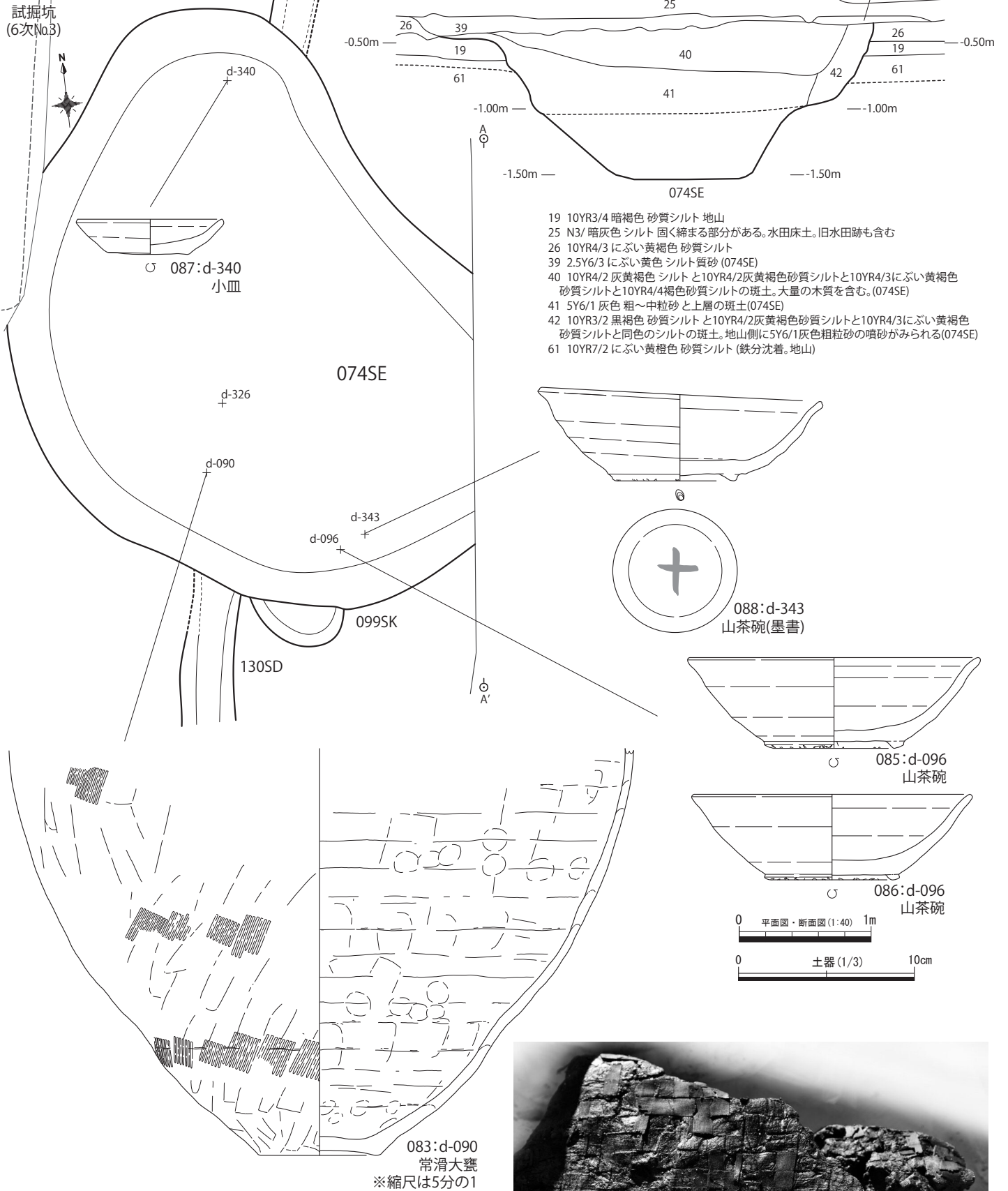
074SE は試掘坑 3 の東側で検出された井戸跡で、南北 4.5m、東西 3.5m 以上の規模である。遺構検出面ではプランをほぼなぞるように、幅 5mm ほどの噴砂層が全周していた。地震によるものであろう。東セクションで示した 39～42 層が埋土であるが、40 層掘削時点で湧水があり 41 層は常時水没状態での検出作業となった(第 30 図)。

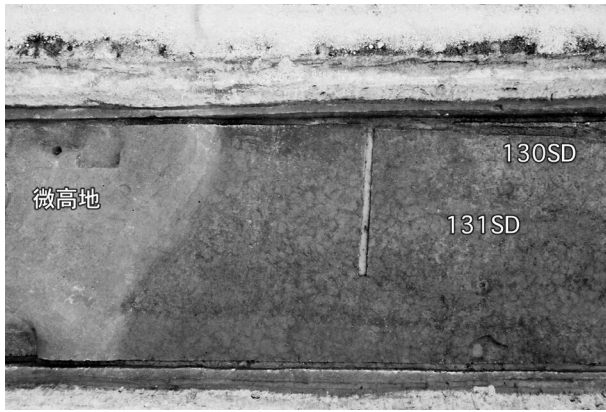
40 層以下の層には大量の自然木の枝葉が含まれており、小枝が束ねられたような状態のものもあった。また、それらの自然木に混ざり、網代残欠(d-326)の他、加工木の残欠と思われるものも数多く見出されたが、木製品としての原形が判明できるものは無かった。これらの自然木は埋土下層の砂層中にも半ば埋もれるような状態で検出されている。

遺物は、尾張 5 型式の山茶碗や小皿が完形品も含めて十数点検出されている。遺構の大きさや自然遺物の量に比べ少ない。なお常滑製大甕 083 は 39 層からの出土で下胴部だけであった。遺構埋没後に当該地点にもたらされたものと考えられるが、意図的に配置されたものかどうかは不明である。遺物の時期が遺構の時期と逆転していることから、当該地で伝世してきたものを水甕などの用途として水田や耕作地脇で使用していたものの残欠かもしれない。

遺構の性格は素掘り露天の井戸である可能性が高いが、井戸側や井戸枠などの材は検出されておらず、全て再利用のために抜き去られた可能性もある。

130SD/131SD は並行して走る溝であることから、道路側溝と考えられる遺構である。いずれも一直線に N-15°-E 方向に走り、130SD は幅 50cm 前後、断面は U 字形で平均の深さ 20cm。131SD は幅 80cm 前後で、両者の上端幅は 2.1m、溝中央からの幅は 3m である。130SD は調査区内で全長 52m を検出し、南北は調査区外に延びている。131SD は同じく 35m を検出し、南端は調査区外に延び、北端は微高地手前で収束している。いずれの溝埋土からも遺物は発見されて



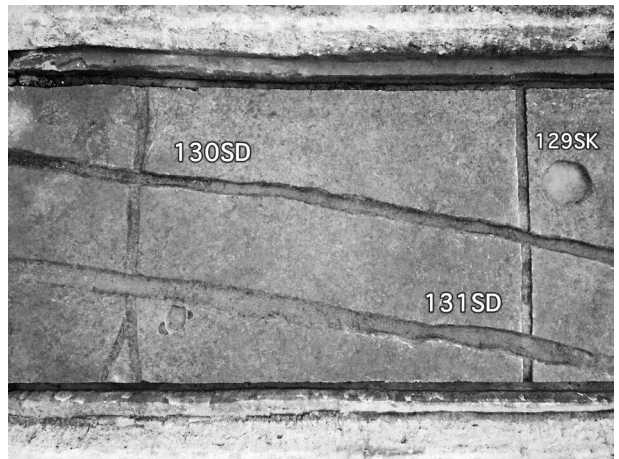


微高地南側 (ドローンより撮影)



道路側溝 北から

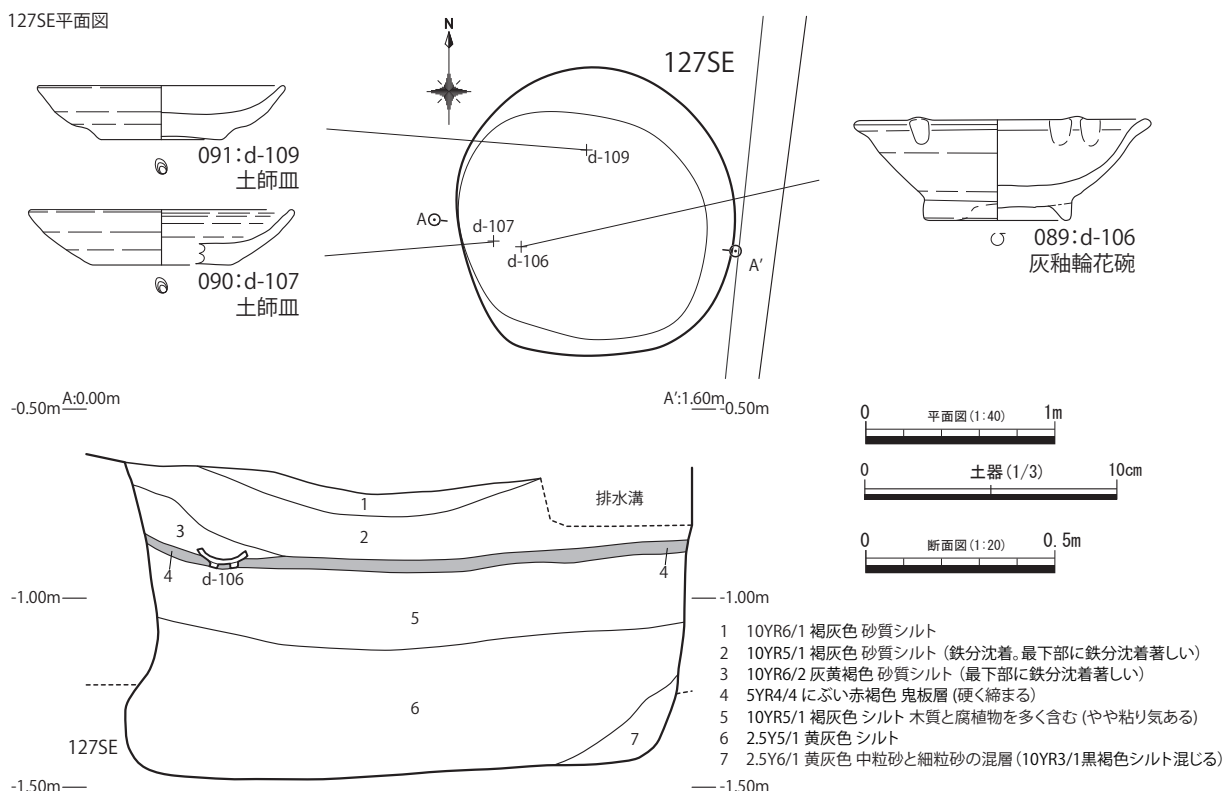
おらず、時期比定の手がかりはほとんど無いが、030SD は北部で 074SE に切られ地山に掘削されている状況などから、古代の遺構である可能性が考えられる。道路と想定される遺構の向かう方向などから、起点又は目的地が中間の微高地であった可能性が高いが、南方向の目的地は不明である。また、この遺構に関連し、両溝の北端が微高地を挟み北側に位置する 061SD とほぼ同じ方向性を持つことから、同時期の一連の遺構である可能性も指摘しておきたい。



道路側溝 (ドローンより撮影)

127SE は 130SD 南端の東側で検出された円形の井戸遺構で、直径は 1.5m を測る。他の多くの井戸同様、埋土上層と下層の中間に鉄分の凝固した鬼板層がみられる。下層の大半は木質と腐植物を多く含む灰褐色シルトと黄褐色シルト層で、グライ化が著しく、掘削と同時に湧水により泥濁化する。井戸枠に類する木材は発見されていない (第 31 図)。

遺物は、鬼板層に半ば食い込むような状態で 089 山茶碗が検出された。輪花のみられる小碗で



尾張3型式期のもの。他にはほぼ同時期の轆轤かわらけが2点(090・091)や東濃型4型式の茶碗などが出土しており、12世紀代の遺構と考えられる。

**B 調査区南端の主な遺構と遺物(第11図～第12図、第32図～第35図)**

**101SK**は調査区西壁で検出された長方形の土坑で、南北幅1.6m、調査区内での東西幅2.7m、深さは30cmで底面はほぼ水平である。埋土中に灰白色のシルトブロックを多く含む特徴から、墓壙である可能性もある。遺物は須恵器や灰釉陶器、山茶碗に混ざり天目茶碗や染付の小片もみられることから近世の土坑である可能性が高い(第33図)。

**105SE**は直径80cmの円形プランを持つ小型の井戸遺構で、断面形状は下半が袋状となる。上半は褐灰色と灰黄褐色の砂質シルトで、第2層下底には鉄分が沈着して凝固した層を確認した。第3層以下は褐灰色または黄灰色のシルトで、下層ほどグライ化が進み粘性を増し、木質や腐植物が多く含まれていた。下底は透水層である砂層に達しており湧水著しく、また井戸枠などは発見されていないので、素掘りの井戸であると推測される。出土遺物は須恵器甕や灰釉輪花碗、灰釉広口壺など約50点が出土している(第32図)。

**106SD**はく字に折れ曲がり調査区を横断する溝で、西セクションにおける断面では幅約3m、深さはおおむね45cmである。いくつかの遺構と重複があることや、上層に存在していた自然流路の影響もあり北岸のプラン上端は暫定的である。出土遺物は須恵器数片と少ないが、西壁近くで須恵器高盤脚部093や092碗を検出している。いずれもNN-32窯式期のものと推定されるが、遺構との関係が不明である。南東から北西へ流れる自然流路の痕跡である可能性が高い(第32図)。

**107SK**は長さ2.6m、幅1.3mの長方形の土坑で、深さは約30cmで底面はほぼ水平である。長軸はN-23°-E方向で、埋土は灰褐色砂質シルトに地山ブロックが多く混入しており、墓壙である可能性が高い。時期は比定できないが、遺物は須恵器や灰釉広口壺など、約60点が出土している(第32図)。

**108SK**は106SDの北側で検出された不整形な土坑で、須恵器や灰釉陶器碗(K-90号窯式か)などが10点出土している(第32図)。

**112SD**は北東から南西に流れる溝で、113SDを切り、灰黄褐色シルト層に覆われる。北半は幅60cm前後でN-36°-E方向に延び、中ほどでN-57°-E方向に屈曲する。深さは20cm前後で、埋土は灰褐色粘質シルトの単層である。遺物は少量で、時期が比定できるものは出土していない(第32図)。

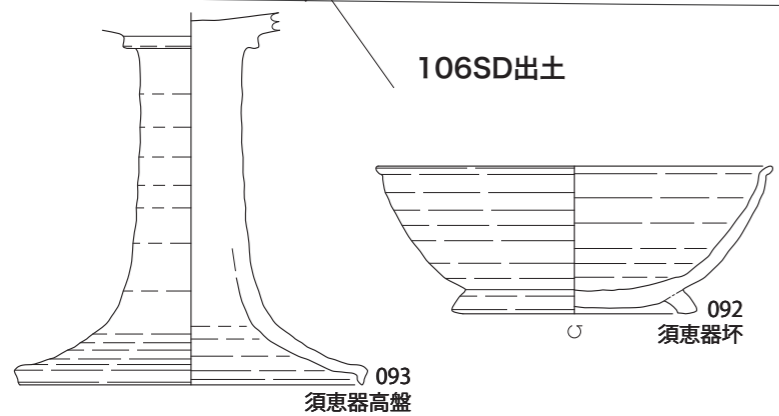
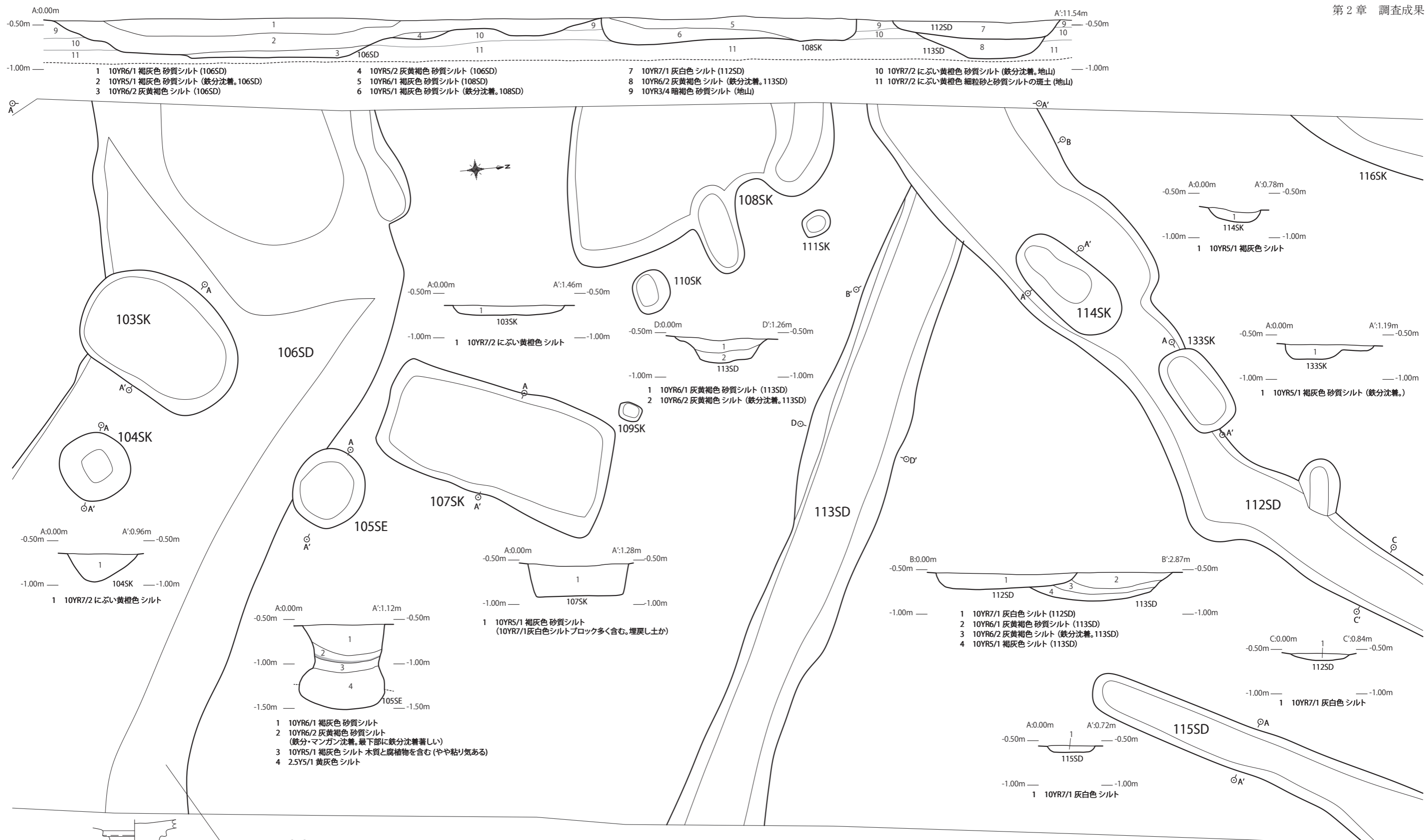
**113SD**は南東から北西へ向けて流れる溝で、112SDに切られる。幅90cm前後、深さ30cm前



127SE 遺物出土状況 南から

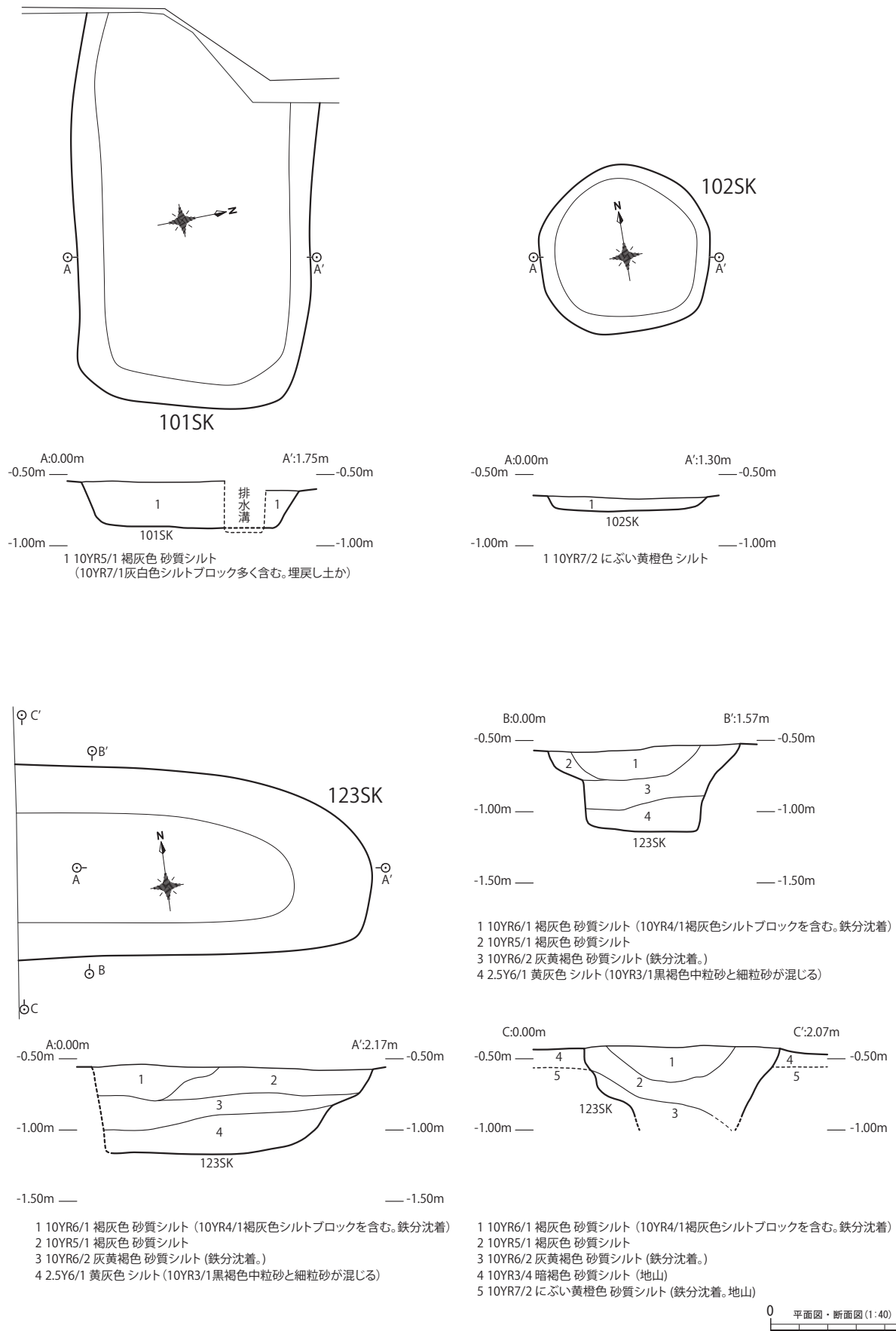


101SK 完掘状況 東から



土器 (1/3) 10cm

第32図 南側個別遺構図 (103SK・104SK・105SE・106SD・107SK・108SK・112SD・113SD・114SK・115SD)



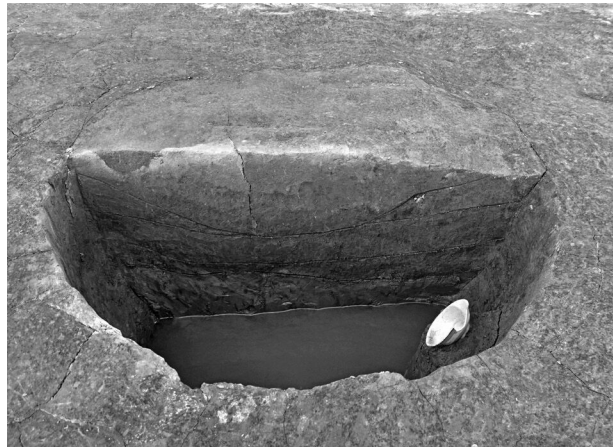
第 33 図 南側個別遺構図(101SK・102SK・123SK)

後で、W-25°-E方向に延びる。調査区東壁付近では肩部が崩れて溝幅が拡張している。埋土はレンズ状堆積で、灰褐色シルトを基調とする(第32図)。

115SDは北東から南西へ流れる溝で、最大幅74cm、深さ8cm前後で、主軸方位はN-28°-Eである(第32図)。

116SKは西壁で検出された深さ約50cm土坑で、長方形プランの可能性もある。主軸方向はN-18°-Eで、埋土上層に地山ブロックが多く混入している状況などから墓壇の可能性が高い。遺構の時期は特定できないが、須恵器および灰釉陶器の細片が30点ほど出土している(第34図)。

117SEは直径1.4mの円形プランの井戸で、上半には灰白色の砂質シルトが窪地に溜まったような状態でみられ(第1層)、以下は鉄分沈着の多い灰黄褐色、褐灰色、灰褐色の砂質シルトやシルト層が続く。第4層下底には鉄分の凝固した鬼板層があり、下半は腐植物を多く含みやや粘り気のある黄灰色のシルト層で充填され、グライ化が著しい(第34図)。



117SE 遺物出土状況 南から

094はほぼ完形の山茶碗(尾張3型式)である。内面は使い込まれてよく磨耗していた。他にはH-72号窯式期の灰釉陶器や緑釉碗の細片も1点出土している。

122SEは直径2m弱の円形プランの井戸である。埋土上層と下層の間には固く締まった鬼板層がみられ、下半は黄灰色や灰褐色、灰黄色のシルト層である(第34図)。

出土遺物の多くは尾張4型式の山茶碗で、098には高台見込みに「長口」の墨書がある。他に、灰釉陶器段皿や9世紀後半の灰釉陶器小碗、白磁玉縁碗も出土している。埋土から井戸枠などは見つかっておらず、素掘りの井戸であると考えられる。

123SKは長楕円形の土坑で、南北幅1.3m、東西の残存長は2.5m、深さは60cmで、下半は湧水により水没状態で検出された。主軸はE-7°-Sである。埋土下層は中粒砂と細粒砂が混ざるシルト層で、溝として西側に延びている可能性もある。いずれの層にも地山層のブロックがみられた。出土遺物はいずれも細片だが山茶碗や天目茶碗もみられ、中世または近世の墓壇である可能性がある(第34図)。

125SDは東から西へ向けて流れる溝で、幅25cm前後、深さ約5cmで、主軸方位はW-26°-Sである(第35図)。

126SDは北東から南西へ流れる溝で、130SDに切られる。幅30cm前後、深さは5cm、主軸方位はW-16°-Sで、埋土は灰褐色粘質シルトの単層である(第35図)。

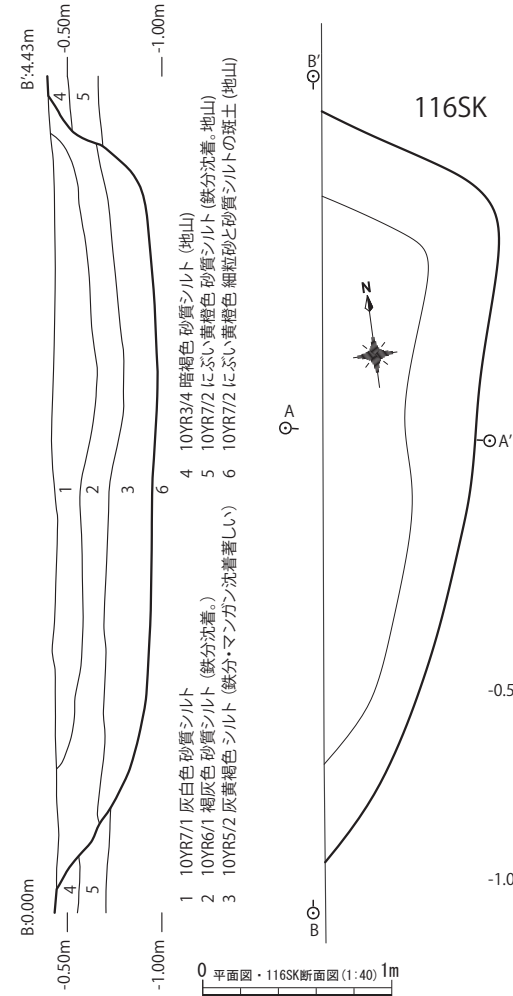


134SD 断面 西から

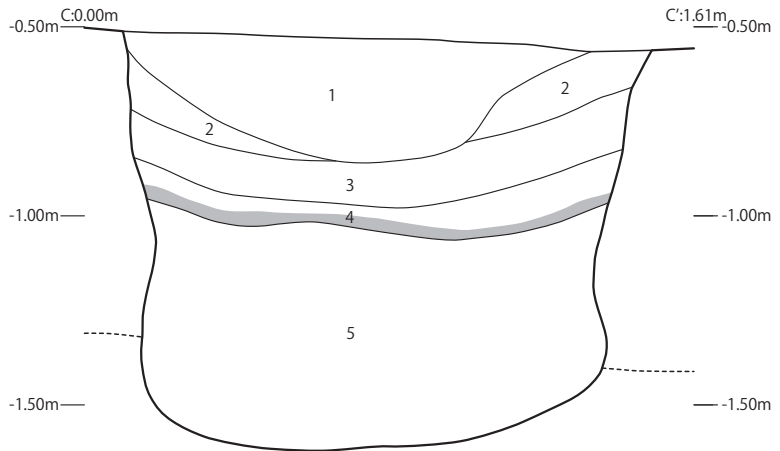
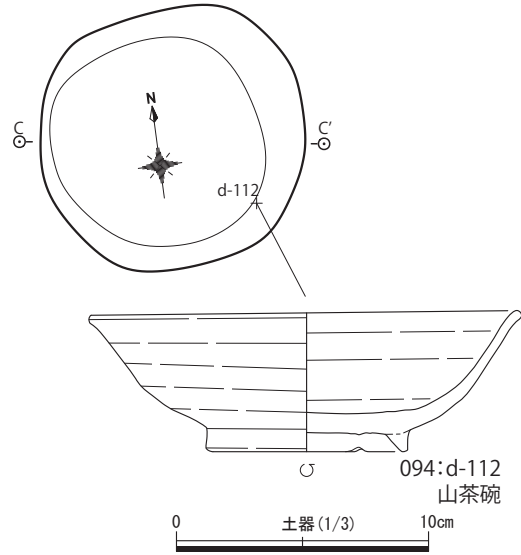
128SKは平面プラン円形、断面形U字形の土坑で、長径1.1m、短径90cm、深さ80cmを測る。埋土はマンガン成分が沈着した灰褐色シルトの単層である。土師器甕が2片出土している(第35図)。



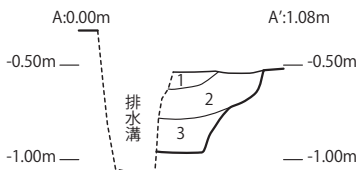
116SK・117SE平面図



117SE

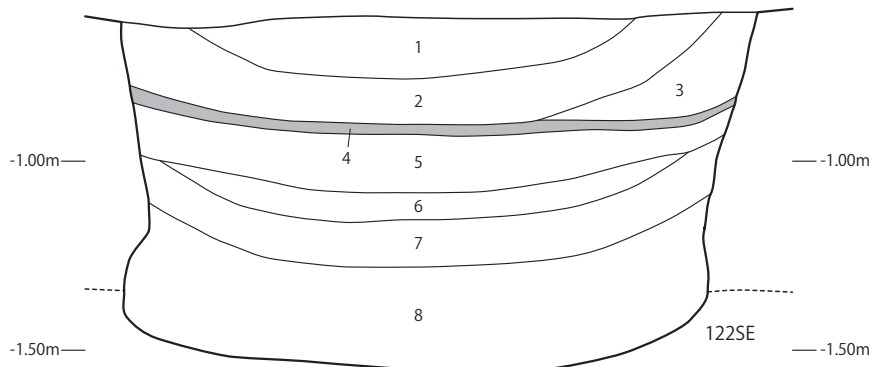
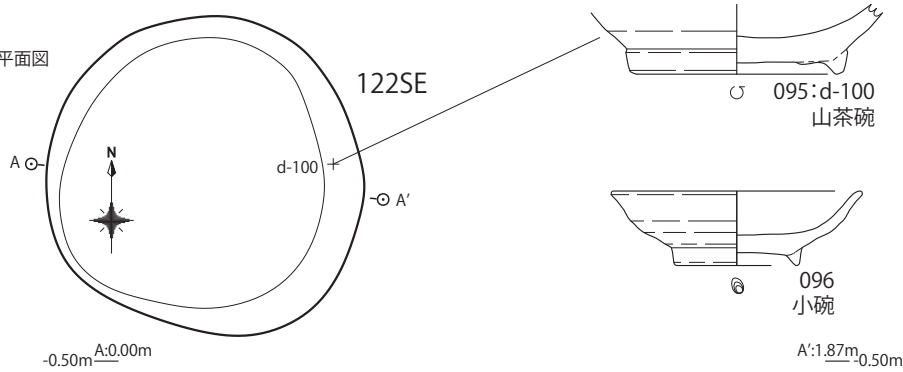


- 1 10YR7/1 灰白色 砂質シルト
- 2 10YR6/2 灰黄褐色 砂質シルト (鉄分沈着)
- 3 10YR6/1 褐灰色 シルト (鉄分沈着著しい)
- 4 7.5YR6/2 灰褐色 砂質シルト (最下部に鬼板層が存在)
- 5 2.5Y6/1 黄灰色 シルト 腐植物を多く含む (やや粘り気ある)



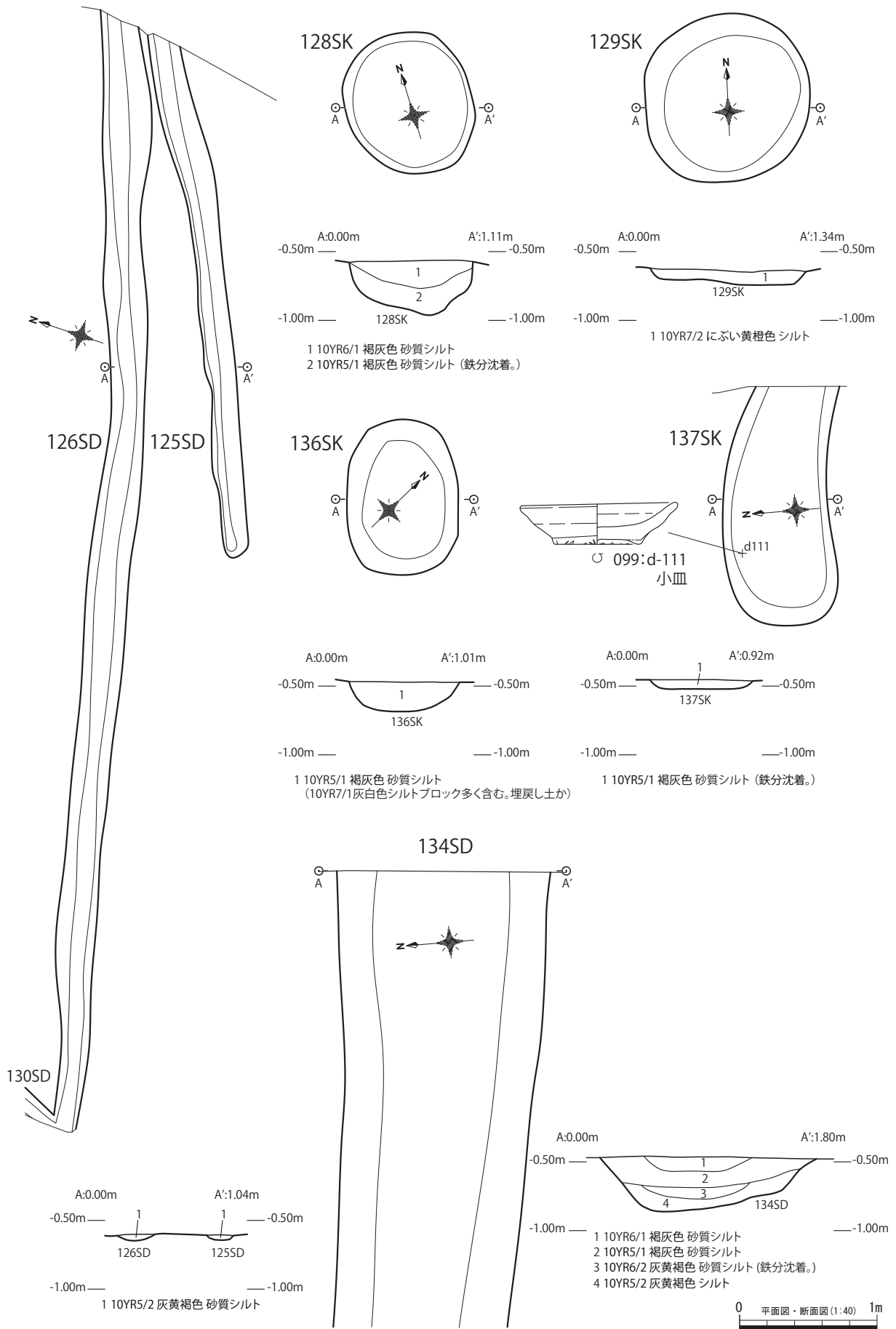
- 1 10YR7/1 灰白色 砂質シルト
- 2 10YR6/1 褐灰色 砂質シルト (鉄分沈着。)
- 3 10YR5/2 灰黄褐色 シルト (鉄分・マンガン沈着著しい)

122SE平面図



- 1 10YR6/1 褐灰色 砂質シルト
- 2 10YR5/1 褐灰色 砂質シルト (鉄分沈着。最下部に鉄分沈着著しい)
- 3 10YR6/2 灰黄褐色 砂質シルト (最下部に鉄分沈着著しい)
- 4 5YR4/4 にぶい赤褐色 鬼板層 (硬く締まる)
- 5 2.5Y6/1 黄灰色 シルト
- 6 10YR4/1 褐灰色 シルト 木質と腐植物を多く含む (やや粘り気ある)
- 7 2.5Y6/2 灰黄色 シルト
- 8 2.5Y6/1 黄灰色 中粒砂と細粒砂の混層 (10YR3/1黒褐色シルト混じる)

第 34 図 116SK・117SE・122SE 平面図・断面図



第35図 南側個別遺構図(125SD・126SD・128SK・129SK・134SD・136SK・137SK)

134SD は調査区南端近く、試掘坑4の北側を東西に横断する溝で、幅は1.4～2.8mで、東セクションにおける断面では深さ20～40cmで4層の埋土が観察された。埋土の大部分は褐灰色と灰黄褐色の砂質シルトであるが、下底にはにぶい黄褐色の砂質シルトが堆積していた。耕作地に伴う排水溝として機能していた可能性がある(第35図)。

出土遺物は須恵器、灰釉陶器、土師器甕、陶製羽釜や尾張4型式の山茶碗などがみられることから、13世紀初頭までに掘削された溝である可能性が高い。

136SK は長軸1.2m、短軸80cm、深さ20cm前後の楕円形の土坑で、埋土は地山ブロックを含んだ灰褐色粘質シルトである。須恵器やかかわらけなど4片が出土している(第35図)。

これらの他に、137SKで099(尾張4型式の小皿)が検出されている(第35図)。

遺構以外の遺物包含層から出土した遺物に関しては、遺物実測図で示した通りである。北部では須恵器皿や灰釉陶器碗、山茶碗(036～041)が、中部では山茶碗(082)が、南部では須恵器甕・坏・盤や広口壺、灰釉陶器碗や古代のものである可能性が高いガラス玉(113)、線刻を持つ陶錘(112)、近代産業遺物で内面に輪積み痕の残る常滑製土管(114)が出土している。

### 第3節 1区のとまとめ

1区の調査成果を時系列に沿ってまとめておく。

- 1 調査区北部の自然堤防末端で7世紀前後の伐採年代が推測される柱根の残る掘立柱建物が検出され、調査区内で最古の遺構となった。軸線はW-40°-Nで二間×三間以上の規模が想定される(当該期の遺物は未発見)。
- 2 8世紀後半には中部の低地の一部が耕作地としての活用が開始された(畝溝群など)。また、9世紀初頭までに仕舞いの儀式を経て機能を終えた大井戸063SEが調査区中部で営まれた。規模や埋納物の内容から見て、集落共有の井戸としての機能が想定される。続く時期には調査区中部の微高地縁辺で素掘りの井戸070SEが掘削され、微高地一帯が日常的に使われ続けられてきたと推測される。また南部でも少量であるが須恵器などの遺物がみられるようになる。
- 3 9世紀末頃には北部の低地部分で単独の曲物井戸030SEが営まれ、10世紀に入ると北端の自然堤防上の利用が開始された(土坑や溝群など)。
- 4 11世紀代は全域で遺物が少量に分散して出土するものの、時期が特定出来る遺構はほとんど無い。
- 5 12世紀に入ると活動の中心が南部に移り、いくつかの井戸(117SE、122SE、127SE、105SE)や溝が掘削された。井戸の規模は概ね小型で、いずれも井戸枠や井戸側を持たない素掘りのものであることなどから、居住地から少し離れた耕作地で、必要に応じて掘削されたものと推測される。南部を縦走する道路遺構(130/131SD)はこの頃までに造られたものと推定される。
- 6 13世紀までには北端自然堤防上での活用が再開され、大規模な土木工事(008SDの掘削や土堤の構築など)がおこなわれ、中部微高地周辺や南部でも大小の井戸(040SE、064SE、074SE)や溝が掘削された。

第2章 調査成果

7 14世紀以後の様相は不明瞭であるが、北部大溝(008SD)の埋め立てや、南部ではいくつかの排水溝が掘削された。南部では耕作地の周辺が埋葬地としても利用されていた可能性がある。耕作地としての利用は全面的ではなく、部分的に続けられていた。また、近世以後は近代に至るまで、周辺のいくつかの微高地が島畑として活用されてきた。

遺構一覧表(1区)

遺構番号	調査区	グリッド	遺構	法量			平面形	断面形	埋土	備考
				長軸	短軸	深さ				
001	北部	340575・340580・345575・345580・350580・350585	SD	(14.49)	0.82	0.24	-	U字	断面図参照	道路側溝か(古代)
002	北部	330575・335575・335580・340575・340580・345580・350580	SD	(18.17)	0.65	0.24	-	U字	断面図参照	道路側溝か(古代)
003	北部	330575・330580・335575・335580・340580	SD	(13.07)	0.59	0.19	-	U字	断面図参照	道路側溝か(古代)
004	北部	340575・345575・345580・350580	SD	(12.73)	0.47	0.19	-	U字	断面図参照	道路側溝か(古代)
005	北部	340580	SK	0.98	0.80	0.99	円	U字	断面図参照	
006	北部	350580	SK	1.27	0.95	0.29	長方	箱	断面図参照	近世の墓壇か
007	北部	320575・325575・330580	SD	(12.90)	0.46	0.12	-	U字	10YR4/4 褐色砂質シルト	道路側溝か(古代)
008	北部	350580・355575・355580・355585・360575・360580・360585・365575・365580・365585	SD	11.74	(8.48)	1.20	-	箱	断面図(大セクション)参照	畑または排水溝
009	北部	350575・350580	SK	1.08	1.00	0.92	円	箱	断面図(大セクション)参照	
010	北部	350580	SK	1.65	0.78	1.14	楕円	U字	断面図(大セクション)参照	
011	北部	350580	SK	0.66	0.63	0.65	円	U字	10YR5/4 にぶい黄褐色細粒砂と 10YR5/4 にぶい黄褐色砂質シルトの斑土	
012	北部	365585	SP	0.60	0.36	0.42	長方	箱	2.5Y4/3 オリーブ褐色砂質シルトと 2.5Y4/2 中～粗粒砂の斑土	柱根(d-088)入り
013	北部	360585	SP	0.45	0.38	0.12	皿	皿	2.5Y4/3 オリーブ褐色砂質シルトと 2.5Y4/2 中～粗粒砂の斑土	
014	北部	370575・370580・375580	SD	(0.79)	0.66	0.05	-	皿	10YR3/3 暗褐色砂質シルト	畝溝か
015	北部	370580・375580	SD	(2.12)	0.60	0.03	-	皿	10YR4/3 にぶい黄褐色砂質シルト	畝溝か
016	北部	370580	SD	1.60	0.52	0.03	-	皿	10YR4/3 にぶい黄褐色砂質シルト	畝溝か
017	北部	375580・375585・380580・380585・385580	SD	(11.00)	2.49	0.42	-	U字	断面図(大セクション)参照	自然流路か
018	中部	385585	SK	0.90	0.53	0.24	楕円	U字	10YR5/2 灰黄褐色砂質シルトと 10YR4/2 灰黄褐色砂質シルトの斑土	
019	1区	385585	SK	0.95	0.60	0.23	楕円	U字	10YR5/3 にぶい黄褐色シルト質砂と 2.5Y7/2 灰黄色中～細粒砂の斑土(鉄分の沈着多い)	
020	中部	390580・390585・395580・395585・395590	SD	(10.78)	0.83	0.18	-	U字	10YR5/2 灰黄褐色シルト質砂と 10YR6/3 にぶい黄褐色シルトの斑土	
021	中部	390585・395585	SK	0.86	0.71	0.24	円	U字	2.5Y3/2 黒褐色シルトと 2.5Y4/2 中粒砂の斑土(上半に鉄分多い、下半に砂多い)	
022	中部	390585	SK	0.55	0.45	0.21	円	U字	10YR4/4 褐色砂質シルト	
023	中部	390585・395585・395590	SK	0.79	(0.41)	0.12	(円)	U字	10YR4/4 褐色砂質シルトと 2.5Y5/3 黄褐色砂質シルトの斑土	
024	中部	395585	SP	0.29	0.26	0.56	円	U字	10YR5/2 灰黄褐色砂質シルトと 10YR4/2 灰黄褐色砂質シルトの斑土	
025	中部	395580・395585	SK	0.43	0.43	0.08	円	U字	10YR4/4 褐色砂質シルト	
026	中部	395580・395585	SK	0.80	0.63	0.18	円	皿	10YR5/4 にぶい黄褐色砂質シルトと 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂質シルトの斑土	下底に 2.5Y4/2 暗灰黄色中～細粒砂有り
027	中部	395585	SK	0.70	0.62	0.19	円	皿	10YR4/4 褐色砂質シルト(鉄分の沈着多い)	
028	中部	395580・395585・400580・400585	SP	0.40	0.36	0.22	円	皿	2.5Y4/4 オリーブ褐色細粒砂と 2.5Y4/2 暗灰黄色中～細粒砂の斑土	
029	中部	400590	SK	1.21	(0.49)	0.14	(円)	皿	10YR4/4 褐色砂質シルトと 2.5Y5/3 黄褐色砂質シルトの斑土(鉄分の沈着多い)	
030	中部	400585・405585	SE	1.38	1.00	1.13	長方	箱	断面図参照	曲物井戸
031	中部	400585・405585・410585	SK	0.62	0.50	0.15	長方	皿	10YR4/4 褐色砂質シルト	
032	中部	400585	SP	0.24	0.17	0.13	円	U字	10YR5/3 にぶい黄褐色砂質シルト	030SE に伴う遺構か
033	中部	405585	SP	0.28	0.23	0.37	円	U字	10YR4/4 褐色砂質シルト	
034	中部	405585	SK	0.57	0.46	0.08	円	皿	10YR4/3 にぶい黄褐色砂質シルトと 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂質シルトの斑土	
035	中部	405585	SP	0.34	0.28	0.48	円	U字	10YR4/4 褐色砂質シルトと 10YR4/3 にぶい黄褐色砂質シルトの斑土	
036	中部	405585	SK	0.57	0.42	0.06	円	U字	10YR4/3 にぶい黄褐色砂質シルトと 2.5Y5/3 黄褐色砂質シルトの斑土	
037	中部	400585・405585・410585	SD	(8.68)	0.58	0.08	-	皿	10YR4/4 褐色砂質シルト	
038	中部	400580・400585	SD	(4.88)	0.43	0.17	-	皿	10YR4/4 褐色砂質シルト(下底に鉄分の沈着層有り)	
039	中部	405580・405585・410580・410585	SK	(3.04)	0.85	0.09	(楕円)	皿	10YR4/4 褐色砂質シルト(下底に鉄分の沈着層有り)	
040	中部	410585	SE	1.03	0.95	1.00	円	箱	断面図参照	曲物井戸
041	中部	405585	SP	0.41	0.34	0.13	円	皿	2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルトと 10YR4/2 灰黄褐色シルトの斑土	炭化物、柱根の痕跡有り
042	中部	410585	SP	0.21	0.15	0.12	円	U字	2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルトと 10YR4/2 灰黄褐色シルトの斑土	040SE に伴う遺構か
043			欠番							
044	中部	410585	SK	1.77	1.23	0.11	不整	皿	10YR3/3 暗褐色砂質シルトと 10YR5/4 にぶい黄褐色シルトの斑土	

第3表 遺構一覧表(1区)

第2章 調査成果

遺構番号	調査区	グリッド	遺構	法量			平面形	断面形	埋土	備考
				長軸	短軸	深さ				
045	中部	410585	SK	0.53	0.52	0.66	円	皿	10YR5/3 にふい黄褐色砂質シルトと 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルトと 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂質シルトの斑土	
046	中部	415585	SP	0.29	0.26	0.06	円	U字	10YR4/4 褐色砂質シルト	
047	中部	415585	SP	0.18	0.17	0.06	円	U字	10YR4/4 褐色砂質シルト	
048	中部	415585	SP	0.27	0.27	0.05	円	U字	2.5Y4/3 オリーブ褐色砂質シルトと 10YR5/6 黄褐色砂質シルトの斑土	
049			欠番							
050	中部	420585	SK	0.54	0.37	0.12	楕円	皿	2.5Y4/3 オリーブ褐色砂質シルトと 10YR5/6 黄褐色砂質シルトの斑土	
051	中部	420585	SK	0.42	0.38	0.15	楕円	U字	2.5Y5/3 黄褐色砂質シルト (鉄分の沈着多い)	
052	中部	420585	SK	0.54	0.36	0.11	楕円	U字	2.5Y5/3 黄褐色砂質シルト (鉄分の沈着多い)	
053	中部	415590・420585・420590	SD	(6.16)	0.45	0.08	-	皿	10YR4/4 褐色砂質シルト	欲溝か
054	中部	415590・420585・420590	SD	(5.80)	0.41	0.05	-	皿	10YR4/4 褐色砂質シルト	欲溝か
055	中部	420590	SD	(5.18)	0.43	0.07	-	皿	10YR4/4 褐色砂質シルト	欲溝か
056	中部	420590	SD	(3.62)	0.35	0.04	-	皿	10YR4/4 褐色砂質シルト	欲溝か
057	中部	420590	SD	(1.41)	0.29	0.06	-	皿	10YR4/4 褐色砂質シルト	欲溝か
058	中部	420590・425590	SD	(0.87)	0.31	0.07	-	皿	10YR4/4 褐色砂質シルト	欲溝か
059	中部	425590	SD	2.58	0.30	0.05	-	皿	10YR4/4 褐色砂質シルト	欲溝か
060	中部	425590	SD	1.62	0.37	0.07	-	皿	10YR4/4 褐色砂質シルト	欲溝か
061	中部	420585・425585・430585	SD	(10.41)	0.49	0.15	-	皿	10YR4/4 褐色砂質シルト	道路側溝か
062	中部	425585・425590	SK	0.34	0.31	0.08	円	U字	10YR4/4 褐色砂質シルト	
063	中部	420585・420590・425585	SE	(2.37)	2.37	1.20	円	箱	断面図参照	底部砂層：2.5Y4/1 黄灰色中～粗粒砂、井戸枠と曲物理納物
064	中部	430590・435590	SE	2.12	2.06	1.40	円	箱	断面図参照	上半はカマドの廃棄土坑
065	中部	425590	SK	0.58	0.43	0.05	円	皿	10YR4/2 灰黄褐色砂質シルトと 10YR4/4 褐色中粒砂の斑土	
066	中部	425590	SK	0.56	(0.28)	0.05	(円)	皿	10YR4/2 灰黄褐色砂質シルト	
067	中部	425585・430585・430590	SD	4.82	0.48	0.16	-	皿	2.5Y5/3 黄褐色砂質シルトと 10YR4/4 褐色中～細粒砂の斑土	
068	中部	400585	SK	0.58	0.53	0.19	円	U字	10YR4/2 灰黄褐色砂質シルトと 10YR4/4 褐色砂質シルトと 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルトの斑土	
069	中部	425590	SP	0.37	0.37	0.08	円	U字	10YR4/4 褐色砂質シルト	
070	中部	440590	SE	1.89	1.73	1.10	円	箱	断面図参照	素掘り
071	中部	430585・430590	SK	0.79	0.75	0.13	円	皿	2.5Y4/3 オリーブ褐色砂質シルトと 2.5Y5/3 黄褐色砂質シルトの斑土	
072	中部	430590	SK	(1.08)	0.66	0.14	(楕円)	皿	10YR4/2 暗灰黄色砂質シルトと 10YR4/4 オリーブ褐色砂質シルトの斑土	
073	中部	435590	SK	1.77	0.94	0.20	(円)	皿	10YR4/2 暗灰黄色砂質シルトと 10YR4/4 オリーブ褐色砂質シルトの斑土	
074	南部	465590・470590	SE	4.11	(3.82)	1.40	不整	箱	10YR4/2 灰黄褐色シルトと 10YR4/2 灰黄褐色砂質シルトと 10YR4/3 にふい黄褐色砂質シルトと 10YR4/4 褐色砂質シルトの斑土	大量の木質を含む、地震による噴砂(地割)が貫通
075	中部	415590	SK	0.47	0.38	0.13	円	U字	10YR4/4 褐色砂質シルト	
076	北部	340580	SP	0.28	0.19	0.10	楕円	U字	10YR5/4 にふい黄褐色砂質シルト	
077	北部	365575・370575	SD	(0.43)	0.31	0.05	-	皿	10YR3/3 暗褐色砂質シルトと 10YR4/3 にふい黄褐色砂質シルトの斑土	欲溝か
078	北部	365575・370575	SD	(0.97)	0.35	0.08	-	皿	10YR3/3 暗褐色砂質シルトと 10YR4/3 にふい黄褐色砂質シルトの斑土	欲溝か
079	北部	370575・370580	SD	(1.33)	0.39	0.09	-	皿	10YR3/3 暗褐色砂質シルトと 10YR4/3 にふい黄褐色砂質シルトの斑土	欲溝か
080	北部	370575・370580	SD	(2.59)	0.33	0.10	-	皿	10YR3/3 暗褐色砂質シルトと 10YR4/3 にふい黄褐色砂質シルトの斑土	欲溝か
081	北部	370580	SD	2.89	0.39	0.07	-	皿	10YR3/3 暗褐色砂質シルトと 10YR4/3 にふい黄褐色砂質シルトの斑土	欲溝か
082			欠番							
083			欠番							
084			欠番							
085	中部	395585・395590・400585・400590	SK	(1.20)	1.05	0.10	(楕円)	皿	10YR4/3 にふい黄褐色砂質シルトと 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルトの斑土	
086	中部	400590	SP	0.36	0.30	0.13	円	U字	10YR4/4 褐色砂質シルト	
087	中部	400585・400590	SP	0.26	0.24	0.04	円	U字	10YR4/4 褐色砂質シルト	
088	中部	400590	SP	0.38	0.27	0.13	楕円	U字	10YR4/4 褐色砂質シルト	
089	中部	400580・405580・405585	SD	(6.40)	0.50	0.10	-	皿	10YR4/4 褐色砂質シルト (下底に鉄分の沈着層有り)	
090			欠番							
091	中部	405590・410590	SK	(1.10)	1.02	0.18	(楕円)	皿	10YR4/4 褐色砂質シルト	
092	中部	410585・410590	SP	0.45	0.39	0.11	円	皿	10YR4/4 褐色砂質シルト	
093	中部	410590	SP	0.44	0.38	0.16	円	皿	10YR4/3 にふい黄褐色砂質シルト	
094	中部	415585	SK	0.73	(0.27)	0.08	(円)	皿	10YR4/4 褐色砂質シルト (鉄分の沈着多い)	
095	中部	420590	SP	0.30	0.24	0.09	円	U字	10YR4/3 にふい黄褐色砂質シルト	
096	中部	425590	SP	0.36	0.26	0.36	円	U字	10YR4/4 褐色砂質シルト	
097	南部	455595	SK	1.36	(0.85)	0.15	(円)	皿	10YR3/3 暗褐色砂質シルトと 10YR4/3 にふい黄褐色砂質シルトと 2.5Y5/3 中～細粒砂の斑土	
098	中部	445590	SP	0.42	0.32	0.07	楕円	皿	10YR4/4 褐色砂質シルト	

第3表 遺構一覧表(1区)

第2章 調査成果

遺構番号	調査区	グリッド	遺構	法量			平面形	断面形	埋土	備考
				長軸	短軸	深さ				
099	南部	470590	SK	0.74	(0.33)	0.15	(円)	皿	10YR4/3 にぶい黄褐色砂質シルト	
100			欠番							当初遺構と考えたが、南方の微高地に対する自然な落ち込みと判断した。
101	南部	545605	SK	(2.77)	1.70	0.46	長方	逆台形	10YR5/1 褐灰色砂質シルトと 5YR5/4 にぶい赤褐色砂質シルト (地山ブロック) 多量・10YR6/1 褐灰色砂質シルトを含む斑土	山茶碗 (13C)。墓坑か
102	南部	540605・545605	SK	1.21	1.18	0.16	円	皿	10YR6/1 褐灰色シルト	
103	南部	540600・540605	SK	1.90	1.28	0.10	楕円	皿	10YR6/1 褐灰色シルト	
104	南部	540600	SK	0.79	0.77	0.32	円	U字	10YR6/1 褐灰色シルト	
105	南部	540600	SE	0.89	0.82	1.04	円	U字	セクション図参照	灰釉・百大寺式 (11C 前～中)。墓坑か
106	南部	540600	SD	(8.48)	3.52	0.50	-	皿	セクション図参照	須恵器 (8C)
107	南部	535600	SK	2.66	1.33	0.43	長方	逆台形	10YR4/1 褐灰色砂質シルトと 7.5YR7/8 黄褐色砂質シルト (地山ブロック) を多量に含む斑土	灰釉・山茶碗 (11C ?)
108	南部	530605・535605	SK	3.01	1.82	0.37	不整	皿	セクション図参照	
109	南部	535600	SK	0.25	0.20	0.16	楕円	逆台形	10YR6/1 褐灰色砂質シルト	
110	南部	535600・535605	SK	0.46	0.44	0.05	楕円	逆台形	10YR6/1 褐灰色砂質シルト	
111	南部	530605	SK	0.33	0.27	0.12	楕円	逆台形	10YR4/1 褐灰色砂質シルト	
112	南部	520595・525595・525600・530600・530605	SD	(13.09)	1.51	0.26	-	皿	セクション図参照	
113	南部	530600・530605・535595・535600	SD	(8.60)	1.10	0.32	-	逆台形	セクション図参照	
114	南部	530600・530605	SK	1.39	0.67	0.19	長円	皿	10YR6/1 褐灰色シルト	
115	南部	525595・530595・530600	SD	(4.37)	0.74	0.12	-	皿	10YR4/2 灰黄褐色砂質シルト	
116	南部	525605	SK	(3.76)	(0.89)	0.53	長方	逆台形	セクション図参照	灰釉 (11C 前～中)。墓坑か
117	南部	525600	SE	1.48	1.37	1.15	円	U字	セクション図参照	山茶碗 (11C 後)
118	南部	520600	SK	2.53	1.46	0.12	不整	皿	10YR5/1 褐灰色砂質シルト	
119	南部	520600	SK	0.45	0.41	0.05	円	皿	10YR5/1 褐灰色砂質シルト	
120	南部	520600	SK	0.50	0.47	0.06	円	皿	10YR5/1 褐灰色砂質シルト	
121	南部	515600	SK	1.12	0.81	0.07	楕円	皿	10YR5/1 褐灰色砂質シルト	
122	南部	515600・520600	SE	1.71	1.68	0.96	円	U字	セクション図参照	
123	南部	515600	SK	(2.48)	1.38	0.77	長円	逆台形	セクション図参照	11C ? 灰釉・天目片 (16C 混入か)。墓坑か
124	南部	510600	SK	0.42	(0.22)	0.04	円	逆台形	10YR5/1 褐灰色砂質シルト	
125	南部	500595・505595	SD	(3.84)	0.27	0.06	-	皿	10YR5/1 褐灰色シルト	
126	南部	500595・505595・505600	SD	(8.11)	0.32	0.09	-	皿	10YR5/1 褐灰色シルト	
127	南部	495590・495595	SE	1.55	1.47	0.83	円	U字	セクション図参照	山茶碗 (11C 後)
128	南部	490595・495595	SK	1.10	0.96	0.26	円	U字	10YR5/1 褐灰色シルト (マンガン分沈着)	
129	南部	485595	SK	1.25	1.23	0.20	円	皿	10YR5/1 褐灰色シルト	
130	南部	455585・455590・460590・465590・470590・475590・475595・480590・480595・485595・490595・495595・495600・500600・505600	SD	(53.29)	0.70	0.30	-	U字	セクション図参照	道路側溝か
131	南部	455590・460590・465590・465595・470595・475595・480595・485595・485600・490600	SD	(34.50)	0.90	0.23	-	U字	セクション図参照	道路側溝か
132	南部	490600	SK	0.31	(0.23)	0.11	楕円	逆台形	10YR6/1 褐灰色砂質シルト	
133	南部	530600	SK	1.30	0.58	0.18	長円	U字	10YR6/1 褐灰色砂質シルト	112SD を切る
134	南部	555600・555605・555610	SD	(9.61)	2.89	0.48	-	逆台形	セクション図参照	
135	南部	525600	SK	0.49	(0.18)	0.14	不明	逆台形	10YR5/1 褐灰色砂質シルト	
136	南部	545600	SK	1.16	0.81	0.21	楕円	U字	10YR6/1 褐灰色シルトと 10YR7/8 黄褐色砂質シルト (地山ブロック) の斑土	
137	南部	550600	SK	(1.75)	0.83	0.07	長円	皿	10YR6/1 褐灰色シルト	山茶碗 (12C 前)。墓坑か
138	北部	365585	SP	1.00	0.63	0.72	楕円	U字	2.5Y4/3 オリーブ褐色砂質シルトと 2.5Y4/2 暗灰黄色中～粗粒砂の斑土	礎板 (d-335) 入り
139	北部	365585	SP	0.75	0.60	0.48	方形	U字	2.5Y4/3 オリーブ褐色砂質シルトと 2.5Y4/2 暗灰黄色中～粗粒砂の斑土	柱根 (d-336) 入り
140	北部	365580	SP	0.88	0.78	0.54	円	U字	2.5Y4/3 オリーブ褐色砂質シルトと 2.5Y4/2 暗灰黄色中～粗粒砂の斑土	
141	北部	365585	SP	(0.77)	0.75	0.48	円	U字	2.5Y4/3 オリーブ褐色砂質シルトと 2.5Y4/2 暗灰黄色中～粗粒砂の斑土	
142	南部	475595	SD	(1.48)	0.25	0.08	-	U字	5Y6/1 灰色粗粒砂	
143	南部	475590・475595	SD	(7.50)	0.39	0.09	-	U字	7.5Y5/2 灰オリーブ色粗粒砂	近代以降
144	北部	355580・355585・360575・360580	SD	7.95	0.41	0.06	-	皿	2.5Y4/3 オリーブ褐色砂質シルト (鉄分の沈着著しい)	

第3表 遺構一覧表 (1区)



## 第4節 2区の基本層序

### 1 調査の経緯

調査前に現況を事前確認したところ、調査区の中央にマンホール施設が既に敷設され、名古屋市上下水道局西部管路センター下水工事係に照会したところ、掘削箇所より離隔を取って作業をおこなうように指示があり、緑政土木局・教育委員会と協議の上、調査区中央部分の調査は避け、調査区を西部・東部と2つに分けて調査をおこなうこととなった。

令和3年(2021年)9月6日に西部より東方向へ表土掘削を開始した。雨を数日挟んだのち、9月10日より西部の遺構検出を開始した。既設のマンホール施工箇所を避けて、9月16日に引き続き東部の表土掘削をおこない、21日に終了した。9月28日には全域の調査を終了し、10月4日に教育委員会、10月5日に緑政土木局の完了検査を受け、終了した。

### 2 セクションの様相(第37図・第38図)

**表土・盛土層：**工用道路の造成時と考えられる砕石や地盤改良土が多くを占める。7次No.20調査区調査時では耕作土や遺物包含層などが確認されていたものの、着手前の現地標高は0.1～0.2mであった(7次の現地標高は0.5m前後)。

**水田の床土：**2層に該当する。壁面でも散在的に確認出来、東部の北壁の残りが良いものの、造成の影響か表土掘削の際も平面で確認出来なかった。

**中近世の造成土：**西部の3層に該当し、東部では確認出来なかった。西部の北壁面でこの3層を切るように大型の溝状遺構が確認出来たが、平面ではプランを確認出来なかった。出土遺物はない。1次A区・B区、2次C区の例のように盛土を繰り返して、畑作の用途で低地部を島畑状の高まりにしようとした可能性もあるが判然としない。

**地山層：**西部西壁・北壁・東部東壁4層、東部南壁3層に該当する。平均標高は-0.5mだが、南東隅に向かって徐々に0.1m程度高くなる。本来の湧水層はさらに下位のレベルと考えられるが、夏季の調査であったため地下水位は上昇しており、湧水に悩まされたこともあり、西部の調査時、平断面ともに明確に確認出来なかった。

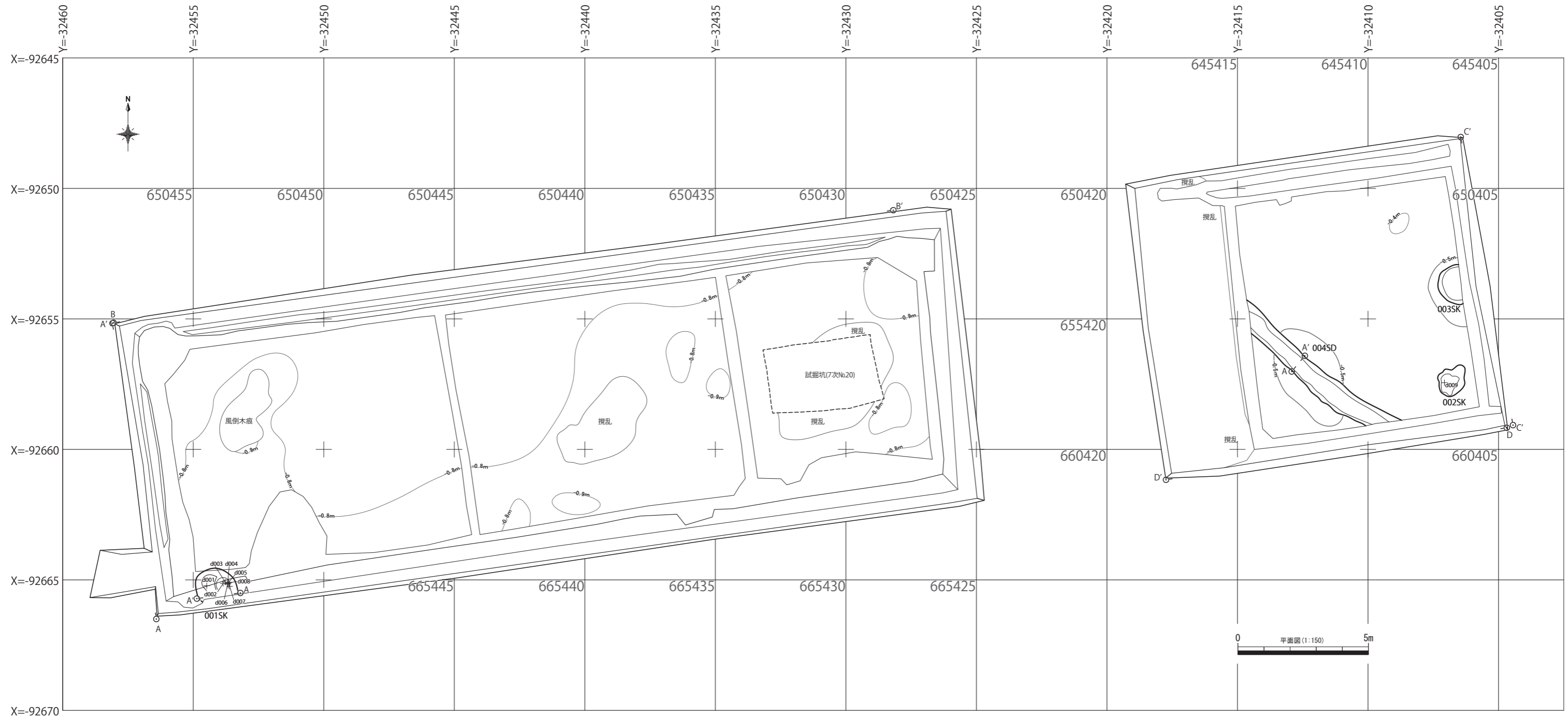


調査区全景 南東から(ドローンより撮影)



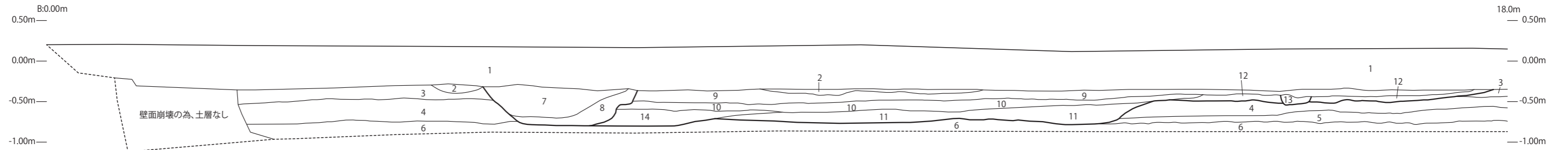
2区全景(ドローンより撮影)





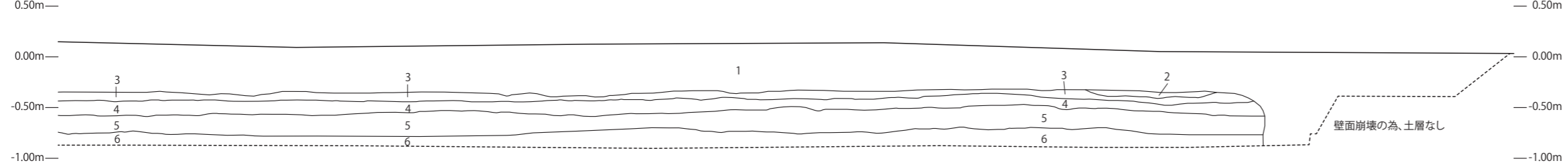
第36図 2区平面図

2区西部 北壁壁面図

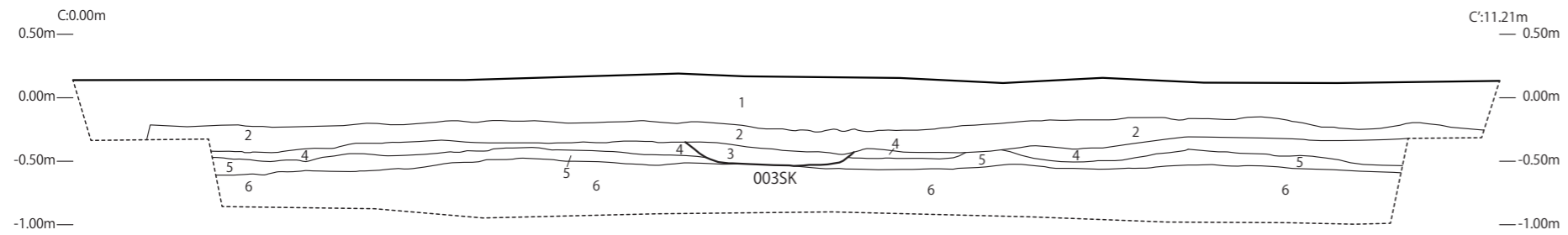


- 1 表土・盛土
- 2 2.5GY6/1 オリーブ灰色シルト (水田床土)
- 3 10YR4/1 褐灰色シルト
- 4 10YR7/6 明黄褐色シルト (地山)
- 5 7.5YR6/1 褐灰色シルト (地山)
- 6 10YR6/1 褐灰色砂質シルト (地山)
- 7 10YR5/1 褐灰色シルト (近世以降の溝埋土か)
- 8 10YR6/3 にぶい黄褐色シルト (近世以降の溝埋土か)
- 9 10YR5/1 褐灰色シルト (近世以降の溝埋土か)
- 10 10YR4/1 褐灰色シルト (近世以降の溝埋土か)
- 11 10YR6/1 褐灰色シルト (近世以降の溝埋土か)
- 12 10YR5/2 灰黄褐色シルト (近世以降の溝埋土か)
- 13 10YR4/1 褐灰色シルト (近世以降の溝埋土か)
- 14 10YR6/2 灰黄褐色シルト (近世以降の溝埋土か)

2区西部 東壁壁面図

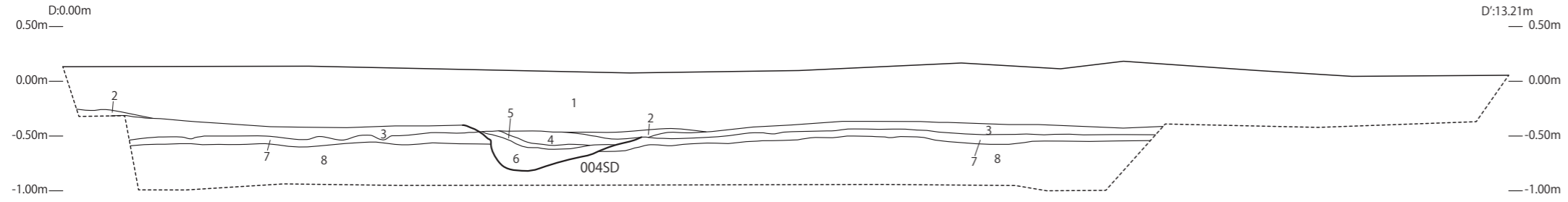


2区東部 東壁壁面図



- 1 表土・盛土
- 2 2.5GY6/1 オリーブ灰色シルト (水田床土)
- 3 5GY6/1 オリーブ灰色シルト (003SK)
- 4 10YR7/6 明黄褐色シルト (地山)
- 5 7.5YR6/1 褐灰色シルト (地山)
- 6 10YR6/1 褐灰色砂質シルト (地山)

2区東部 南壁壁面図



- 1 表土・盛土
- 2 2.5GY6/1 オリーブ灰色シルト (水田床土)
- 3 10YR7/6 明黄褐色シルト (地山)
- 4 10YR5/1 褐灰色シルト (004SD)
- 5 10YR6/1 褐灰色シルト (004SD)
- 6 10YR4/1 褐灰色シルト (004SD)
- 7 7.5YR6/1 褐灰色シルト (地山)
- 8 10YR6/1 褐灰色砂質シルト (地山)



第37図 2区セクション図1

## 第5節 2区の主な遺構

### 001SK: 土坑 (第38図)

西部の南西隅で検出された中世の土坑である。調査区内の幅は1.6 mで、長さは0.9 mであるが、調査区外へ広がって隅丸長方形を呈していたと考えられる。この遺構の上面は基本層序で述べた大型の溝状遺構によって削平されたと考えられ、本来は一回り大型の遺構と考えられる。主軸はNW-SE方向である。確認された深さは0.3 mで断面形状は逆台形である。遺構の西側底面に1cm弱の厚みで炭化物が堆積するほかは、短期間に埋没した様子である。

土坑の底で逆位の状態で据えられた伊勢型鍋が出土し、底部が意図的に大きく割られて取り除かれている状態であった。周囲で別個体の伊勢型鍋の破片、割られた状態の山茶碗が2個体出土した。出土遺物から13世紀に構築されたと考えられ、伊勢型鍋の出土状況から墓壙と考えられる。

## 第6節 2区の主な出土遺物

001SKから伊勢型鍋2点(115・116)と山茶碗2点(117・118)が出土したほか、表採遺物として加工円盤(119)がある。図化しなかったが遺構では002SKから山茶碗1点(尾張型第6～第7型式)・常滑産甕1点(体部のみで時期不明)が出土している。その他は、遺構外の出土遺物は細片ばかりで、2区全体でコンテナ1箱程度である。

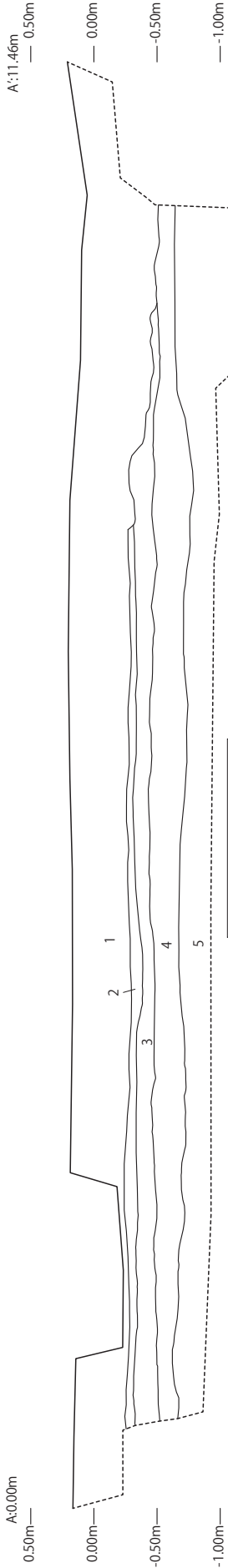
115は逆位の状態で出土した伊勢型鍋で底部が欠けるほかは完形である。体部は全体的に扁平で頸部の立ち上がりが明確である。口縁部は内側に折り返される。体部外面はナデ調整ののち指オサエで整えられ、下半はヘラケズリ調整されている。内面はナデ調整と指オサエ、下半はヘラケズリ調整されている。外面は口縁部から(頸部を除いて)体部全体の煤の付着が激しいが下半の一部は摩耗しており、数次の使用が認められる。内面の体部下半についても煤が薄く付着している。時期は伊勢型鍋A4a類からA4b類の13世紀のものと考えられる。

116は115とは別個体の伊勢型鍋でわずかに大きい。底部が欠け、口縁部は全体の4分の1程度の残存である。体部は全体的に扁平で頸部の立ち上がりが明確である。口縁部は内側に折り返されるが115よりわずかに端部が摘み上げられ内湾している。体部外面はナデ調整ののち指オサエで整えられ、下半はヘラケズリ調整されている。内面は板ナデ調整と指オサエ、下半は指ナデ調整されている。外面は頸部から体部上半及び内面全体に煤が薄く付着している。時期は伊勢型鍋A4a類からA4b類の13世紀のものと考えられる。

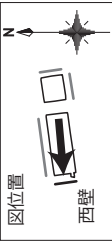
117・118ともに山茶碗である。117は尾張型第5型式の新相で12世紀末～13世紀初頭、118は尾張型第6型式で13世紀前半のものと考えられる。117は体部下方からほぼ直線的に立ち上がるのに対し、118は体部下方がやや丸みを帯びたのち上方に立ち上がるほか内面底部を指オサエで整形している。117は大きく3つに割られているが2片のみの回収に留まる。118も大きく3つに割られている(回収は2片)ほか、口縁部を外側から数度に分けて細かく打ち欠いているが接合する破片は見つからなかった。また118の内面及び口縁部・外面の一部に煤が付着している。

119は播鉢を再利用した加工円盤である。櫛目の始まりの部分を観察出来ることから体部にあたる。櫛目の数が多いことから近世のものと考えられる。外周部分の摩耗が激しい。

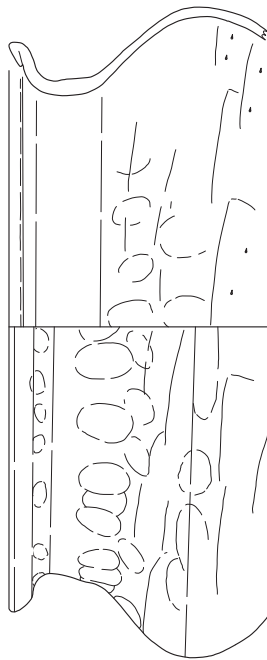
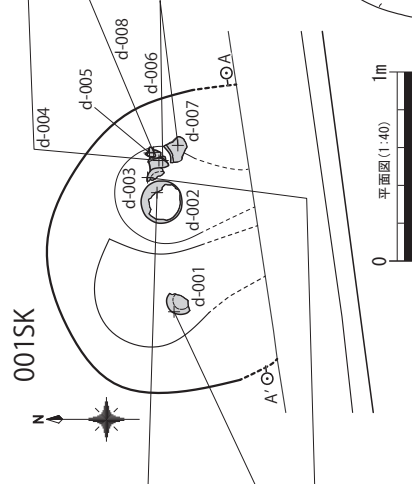
2区西部 西壁壁面図



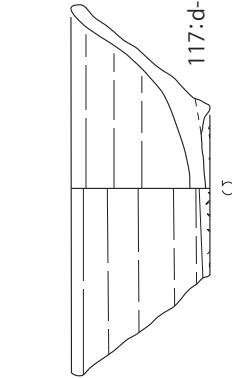
- 1 表土・盛土
- 2 2.5G/6/1 オリーブ灰色シルト (水田床土)
- 3 10YR4/1 褐灰色シルト
- 4 10YR7/6 明黄褐色シルト (地山)
- 5 10YR6/1 褐灰色砂質シルト (地山)



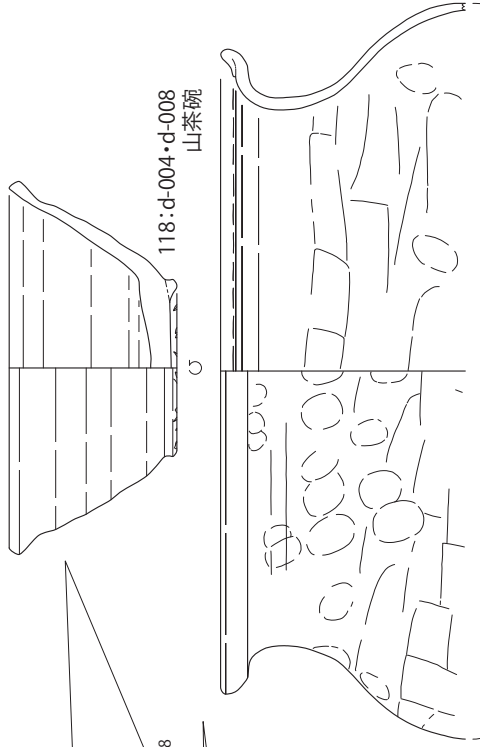
001SK遺物出土状況図



115:d-002  
伊勢型鍋

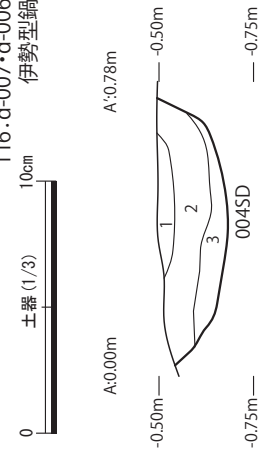


117:d-001-d-003  
山茶碗

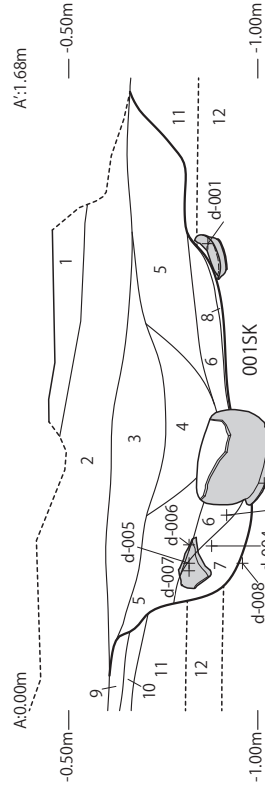


118:d-004-d-008  
山茶碗

116:d-007-d-006  
伊勢型鍋



- 1 10YR4/1 褐灰色シルト
- 2 10YR6/1 褐白色シルト (近世以降の溝埋土か)
- 3 10YR7/2 にぶい黄褐色シルト (001SK)
- 4 10YR5/2 灰黄褐色シルト (001SK)
- 5 10YR6/1 褐灰色シルト (001SK)
- 6 10YR5/3 にぶい黄褐色シルト (001SK)
- 7 10YR5/1 褐灰色シルト (炭化物混じる 001SK)
- 8 10YR1/7/1 黒色炭化物 (001SK)
- 9 10YR6/3 にぶい黄褐色シルト
- 10 10YR6/1 褐灰色シルト
- 11 7.5YR6/1 褐灰色シルト (地山)
- 12 10YR6/1 褐灰色砂質シルト (地山)



- 1 10YR5/1 褐灰色シルト (004SD)
- 2 10YR6/1 褐灰色シルト (004SD)
- 3 10YR4/1 褐灰色シルト (004SD)

第38図 2区セクション図2・001SK・004SK

## 第7節 2区のまとめ

今回検出の遺構・遺物量ともに少ないため、001SK 関係の資料紹介にて代替する。

### ■ 尾張地域の中世墓

県内で中世墓は多数確認されており、葬制として土葬・火葬、墓の形態として単独墓・集団墓、集落との立地から集落内・集落周辺・集落から離れた場所などの分類がある。

2区で確認された001SKは土壙墓の可能性のあるものの、木棺は認められなかった。1区・3区においても明確な住居遺構は見つからなかったものの、千音寺遺跡の包蔵地範囲外東側の高まりには第1章第2節で述べた通り古くからの神社仏閣が残っており、中近世の集落域の該当地であると推察される。集落から離れた2区のような低地域に墓が立地する可能性も考えておきたい。

また、001SKからは2点の伊勢型鍋と2点の山茶碗が出土したことから類例を紹介したい。山茶碗が副葬された土壙墓は古沢町遺跡(名古屋市中区)第3次の3基(13世紀～14世紀後半)、土田遺跡(清須市)の方形土壙墓群など多数あるが、なかでも伊勢型鍋を伴う土壙墓は尾張地域では2例確認されている。今回の13世紀からは少し遡る時期の遺構であるが、高蔵遺跡(名古屋市熱田区)20次SK10と権現山遺跡(岩倉市)01区SD01である。(第40図・第4表)

高蔵遺跡20次SK10では、ほぼ完形の伊勢型鍋1点と白磁碗2点が出土しており、伊勢型鍋・白磁碗ともに底面からはわずかに浮き、斜位で出土していることから木棺の上に供献された可能性がある。伊勢型鍋は千音寺遺跡出土のものと同丸みを帯びており、A2類の12世紀後半のものと考えられる。白磁の玉縁碗は口縁部が一部打ち欠かれており、山本信夫編年C期(11世紀後半～12世紀初頭・前半)のものか。千音寺遺跡1区008SDから似たような白磁の玉縁碗が1点出土している。またこの土壙墓は調査区内では1基のみの確認であるものの、弥生時代後期高蔵式期～古墳時代前期の方形周溝墓群の一带に重なることから墓域との認識が推定される。

権現山遺跡01区SD01では、伊勢型鍋の口縁部1点と青磁碗が1点出土している。伊勢型鍋は頸部が明確ではなく、A2類の12世紀後半のものと考えられる。青磁碗は体部のみであるが内面に草花を模した刻劃文(画花文)がみられ、山本信夫編年D期(12世紀中頃～後半)龍泉窯系青磁I-4類のものか。この遺構周辺で同様な規模の複数の土坑・溝が確認され、尾張型第4～5型式の山茶碗が副葬されているものもあることから墓域であったと考えられる。またこの墓域周辺も弥生時代末山中式期～古墳時代初頭廻間式期の墳丘墓群・古墳時代後期の円墳群の間や周溝に位置しており、古来よりの墓域との空間認識であったことが想定される。

### ■ 出土遺物と祭祀

001SKで出土の遺物を観察すると、意図的に破損された伊勢型鍋と山茶碗を用いた葬送儀礼の痕跡を確認出来た。

土坑の底からは、底部を大きく打ち欠いた伊勢型鍋が逆位で出土している。鉢被葬や甕被葬と呼ばれるような縄文時代より続く遺体の頭に土器を被せる習俗の名残か、近世の鍋被り葬へ繋がるものかもしれない。伊勢型鍋の欠損部分については出土しなかった。もう1片の伊勢型鍋は口縁部が4分の1ほどの残存であり、別個体のものであった。

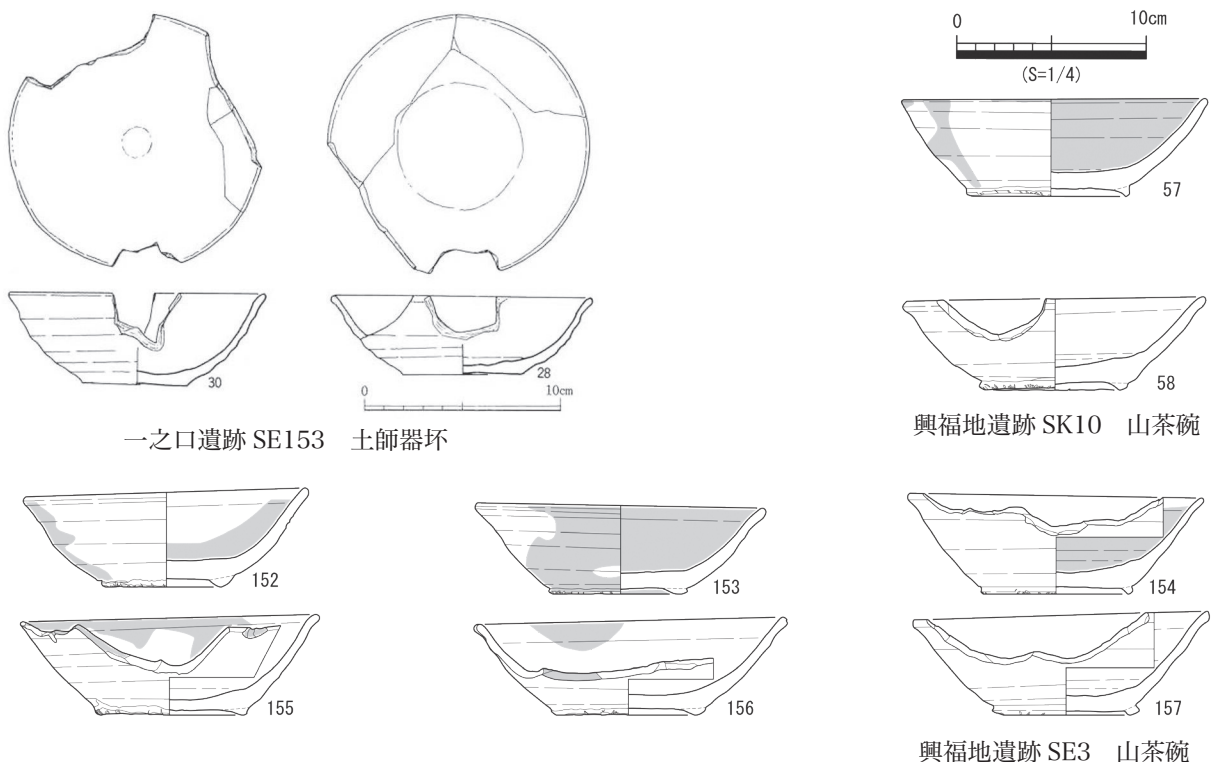
伊勢型鍋の周囲で確認された2つの山茶碗はこの遺構の近辺で意図的に大きく割られたうえで、口縁部を外側から細かく打ち欠かれている。さらに1つは内面に意図的に煤が付着させられており、

出土直後は「真っ黒」の状態であった。山茶碗は白瓷<sup>しらし</sup>という別名通り灰白色のうつわである。この「黒」と「白」という色は陰陽思想を想像させる。このような打ち欠きや煤の付着の例は、井戸での発見例が多い。一之口遺跡(新潟県上越市)SE153の土師器<sup>いちのくち</sup>坏2点の口縁部は意図的に打ち割られ、うち1点は内外面に煤が付着していた。興福地遺跡(岐阜県大垣市)SE2・SK10・SE3では内面ないし外面、若しくは内外面に煤が付着している例、また口縁部の打ち欠きがみられ、中でもSK10・SE3からは煤の付着・口縁部の打ち欠きともにみられるものが発見されている(第39図)。今回千音寺遺跡の2区では直接、井戸や水場の祭祀に関わる遺構は発見されなかった。

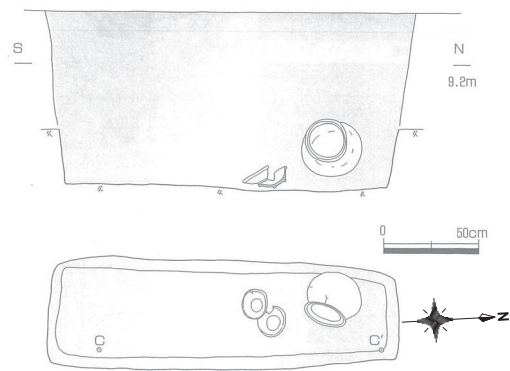
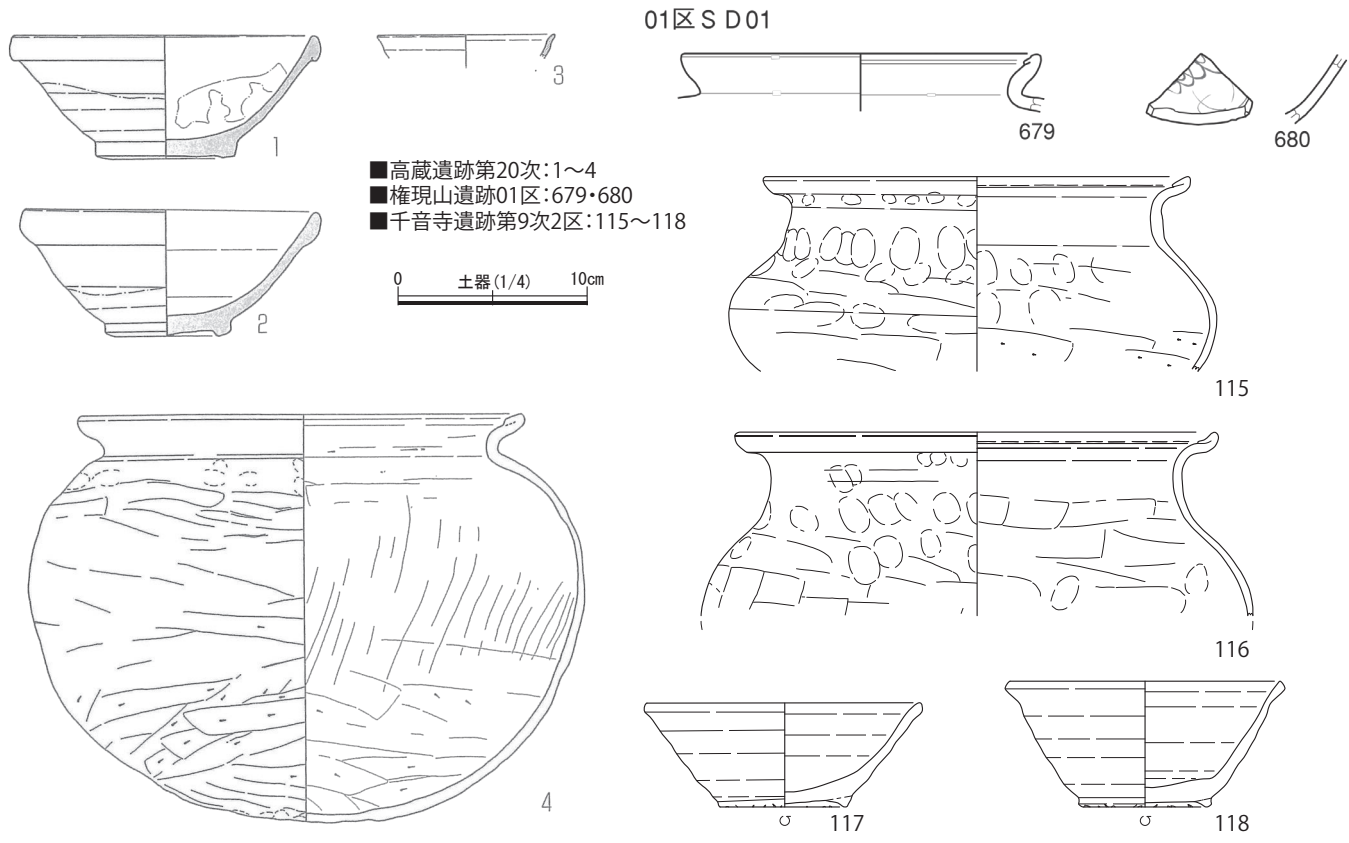
また解決できなかった問題として、山茶碗は墓壙のその場で打ち欠かれた破片の大部分が出土しているが、伊勢型鍋の破碎された底部は出土しなかった。葬送時の打ち欠きの儀式が埋設地とは別の場所で行われたのかどうか、検討が必要である。また、時間の制約上、県内の類例などとの比較・検討がもう少し必要であり、資料と類例の紹介に留めたい。

《参考文献》

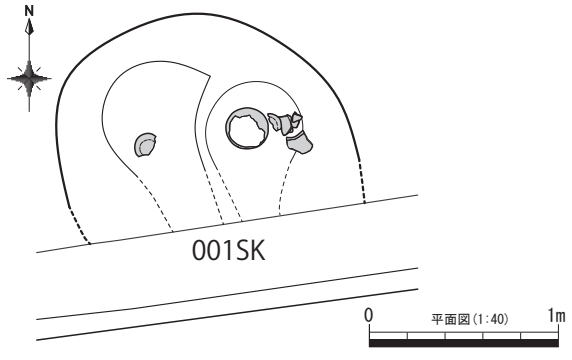
- 坂井秀弥・寺崎裕助ほか『一之口遺跡西地区2』新潟県埋蔵文化財調査報告書40 1986 新潟県教育委員会  
 服部哲也『高蔵遺跡第20次発掘調査報告書』1999 名古屋市見晴台考古資料館  
 早野浩二・鶴飼雅弘ほか『権現山遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第110集 2003 愛知県埋蔵文化財センター  
 伊藤厚史・木村有作ほか『埋蔵文化財調査報告書50 古沢町遺跡(第3次・第4次)』名古屋市文化財調査報告64 2004 名古屋市教育委員会  
 岡本直久「第3章 特論 第3節 中世墓」『愛知県史 資料編4 考古4 飛鳥～平安』2010 愛知県  
 近藤正枝『興福地遺跡』岐阜県文化財保護センター調査報告書132 2015 岐阜県文化財保護センター  
 近藤正枝「扇出土遺跡の性格と扇を使用する祭祀について」『岐阜県文化財保護センター研究紀要1』2015 岐阜県文化財保護センター  
 山本信夫 2022「第7章 貿易陶磁 第1節 中世前期の貿易陶磁器」『新版 概説 中世の土器・陶磁器』真陽社



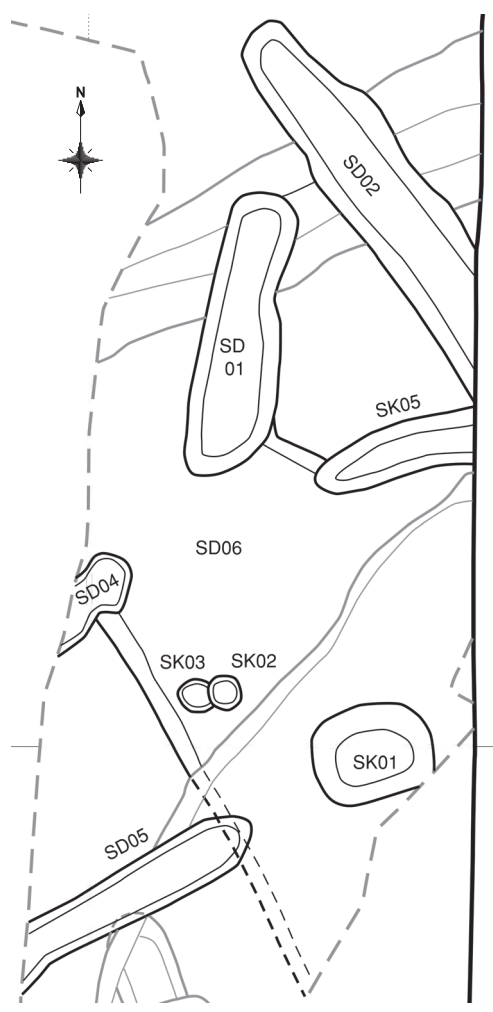
第39図 他遺跡の祭祀遺物の例



高蔵遺跡第20次 SK10遺構図(S=1/40)



千音寺遺跡第9次2区 001SK遺構図(S=1/40)



権現山遺跡01区東部 遺構図(S=1/100)

第40図 伊勢型鍋を伴う中世墓の例

遺跡名	調査次	調査区	遺構名	遺構規模 (m)			遺物	時期
				幅	長さ	深さ		
高蔵遺跡	第20次(1998)	—	SK10	0.6	1.8	0.9	伊勢型鍋(1)、白磁碗(2)	12世紀後半
権現山遺跡	平成13年度(2001)	01区	SD01	0.8	3.9	不明	伊勢型鍋(1)、青磁碗(1)	12世紀後半
千音寺遺跡	第9次(2021)	2区	001SK	(0.9)	1.6	0.3	伊勢型鍋(2)、山茶碗(2)	13世紀

第4表 伊勢型鍋を伴う中世墓一覧表

第2章 調査成果

遺構一覧表(2区)

遺構番号	調査区	グリッド	遺構	法量			平面形	断面形	埋土	備考
				長軸	短軸	深さ				
001	西部	660450・665450	SK	1.55	(0.92)	0.31	楕円形	皿	セクション図参照	伊勢型鍋(13前)・山茶碗を供えた墓域か
002	東部	655405	SK	1.31	1.00	0.08	不定形	皿	10YR6/1 褐灰色砂質シルト	
003	東部	650405	SK	1.54	0.89	0.08	楕円形	皿	10YR6/1 褐灰色砂質シルト	
004	東部	650410・655405・655410	SD	(6.45)	0.93	0.19	-	U字	セクション図参照	

第5表 遺構一覧表(2区)



001SK 遺物出土状況 北東から



001SK 遺物出土状況 北西から



001SK 遺物出土状況 北西から(近景)



001SK セクション 北から





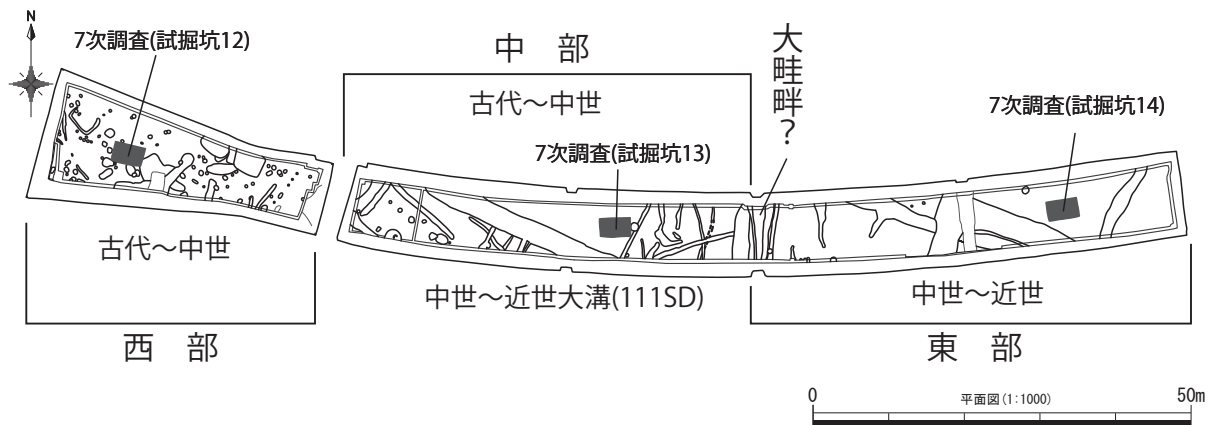
## 第8節 3区の基本層序

## 1 調査の経緯

3区の表土掘削は1区での作業と並行し、10月21日から調査区西端での作業を開始した。11月5日からは調査区東端にも重機を投入し、表土掘削を開始した。調査区西端から35mを過ぎた地点の、道路が交差する部分には既にマンホールが敷設されていたため、工事箇所を含め幅約4mの離隔を設けて掘削をおこなったため、結果的に調査区を分割することとなった。

3区も1区同様、東西に長大な調査区であるため、西端から離隔部分までを西部と呼称し、残りの調査区はほぼ中央の南北の溝が重走する部分までを中部、それより東を東部と呼称した上で記述する。

なお、調査区内では3ヶ所の試掘坑を検出している。



第41図 3区概念図

## 2 セクションの様相(第47図～第50図)

## a 西部

西部全体の様相として、試掘調査時とは堆積状況が大きく変化していた。表土直下には膨大な量の浚渫川砂が一面に存在しており、現代の水田床土を削平後の客土と判明した。水田床土の下面に存在していたであろう遺跡としての遺物包含層上部も、その多くが削平され消滅していることが確認された。川砂は透水層であり、雨が降ると地上からの水が壁面から大量に滲出し、同時に調査区が福田川にほど近い地盤の低い地区に相当することなどから湧水も激しく、排水溝と数台のポンプを常に取り回しながらの調査となった。

西セクション図における第1層が川砂層であり、第2層と第3層が現代水田の床土や客土であり、北セクション図でも同様である。

第4層以下は遺構埋土もしくは遺物包含層であり、北セクションにおける第4層表面で遺構検出をおこなった。この第4層には須恵器や灰釉陶器などの古代の遺物に混ざり、中世の山茶碗や近世陶器が出土する部分もあった。

地山層の上面は鉄分の沈着が多い黄橙色のシルトで、層厚は約20cmあり、以下は直ちに灰色の中～細粒砂層となり、大量の湧水があった。

**b 中部～東部**

マンホール敷設に伴う離隔部分を壁面として精査し、西セクションを測量した。西区にみられた川砂の客土層は、ここでは認められなかった。表土下には現代水田の床土層があり、主に中世以前の遺物包含層はその直下に存在した。

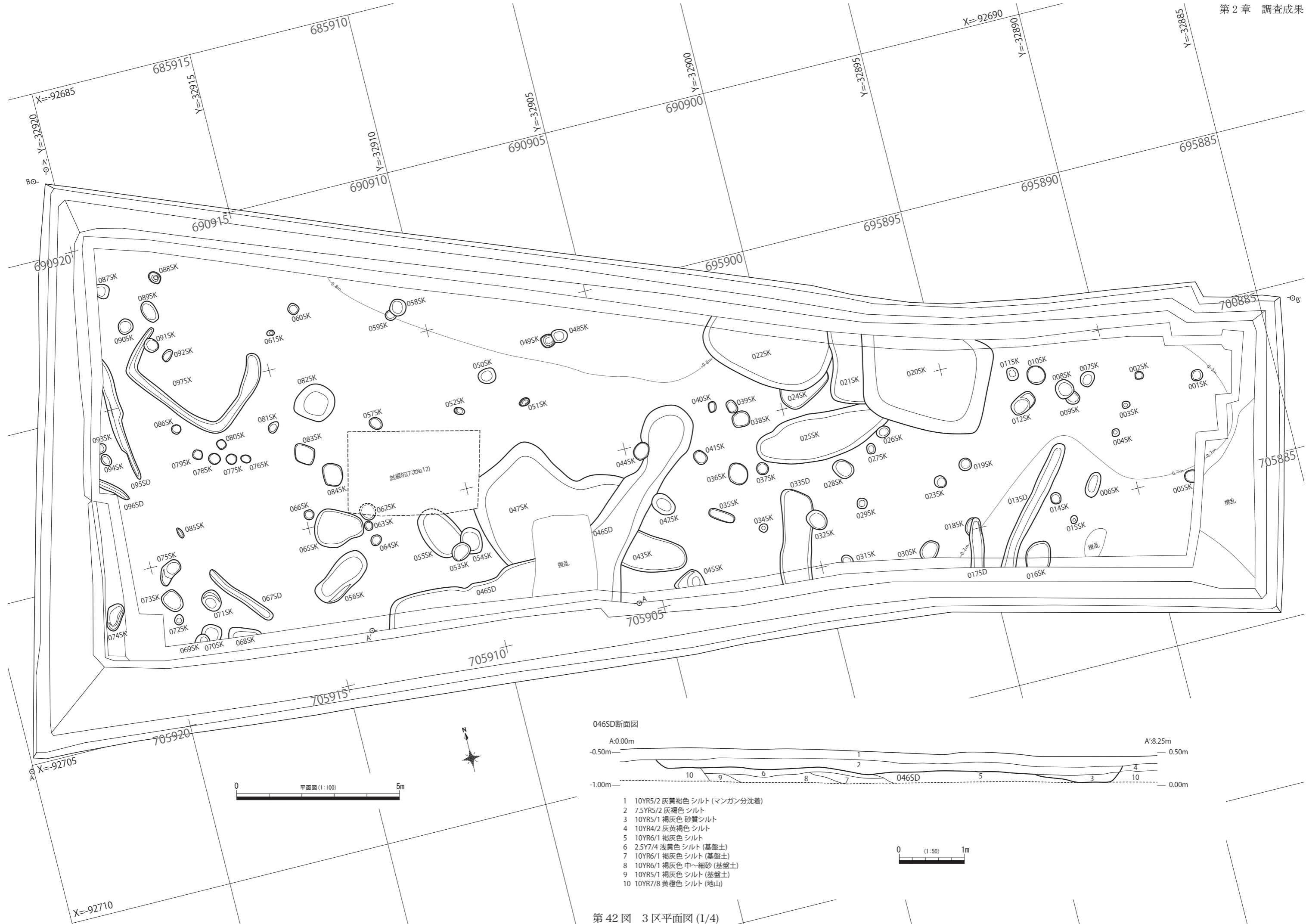
北セクションで示したように、水田床土が消失した部分もみられた。また、遺構や遺物がほとんどみられない空白地帯もしばしば存在し、地山の認定も難航した。

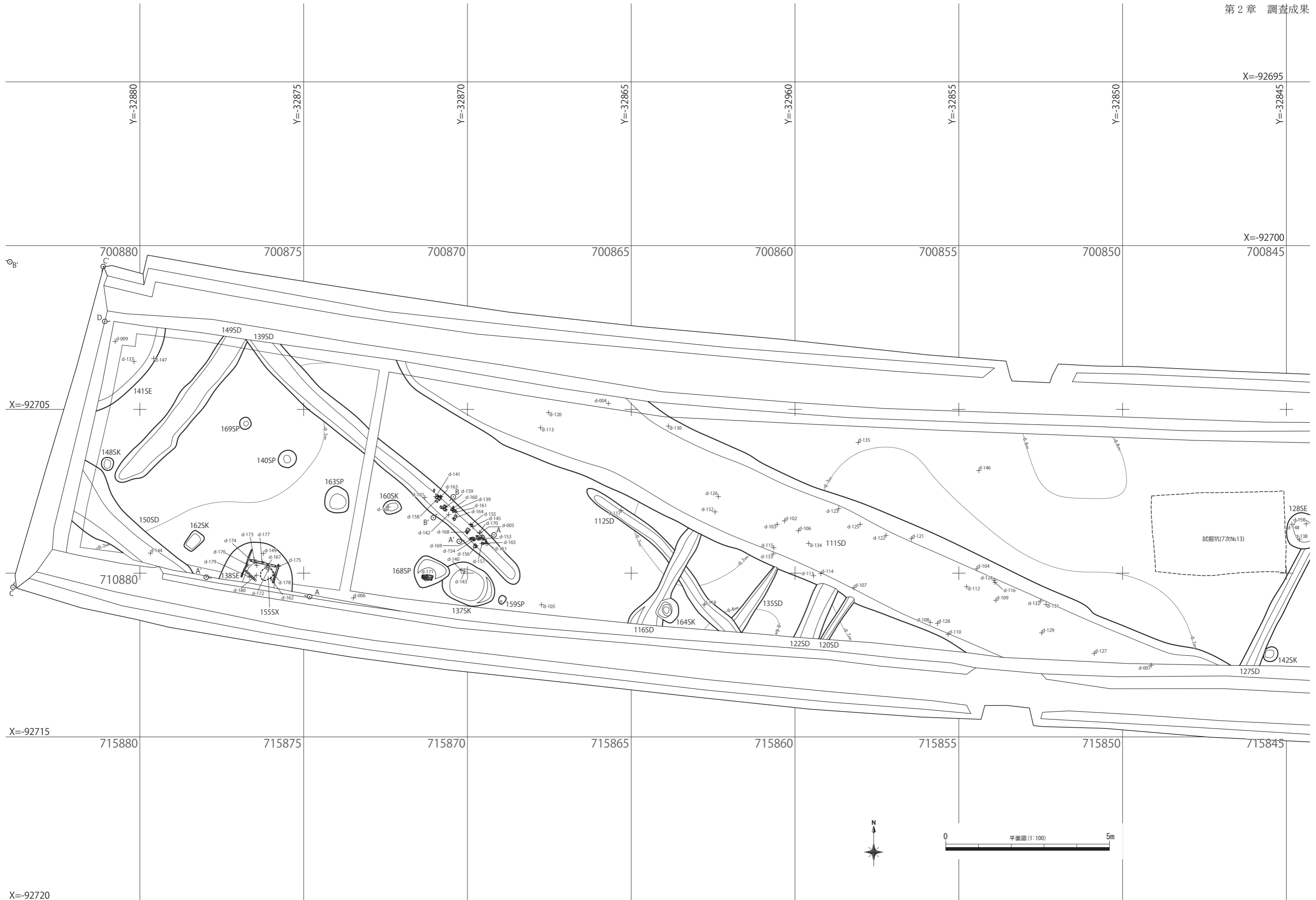
遺構の埋土は砂質シルトとやや粘り気のあるシルトが多く、地山を含めていずれの層も鉄分の沈着が著しい。

遺構検出面の標高は -50cm 前後で、中部と東部の境界付近では -30cm 前後とやや高くなることから、大畦畔の存在を想定している。東部では再び -50cm 前後となるが、東部には複数の大きな溝が存在するのみで小さな遺構はほとんどみられず、壁面に沿って設けた排水溝をいくら掘り下げても調査終了時まで浸水状況であった。

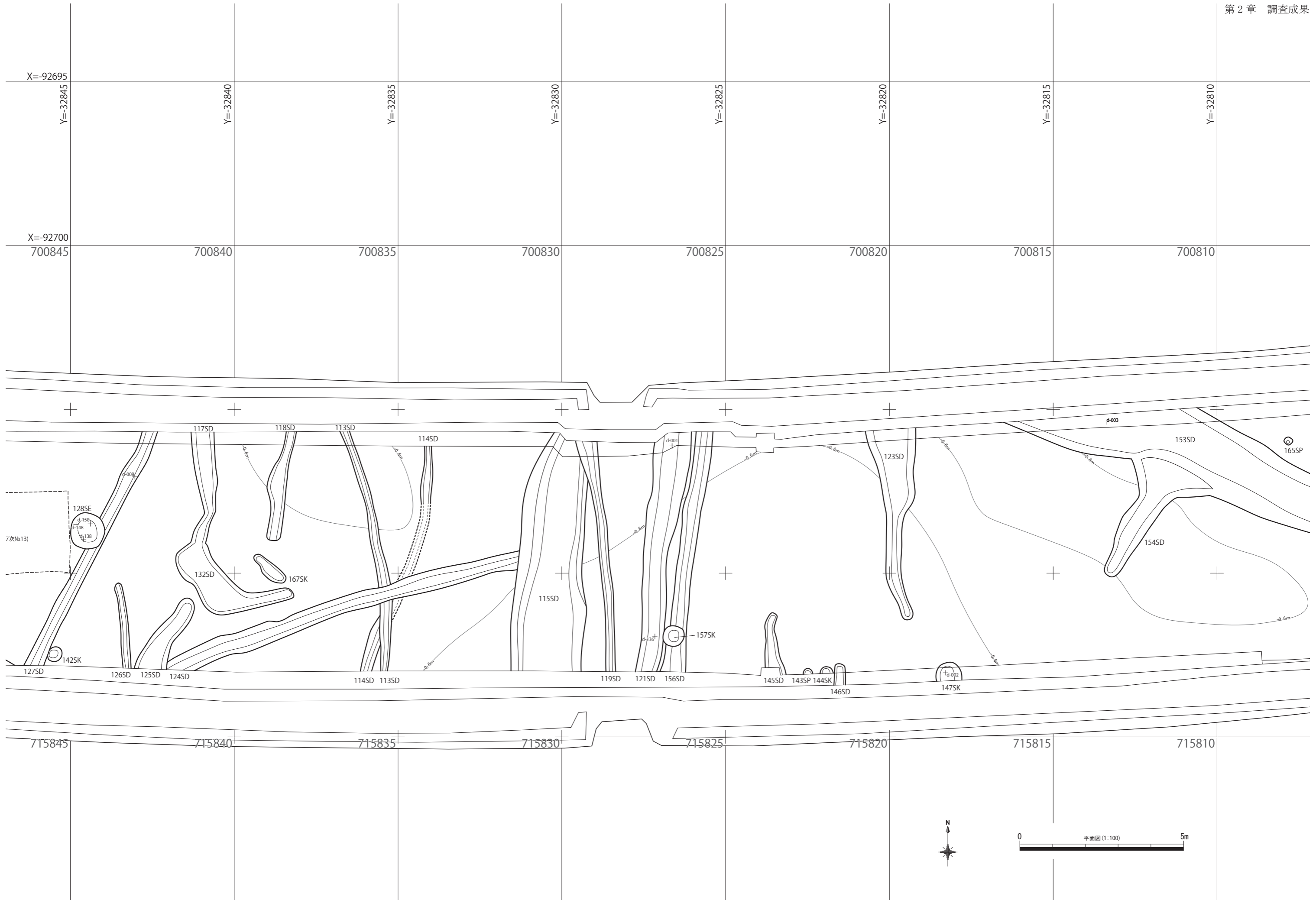
なお東区東セクションでは、水田床土下に遺物包含層はみられず、直接地山面に接することが確認された。



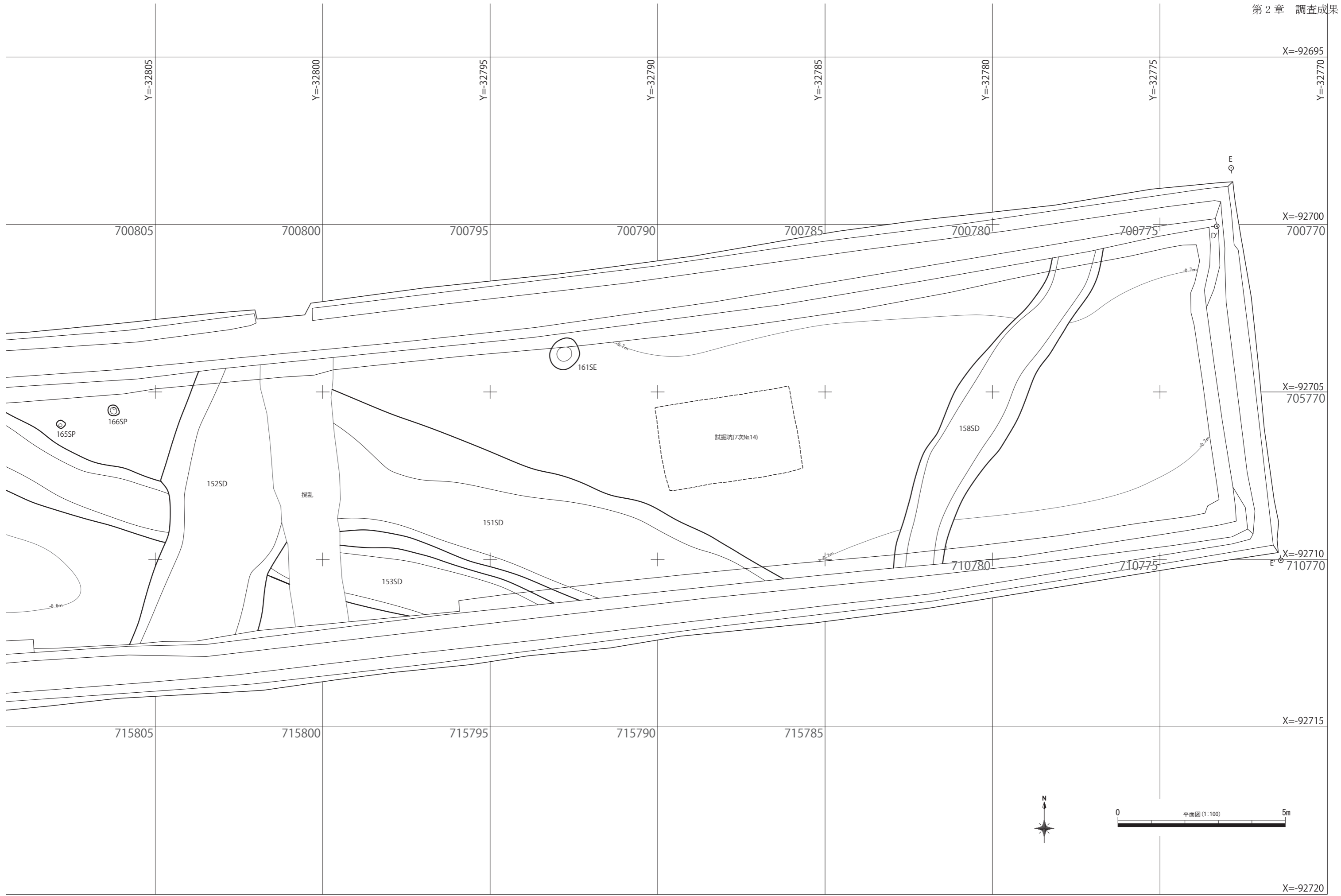




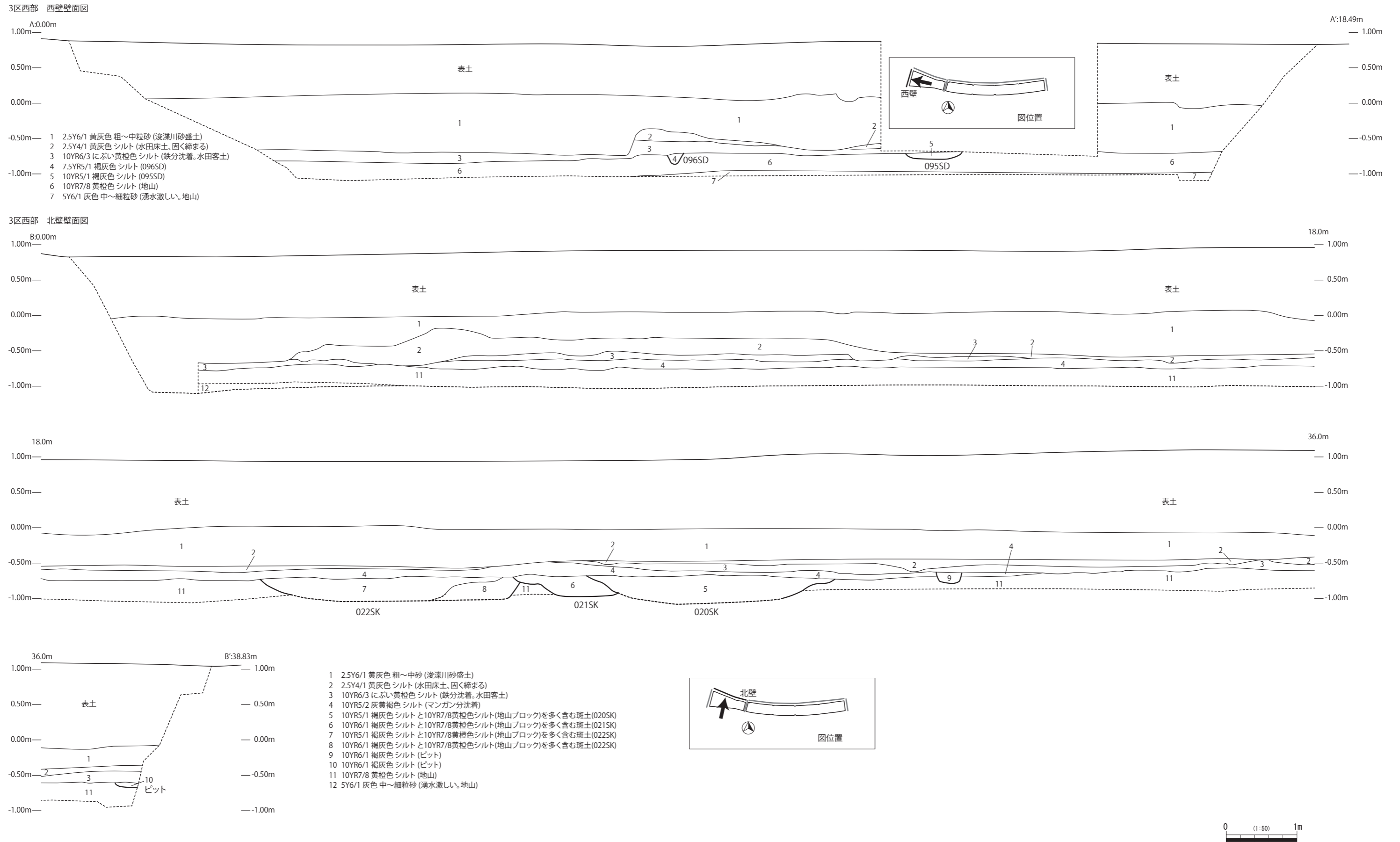
第43图 3区平面图(2/4)



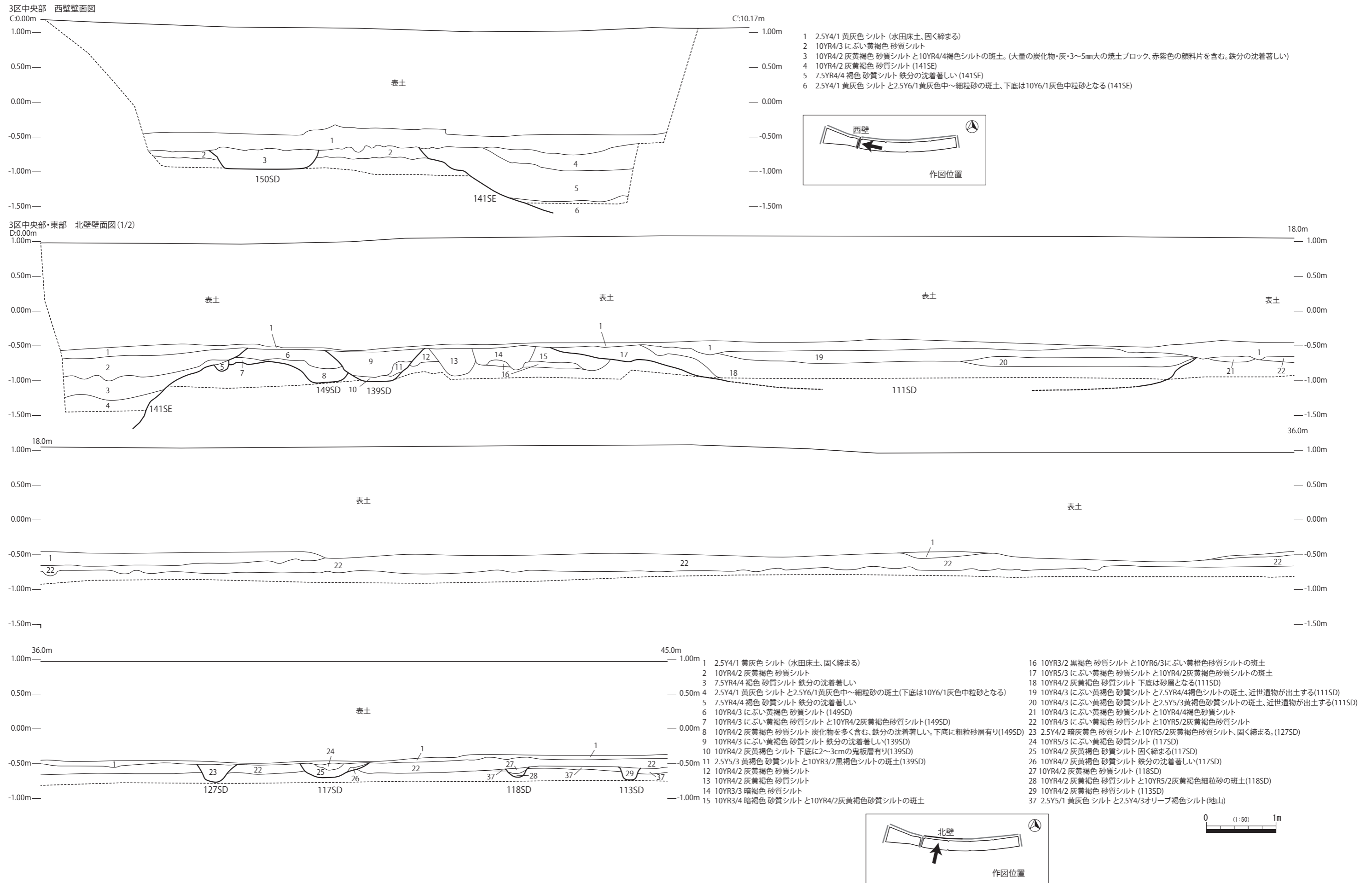
第44图 3区平面图(3/4)



第45図 3区平面図(4/4)



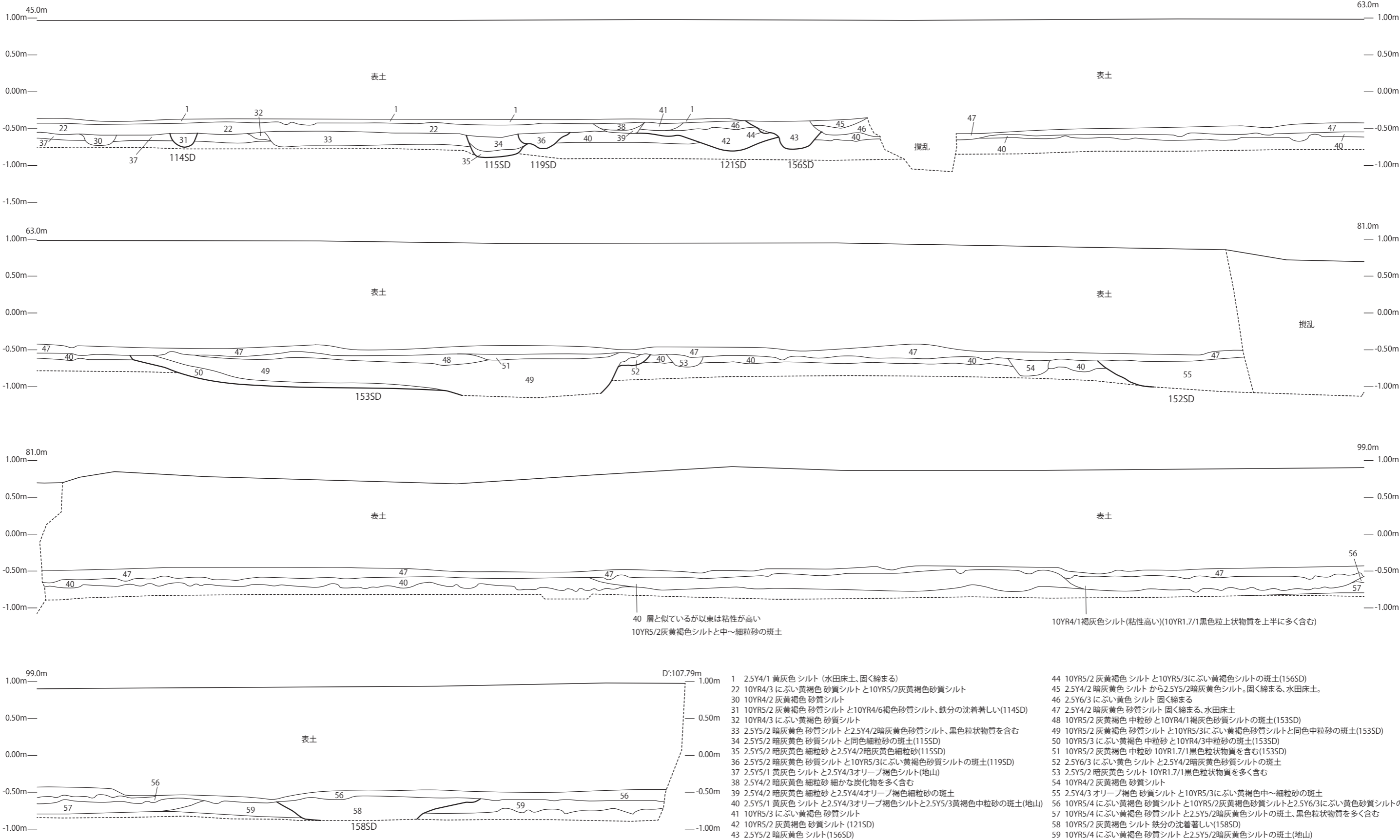
第46図 3区セクション図1



第47図 3区セクション図2

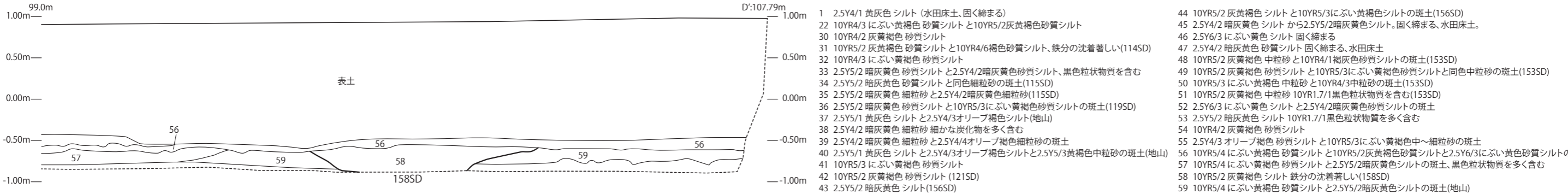


3区中央部・東部 北壁壁面図(2/2)

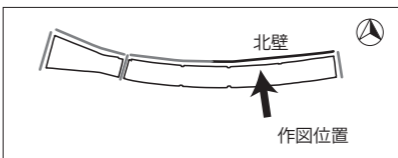


40 層と似ているが以東は粘性が高い  
10YR5/2 灰黄褐色シルトと中～細粒砂の斑土

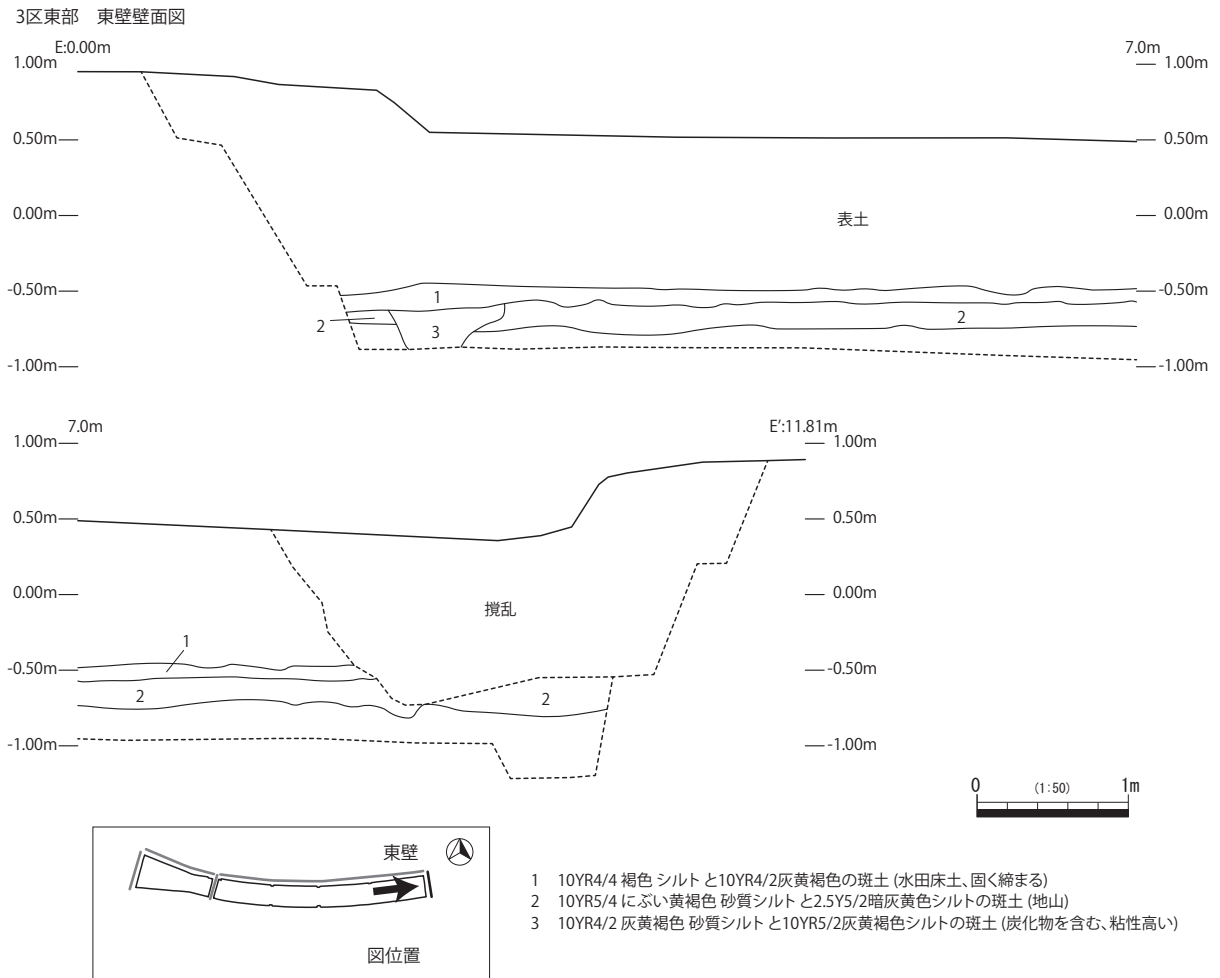
10YR4/1 褐灰色シルト(粘性高い)(10YR1.7/1 黒色粒状物質を上半に多く含む)



- 1 2.5Y4/1 黄灰色シルト(水田床土、固く締まる)
- 22 10YR4/3 にぶい黄褐色 砂質シルトと10YR5/2 灰黄褐色砂質シルト
- 30 10YR4/2 灰黄褐色 砂質シルト
- 31 10YR5/2 灰黄褐色 砂質シルトと10YR4/6 褐色砂質シルト、鉄分の沈着著しい(114SD)
- 32 10YR4/3 にぶい黄褐色 砂質シルト
- 33 2.5Y5/2 暗灰黄色 砂質シルトと2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト、黒色粒状物質を含む
- 34 2.5Y5/2 暗灰黄色 砂質シルトと同色細粒砂の斑土(115SD)
- 35 2.5Y5/2 暗灰黄色 細粒砂と2.5Y4/2 暗灰黄色細粒砂(115SD)
- 36 2.5Y5/2 暗灰黄色 砂質シルトと10YR5/3 にぶい黄褐色砂質シルトの斑土(119SD)
- 37 2.5Y5/1 黄灰色シルトと2.5Y4/3 オリーブ褐色シルト(地山)
- 38 2.5Y4/2 暗灰黄色 細粒砂 細かな炭化物を多く含む
- 39 2.5Y4/2 暗灰黄色 細粒砂と2.5Y4/4 オリーブ褐色細粒砂の斑土
- 40 2.5Y5/1 黄灰色シルトと2.5Y4/3 オリーブ褐色シルトと2.5Y5/3 黄褐色中粒砂の斑土(地山)
- 41 10YR5/3 にぶい黄褐色 砂質シルト
- 42 10YR5/2 灰黄褐色 砂質シルト(121SD)
- 43 2.5Y5/2 暗灰黄色シルト(156SD)
- 44 10YR5/2 灰黄褐色シルトと10YR5/3 にぶい黄褐色シルトの斑土(156SD)
- 45 2.5Y4/2 暗灰黄色シルトから2.5Y5/2 暗灰黄色シルト。固く締まる、水田床土。
- 46 2.5Y6/3 にぶい黄色シルト 固く締まる
- 47 2.5Y4/2 暗灰黄色 砂質シルト 固く締まる、水田床土
- 48 10YR5/2 灰黄褐色 中粒砂と10YR4/1 褐灰色砂質シルトの斑土(153SD)
- 49 10YR5/2 灰黄褐色 砂質シルトと10YR5/3 にぶい黄褐色砂質シルトと同色中粒砂の斑土(153SD)
- 50 10YR5/3 にぶい黄褐色 中粒砂と10YR4/3 中粒砂の斑土(153SD)
- 51 10YR5/2 灰黄褐色 中粒砂 10YR1.7/1 黒色粒状物質を含む(153SD)
- 52 2.5Y6/3 にぶい黄色シルトと2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルトの斑土
- 53 2.5Y5/2 暗灰黄色シルト 10YR1.7/1 黒色粒状物質を多く含む
- 54 10YR4/2 灰黄褐色 砂質シルト
- 55 2.5Y4/3 オリーブ褐色 砂質シルトと10YR5/3 にぶい黄褐色中～細粒砂の斑土
- 56 10YR5/4 にぶい黄褐色 砂質シルトと10YR5/2 灰黄褐色砂質シルトと2.5Y6/3 にぶい黄色砂質シルトの斑土
- 57 10YR5/4 にぶい黄褐色 砂質シルトと2.5Y5/2 暗灰黄色シルトの斑土、黒色粒状物質を多く含む
- 58 10YR5/2 灰黄褐色シルト 鉄分の沈着著しい(158SD)
- 59 10YR5/4 にぶい黄褐色 砂質シルトと2.5Y5/2 暗灰黄色シルトの斑土(地山)



第48図 3区セクション図3



第49図 3区セクション図4



## 第9節 3区の主な遺構と遺物

## 1 西部(第42図)

西部では不整形な大型土坑や溝、土坑など90余りの遺構が検出されたが、ほとんどの遺構で時期を決定できるような遺物の出土が無く、性格を特定出来る遺構は少なかった。遺構検出面のレベルは概ね-70cm前後である。

013SDは北東から南西へ流れる溝で、主軸方位はN-37°-Eである。幅約50cm、深さ5cm、断面形は皿形で、埋土は褐灰色シルトの単層である。遺物は出土していない。

017SDは幅42cm、深さ10cm、主軸方位N-37°-E方向に延びる溝で、埋土は褐灰色シルトの単層である。須恵器坏蓋の小片が2点出土している。

020SKは幅約4mの方形遺構で、検出時には住居址かとも思われたが、皿状の断面形状で中央部の深さは40cmである。埋土は灰褐色シルトと黄橙色シルトの斑土で、地山ブロックが多く含まれることから埋め戻し土と推定される。埋土中よりいくつかの遺物を検出した。遺物は主に遺構中央部からの出土である。120・121は須恵器の大型甕で、器表には沈線間に三段の波状文が付けられている。同一個体の破片が埋土底面と上位から出土することから、短時間のうちに埋め戻されたと思われる。124は土師質の把手付き鍋で、内外の器面がハケで調整されている。122は猿投産須



020SK 遺物出土状況 南東から

恵器の坏身で、これらはいずれも8世紀前半から中葉にかけてのものと考えられる。他にも数点の土師質甕や須恵器が出土しているが、ほぼ同時期のものであり、一括廃棄された可能性が高い。

021SKは方形プランの土坑で、022SKを切り、020SKに切られる断面形状逆台形と推定される遺構である。埋土には黄橙色の地山ブロックが多く含まれており、埋め戻されたものと推定される。須恵器や灰釉陶器、土師質の土器片が30点ほど出土している。

022SKは隅丸方形または長円形プランの土坑で、断面形状は皿形である。東西3.9m、深さ30cmで、隣接して連なる他の遺構同様、埋土は黄橙色の地山ブロックを多く含む埋め戻し土である。須恵器や土師質の土器細片が40点ほど出土している。127は線刻を持つ土錘である。類似した形状のもの(112)が1区の包含層より出土している。

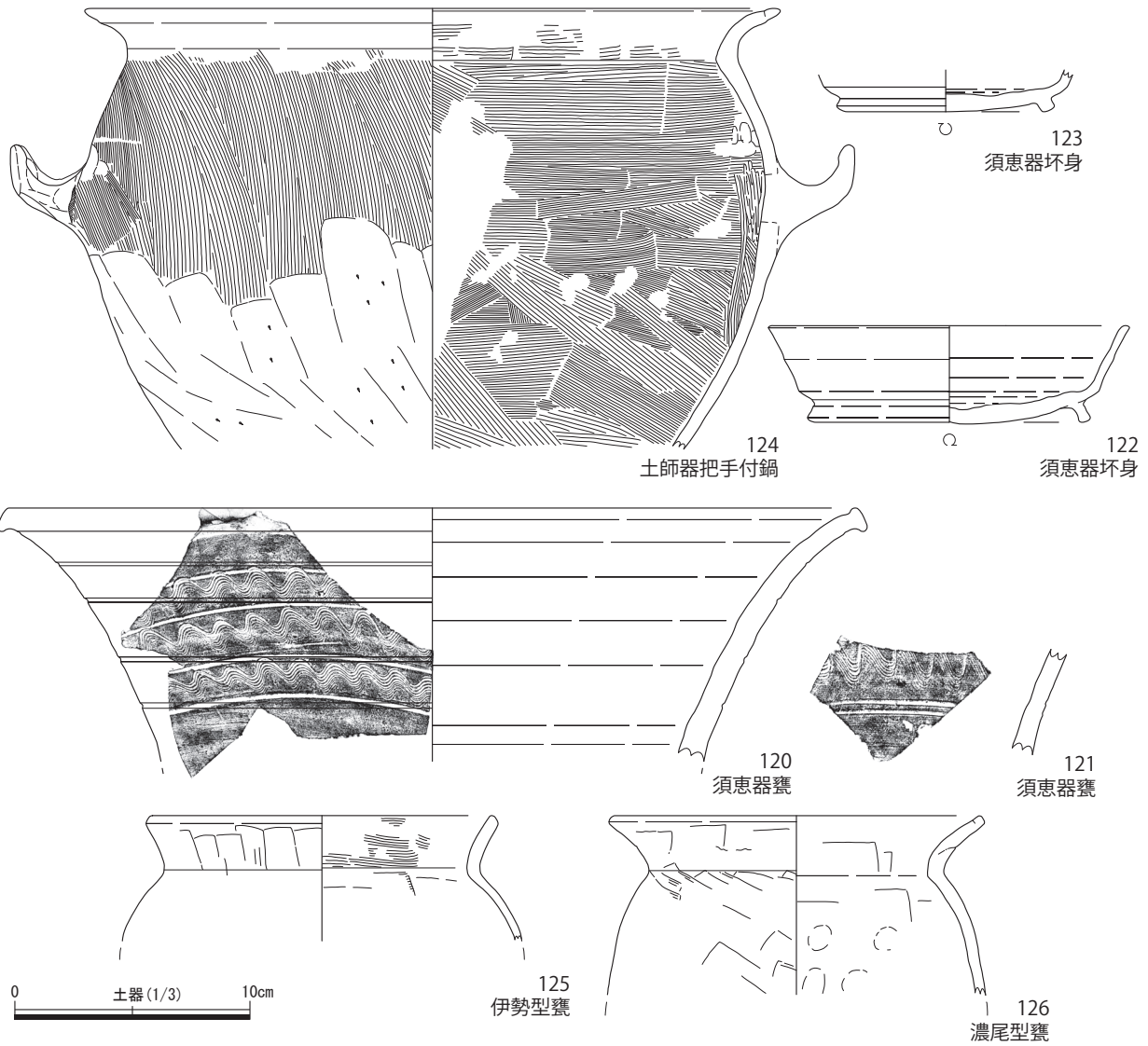
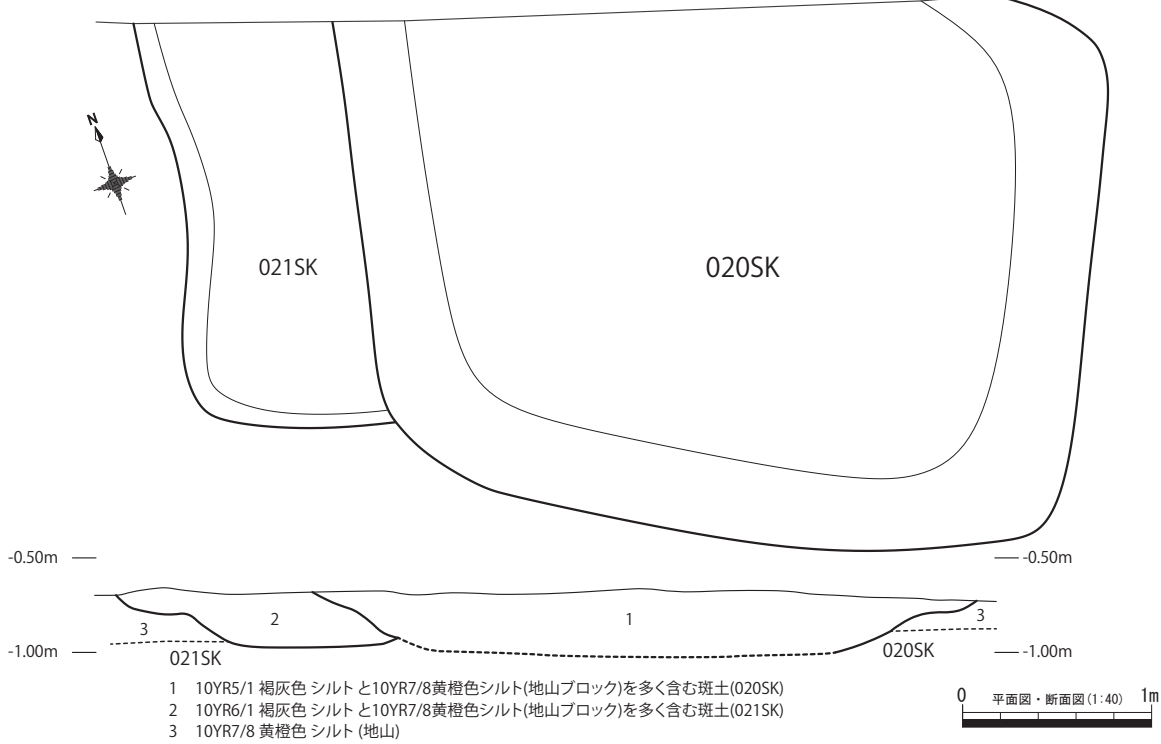
025SKは長軸4.2m、短軸1.5mほどの楕円形プランの土坑で、深さは15cmである。埋土は褐灰色シルトの単層で、遺物は出土していない。

033SDは主軸方位N-15°-E方向に延びる溝状遺構で、032SKに切られる。幅98cm、深さ15cmで、断面形状は逆台形を呈し、埋土は褐灰色シルトの単層である。須恵器1点のほか、土師質の土製品片の欠片(128)が1点出土している。端部が3面ヘラナデ調整されている。不明土製品としたが、把手付鉢の把手部分の可能性はある。

046SDはN-42°-E方向に延びる溝状遺構で、幅1.35m、深さ21cm、埋土は褐灰色シルトを基

020SK平面図 A ⊙-

⊙ A'



第50図 020SK 平面図・断面図

調とし、西端部では最下層に褐灰色砂質シルトが堆積する。自然流路の痕跡である可能性もある。ハケメ調整された甕破片 20 点のほか、須恵器 4 点、土錘 1 点が出土している。

**056SK** は長軸 1.9m、短軸 90cm の隅丸長方形プラン、断面形状は逆台形の遺構で、主軸方位は N-52°-E である。埋土は炭化物を多量に含んだ黒色シルトの単層だが、遺構壁に被熱痕は認められなかった。須恵器蓋と土師器の小片が出土している。

**067SD/085SK/095SD** は断続的な調査となったが一連の溝であった可能性が高く、北から南東方向に彎曲して延びている。断面形状は皿形で、最大幅 45cm、最大深さ 9cm、埋土は褐灰色シルトの単層である。遺物は出土していない。

**097SX** は一辺の長さ約 4m でコの字状に曲がる溝遺構で、北東側は削平により消滅している。主要部分の幅は約 30cm、深さは 5cm ほどしか残っておらず、建物跡の周溝残欠の可能性もあるが、無遺物のため時期は不明である。

これらの他に、**007SK** からは尾張型長胴甕の底部 1 点が出土している。

## 2 中部 (第 43 図・第 44 図)

次に西区に続く中部では、調査区中央を西北西から東南東に位置する 111SD を中心に、南西側には古代から中世にかけての溝や井戸、柱穴などが検出され、遺物もまとまった量が出土している。一方 111SD 北岸から東にかけては、遺構・遺物の空白地帯を経て用途不明の細い溝が何本も重複する部分と、大畦畔と想定される何本もの溝が南北方向に重複して縦走する部分がある。

**111SD** は W-23°-N 方向に位置する幅 3m 弱のまっすぐな溝で、深さは約 70cm、断面逆台形の溝と推定される。北西端でやや北側に曲がるが、調査区内ではほぼ一直線である (第 51 図)。プラン検出時より湧水が始まり、遺構完掘にいたるまで終始満水状態で、複数台のポンプを投入したが更なる湧水を呼び、溝底までの排水は困難であった。埋土下半部からは 13 世紀代の山茶碗を中心とした陶器類が、上半部にかけては 14 世紀から 15 世紀代の陶器類が多く出土した。古代の須恵器や灰釉陶器もみられるが、それらは溝掘削以前に存在した遺構に由来するものであろう。

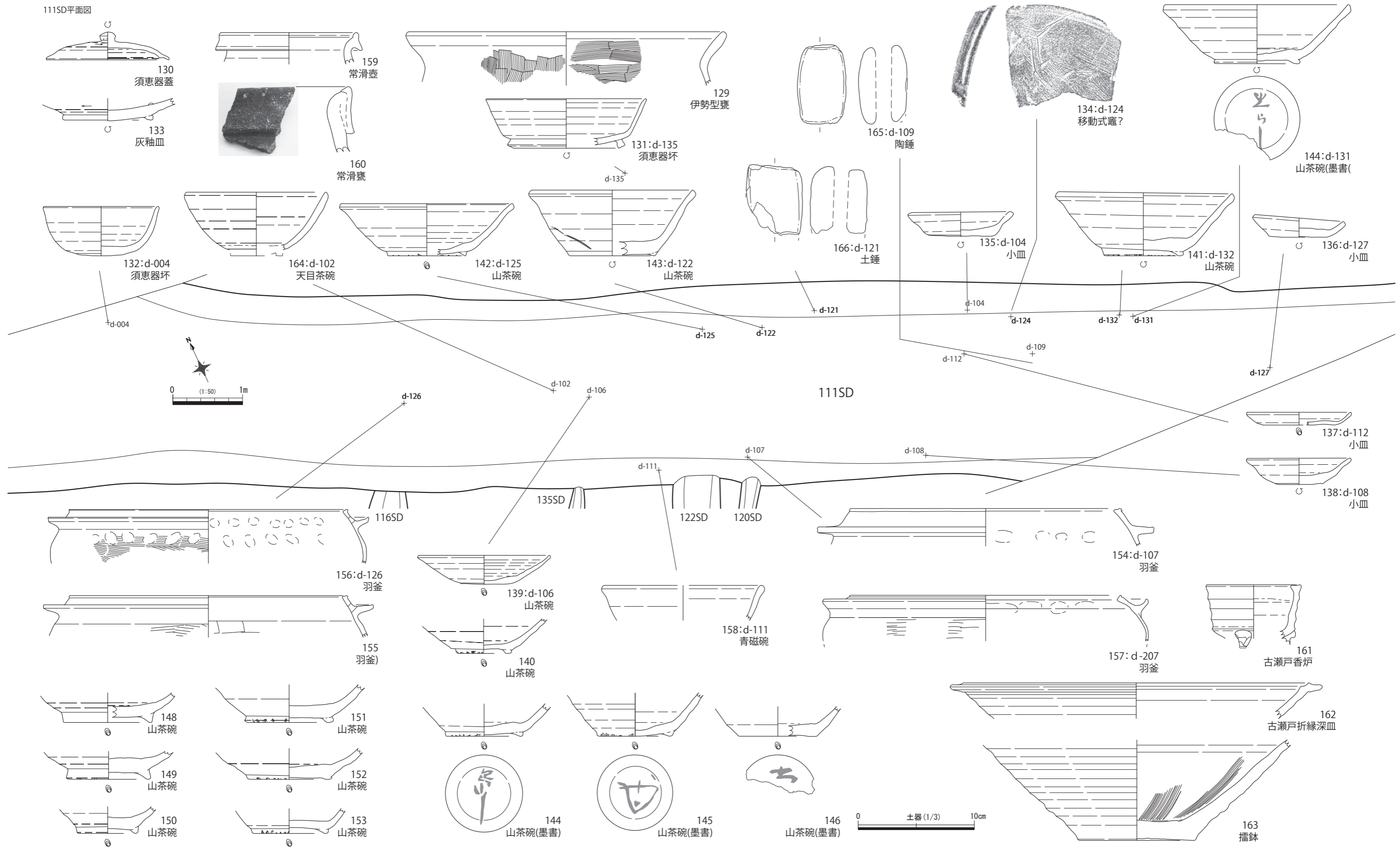
中世以降の遺物は、山茶碗の尾張 5 型式 (138・141・144・145)、同 6 型式 (135・142・147)、同 7 型式 (136・143)、同 8 型式 (146) があり、高台見込みに墨書がみられる例 (144・145・146・147) がある。東濃 11 段階の茶碗 (139) や明和 1 段階の茶碗 (140)、常滑 6a 段階の広口壺 (159) や 9 型式の甕口縁部 (160)、内彎形羽釜 (154・155・156)、古瀬戸後期 3 段階の香炉 (161) や大窯 4 段階の丸碗 (164)、搦鉢 (163) や青磁碗 (158) や陶錘 (165・166) など、13 世紀から 16



097SX 完掘 北東から



111SD 完掘 東から (ドローンより撮影)



第51図 111SD 平面図・断面図

世紀にわたるさまざまな遺物が出土した。日常雑器が中心であることを考えると、近くに居住域が存在していたことを示唆する内容である。

141SE は調査区中部北西角で検出された井戸である(第52図)。激しい湧水により水没した部分の埋土が常時泥濁化しており、底面までの完掘は不可能であったが、最深部は検出面から1.2mほどで砂層に到達すると考えられる。プランは直径5mほどの円形で、素掘りの井戸と思われるが、プラン西側は西部調査区にまでは及んでいない。埋土はおおむねレンズ状に堆積し、上層から順に灰黄褐色砂質シルト、褐色砂質シルト、黄灰色シルトと堆積し、底部で灰色中粒砂層(透水層)に至る。

遺物は茶碗類が多く、他にもさまざまなものがある。須恵器は7世紀代の167の坏身と168の高坏脚が調査区内では古い遺物に属する。169の有台坏はI-25号窯式期、170はいわゆる清郷甕で、11世紀代のもの。これらの遺物は井戸掘削以前に存在した遺物包含層から混入したものである可能性が高い。171は明和27号窯式期の碗で、高台見込みに「嘉」と推定される墨書がある。173は輪花を持つ小碗で尾張2型式のもの、174・175は尾張3型式の茶碗、180は常滑2型式の片口鉢、179は常滑または渥美産の陶製羽釜で、推定直径は35cm前後。181は表面がよく磨耗した陶鍾である。176は東濃系の山茶碗だが第2層東端からの出土であり、14世紀代の遺物であることを考えると111SD上層からの混在である可能性が高い。

150SD は調査区南西角で検出された溝で、調査区内の長さは4m、深さ30cm前後で、埋土中に焼土ブロックおよび大量の灰や炭化物を含む部分があり、灰黄褐色砂質シルトと褐色シルトの斑土である(第53図)。その他にも赤紫色を呈する顔料片を含む部分もあり、全体的に鉄分の沈着が著しい埋土であった。182は須恵器蓋でC-2号窯式期のもの。他に、ハケメ調整された土師器甕の破片が15点ほど出土している。主体を占める遺物から、8世紀前半の遺構と考えられる。

160SK は平面規模55cm×40cm、深さ約50cmを測る土坑で、C-2号窯式期の坏(215)の他に生焼けの坏身の小片2点が出土している。柱穴に似た形状であるが、周囲に対になるものが見あたらない(第53図)。

137SK は1.8m×1.2m、深さ約30cmの片側が段掘りされた土坑である。埋土からは183須恵器蓋の他に須恵器片が10点、灰釉陶器片2点、山茶碗片7点、土師器数片が出土している。また東濃系の小皿(184)も出土しているが、上層からの出土であり111SDに関連する遺物と推測される。137SKプランを切る168SPの底部から礎板(d-171)が出土した(第53図)。186SPからは須



168SP 遺物(d-171)出土状況 北東から



168SP 出土した礎板(d-171)

## 第2章 調査成果

恵器片1点や土師器小片8点が出土し、そのうち1点は鍋の把手部分であった。168SPは163SP・140SP・169SPの3基の遺構とともに一直線に並ぶものの、個々の規模や間隔に規則性は見出せなかったために、同時期の柵列や建物跡とは判断されなかった。

138SEは調査区南側で検出された井戸で、調査区内では全体の半分以上が確認された(第54図)。平面プランの最大幅は2.3mで、これが円形プランのほぼ直径に相当すると考えられる。激しい湧水のため深さは推定1.5mと思われる。埋土上半部はにぶい黄褐色や暗灰黄色の砂質シルトやシルトで、底部に3~5cmの厚さで固い鬼板層がみられた。また、断面図に示した第2層には大量の灰が含まれており、その上面では大量の焼土がみられた。138SE埋没後の窪地で長時間にわたって火が焚かれていたものと推定される。

鬼板層を挟んだ埋土下半部は黒褐色のシルト層で、掘削と同時に激しい湧水がみられた。シルト層の中程からほぼ「井」の字形の配置を保った状態で4本の木材(d-176~179)が出土した。そのうち1本は杭状で、それ以外の3本は両端が削がれると同時に中央が抉られた形状に加工されており、井戸枠四隅の杭材などに組み合わせて使われていた可能性が高い。抉られた部分の曲線から推測すると、推定直径が10~15cmの太さを持つ杭材が使われていた。この4本以外の井戸材は発見されず、再利用のために全て持ち去られたものと推測されるが、何故この4本が残されたかは不明である。

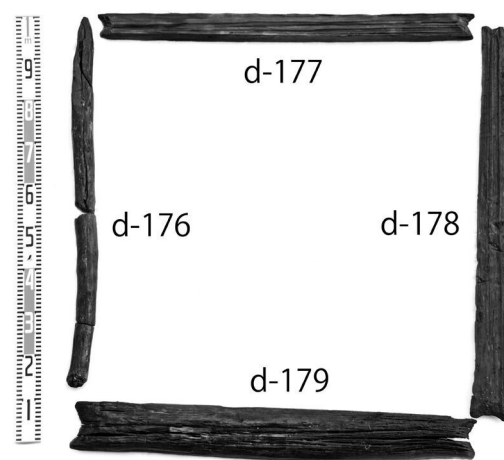
遺物は、9世紀代の須恵器から百大寺様式の碗(186)のほか、尾張4型式の茶碗底(187)も出土したが、遺構の時期を特定することは出来なかった。187は茶碗の見込みに墨が付着しており、転用碗と思われる。その他に須恵器・灰釉陶器・山茶碗やハケメを持った土師器甕など100点近くが出土したが、多くは砕かれたような細片であった。



138SE 完掘 北から



138SE 井戸材検出状況 北から

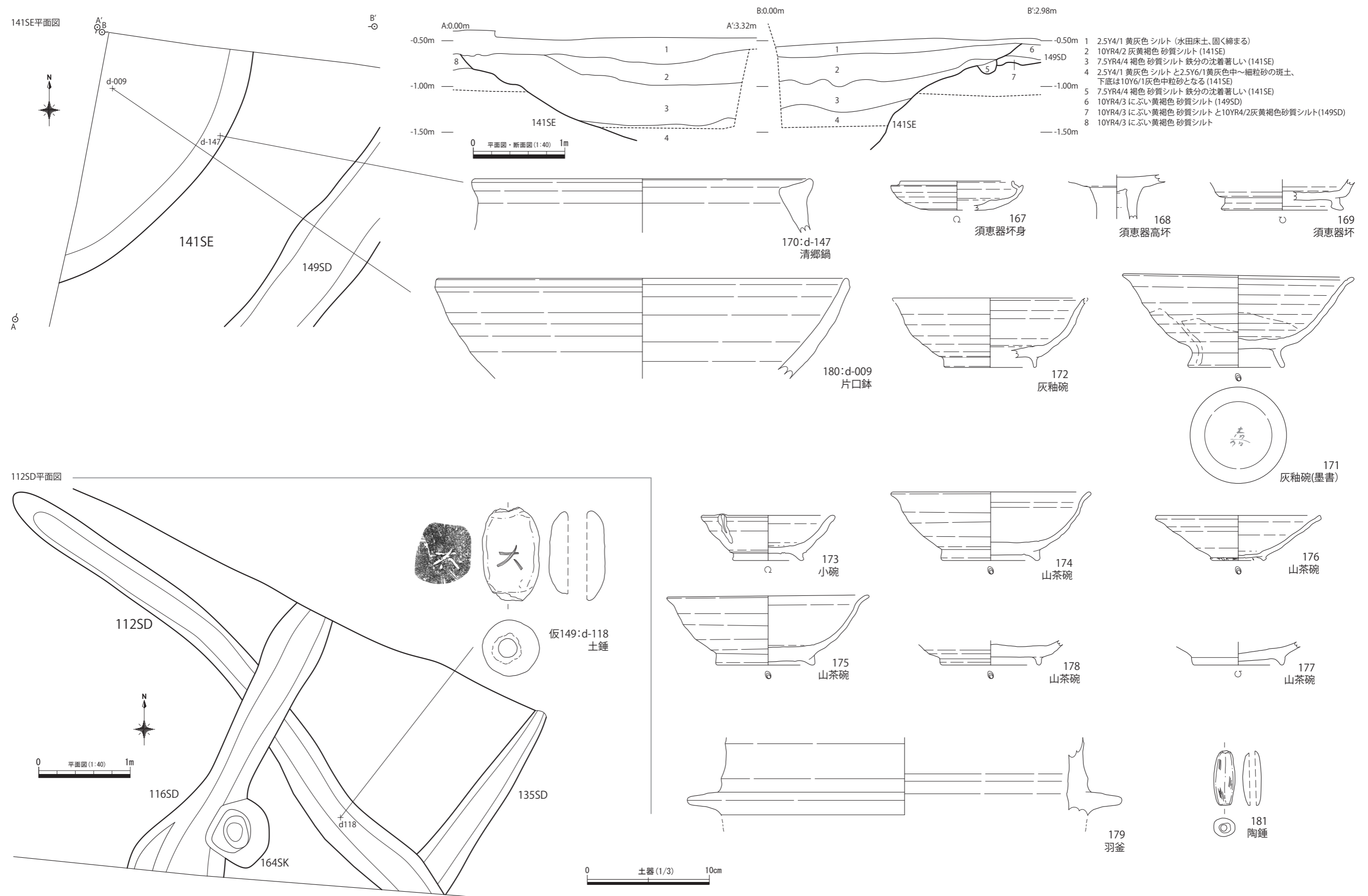


138SE 出土した井戸材

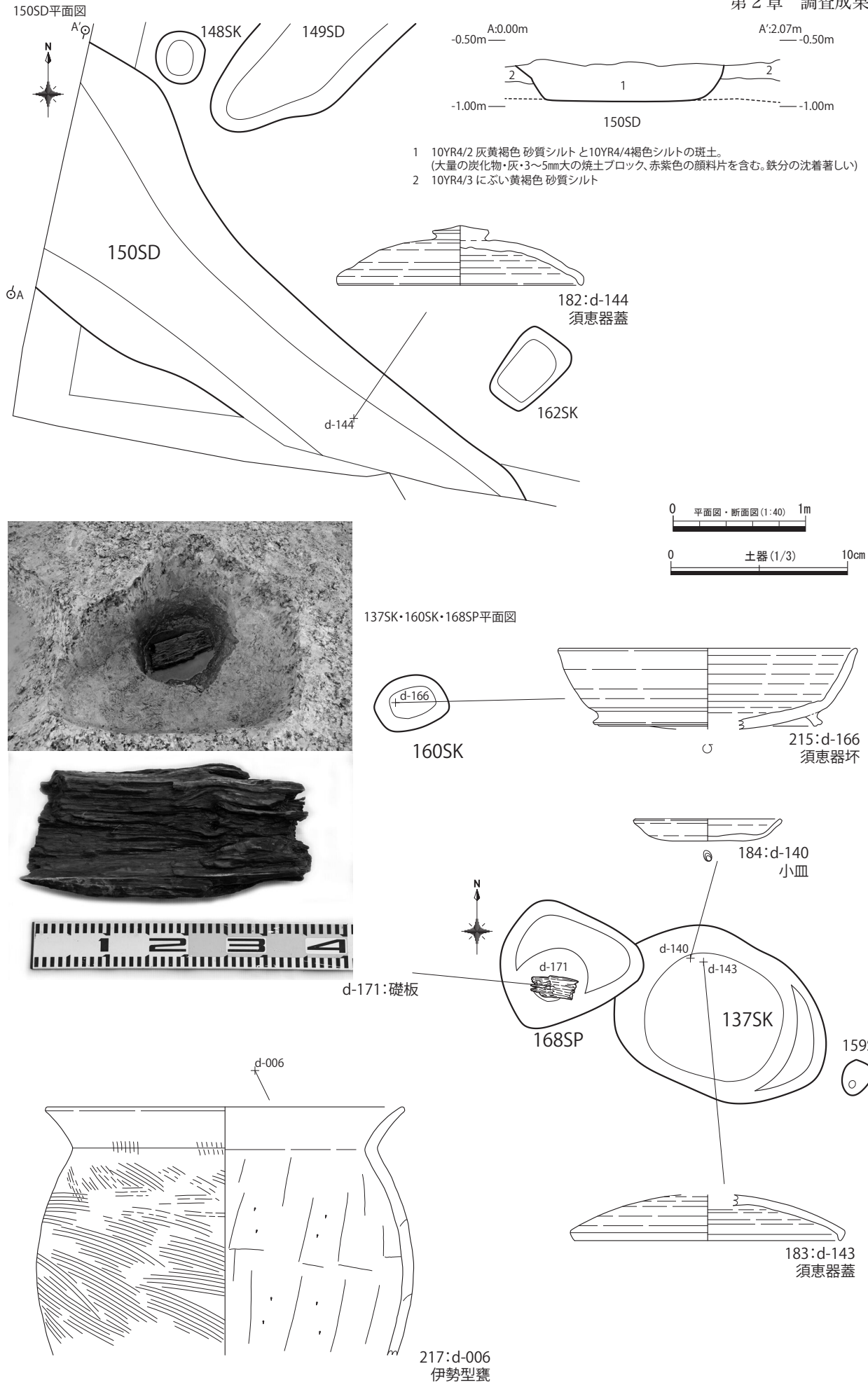


138SE 井戸枠拡大 (d-179・d-178)

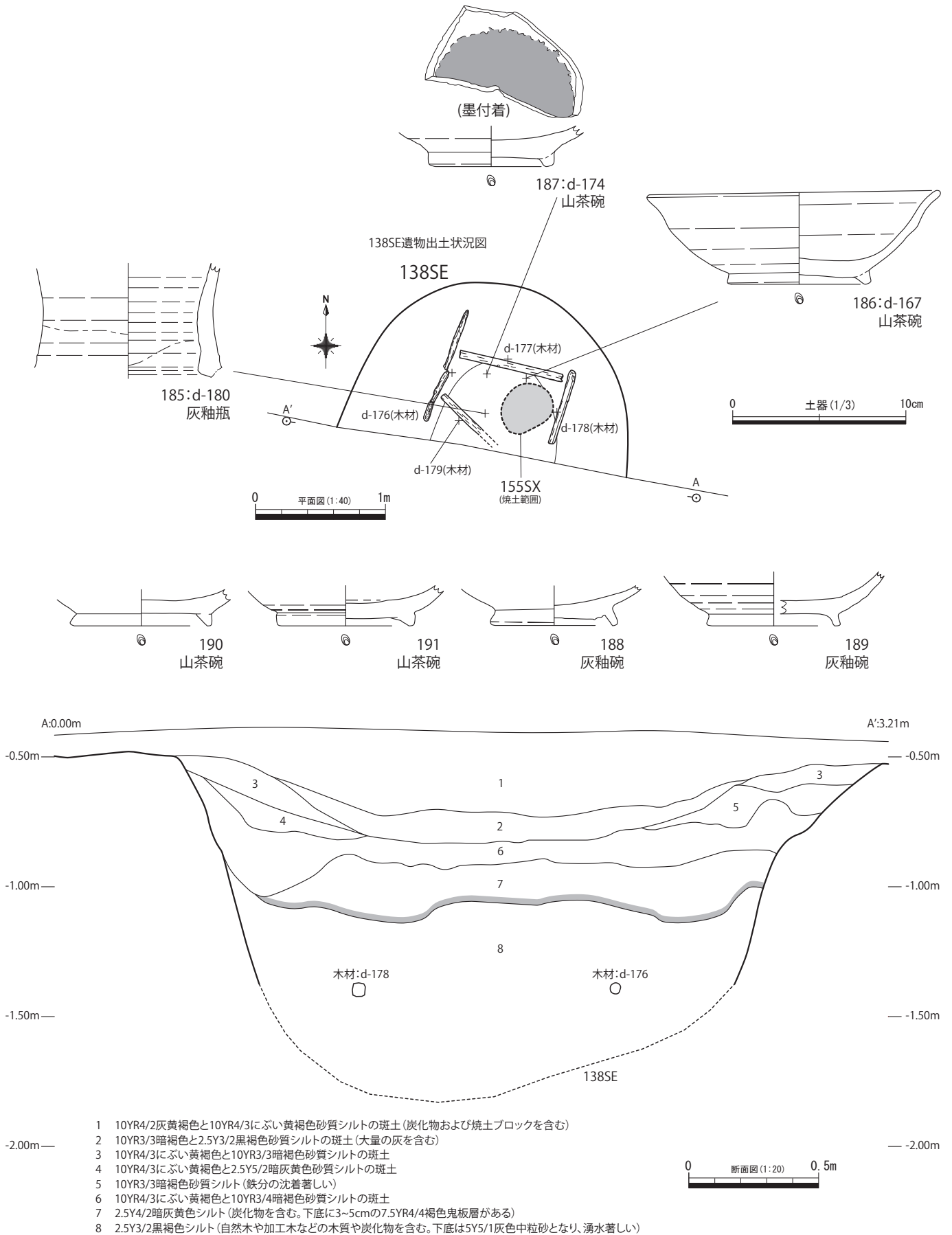




第52図 112SD・141SE 平面図・断面図

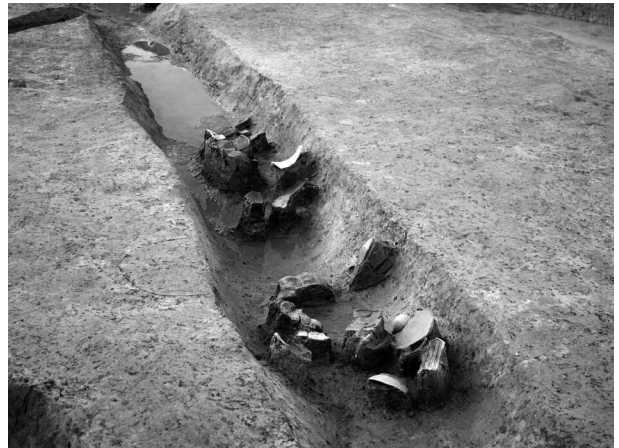


第53図 137SK・150SD・160SK・168SP 平面図・断面図



第54図 138SE 平面図・断面図

139SD は全長 11m、幅 65cm 前後で断面 U 字形の溝で、深さはおおむね 20cm であった (第 55 図)。W-40°-N 方向に延び、調査区東南端で収束する。埋土はにぶい黄褐色砂質シルトで、溝の底部には厚さ数 cm の鬼板層がみられた。遺構の東半部分には小規模な土器の集積がみられ、14 点の遺物を図示することが出来た (第 55 図)。須恵器の坏 (194・195・196・197・198・199・200・201) や蓋 (192・193)、ハケメ調整された土師器甕 (202・203) や須恵質陶錘 (205) のほか、知多式製塩土器の坏部と思われるもの (204) も出土した。日常雑器の廃棄による集積と思われるが、陶錘や製塩土器が含まれているのが特徴である。遺構の時期は主体を占める遺物からおおむね 8 世紀前半である。



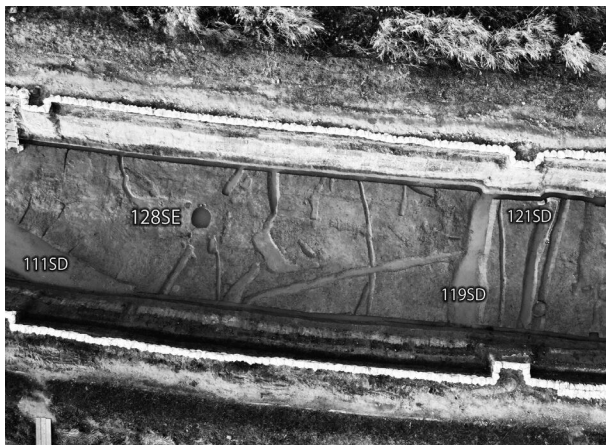
139SD 遺物出土状況 南から

なお 149SD は調査区北端で 139SD と直交し 139SD に切られるほぼ同規模の溝だが、埋土下半には炭化物が多く含まれていることや底面に鬼板層が存在しないこと、埋土中からは土師器や須恵器の破片が数点しか出土していないことなどから、両者の関連性は薄いと考えられる。方位は W-50°-N に延びており調査区内の全長は 5.5m あるが、南端部は収束しており 150SD とは交わらない。

なお 111SD の南岸にはいくつかの小さな溝が重複して存在するところがあるが、直行する溝はいずれも対岸では検出されていない。遺物は 112SD で須恵器や山茶碗の細片が 10 点ほど出土したのみで、詳細は明らかではない (第 52 図)。111SD 北岸部分は調査区北壁に向かって 10cm ほど地山が高まる (標高 -60cm) ことから、遺構検出時には既に削平されていたのかもしれない。

次に中部東半の遺構を紹介する。128SE は素掘りの井戸で直径 1m のプランであった (第 56 図)。埋土掘削と同時に激しい湧水があり、検出中はほとんど水没状態であり、満水になっても遺構検出面に水が溢れ出る状況であったが、深さ 80cm で砂層に達していることを確認した。遺物は 8 世紀後半の灰釉陶器の瓶底部 (206) もみられるが、尾張 6 型式の山茶碗 (207) や小皿 (208) もみられることから、13 世紀代の遺構と判断した。

127SD は調査区を縦断する溝で 128SE に切られる。幅 45cm で断面形状は U 字形で深さ 25cm、N-27°-E 方向に一直線に延びている。固く締まったシルト系の埋土から大型の土錘 (211)

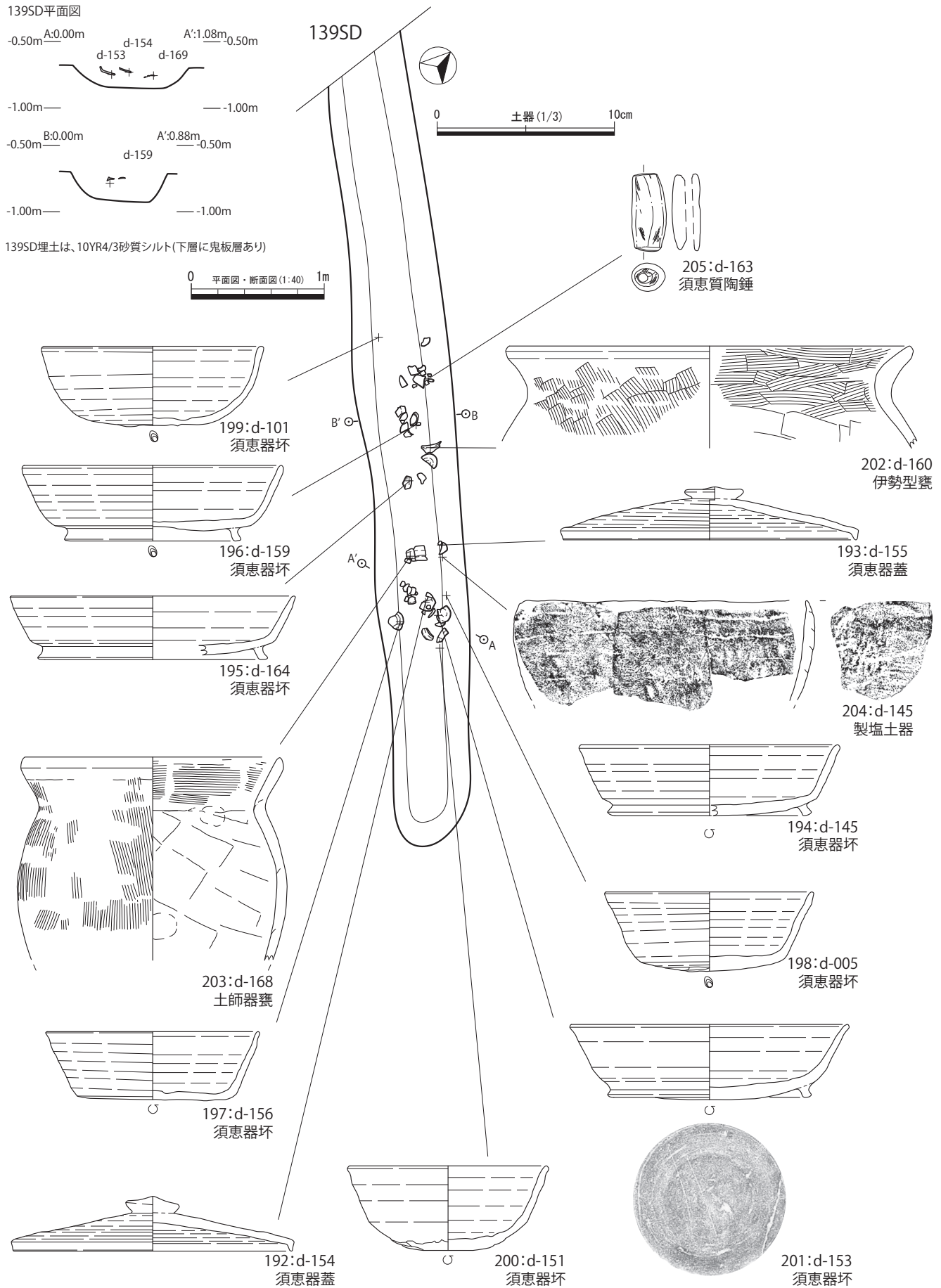


調査区中央部 (ドローンより撮影)

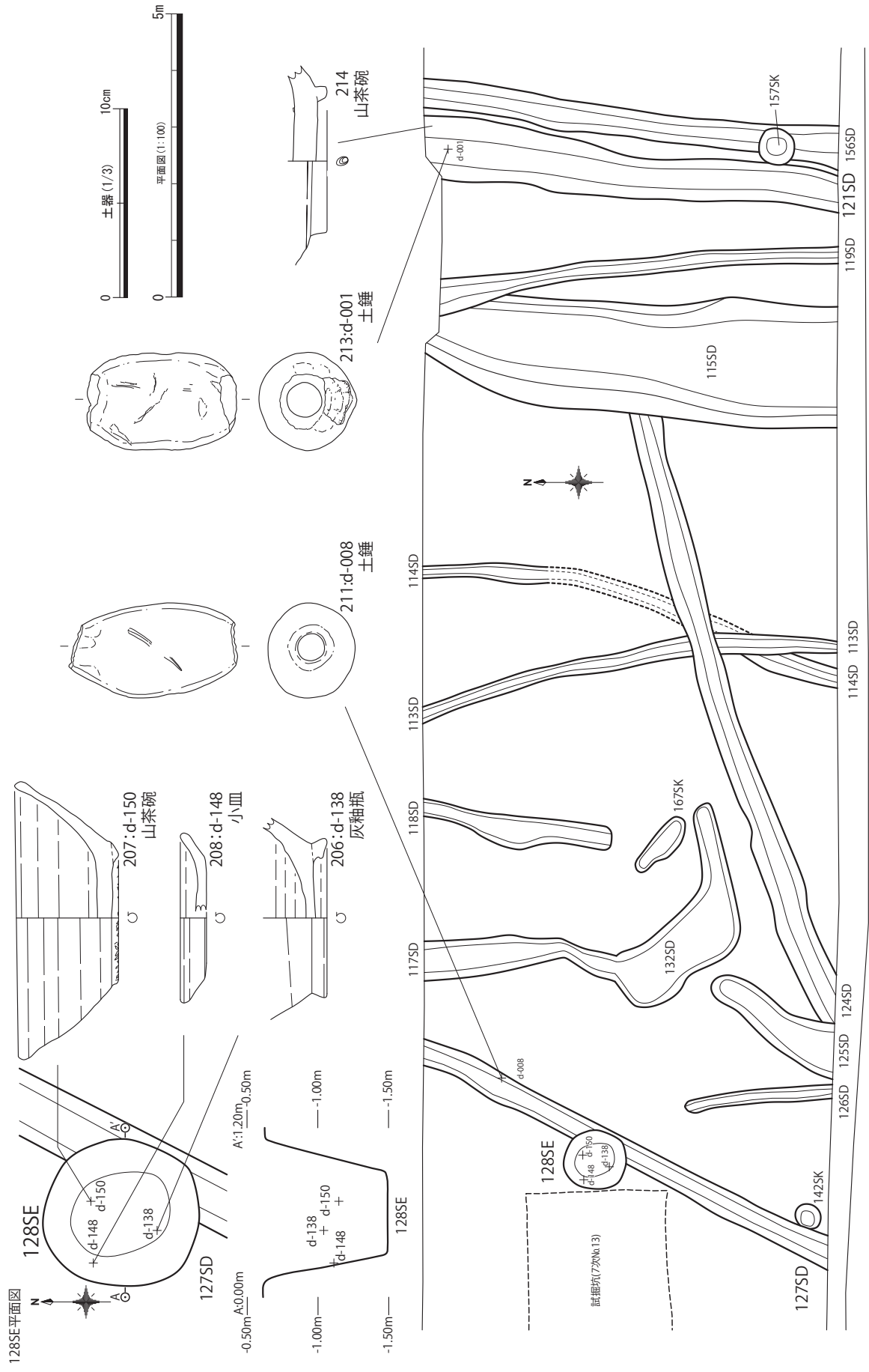


128SE 遺物出土状況 南から

第2章 調査成果



第55図 139SD平面図



第56図 121SD・127SD・128SE平面図

が出土している。長さ 8.8cm、重さ 179 g の素焼きで、表面は磨耗が著しい。同様の陶錘 (213) は 121SD から出土しており、こちらも表面に磨耗がみられる。

121SD は調査区を南北に縦断する溝で、東部を 156SD によって切られている。推定幅は北端で 1.1m、南端で 70cm、深さは約 25cm である。埋土は灰黄褐色砂質シルトの単層で、数点の須恵器のほか、7 点ほどの山茶碗が出土している。

156SD は 121SD とほぼ並行して南北に走る溝で、埋土は灰黄褐色シルトの単層である。遺物は山茶碗の小片が 10 点や中世陶器と思われるもの数点のほか、中国産青磁の小片が 1 点検出されている。

115SD は南北に縦走する溝で、南端の幅 2.2m、北端の幅約 1.3m、断面形状は逆台形の箱掘りで、深さはおおむね 30cm を測る。尾張 4 型式の片口鉢や尾張 5 型式の山茶碗のほか、少量の土師器小片が出土している。

119SD は 115SD に切り合うように縦走する細い溝であるが、埋土から数点近世陶器が出土していることから、新しい時期の溝と考えられる。

これら大小 4 本の溝が縦走する周辺は、111SD 周辺と比べて 10cm ほど地山の高まりがみられることから、水田の大畦畔または通路に伴う溝である可能性がある。

### 3 東部 (第 44 図・第 45 図)

最後に溝群東側の東部 (第 57 図) は、複数の大溝が交錯する区域で、遺構検出面の標高は -65cm である。この地域は地下水位が高いようで、調査区周囲の排水溝をどれほど掘り下げても、遺構検出面が常時水浸しのような状態であった。

153SD は W-19°-N 方向に走る溝で、幅は 1.5m ~ 2m、断面形状は逆台形の箱掘りと思われ、北セクションにおける深さは 65cm 以上ある。埋土は灰黄褐色系のシルトや中粒砂の斑土で、途中 152SD と攪乱によって断絶しているが、調査区を斜めに横断し、調査中も常に水を湛えていた。

遺物は数点の須恵器やハケメ調整された土師器甕の破片が 20 点ほど出土しているが、同時に常滑大甕破片、尾張 10 型式の山茶碗 (209) や大窯の挿鉢 (210)、内彎形羽釜なども出土しており厳密な時期を特定できないが、主体を占める遺物から 13 世紀以後に掘削されたと推定される。

152SD は調査区を南北に縦走する溝で、東側が攪乱によって滅失しているが、後述する 151SD と合流して北側に延びているものと推定される。断面形状逆台形の箱掘りの溝と思われ、残存部の幅 3.5m~4m、深さは 40cm 以上あった。埋土はオリーブ褐色砂質シルトとにぶい黄褐色砂の斑土で、掘削した部分は常時湧水していた。なお、位置や規模から中部の 111SD の延長もしくは対になる溝である可能性を検討してみたが、規模や出土遺物が異なることから、別々の遺構であると判断した。

遺物は須恵器の坏や皿などのほか、灰釉陶器若しくは山茶碗を考えられる破片数点、尾張 7 ~ 8 型式の山茶碗 5 点、常滑大甕破片や古瀬戸仏供 (216)、14 ~ 15 世紀の内彎形羽釜片が数点出土しており、時期を特定できないものの、主体を占める遺物から中世以後に掘削された可能性が高い。

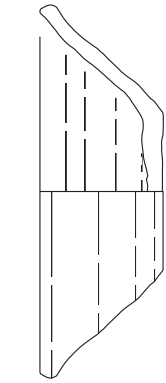
151SD は攪乱部分で 152SD に合流する可能性が高い溝で、153SD と同方向に位置する。幅は 3m~3.5m で深さは 25cm 前後、埋土は 152SD と同様である。遺物は中世遺物のみで、常滑大甕、尾張 5 型式以降の山茶碗や小皿破片 20 点のほか土師器小片が少量検出されている。中世以降に掘

152SD出土



216  
古瀬戸仏供

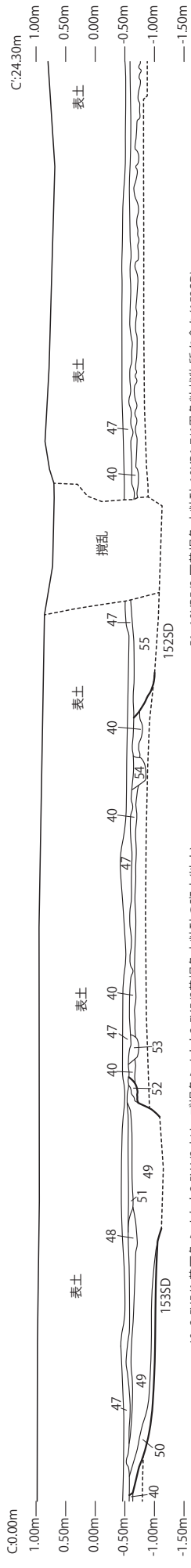
153SD出土



209  
山茶碗

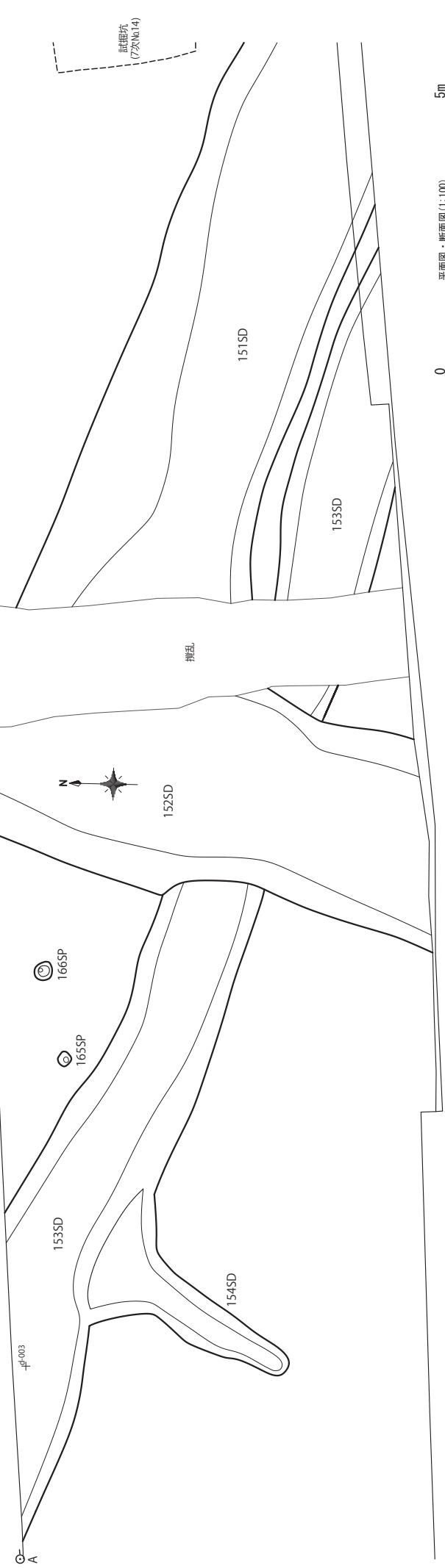


210  
大窯播鉢



- 40 2.5Y5/1 黄灰色 シルト と 2.5Y4/3 オリーブ褐色 中粒砂の斑土(地山)
- 47 2.5Y4/2 暗灰黄色 砂質シルト 固く締まる。水田床土
- 48 10YR5/2 灰黄褐色 中粒砂 と 10YR4/1 褐灰色 砂質シルトの斑土(153SD)
- 49 10YR5/2 灰黄褐色 砂質シルト と 10YR5/3 にぶい黄褐色 砂質シルト と 同色 中粒砂の斑土(153SD)
- 50 10YR5/3 にぶい黄褐色 中粒砂 と 10YR4/3 中粒砂の斑土(153SD)

- 51 10YR5/2 灰黄褐色 中粒砂 10YR1.7/1 黒色粒状物質を含む(153SD)
- 52 2.5Y6/3 にぶい黄色 シルト と 2.5Y4/2 暗灰黄色 砂質シルトの斑土
- 53 2.5Y5/2 暗灰黄色 シルト 10YR1.7/1 黒色粒状物質を多く含む
- 54 10YR4/2 灰黄褐色 砂質シルト
- 55 2.5Y4/3 オリーブ褐色 砂質シルト と 10YR5/3 にぶい黄褐色中〜細粒砂の斑土



第 57 図 東部平面図・断面図



削された溝と推定される。

158SDは調査区東端で検出された溝で、N-28°-E方向に位置する。自然流路のようなやや不規則なプランで、幅は1.3m-2m、断面形状は逆台形に近く深さは30cm前後である。出土遺物は無い。

161SEは直径1m弱の円形プランを持つ素掘りの井戸で、調査区北壁沿いに単独で検出された。湧水が激しく深さは約90cmまで確認した。遺物は出土していない。

## 第10節 3区のとまとめ

8世紀代を中心とした須恵器は、西部から中部にかけて広く分散して出土した。小規模な遺物の集積がみられた139SD周辺では、同時期の溝や柱穴なども検出されており、何らかの建物が存在したようであることや、138SE上面で検出された大量の焼土の存在から、西部ではこの時期の住居域があった可能性もある。

9世紀から10世紀代の様相は不明であるが、灰釉陶器などは西部から中部では分散して出土している。11世紀に入ると中部で井戸などの掘削が開始されたようであるが、活動は西部から中部西半に限られていたようである。

中世の遺物は山茶碗を中心に調査区のほぼ全域から出土するが、12世紀代の遺物は中部から西部に限って分布する。その範囲は直線化される前の福田川に伴う自然堤防(微高地)の分布範囲とほぼ合致する。東部はこの微高地の後背湿地として未開または一部が水田として利用されていたと考えられる。

111SDは直線的な形状や出土する遺物の状況から13世紀末頃に掘削されたと思われる溝で、15世紀に至るまで使い続けられてきた。中世から近世に至るさまざまな日常雑器が出土することから、やはりこの微高地上に小規模な集落が存在したものと考えられる。当地は『尾張国富田荘絵図』に現された条里域外ではあるが隣接地であり、「嶋山郷」の名が示すように、周辺にも旧河道によって形成された自然堤防上を中心とした大小規模の集落が点在していたことも考えられよう。

なお調査区東部に関しては、古代以前は未開の後背湿地であり、中世以降は大溝で区画された水田または耕作地としての利用が続けられてきたものと考えられる。



遺構一覧表(3区)

遺構番号	調査区	グリッド	遺構	法量			平面形	断面形	埋土	備考
				長軸	短軸	深さ				
001	西部	700885	SK	0.39	0.34	0.15	円	逆台形	10YR6/1 褐灰色砂質シルト	
002	西部	700885	SK	0.28	0.28	0.09	円	逆台形	10YR6/1 褐灰色砂質シルト	
003	西部	700885	SK	0.25	0.22	0.07	円	U字	10YR6/1 褐灰色砂質シルト	
004	西部	700890	SK	0.26	0.24	0.50	円	逆台形	10YR4/1 褐灰色砂質シルト	
005	西部	700885・705885	SK	0.39	(0.31)	0.20	円	逆台形	10YR5/1 褐灰色砂質シルト	
006	西部	700890	SK	0.79	0.41	0.08	楕円	逆台形	10YR6/1 褐灰色砂質シルト	
007	西部	700890	SK	0.49	0.42	0.13	楕円	逆台形	10YR6/1 褐灰色砂質シルト	
008	西部	700890	SK	0.57	0.57	0.22	円	逆台形	10YR5/1 褐灰色砂質シルト	
009	西部	700890	SK	0.43	(0.31)	0.18	楕円	逆台形	10YR6/1 褐灰色砂質シルト	
010	西部	700890	SK	0.60	0.57	0.05	円	逆台形	10YR6/1 褐灰色砂質シルト	
011	西部	700890	SK	0.40	0.35	0.15	楕円	逆台形	10YR5/1 褐灰色砂質シルト	
012	西部	700890	SK	0.81	0.51	0.10	楕円	逆台形	10YR6/1 褐灰色砂質シルト	
013	西部	700890・705890	SD	(4.13)	0.49	0.10	-	皿	10YR6/1 褐灰色砂質シルト	
014	西部	700890	SK	0.36	0.32	0.10	円	逆台形	10YR6/1 褐灰色砂質シルト	
015	西部	705890	SK	0.25	0.20	0.26	円	逆台形	10YR6/1 褐灰色砂質シルト	
016	西部	705890	SK	(0.81)	0.76	0.10	円	逆台形	10YR6/1 褐灰色砂質シルト	
017	西部	700890・700895・705890・705895	SD	(1.53)	0.42	0.14	-	皿	10YR6/1 褐灰色砂質シルト	
018	西部	700895・705895	SK	0.56	(0.17)	0.06	円	逆台形	10YR6/1 褐灰色砂質シルト	
019	西部	700890・700895	SK	0.41	0.39	0.09	円	逆台形	10YR6/1 褐灰色砂質シルト	
020	西部	695890・695895・700890・700895	SK	3.84	(2.92)	0.26	方	皿	10YR5/1 褐灰色シルトと 10YR7/8 黄橙色シルト (地山ブロック) を多く含む斑土	須恵器 (8C 前)
021	西部	695895・700895	SK	(2.18)	(1.02)	0.21	方	逆台形	10YR6/1 褐灰色シルトと 10YR7/8 黄橙色シルト (地山ブロック) を多く含む斑土	
022	西部	695895・695900	SK	3.89	(2.23)	0.19	隅丸方	隅丸方	10YR5/1 褐灰色シルトと 10YR7/8 黄橙色シルト (地山ブロック) を多く含む斑土	
023	西部	700895	SK	0.40	0.35	0.07	楕円	U字	10YR6/1 褐灰色砂質シルト	
024	西部	695895・700895	SK	(1.60)	(0.88)	0.08	不整	逆台形	10YR6/1 褐灰色砂質シルト	
025	西部	700895・700900	SK	(4.14)	1.49	0.09	楕円	逆台形	10YR6/1 褐灰色砂質シルト	
026	西部	700895	SK	0.43	0.35	0.11	楕円	逆台形	10YR6/1 褐灰色砂質シルト	
027	西部	700895	SK	0.33	0.27	0.10	楕円	逆台形	10YR6/1 褐灰色砂質シルト	
028	西部	700895	SK	0.66	0.52	0.18	楕円	逆台形	10YR6/1 褐灰色砂質シルト	
029	西部	700895	SK	0.32	0.32	0.17	楕円	逆台形	10YR6/1 褐灰色砂質シルト	
030	西部	705895	SK	0.60	0.52	0.11	楕円	U字	10YR6/1 褐灰色砂質シルト	
031	西部	700895・705895	SK	0.37	(0.22)	0.14	楕円	逆台形	10YR6/1 褐灰色砂質シルト	
032	西部	700895・700900	SK	0.67	0.56	0.17	楕円	逆台形	10YR6/1 褐灰色砂質シルト	
033	西部	700895・700900・705900	SD	(2.88)	0.98	0.22	-	逆台形	10YR6/1 褐灰色砂質シルト	
034	西部	700900	SK	0.27	0.27	0.18	円	逆台形	10YR6/1 褐灰色砂質シルト	
035	西部	700900	SK	0.84	0.30	0.10	楕円	逆台形	10YR6/1 褐灰色砂質シルト	
036	西部	700900	SK	0.72	0.63	0.07	楕円	逆台形	10YR6/1 褐灰色砂質シルト	
037	西部	700900	SK	0.39	0.37	0.05	円	逆台形	10YR6/1 褐灰色砂質シルト	
038	西部	695900・700900	SK	0.54	0.49	0.08	楕円	逆台形	10YR6/1 褐灰色砂質シルト	
039	西部	695900	SK	0.41	0.30	0.12	楕円	逆台形	10YR6/1 褐灰色砂質シルト	
040	西部	695900	SK	0.32	0.24	0.06	楕円	逆台形	10YR6/1 褐灰色砂質シルト	
041	西部	700900	SK	0.46	0.37	0.09	円	逆台形	10YR6/1 褐灰色砂質シルト	
042	西部	700900	SK	0.80	0.57	0.17	楕円	逆台形	10YR6/1 褐灰色砂質シルト	
043	西部	700900・700905	SK	(1.85)	1.16	0.20	楕円	逆台形	10YR5/1 褐灰色砂質シルト	
044	西部	695900・700900	SK	0.57	0.47	0.05	楕円	逆台形	10YR6/1 褐灰色砂質シルト	
045	西部	700900	SK	(0.82)	0.64	0.15	隅丸方	U字	10YR5/1 褐灰色砂質シルト	
046	西部	695900・700900・700905・700910	SD	(12.45)	1.35	0.21	-	皿	7.5YR5/2 灰褐色砂質シルト (炭化物混入部あり)	
047	西部	695905・700905	SK	(3.84)	(3.38)	0.19	円	逆台形	10YR5/1 褐灰色砂質シルト	
048	西部	695905	SK	0.45	0.45	0.10	円	逆台形	10YR5/1 褐灰色砂質シルト	
049	西部	695905	SK	0.42	0.37	0.10	円	逆台形	10YR5/1 褐灰色砂質シルト	
050	西部	695905	SK	0.54	0.47	0.15	円	逆台形	10YR5/1 褐灰色砂質シルト	
051	西部	695905	SK	0.34	0.24	0.06	楕円	逆台形	10YR6/1 褐灰色砂質シルト	
052	西部	695905	SK	0.33	0.21	0.07	楕円	逆台形	10YR6/1 褐灰色砂質シルト	
053	西部	700910	SK	0.62	0.49	0.08	楕円	逆台形	10YR6/1 褐灰色砂質シルト	
054	西部	700905・700910	SK	0.83	0.66	0.08	楕円	逆台形	10YR6/1 褐灰色砂質シルト	
055	西部	700910	SK	(1.62)	1.08	0.14	楕円	逆台形	10YR5/1 褐灰色砂質シルト (炭化物を少量含む)	
056	西部	700910・700915	SK	1.90	0.89	0.20	楕円	逆台形	10YR2/1 黒色砂質シルト (炭化物を多量に含む)	
057	西部	695910	SK	0.43	0.35	0.05	楕円	逆台形	10YR5/1 褐灰色砂質シルト	
058	西部	690910	SK	0.53	0.50	0.12	不整円	U字	10YR5/1 褐灰色砂質シルト	

第6表 遺構一覧表(3区)

第2章 調査成果

遺構番号	調査区	グリッド	遺構	法量			平面形	断面形	埋土	備考
				長軸	短軸	深さ				
059	西部	690910	SK	0.33	(0.23)	0.06	円	逆台形	10YR6/1 褐灰色砂質シルト	
060	西部	690910	SK	0.34	0.32	0.08	円	逆台形	10YR6/1 褐灰色砂質シルト	
061	西部	690910	SK	0.25	0.18	0.13	円	逆台形	10YR6/1 褐灰色砂質シルト	
062	西部	695910・700910	SK	0.55	0.50	0.08	不整	逆台形	10YR5/1 褐灰色砂質シルト	
063	西部	700910	SK	0.29	0.27	0.06	円	逆台形	10YR5/1 褐灰色砂質シルト	
064	西部	700910	SK	0.36	0.31	0.13	円	逆台形	10YR5/1 褐灰色砂質シルト	
065	西部	695910・700910	SK	1.51	1.19	0.09	不整	逆台形	10YR5/1 褐灰色砂質シルト	
066	西部	695910・695915	SK	0.33	0.32	0.09	円	逆台形	10YR5/1 褐灰色砂質シルト	
067	西部	700915	SD	2.41	0.31	0.06	-	皿	10YR5/1 褐灰色砂質シルト	095SD・085SKと同一か
068	西部	700915	SK	(1.00)	(0.32)	0.09	長方	U字	10YR5/1 褐灰色砂質シルト	
069	西部	700915	SK	(0.41)	(0.26)	0.20	円	逆台形	10YR5/1 褐灰色砂質シルト	
070	西部	700915	SK	0.62	(0.51)	0.14	円	逆台形	10YR5/1 褐灰色砂質シルト	
071	西部	700915	SK	0.67	0.56	0.16	不整円	逆台形	10YR5/1 褐灰色砂質シルト	
072	西部	700915	SK	0.34	0.29	0.19	円	逆台形	10YR5/1 褐灰色砂質シルト	
073	西部	700915	SK	0.71	0.55	0.09	楕円	逆台形	10YR5/1 褐灰色砂質シルト	
074	西部	700920	SK	0.88	0.49	0.14	楕円	U字	10YR5/1 褐灰色砂質シルト	
075	西部	695915・700915	SK	0.88	0.44	0.12	不整円	U字	10YR5/1 褐灰色砂質シルト	
076	西部	695915	SK	0.33	0.25	0.04	楕円	逆台形	10YR5/1 褐灰色砂質シルト	
077	西部	695915	SK	0.34	0.32	0.09	円	逆台形	10YR5/1 褐灰色砂質シルト	
078	西部	695915	SK	0.34	0.34	0.10	円	逆台形	10YR5/1 褐灰色砂質シルト	
079	西部	695915	SK	0.31	0.29	0.07	円	逆台形	10YR5/1 褐灰色砂質シルト	
080	西部	695915	SK	0.30	0.29	0.08	円	逆台形	10YR5/1 褐灰色砂質シルト	
081	西部	695915	SK	0.41	0.26	0.05	円	逆台形	10YR5/1 褐灰色砂質シルト	
082	西部	695910	SK	1.13	1.12	0.13	不整	逆台形	10YR5/1 褐灰色砂質シルト	
083	西部	695910	SK	0.65	0.55	0.06	不整	逆台形	10YR5/1 褐灰色砂質シルト	
084	西部	695910	SK	0.68	0.64	0.05	不整	逆台形	10YR5/1 褐灰色砂質シルト	
085	西部	695915	SK	0.34	0.15	0.04	楕円	皿	10YR5/1 褐灰色砂質シルト	067SD・095SDと同一か
086	西部	695915	SK	0.29	0.29	0.08	円	逆台形	10YR5/1 褐灰色砂質シルト	
087	西部	690915	SK	0.46	(0.37)	0.08	円	逆台形	10YR5/1 褐灰色砂質シルト	
088	西部	690915	SK	0.42	0.32	0.08	楕円	U字	10YR5/1 褐灰色砂質シルト	
089	西部	690915	SK	0.70	0.41	0.10	楕円	逆台形	10YR5/1 褐灰色砂質シルト	
090	西部	690915	SK	0.48	0.44	0.10	円	逆台形	10YR5/1 褐灰色砂質シルト	
091	西部	690915	SK	0.46	0.40	0.09	円	逆台形	10YR5/1 褐灰色砂質シルト	
092	西部	695915	SK	0.39	0.25	0.08	楕円	逆台形	10YR5/1 褐灰色砂質シルト	
093	西部	695920	SK	(0.29)	(0.23)	0.07	円	逆台形	10YR5/1 褐灰色砂質シルト	
094	西部	695920	SK	0.40	0.30	0.04	楕円	U字	10YR5/1 褐灰色砂質シルト	
095	西部	690915・690920・695915・695920	SD	(3.70)	0.45	0.09	-	皿	10YR5/1 褐灰色砂質シルト	067SD・085SKと同一か
096	西部	695920	SD	(1.00)	0.23	0.08	-	皿	7.5YR5/1 褐灰色砂質シルト	
097	西部	690915・695915	SX	7.20	0.51	0.11	-	皿	10YR5/1 褐灰色砂質シルト	
098			欠番							
099			欠番							
100			欠番							
101			欠番							
102			欠番							
103			欠番							
104			欠番							
105			欠番							
106			欠番							
107			欠番							
108			欠番							
109			欠番							
110			欠番							
111	中部	700860・700865・700870・705850・705855・705890・705895・705870・710845・710850・710855・710860	SD	(24.78)	2.88	0.48	-	逆台形	大セクション参照	上層は近世遺物多く出土する、下半は中世の掘削による人工水路
112	中部	705860・705865・710860	SD	(6.26)	0.58	0.22	-	U字	10YR4/3 にぶい黄褐色砂質シルト	
113	中部	705835・710835	SD	(7.29)	0.32	0.13	-	U字	10YR4/3 にぶい黄褐色砂質シルトと10YR4/2 灰黄褐色砂質シルトの斑土	
114	中部	705830・710830・710835	SD	(3.05)	0.41	0.13	-	皿	10YR4/3 にぶい黄褐色砂質シルトと10YR4/2 灰黄褐色砂質シルトの斑土	
115	中部	705825・705830・710825・710830	SD	(6.97)	2.24	0.30	-	U字	大セクション参照	中世の排水溝
116	中部	705860・710860・710865	SD	(3.27)	1.04	0.13	-	U字	10YR4/3 にぶい黄褐色砂質シルト(鉄分の沈着多い)	

第6表 遺構一覧表(3区)

第2章 調査成果

遺構番号	調査区	グリッド	遺構	法量			平面形	断面形	埋土	備考
				長軸	短軸	深さ				
117	中部	705840	SD	(3.31)	0.64	0.18	-	皿	10YR4/3 にふい黄褐色砂質シルトと 7.5YR4/4 褐色砂質シルトの斑土	132SD の続き
118	中部	705835	SD	(3.18)	0.64	0.09	-	皿	10YR4/3 にふい黄褐色砂質シルト (鉄分の沈着著しい)	
119	中部	705825・710825	SD	(6.90)	0.31	0.15	-	U字	大セクション参照	
120	中部	710855	SD	(1.52)	0.24	0.16	-	U字	10YR4/3 にふい黄褐色砂質シルト (鉄分の沈着著しい)	
121	中部	705825・710825	SD	(7.18)	1.00	0.34	-	U字	大セクション参照	
122	中部	710855・710860	SD	(1.71)	0.68	0.19	-	皿	10YR4/3 にふい黄褐色砂質シルト (鉄分の沈着著しい)	
123	東部	705815・705820・710815・710820	SD	(5.49)	1.39	0.11	不整	皿	大セクション参照	
124	中部	705830・710830・710835・710840	SD	(11.10)	0.64	0.14	-	U字	10YR4/3 にふい黄褐色砂質シルト	
125	中部	710840	SD	(2.45)	0.89	0.10	不整	皿	10YR4/3 にふい黄褐色砂質シルトと 10YR4/4 褐色砂質シルトの斑土	
126	中部	710840	SD	(2.42)	0.28	0.09	-	U字	10YR4/3 にふい黄褐色砂質シルトと 10YR4/4 褐色砂質シルトの斑土	
127	中部	705840・710840・710845	SD	(7.77)	0.50	0.22	-	U字	10YR4/3 にふい黄褐色砂質シルトと 10YR4/4 褐色砂質シルトの斑土	
128	中部	705840	SE	1.10	1.05	0.89	円	箱	10YR4/2 灰黄褐色砂質シルト 下半は 10YR5/2 灰褐色シルトに漸移する、鉄分の沈着著しい	古代末
129			欠番							
130			欠番							
131			欠番							
132	中部	705840・710835・710840	SD	3.98	1.17	0.10	不整	皿	10YR4/3 にふい黄褐色砂質シルト (鉄分の沈着著しい)	117SD に続く
133			欠番							
134			欠番							
135	中部	705860・710860	SD	(2.14)	0.49	0.08	-	皿	10YR4/3 にふい黄褐色シルト質砂	
136			欠番							
137	中部	705865・705870・710865・710870	SK	(1.67)	1.22	0.26	楕円	皿	10YR4/3 にふい黄褐色砂質シルト (下底に 10YR5/3 にふい黄褐色中～細粒砂溜まる)	
138	中部	705875・710875	SE	(2.25)	(1.36)	1.15	円	箱	断面図参照	井戸枠部分残存、古代後半の井戸と推測 (d-176～179)
139	中部	700870・700875・700865・705870・710865	SD	(10.57)	0.81	0.30	-	U字	10YR4/3 にふい黄褐色砂質シルト (下底に鬼板層有り)	南東端に須恵器・土師器の集積有り (古代)
140	中部	705875	SP	0.59	0.54	0.39	円	U字	2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルトと 10YR4/3 にふい黄褐色砂質シルトの斑土	
141	中部	700875・700880・705880	SE	(2.36)	(1.39)	0.70	不明	U字	大セクション参照	古代末期の井戸跡か
142	中部	710845	SK	0.50	(0.47)	0.04	円	U字	10YR4/3 にふい黄褐色砂質シルト	
143	東部	710820	SP	0.29	(0.17)	0.05	円	U字	10YR4/3 にふい黄褐色砂質シルト	
144	東部	710820	SK	(0.40)	(0.20)	0.15	楕円	皿	10YR4/3 にふい黄褐色砂質シルト	
145	東部	710820	SD	(1.69)	0.58	0.10	不整	皿	10YR4/3 にふい黄褐色砂質シルト	
146	東部	710820	SD	(0.55)	0.35	0.11	-	皿	10YR4/3 にふい黄褐色砂質シルト	
147	東部	710815	SK	(0.76)	(0.49)	0.32	(楕円)	皿	10YR4/3 にふい黄褐色砂質シルト	
148	中部	705880	SK	0.41	0.39	0.13	円	U字	10YR4/2 灰黄褐色砂質シルト	
149	中部	700875・705875・705880	SD	(5.69)	0.83	0.25	-	逆台形	10YR4/2 灰黄褐色砂質シルト (下底に粗粒砂層有り)	
150	中部	705875・705880	SD	(3.57)	1.36	0.23	-	U字	10YR4/2 灰黄褐色砂質シルトと 10YR4/4 褐色シルトの斑土 大量の炭化物・灰・3～5mm 大の焼土ブロックを含む、底部に鉄分の沈着著しい	
151	東部	705785・705790・705795・710785・710790・710795	SD	(11.48)	3.81	0.52	-	逆台形	大セクション参照	
152	東部	705800・710800・710805	SD	(8.11)	(4.00)	0.75	-	逆台形	大セクション参照	151SD に続くか
153	東部	705790・705795・705800・705805・705810・705715・710790・710795・710800	SD	(19.29)	2.09	0.45	-	逆台形	大セクション参照	
154	東部	705810・710810	SD	(3.97)	0.88	0.17	不整	皿	10YR4/2 灰黄褐色砂質シルト	
155	中部	705875・710875	SX	0.41	0.35	0.05	円	-	スサ交じりの焼土塊 (分布範囲)	
156	中部	705825・710825	SD	(7.21)	0.57	0.22	-	U字	大セクション参照	
157	中部	710825	SK	0.66	0.64	0.15	円	U字	10YR4/3 にふい黄褐色シルト質砂	
158	東部	700775・700780・705775・705780・710780	SD	(10.08)	2.06	0.33	-	逆台形	10YR4/3 にふい黄褐色シルト質砂	
159	中部	710865	SP	0.28	0.21	0.30	円	U字	10YR4/3 にふい黄褐色砂質シルト	
160	中部	705870	SK	0.56	0.41	0.18	楕円	U字	10YR4/2 灰黄褐色砂質シルトと 7.5YR4/6 褐色砂質シルトの斑土 (鉄分の沈着多い)	
161	東部	700790	SE	0.96	0.92	0.95	円	U字	10YR4/2 灰黄褐色砂質シルト 下半に 10YR5/2 灰黄褐色シルト質砂混ざる	
162	中部	705875	SK	0.62	0.39	0.51	長方	箱	10YR4/2 灰黄褐色砂質シルトと 7.5YR4/6 褐色砂質シルトの斑土 細かい炭化物を含む (鉄分の沈着著しい)	
163	中部	705870	SP	0.83	0.73	0.52	円	U字	10YR4/2 灰黄褐色砂質シルトと 7.5YR4/6 褐色砂質シルトの斑土 (底面に鉄分の沈着著しい)	
164	中部	710860	SK	0.76	(0.67)	0.35	不整	U字	10YR4/2 灰黄褐色砂質シルトと 10YR4/3 にふい黄褐色砂質シルトの斑土	
165	東部	705805	SP	0.27	0.24	0.09	円	U字	10YR4/1 褐灰色砂質シルト	
166	東部	705805	SP	0.36	0.32	0.34	円	U字	10YR4/1 褐灰色砂質シルト	
167	中部	705835・710835	SK	1.21	0.43	0.07	不整	皿	10YR5/1 褐灰色砂質シルト	
168	中部	705870・710870	SP	1.10	0.90	0.92	不整	箱	10YR4/2 灰黄褐色砂質シルトと 10YR4/4 褐色砂質シルトと 7.5YR4/6 褐色砂質シルトの斑土	礎板 (d-171) 入り、古代 163SP・140SP・169SP とプランを成す
169	中部	705875	SP	0.38	0.36	0.37	円	U字	10YR4/1 褐灰色砂質シルト	

第6表 遺構一覧表 (3区)

## 第3章 自然化学分析

### 第1節 千音寺遺跡の放射性炭素年代測定

パレオ・ラボ AMS 年代測定グループ

伊藤 茂・加藤和浩・廣田正史・佐藤正教

山形秀樹・Zaur Lomtadidze・小林克也

#### 1 はじめに

愛知県名古屋市の千音寺遺跡で出土した試料について、加速器質量分析法 (AMS 法) による放射性炭素年代測定を行った。

#### 2 試料と方法

試料は、012SP の木柱 (試料 No.1 : PLD-47911)、063SE の杭 (試料 No.2 : PLD-47912)、030SE の曲物綴紐 (試料 No.3 : PLD-47913)、040SE の曲物綴紐 (試料 No.4 : PLD-47914) の計4点である。いずれの試料も、最終形成年輪が残っていた。発掘調査所見では、いずれも古代の遺構と考えられている。測定試料の情報、調製データは第7表のとおりである。

試料は調製後、加速器質量分析計 (パレオ・ラボ、コンパクト AMS : NEC 製 1.5SDH) を用いて測定した。得られた  $^{14}\text{C}$  濃度について同位体分別効果の補正を行った後、 $^{14}\text{C}$  年代、暦年代を算出した。

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-47911	試料 No.1 調査区 : 1 区 遺構 : 012SP d-088	種類 : 生材 試料の性状 : 最終形成年輪 器種 : 木柱 状態 : dry	超音波洗浄 有機溶剤処理 : アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸 : 1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム : 1.0 mol/L, 塩酸 : 1.2 mol/L)
PLD-47912	試料 No.2 調査区 : 1 区 遺構 : 063SE 位置 : 南西隅 木 12(杭 3)	種類 : 生材 試料の性状 : 最終形成年輪 器種 : 杭 状態 : dry	超音波洗浄 有機溶剤処理 : アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸 : 1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム : 1.0 mol/L, 塩酸 : 1.2 mol/L)
PLD-47913	試料 No.3 調査区 : 1 区 遺構 : 030SE	種類 : 生材 試料の性状 : 最終形成年輪 器種 : 曲物綴紐 状態 : dry	超音波洗浄 有機溶剤処理 : アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸 : 1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム : 1.0 mol/L, 塩酸 : 1.2 mol/L)
PLD-47914	試料 No.4 調査区 : 1 区 遺構 : 040SE	種類 : 生材 試料の性状 : 最終形成年輪 器種 : 曲物綴紐 状態 : dry	超音波洗浄 有機溶剤処理 : アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸 : 1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム : 1.0 mol/L, 塩酸 : 1.2 mol/L)

第7表 測定試料および処理

#### 3 結果

第8表に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比 ( $\delta^{13}\text{C}$ )、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した  $^{14}\text{C}$  年代を、第58図にマルチプロット図を、第59図に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下1桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

$^{14}\text{C}$ 年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。 $^{14}\text{C}$ 年代(yrBP)の算出には、 $^{14}\text{C}$ の半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した $^{14}\text{C}$ 年代誤差( $\pm 1\sigma$ )は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の $^{14}\text{C}$ 年代がその $^{14}\text{C}$ 年代誤差内に入る確率が68.27%であることを示す。

なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは、大気中の $^{14}\text{C}$ 濃度が一定で半減期が5568年として算出された $^{14}\text{C}$ 年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の $^{14}\text{C}$ 濃度の変動、および半減期の違い( $^{14}\text{C}$ の半減期 $5730\pm 40$ 年)を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

$^{14}\text{C}$ 年代の暦年較正にはOxCal4.4(較正曲線データ: IntCal20)を使用した。なお、 $1\sigma$ 暦年代範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された $^{14}\text{C}$ 年代誤差に相当する68.27%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に $2\sigma$ 暦年代範囲は95.45%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は $^{14}\text{C}$ 年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$ )	$^{14}\text{C}$ 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$ )	$^{14}\text{C}$ 年代を暦年代に較正した年代範囲	
				$1\sigma$ 暦年代範囲	$2\sigma$ 暦年代範囲
PLD-47911 012SP 試料 No.1	-25.12 $\pm$ 0.19	1486 $\pm$ 20	1485 $\pm$ 20	568-603 cal AD (68.27%)	552-609 cal AD (82.55%) 618-639 cal AD (12.90%)
PLD-47912 063SE 試料 No.2	-25.83 $\pm$ 0.21	1281 $\pm$ 20	1280 $\pm$ 20	679-706 cal AD (31.48%) 726-749 cal AD (23.24%) 758-768 cal AD (11.17%) 771-773 cal AD ( 2.38%)	673-774 cal AD (95.45%)
PLD-47913 030SE 試料 No.3	-28.03 $\pm$ 0.19	1139 $\pm$ 20	1140 $\pm$ 20	886-899 cal AD (14.80%) 918-959 cal AD (47.53%) 967-974 cal AD ( 5.94%)	776-783 cal AD ( 3.38%) 834-844 cal AD ( 1.73%) 878-979 cal AD (88.89%) 982-990 cal AD ( 1.45%)
PLD-47914 040SE 試料 No.4	-27.63 $\pm$ 0.19	868 $\pm$ 18	870 $\pm$ 20	1175-1195 cal AD (36.15%) 1199-1217 cal AD (32.11%)	1160-1221 cal AD (95.45%)

第8表 放射性炭素年代測定および暦年較正の結果

#### 4 考察

以下、 $2\sigma$ 暦年代範囲(確率95.45%)に着目して結果を整理する。なお、いずれの試料も最終形成年輪を測定しており、測定結果は枯死もしくは伐採年代を示す。

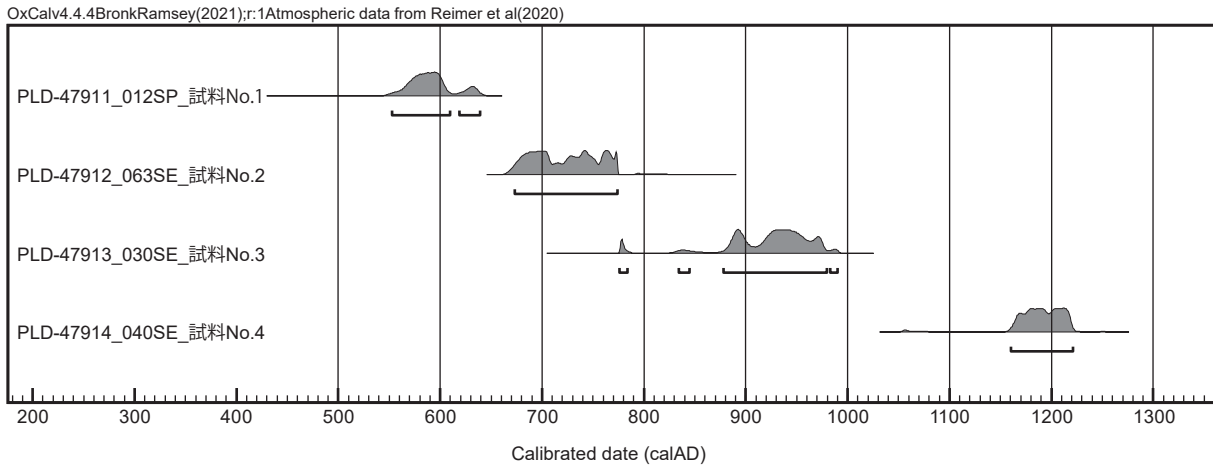
012SPの試料No.1(PLD-47911)は、552-609 cal AD (82.55%)および618-639 cal AD (12.90%)で、6世紀中頃～7世紀前半の暦年代を示した。これは、古墳時代後期～飛鳥時代に相当する。

063SEの試料No.2(PLD-47912)は、673-774 cal AD (95.45%)で、7世紀後半～8世紀後半の暦年代を示した。これは、飛鳥時代～奈良時代に相当する。

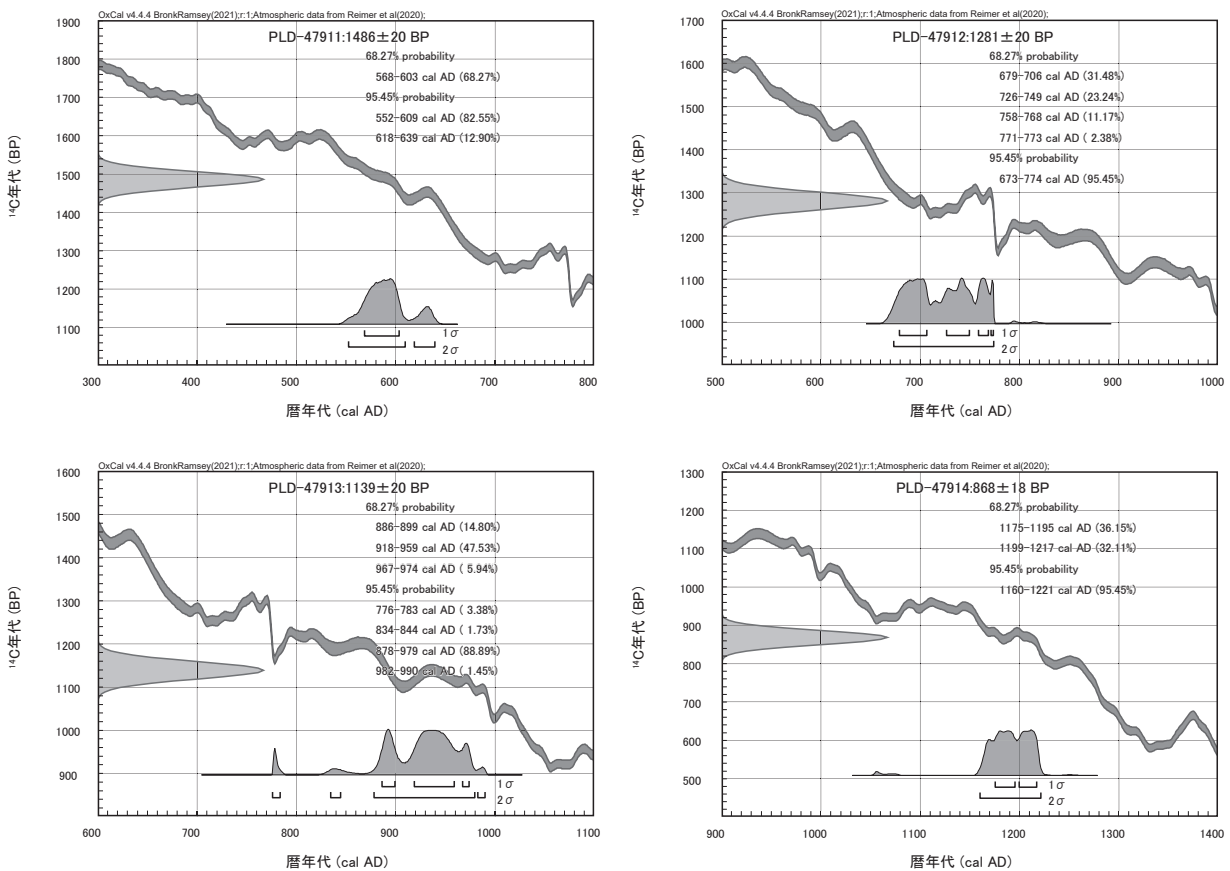
030SEの試料No.3(PLD-47913)は、776-783 cal AD (3.38%)、834-844 cal AD (1.73%)、878-979 cal AD (88.89%)、982-990 cal AD (1.45%)で、8世紀後半～10世紀後半の暦年代を示した。これは、奈良時代～平安時代中期に相当する。

040SEの試料No.4(PLD-47914)は、1160-1221 cal AD (95.45%)で、12世紀中頃～13世紀前半の暦年代を示した。これは、平安時代後期～鎌倉時代に相当する。

発掘調査所見によれば、試料が出土した遺構はいずれも古代の遺構と考えられており、測定結果は調査所見と整合的である。



第58図 マルチプロット図



第59図 暦年較正結果

《参考文献》

Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. *Radiocarbon*, 51(1), 337-360.

中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の 14C 年代編集委員会編「日本先史時代の 14C 年代」: 3-20, 日本第四紀学会.

Reimer, P.J., Austin, W.E.N., Bard, E., Bayliss, A., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Butzin, M., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hajdas, I., Heaton, T.J., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kromer, B., Manning, S.W., Muscheler, R., Palmer, J.G., Pearson, C., van der Plicht, J., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Turney, C.S.M., Wacker, L., Adolphi, F., Büntgen, U., Capano, M., Fahrni, S.M., Fogtmann-Schulz, A., Friedrich, R., Köhler, P., Kudsk, S., Miyake, F., Olsen, J., Reinig, F., Sakamoto, M., Sookdeo, A. and Talamo, S. (2020) The IntCal20 Northern Hemisphere radiocarbon age calibration curve (0-55 cal kBP). *Radiocarbon*, 62(4), 725-757, doi:10.1017/RDC.2020.41. <https://doi.org/10.1017/RDC.2020.41> (cited 12 August 2020)

## 第2節 千音寺遺跡出土の灰釉陶器に付着する赤色顔料の分析

竹原弘展 (パレオ・ラボ)

## 1 はじめに

名古屋市中区富田町千音寺に所在する千音寺遺跡の第9次発掘調査で出土した灰釉陶器に付着する赤色顔料について、蛍光X線分析を行い、顔料の種類を検討した。

## 2 試料と方法

分析対象は、001SDより出土した灰釉陶器の外面底部に付着していた赤色顔料(試料No.5)である(第9表、第60図1)。赤色部を微量採取し、セロハンテープに貼り付け、分析試料とした。試料採取位置を第60図2に示す。

測定番号	調査区	出土遺構	実測番号	ドット番号	種別	採取位置
試料No.5	1区	001SD	003	d-060	灰釉陶器	外面底部

第9表 分析資料の詳細

分析装置は、エネルギー分散型蛍光X線分析装置である株式会社堀場製作所製分析顕微鏡XGT-9000を使用した。装置の仕様は、X線管が最大50kV、1000  $\mu$  Aのロジウムターゲット、キャピラリ径が100  $\mu$  mまたは15  $\mu$  m、検出器はSDD検出器で、検出可能元素は、炭素(C)からアメリカシウム(Am)である。

本分析での測定条件は、50kV、726  $\mu$  A(自動設定による)、キャピラリ径100  $\mu$  m、測定時間300s、パルス処理時間Process5に設定した。定量分析は、標準試料を用いないファンダメンタル・パラメータ法(FP法)による半定量分析を装置付属ソフトで行った。

さらに、蛍光X線分析用に採取した試料を観察試料として、生物顕微鏡で赤色顔料の粒子形状を確認した。

## 3 試料と方法

分析により得られたスペクトルおよびFP法による半定量分析の結果を第61図に示す。

分析の結果、主にケイ素(Si)、鉄(Fe)、アルミニウム(Al)が主に検出され、ほかにナトリウム(Na)、マグネシウム(Mg)、リン(P)、硫黄(S)、カリウム(K)、カルシウム(Ca)、チタン(Ti)、マンガン(Mn)が検出された。

## 4 考察

赤色顔料の代表的なものとしては、朱(水銀朱)、鉛丹<sup>えんたん</sup>、ベンガラが挙げられる。水銀朱は硫化水銀(HgS)で、鉛物としては辰砂<sup>しんしゃ</sup>と呼ばれ、産出地はある程度限定される。鉛丹は四酸化三鉛(Pb<sub>3</sub>O<sub>4</sub>)で、人工顔料である。ベンガラは狭義には三酸化二鉄(Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>、鉛物名は赤鉄鉛)を指すが、広義には鉄(III)の発色に伴う赤色顔料全般を指し(成瀬, 2004)、広範な地域で採取可能である。また、ベンガラは直径約1  $\mu$  mのパイプ状の粒子形状からなるものも多く報告されている。このパイプ状の粒子形状は鉄バクテリア起源であると判明しており(岡田, 1997)、鉄バクテリア起源の含水水酸化鉄を焼いて得た赤鉄鉛がこのような形状を示す(成瀬, 1998)。鉄バクテリア起源のパイプ状粒子は、湿地などで採集できる。

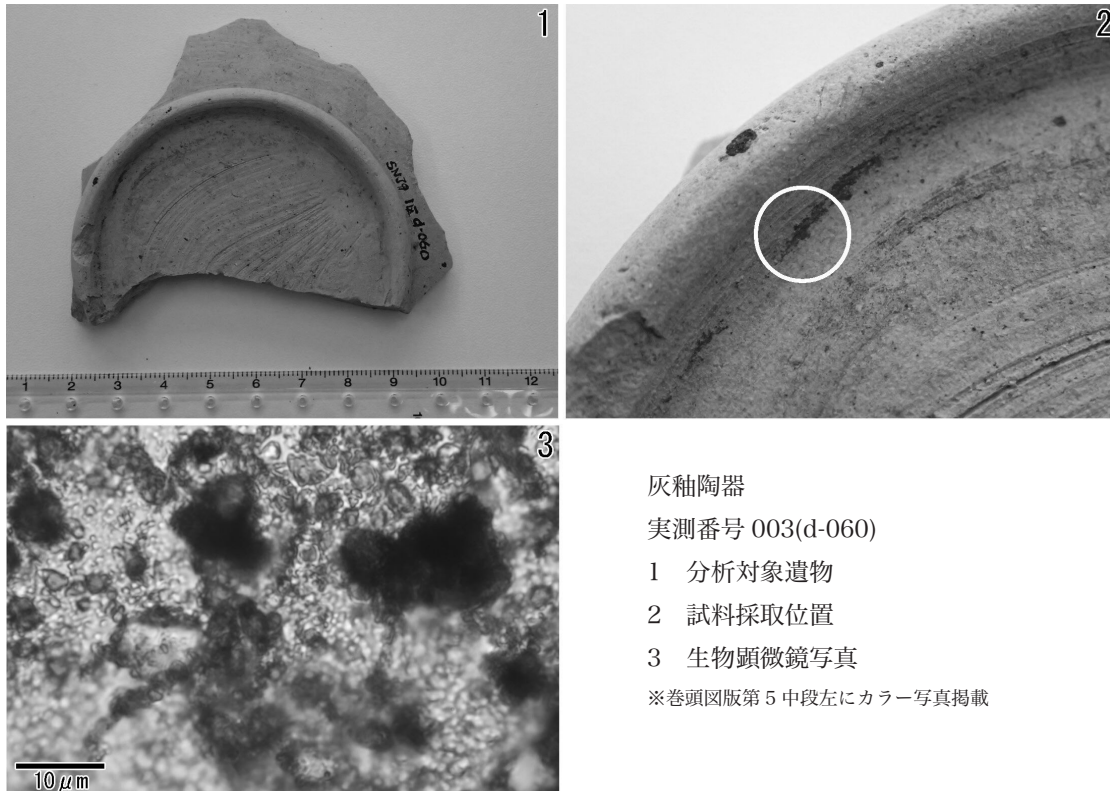
今回分析した試料からは、ケイ素など土中成分に由来すると考えられる元素は検出されたものの、水銀や鉛は検出されなかった。一方で鉄が多く検出されているため、赤い発色は鉄によるものと推



定できる。すなわち、顔料としてはベンガラにあたる。赤色パイプ状粒子は生物顕微鏡で観察されず、いわゆるパイプ状ベンガラではなかった(第60図3)

5 おわりに

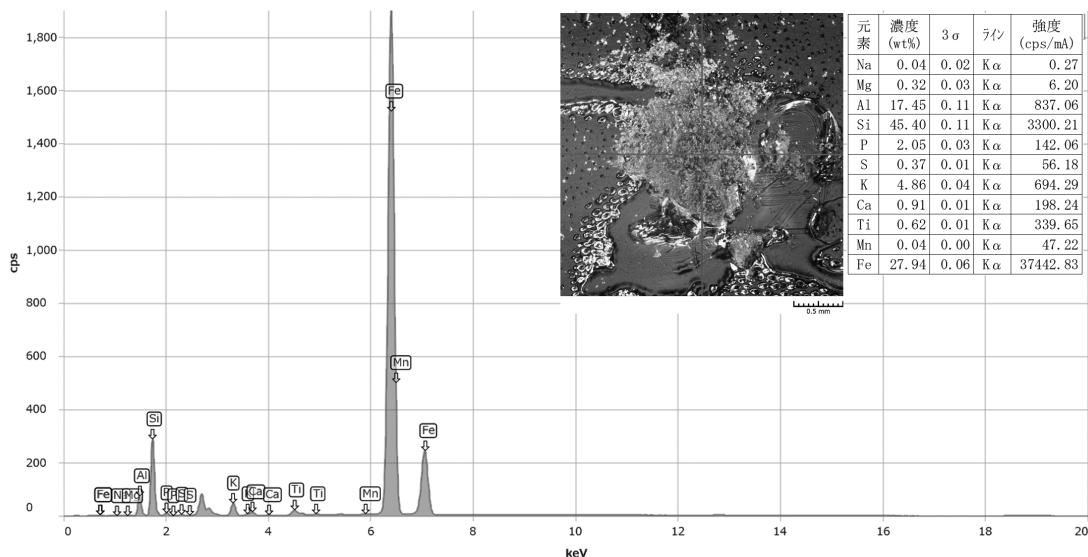
灰釉陶器の外面底部に付着していた赤色顔料を分析した結果、鉄(III)による発色と推定された。顔料としてはベンガラにあたる。



灰釉陶器  
実測番号 003(d-060)  
1 分析対象遺物  
2 試料採取位置  
3 生物顕微鏡写真

※巻頭図版第5中段左にカラー写真掲載

第60図 赤色顔料の蛍光X線分析試料写真



第61図 赤色顔料の蛍光X線分析結果

《参考文献》

成瀬正和 (1998) 縄文時代の赤色顔料 I —赤彩土器—. 考古学ジャーナル, 438, 10-14.  
 成瀬正和 (2004) 正倉院宝物に用いられた無機顔料. 正倉院紀要, 26, 13-61.  
 岡田文男 (1997) パイプ状ベンガラ粒子の復元. 日本文化財科学会第14回大会研究発表要旨集, 38-39.

## 第4章 まとめ

### 第1節 千音寺遺跡第9次発掘調査成果について

従来千音寺地区で続けられてきた発掘調査は第1次・第2次調査を除けば小規模なものが多く、遺跡の全体像を探るには断片的な情報が多かった。今回の調査区はいずれも道路計画に沿った長大なものとなったが、今まで情報が希薄であった区域の地理的な情報も含め、遺跡の実態や消長を知る上では極めて重要な調査となった。また、今回の調査と時期を同じくして隣接した民間地でも大規模な発掘調査がおこなわれており、遺跡の面的な広がりを把握する上でも貴重な情報が得られたものと思われる。

登録上の「千音寺遺跡」に関し、遺跡範囲には現在の千音寺集落が含まれていない。千音寺集落は南北700m、東西約400mの大規模な自然堤防上に営まれた集落で、集落内には奈良時代の創建縁起を持つ寺院が2軒存在する。一音山行雲寺ぎょううんじは千音寺集落のほぼ中央にあり、古くは聖徳山千手観音寺と称し天平19年(747年)の創建と伝えられている。また隣接する安住山円乗寺えんじょうじは天慶2年(939年)に創建された千如山音教寺が起源であるとされ、両寺院とも「千音寺」地名の由来となった古刹でもある。また、千音寺集落内には赤星神社・天神社・七所神社が存在し、集落南東端に現存する赤星神社が『尾張国内神名帳』に記載された赤星明神であれば、平安時代までには存在していた神社ということになる。

今回の調査では、1区や3区に於いて8世紀代の遺物や遺構が検出されており、古代から中世、中世から近世に至るまで断続的にはあるが、千音寺集落に隣接した低地部を中心とした遺跡地区が利用され続けられてきたことが判明した。先の二山の古刹に伝えられた縁起の真偽はさておき、少なくとも7世紀頃までには自然堤防を中心にいくつもの集落が形成され、同時に周囲の低地部でも大小規模の水田耕作が本格的に開始されていたものと推定される。後に三世一身法(723年)や恭仁京で発布された墾田永年私財法(743年)を経て、各地方での荒れ地開墾が本格化する過程を通じ、それぞれの自然堤防上の集落を中心に進められていた開墾地は、次第に東西南北を基準とした四至に区画された条里に組み込まれていったものと考えられる。現代にまで残る条里の主軸が東側に5～6°傾いた状況に関しては、複雑に川筋が走る地理的な制約に対応した結果であろう。調査区内のところどころに見られた畝溝群に関しては方位に規則性が見出せないことなどから、条里制に組み込まれる以前の個人や家族単位によるごく小規模な耕作の痕跡と理解できるかもしれない。

次に道路遺構に関してであるが、氾濫平野のいたるところに存在する自然堤防の高まり同士を結ぶ小規模な道路(側溝を備えた通路)が存在したことも確認された。墾田開発の活発化により大小規模の自然堤防上には自然発生的な集落が生まれ、うち規模の大きな集落内にも側溝を伴った路地規模の道路が存在したことも確認された。幅一間前後で側溝を備えた道路は集落内を貫く幹線道路に次いで重要な役割を果たしていたものと推測され、1区北部で検出されたものは溝から灰釉陶器や石器が出土しているが、南部の低地を走る道の側溝からは遺物が出土していない。いずれの道も

何処と何処を結ぶために造られたものであるか気になるところだが、そのためにはより精度の高い微地形の把握や地籍図などを用いた古環境復元が必要であろう。

度重なる河川の氾濫は各時代時代で集落や耕作地を襲い、時には丸ごと削平し、また新たな水流が生み出した自然堤防の下に、活動の痕跡は埋没していったのだろう。出土遺物の様相からは、奈良時代に始まり鎌倉、室町時代に至るまでの一通りの遺物が出土しているが、調査区が集落の縁辺部に相当していたこともあり遺構が重複する様相は希薄で、時代を越えて使われ続けられたことを示すような遺構はほとんど見られず、その時々で構築され埋没していったものがほとんどであった。また、井戸遺構でしばしば見られた現象であるが、埋土上層と下層の境界に数センチの鬼板層が介在する例が多く、土坑が埋積されていく過程に於いて、より鉄分を多く含んだ水流または洪水性堆積物で覆われた状態のまま放置されていた期間を想定することができる。

河川の動態同様、遺跡の消長と密接に関係していたと思われる海面変動に関しては、平安海進と呼ばれる小規模な海進現象が日本列島各地で報告されている。海拔ゼロメートル地帯に存在する千音寺遺跡でも、当然何らかの影響を受けたはずである。

先史地理学的には、それまで急速に拡大してきた臨海沖積平野の成長が平安時代に相当する時期に緩慢化した様子が知られており、井関弘太郎氏は「富田庄 12ヶ里絵図」(第5図)に関する言及に於いて、「三角州陸状部分が緩慢化する反面、汀線から前置斜面にいたる水面下の部分が相対的に大きくなり、干潮時には露出する遠浅部分が拡大することから、社会的条件が整えば干拓地の出現をみる可能性が高まる。絵図南端に表現されたアシ・ヨシの繁茂する海岸部分がそれに相当するのではないか(要約)」と指摘している。また遺跡周辺の表層地質や先史地理的な観点を加味した考察に関しては愛知県埋蔵文化財センターの蔭山氏と鬼頭氏による論考(蔭山・鬼頭 2022)が発表されており、微高地群や遺跡との関連についても言及されているので、そちらを参照されたい。

## 第2節 1区 063SE 大井戸に関する小考

井戸から発見された埋納物に関する考察をおこなう(第27図)。

板材と杭によって構築された井戸側の底には、水溜めとして大型の曲物(以下大曲物と呼称)が埋設されていた。埋納物はその内部に収められていたようで、口縁を欠いた長頸瓶2本のほか小型の曲物(以下小曲物と呼称)が有り、小曲物内部には須恵器の皿に乗せられた状態の横櫛と、白色の玉石(石英の礫で出土位置は不明)が収められていたようである。また、井戸底の泥濘からは数本の斎串が発見されており、井戸仕舞いの時に使われた可能性もある。

ほぼ完形を保つ二本の長頸瓶に関しては、個体識別のために器表の色調を元に「赤瓶(055)」「青瓶(056)」と呼称するが、赤瓶の口縁部は7回ほどの打ち欠きによって欠損している。やや小ぶりの青瓶の口縁部は、推定8回ほどの打ち欠きできれいに欠損しており、これらが意図的な行為であった様子を観察出来る。またこれらの他に、井戸底の泥濘の篩がけによって4点の長頸瓶口縁端部(057～060)と頸部のみまたは頸部を含む口縁部(061・062)を検出し、いずれの破片も赤瓶・青瓶の欠損部には接合しないことを確認した。更に、両瓶内部の土壌精査によって赤瓶内部より1点の口縁端部破片を1片検出し、それが別個体である061の欠損部と接合することを確認した(巻

頭図版第3下段写真)。

同様の例を複数の遺跡で確認したので紹介しておく。名古屋市中区の正木町遺跡<sup>まさきちょう</sup>では、平成7年の南山大学による発掘調査で古代の井戸遺構 SE2 が発見され、その内部から一括性の高い大量の遺物が出土している。なかでも注目されるのは口縁部の欠損した大小の長頸瓶である。報告書に掲載された写真での確認になるが、いずれの長頸瓶も口縁部全周の三分の一から二分の一が欠損しており、これらとは別に口縁部を複数箇所欠損した長頸瓶頸部のみのものや、頸部以上が欠損した無高台の瓶、高台を有する瓶の下胴部のみのものが報告されている。主要な個体は千音寺遺跡に於ける今回の出土例よりやや古い口縁部形態を呈しており、実測図に示された頸部や口縁部の実際の残存状況が不明なことから、石や木製品など他の遺物の詳細が不明であるので一概に井戸仕舞いの行為に関する遺物とは断定できないが、おおむね同時期の遺物である。器表面に大いに自然釉が流れる様子もよく似ており、名古屋市内に於ける類似例として重要である。

他に、滋賀県草津市の中畑遺跡<sup>なかはた</sup>に於ける平成17年の調査では、複数の井戸遺構で祭祀の痕跡が確認されている。特に SE2 では「須恵器および灰釉陶器長頸壺の口縁端部打ち欠き片(11点出土)および頸部打ち欠き品(2点出土)」が、井戸底面に汚濁防止のため入れられたと思われる礫とともに検出されており「これらはすべて別個体のものである。」と報告されている。うち、頸部片1点と同一個体の打ち欠き片が35m離れた別遺構から出土している。報告書では井戸構築時の祭祀として報告されているが、同井戸廃棄時の祭祀としては「底面から70cmまでを埋め戻し、その上面に厚さ10cmの礫混じり土を敷いて整え、土師器皿や緑釉陶器椀・皿、斎串、鋸状木製品、包丁形木製品、木錘・曲物底板・横斧の柄・横櫛などを入れる。時期は11世紀初頭～前葉である。」と報告されている。中畑遺跡例では出土状況から、打ち欠いた口縁端部の井戸への投入は井戸構築時とされているが、千音寺遺跡例では井戸底に埋納された赤瓶の内部からも1点の口縁端部が発見されていることから、井戸仕舞いの時のものと判断した。

また、中畑遺跡では別の井戸 SE5 堀り方底には一木鋤が埋納されており、井戸内部からは破損した横櫛、曲物底板とともに曲物柄杓の身が出土しており、注目される。時期は10世紀後半と報告されている。

このような事例を参考にしつつ、あらためて千音寺遺跡1区063SEの状況を観察してみる。

縦方向の分厚い板材を用いた井戸側はそれぞれ90cmほどの長さを有していたと考えられる。水溜として井戸底に埋設されていた大曲物は推定直径が50cmほどであった。先の中畑遺跡例では井戸底に汚濁防止を目的とした礫が沈められていたようだが、千音寺例では確認されていない。構築面の標高の低さ(遺構検出面の現標高は-70cm)即ち地下水位の高さから井戸側は一段のみであったと推定されることから、頻繁な井戸<sup>きろ</sup>浚いは不要であったのかもしれない。

模式図に示した埋納物の配置は推定であるが、大曲物中央に小曲物を置き、その両脇に赤瓶と青瓶を配置した可能性が高い。直径18cmほどの小曲物の中には破損した須恵器皿(063、8世紀後半)の上に折られた横櫛(木23)を乗せて埋納されていた。横櫛は残存長3.5cmで、彎曲部分の形状などから元は10cmほどの長さがあったものと推定される。須恵器の皿は破損品で、高台見込みに墨書がある。この墨書は「中」字のような形だが意味などは不明である。

小曲物は井戸底の砂質シルトの泥濘に埋もれるような状態で検出されたが、周辺の泥濘を地上で篩がけをした結果、一粒の玉石を発見した。石英と思われる直径9mmほどの円礫だが、輝くよう

な白色である。そもそも遺跡周辺の土壌は地山も含めて礫を含まないため、意図を持って投入されたものと考えた。小曲物内部に慎重に置かれた横櫛の在り方を考えれば、同様に小曲物内部に納められていた可能性もある。他に、長さ 11.5cm の齋串とそれに類する木製品が 2 点発見されており、また、より小型の曲物の身の底板と思われる加工木が検出され、そのいずれもが井戸内部に投入されたものと思われる。

古代に於いて櫛は壁邪<sup>へきじゃ</sup>などの力を持つものと理解されていた。神話に登場する櫛の例としては、伊耶那美命<sup>いざなみのみこと</sup>に会いに行った伊耶那岐命<sup>いざなぎのみこと</sup>が「湯津々間櫛」の太い歯を折って火を灯してみると、伊耶那美命はウジ虫がたかり雷神をまとった変わり果てた姿になっていたという逸話がよく知られている。泉津醜女<sup>よもつしこめ</sup>に追われた伊耶那岐命が折った歯を投げると、こんどは筥となって命を助けたとされる。また櫛名田比売<sup>くしなだひめ</sup>と八岐大蛇<sup>やまたのおろち</sup>の逸話では、早、素戔鳴尊<sup>ゆつまくし</sup>が姫を湯津爪櫛<sup>ゆつまくし</sup>に変えて髪に挿し、退治に成功する。倭建命<sup>やまとたけるのみこと</sup>東征時の逸話でも、海を鎮めるために入水した弟橘媛命<sup>おとたちばなひめのみこと</sup>の形見としての櫛が漂着し、墳墓に埋葬されている。もっとも道具としての櫛は、男女ともに使われたようであるが、井戸神の鎮めを期待して埋納したのであろう。

福岡市の高畑遺跡<sup>たかばた</sup> 20 次調査では奈良時代とされる井戸遺構 (9 号井戸) が検出され、井戸枠上からは皇朝十二銭の「神功開寶」<sup>じんぐうかいほう</sup>が、内部から曲物や加工木に加え折れた櫛が 4 本出土している。同時に瓦甃や鬼瓦などの瓦類も発見されており、寺院関係の遺跡であるとも考えられている。

石英の玉石については、その稀少性と呪力、または清浄なるものの象徴的意味合いで、井戸を浄化し鎮めを促進する効力を期待されて投入されたものとも理解出来る。

口縁端部が打ち欠かれた長頸瓶に関しては、中心となる二本の大きさや色調も考慮された上での一対であるとも考えられる。丁寧な打ち欠きによって生じた口縁端部の破片は、別の井戸儀式で使われたものと思われる。長頸瓶の品質に関しては、器表面積の三分の一以上に自然釉が流れ焼け歪みによる傾きや、胎土に火膨れ (赤瓶) なども見られる。恐らく、折戸地区または黒笹地区あたりで焼成された地元流通用の個体が用いられたのであろう。

井戸は此の世と異世界を繋ぐ通路でもあり、井戸神の棲まう神聖な場所でもある。井戸の維持は共同体にとって最も重要なことであり、汚すことは許されず、常に清められるべき場所である。井戸には「まなこ」と呼ばれる曲物や筥<sup>ざる</sup>を沈めておくことがあった。筥の場合は汲み上げ時の水の汚濁を防ぐ効果は多少期待出来るかもしれないが、底の無い曲物の場合は枠の延長であり井戸底は透水層が露出したままであることを考えると、やはり依代<sup>よりしろ</sup>としての機能も考慮すべきであろう。1 区で検出された 063SE の場合は井戸底で検出された大曲物が「まなこ」と考えてよいだろう。このような「まなこ」は井戸神の依代として神聖視され、のちには仕舞いの儀式に埋納されるものも「まなこ」と呼ぶようになったようである。

大垣市興福地遺跡<sup>こうふくじ</sup>では平安時代末から鎌倉時代初頭の井戸遺構から口縁部を故意に打ち欠いた小型片口壺が発見されており、井戸の「まなこ」であるとされている。同時に、齋串に転用された扇子の骨や口縁部を欠いた山茶碗、土師皿、青磁、白磁なども出土しており、これらを「埋め井の祭りに使用した道具」として報告されている。

仕舞いにはさまざまな事情があったのだろうが、井戸は単に埋め立てて終わりというものではなかったはずである。現代に至るまで、「井戸の息抜き」と称して主に解体業者のおこなう竹 (時に塩ビ管のこともある) 立てや清浄な砂を用いた土盛り行為は、井戸の聖性が現代にまで伝えられて

いる証拠であろう。

このようなまじないはもとを辿れば朝廷でおこなわれていた祓い鎮めの儀式から派生したもので、地方に伝えられていく過程で省略されたり、各地方また各遺跡周辺での工夫や加減がおこなれた上で執行されたものであろう。各埋納物の背景には神話や儀軌が存在し、器物の埋納や破損行為そのものにも厳密な意味づけが為されていたものと推測される。千音寺遺跡 063SE 大井戸例の場合、9世紀初頭までに井戸仕舞いされた可能性が高いが、8世紀後半は天然痘の流行に伴う混乱や国分寺建立の詔、墾田永年私財法の発布や度重なる遷都など、畿内の政治情勢も決して平穏な状態ではなかった。そのような状況下でも、一地方で井戸仕舞いの儀式は粛々とおこなわれていた。一見すると律令的な格式に従って準備された儀礼的に埋納されたものと思われがちだが、基本的な背景には井戸に対する根源的な畏怖や尊崇の念が、当時の人々の心の中にも存続していたからなのだろう。

#### 《参考文献》

- 『正木町遺跡発掘調査報告書』1997 南山大学大学院考古学研究室  
 『中畑遺跡Ⅱ』2005 滋賀県教育委員会 財団法人滋賀県文化財保護協会  
 『高畑遺跡2 - 高畑遺跡第20次調査報告 - 』2012 福岡市教育委員会  
 『岐阜県文化財保護センター調査報告書 132：興福地遺跡』2015 岐阜県文化財保護センター  
 井関弘太郎『沖積平野』1983 東京大学出版  
 加藤安信編『遺跡からのメッセージ 発掘調査が語る愛知の歴史』2000 中日新聞社  
 中・近世研究部会「尾張国富田荘の考古学的研究 -成願寺を中心として-」2004 愛知県埋蔵文化財センター研究紀要 第5号  
 蔭山誠一・鬼頭 剛「尾張国富田荘絵図に描かれた建物と海 ～中世富田荘周辺の古地理と遺跡～」2022 愛知県埋蔵文化財センター研究紀要 第23号

### 第3節 1区 070SE 出土の暗文土師器について

#### 1 はじめに

070SE では県内でも出土例が少ない暗文土師器皿(081)が1点出土している。共伴する遺物は折戸10号窯式期前後の須恵器の盤や黒笹90号窯式期の灰釉陶器の碗と段皿である。

暗文土師器は、きめ細かい粘土を用いて、金属製の食器の光沢や質感を模した特徴的な土器で、内面に装飾的な文様であるへら磨き(暗文・暗紋)、外面に丁寧なミガキを施しており、中には赤褐色の彩色をしているものもある。主要な器種は、坏・皿・高坏・蓋・鉢などである。7～8世紀に主に畿内周辺で使われた土器であるが、地方官衙(国衙・郡衙など)や古代寺院などでの出土も相次いでいる。また、都で作られたものを「畿内産土師器」、それを模倣して各地で作られたものを「畿内系土師器」と呼ぶこともある。尾張平野部から出土する「畿内系土師器」の多くが中勢の雲出川下流域・一志郡産であったとする胎土分析のデータもある(樋上(2002))。

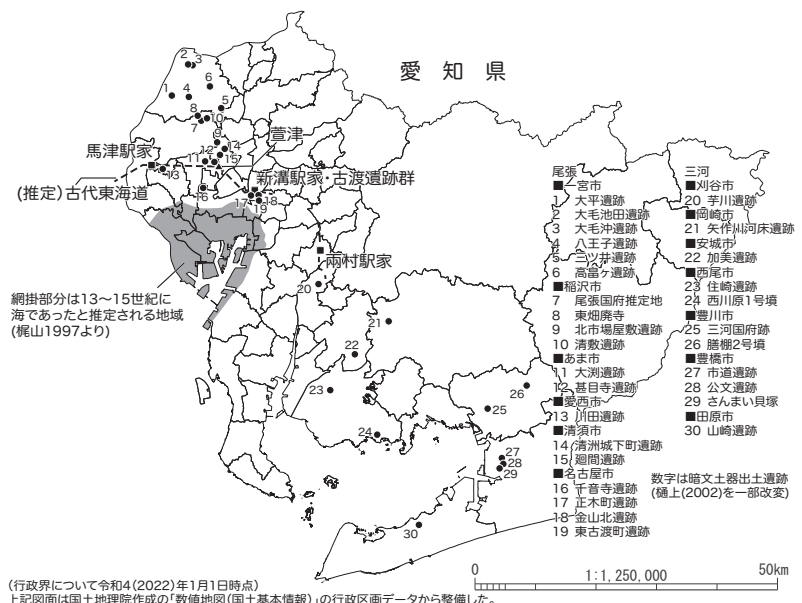
#### 2 出土例と傾向

県内から出土した暗文土師器は、樋上氏による集成(2001)時点で、25遺跡94点である。その後、川田遺跡(愛西市)から8点の出土例(木川ほか(2002))や、『新修名古屋市史 資料編 考古2』(2013)にて名古屋市内の事例紹介などがあるほか、2013年におこなわれた千音寺遺跡の試掘調査(第7次調査)でも、今回の3区西部範囲に含まれる試掘坑から1点出土している。

出土例のうち名古屋市内のものを中心に第10表にまとめ、図面のあるものについては出来る限り第63図に紹介した。なお、器種分類・時期については森(2016)を参考にした。

器種については坏A・皿Aが多くを占め、体部に2段以上暗文のある古手のものは少なく、7世紀末以降の新手のものが多い。また底部にも暗文のあるものは少ない。千音寺遺跡9次081は、大きさが20cm前後であること、外面に丁寧なへらケズリがあること、内面に1段の放射状暗文があるという点で千音寺遺跡7次73に近いと言える。正木町遺跡21次81については、大きさは近似しているが、放射状暗文の上部に円弧(螺旋状?)暗文が存在するという特徴があり、少し古いものと思われる。

出土例をみると三河よりさらに畿内に近い尾張で多く、かつ尾張国衙の置かれた稲沢市や旧尾西市域を含めた一宮市西部など中島郡、海部郡北部、愛智郡西部においても出土している。中島郡には妙興寺跡・中島廃寺・東畑廃寺など、海部郡には第1章第2節でも述べた甚目寺遺跡・法性寺跡・清林寺



第62図 暗文土師器の県内出土遺跡

遺跡など、愛知郡には尾張元興寺跡が知られるように古代寺院が点在している。なお、先ほど述べた川田遺跡では古代瓦が出土している。

### 3 まとめ

古代の畿内との交流を考えると地方官衙・古代寺院とともに考える必要があるのが古代東海道である。古代官道である<sup>えきどう</sup> 駅道には30里(約16km)毎に<sup>うまや</sup> 駅家がおかれ<sup>えきば</sup> 駅馬が管理されていた。その駅家は平安時代中期に編纂された『延喜式』に記載があり、尾張国では「海部郡馬津」「愛智郡新溝」「山田郡<sup>ふたむら</sup> 兩村」があり、馬津駅家は先ほど述べた川田遺跡の西側1.5kmの<sup>ましかたちょうまつがわ</sup> 愛西市町方町松川付近に比定され、新溝駅家は名古屋市中区の正木町遺跡や古沢町遺跡が推定される。正木町遺跡は古渡遺跡群の一つであり、同じ遺跡群の金山北遺跡・東古渡町遺跡からも暗文土師器が出土している。兩村駅家は<sup>かみたかねぎょうじやどう</sup> 上高根行者堂遺跡(豊明市)が推定される。この古代東海道の駅家間のルートについては、諸説あるが、馬津駅家と新溝駅家の間は、馬津駅家から真東に向かい、あま市の萱津を通ったのちに南東方向の新溝駅家へと至る道順が有力視されている。千音寺遺跡の位置はかなり海側に離れており、周辺には古代寺院や地方官衙は知られておらず、この場所で暗文土師器が見つかる理由を考えたい。新溝駅家に比定される古渡周辺は現在内陸地域であるが、古代は海上交通の要衝で、尾張元興寺跡付近に玄関口があったとも考えられる。また千音寺遺跡についても西側は木曾川のデルタ地帯であり、海岸線も比較的近い状態であり、中世に作られた『尾張国富田荘絵図』でも南方に波のような表現が描かれ海域であったことを示している。

この千音寺遺跡で出土した2点を以て直ちに、遺跡付近に古代の役所などが存在したというような可能性は指摘できないが、063SE 大井戸に使われた厚さ10cmもの板材や埋納された長頸瓶の存在を加味して考えれば、それらの入手先が役所や寺院であった可能性はあるだろう。名古屋市域低地部での発見例として、古渡遺跡群の出土例を含めて今後注目されていくものと思われる。

伊勢で作られた暗文土師器が海上ルートにより、千音寺遺跡を経由して、古渡遺跡群にもたらされたとも考えられないだろうか。

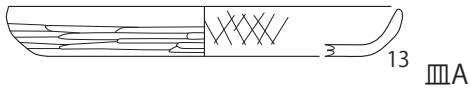
### 《参考文献》

- 赤塚次郎・バリノ・サーヴェイ株式会社『廻間遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第10集 1990 愛知県埋蔵文化財センター  
 梶山勝「第6章 律令国家の確立 第4節 地方豪族と仏教」『新修名古屋市史 第1巻』1997 名古屋市  
 服部哲也「【資料紹介】東古渡町遺跡出土の古代土器」『名古屋市見晴台考古資料館研究紀要』第3号 2001 名古屋見晴台考古資料館  
 樋上昇「県内遺構・遺物集成 No.20 畿内産(系)土師器」『まいぶん愛知 No.64』2001 愛知県埋蔵文化財センター  
 樋上昇「八王子遺跡の古代をめぐる諸問題」『八王子遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第92集 2002 愛知県埋蔵文化財センター  
 木川正夫・蔭山誠一ほか『川田遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第103集 2002 愛知県埋蔵文化財センター  
 伊藤敬太郎・鈴木恵介ほか『金山北遺跡・金山北地区開発事業に伴う第2次発掘調査報告書』2004 国際航業株式会社  
 服部哲也「正木町遺跡(第21次)」『埋蔵文化財調査報告書58』名古屋市文化財調査報告74 2008 名古屋市教育委員会  
 天野暢保「第4章 特論 第4節 交通路・駅家」『愛知県史 資料編4 考古4 飛鳥～平安』2010 愛知県  
 新修名古屋市史資料編編集委員会『新修名古屋市史 資料編 考古2』2013 名古屋市  
 木村有作「千音寺遺跡(第6・7次)」『埋蔵文化財調査報告書73』名古屋市文化財調査報告90 2015 名古屋市教育委員会  
 森暢郎「暗文土師器の編年と規範」『纏向学研究センター研究紀要 纏向学研究 第4号』2016 桜井市纏向学研究センター  
 樋田泰之『尾張元興寺跡第16次発掘調査報告書』2017 ナカシャクリエイテブ株式会社  
 近江俊秀「古代の東海地方の流通と交通」『令和4年度考古学セミナー あいちの考古学2022 発表資料集』2022 愛知県埋蔵文化財センター  
 永井邦仁「東海道駅路の成立と古代境川流域の動向」『古代猿投窯における井ヶ谷古窯跡群を考える 資料集』2022 考古学フォーラム

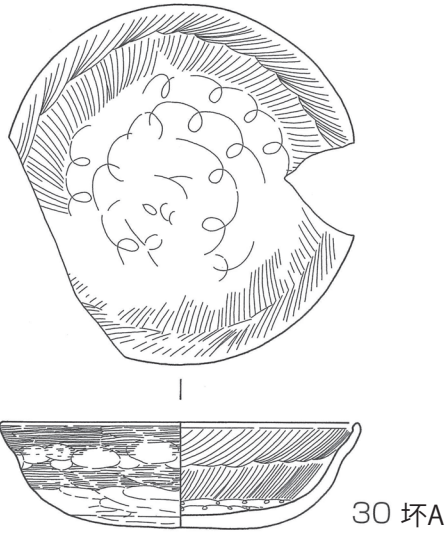


暗文土器の出土例

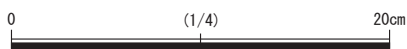
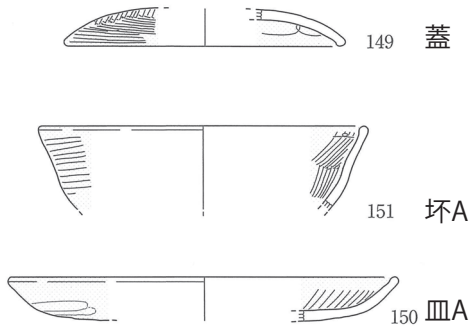
廻間遺跡(1985)



東古渡町遺跡3次(1990)

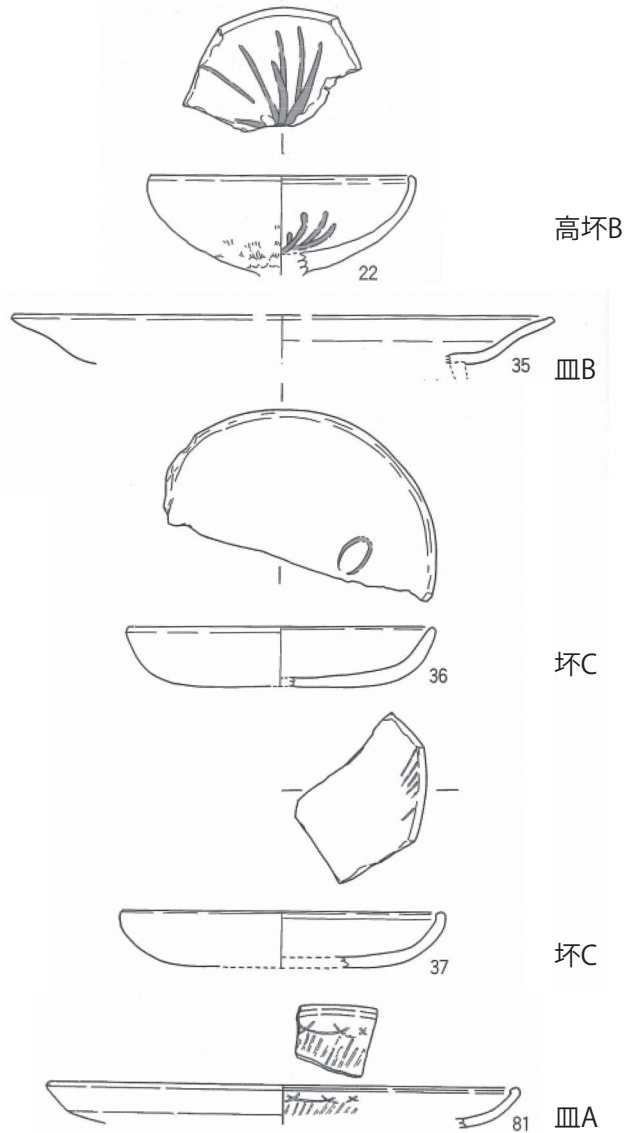


金山北遺跡2次(2003)

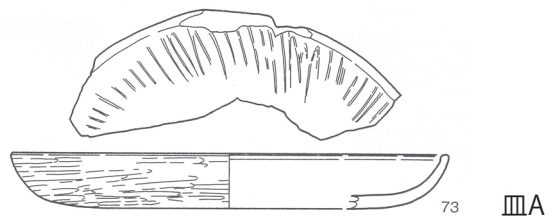


※廻間遺跡13については  
報告書データから再トレース

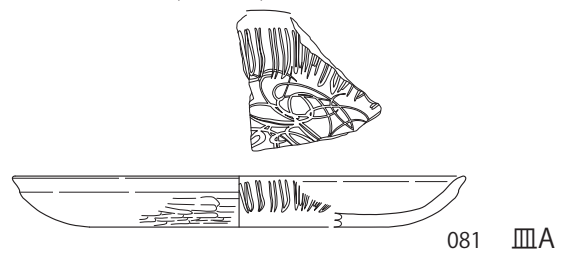
正木町遺跡21次(2007)



千音寺遺跡7次(2013)



千音寺遺跡9次(2021)



第 63 図 暗文土器の出土例 (名古屋市内中心)

遺跡名	所在地	調査次	遺構	種別	図面 番号	器種	法量 (cm)		調整など	遺構時期	図
							口径	器高			
廻間遺跡	清須市	60年度 C・D区 (1985)	NR01	暗文土師器	13	皿A	20.6	2.6	外面：横方向のミガキ 内面：横方向のミガキ、斜格子状暗文	古墳～鎌倉	
東古渡町遺跡	名古屋市中区	第3次 (1990)	SX21	彩色暗文土師器	30	坏A	19.0	5.6	彩色：赤色 ヘラミガキ 内面：上位に2段の放射状暗文、 下位に3段の内螺旋状暗文 口縁端部を内側に巻き込む	I-41	
				彩色暗文土師器	31	坏A			内面：放射暗文 32と同一個体か	I-41	
				彩色暗文土師器	32	坏A			内面：放射暗文 31と同一個体か	I-41	
金山北遺跡	名古屋市中区	第2次 (2003)	715-SB	彩色暗文土師器	156	蓋			端部 彩色：赤褐色 暗文は不明	I-17～C-2	無
			717-SB	彩色暗文土師器	149	蓋	15.0	(1.8)	彩色：赤褐色 外面：丁寧なミガキ 内面：螺旋暗文	O-10	
				彩色暗文土師器	151	坏A	17.4	(4.5)	彩色：赤褐色 外面：丁寧なミガキ 内面：放射2段暗文・口縁端部に螺旋暗文	-	
				彩色暗文土師器	154	坏			彩色：赤褐色 外面：丁寧なミガキ 内面：放射2段暗文・口縁端部に螺旋暗文	-	無
				彩色暗文土師器	157	坏			皿か坏の高台部 彩色：赤褐色	-	無
				彩色暗文土師器	158	坏			皿か坏の高台部 彩色：赤褐色	-	無
				彩色暗文土師器	159	皿			口縁部 彩色：赤褐色 暗文は不明	-	無
			482-SB	彩色暗文土師器	150	皿B	20.6	(2.3)	彩色：赤褐色 外面：底部ケズリ 内面：放射1段暗文	K-14	
				彩色暗文土師器	155	蓋			端部 彩色：赤褐色 内面：螺旋暗文	-	無
				暗文土師器	160	坏C			外面：ヘラミガキ	-	無
			479-SB	彩色暗文土師器	153	蓋	(3.4)		彩色：赤褐色 摘み部のみ	K-14～K-90	無
			490-SB	暗文土師器	-	不明			※遺構別出土遺物一覧より1点出土	K-90	無
			492-SB	暗文土師器	-	不明			※遺構別出土遺物一覧より1点出土	K-90	無
1007-P	彩色暗文土師器	152	蓋			端部 彩色：赤褐色 内面：螺旋暗文	-	無			
正木町遺跡	名古屋市中区	第21次 (2007)	SK12	暗文土師器	22	高坏 B			内面：放射状暗文 口縁端部を内側に巻き込む	古代	
			SK04	暗文土師器	35	皿B			内面：放射状暗文 口縁端部を僅かに内側に巻き込む 赤色粒(混和剤)を含むが少ない	I-17～C-2	
				暗文土師器	36	坏C			内面：螺旋暗文 口縁端部を内側に巻き込む 赤色粒(混和剤)を含む	I-17～C-2	
				暗文土師器	37	坏C			外面：丁寧なヘラケズリ 内面：放射状暗文 口縁端部を内側に巻き込む 赤色粒(混和剤)を多く含む	I-17～C-2	
			遺構外	彩色暗文土師器	81	皿A			彩色：赤色 内面：上位に円弧暗文、下位に放射状暗文 口縁端部を内側に巻き込む	-	
千音寺遺跡	名古屋市中川区	第7次 (2013)	No.12 トレンチ	暗文土師器	73	皿A	23.0	2.9	外面：ヘラミガキ 内面：放射状暗文 口縁端部を内側に巻き込む	-	
		第9次 (2021)	070SE	暗文土師器	081	皿A	(23.7)	2.7	外面：ヘラミガキ 内面：上位に1段の放射状暗文、 下位に2段以上の内螺旋状暗文	K-90	

第10表 暗文土器の出土例(名古屋市内中心)

## 第4章 まとめ

### 《参考文献》

#### 土器編年関係

##### 尾張須恵器・緑釉・灰釉陶器

城ヶ谷和広「第1章 総論 第3節 編年及び編年表 土師器・須恵器・施釉陶器(緑釉・灰釉)」『愛知県史 資料編4 考古4 飛鳥～平安』2011 愛知県

城ヶ谷和弘・井上喜久男「第4章第5節 編年論 須恵器・瓷器」『愛知県史 別編 窯業1 古代 猿投系』2015 愛知県

##### 弥生～古墳期土器編年

早野浩二「知多式以前-松崎遺跡・上浜田遺跡の脚台式製塩土器-」研究紀要第14号 2013 愛知県埋蔵文化財センター

古代煮沸具(鍋・甕)

永井宏幸「尾張平野を中心とした古代煮沸具の変遷」『鍋と甕 そのデザイン』第4回東海考古学フォーラム 1996 東海考古学フォーラム尾張大会実行委員会

##### 山茶碗

藤澤良祐「第1章 総論 第2節 灰釉陶器から山茶碗生産へ」『愛知県史 別編 窯業2 中世・近世 瀬戸系』2007 愛知県

山本智子「第3章 山茶碗」『新版 概説 中世の土器・陶磁器』2022 真陽社

##### 常滑焼(常滑窯)、渥美焼(渥美窯)

中野晴久「編年表」『愛知県史 別編 窯業3 中世・近世 常滑系』2012 愛知県

##### 古瀬戸、瀬戸・美濃大窯製品

藤澤良祐「編年表」『愛知県史 別編 窯業2 中世・近世 瀬戸系』2007 愛知県

中野晴久「第5章 中世陶器」『新版 概説 中世の土器・陶磁器』2022 真陽社

##### 中近世鍋類

北村和宏「尾張の伊勢型鍋」『鍋と甕そのデザイン』第4回東海考古学フォーラム 1996 東海考古学フォーラム尾張大会実行委員会

##### 貿易陶磁

山本信夫「第7章 貿易陶磁 第1節 中世前期の貿易陶磁器」『新版 概説 中世の土器・陶磁器』2022 真陽社

#### 埋蔵文化財・3次元活用関係

文化庁文化財部記念物課『定本 発掘調査のてびき―集落遺跡発掘編―』2016 同成社

文化庁文化財部記念物課『定本 発掘調査のてびき―各種遺跡調査編―』2016 同成社

文化庁文化財部記念物課『定本 発掘調査のてびき―整理・報告書編―』2016 同成社

愛知県埋蔵文化財センター『愛知県埋蔵文化財センター 基本マニュアル2021』2021

- 埋蔵文化財発掘調査体制等の整備充実に関する調査研究委員会『埋蔵文化財保護行政におけるデジタル技術の導入について1』2017 文化庁
  - 埋蔵文化財発掘調査体制等の整備充実に関する調査研究委員会『埋蔵文化財保護行政におけるデジタル技術の導入について2』2017 文化庁
  - 埋蔵文化財発掘調査体制等の整備充実に関する調査研究委員会『埋蔵文化財保護行政におけるデジタル技術の導入について3』2020 文化庁
  - 独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所『デジタル技術による文化財情報の記録と利活用3』奈良文化財研究所研究報告27 2021
  - 独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所『デジタル技術による文化財情報の記録と利活用4』奈良文化財研究所研究報告33 2022
  - 独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所『デジタル技術による文化財情報の記録と利活用5』奈良文化財研究所研究報告37 2023
- 中園 聡ほか『季刊考古学 第140号 3D技術と考古学』2017 雄山閣

#### 周辺遺跡関係

津島市史編さん委員会『津島市史(資料編)』1970 津島市教育委員会

新修名古屋市史資料編編集委員会『新修名古屋市史 資料編 考古1』2008 名古屋市

新修名古屋市史資料編編集委員会『新修名古屋市史 資料編 考古2』2013 名古屋市

愛知県史編さん委員会『愛知県史 資料編1 考古1 旧石器・縄文』2002 愛知県

愛知県史編さん委員会『愛知県史 資料編2 考古2 弥生』2003 愛知県

愛知県史編さん委員会『愛知県史 資料編3 考古3 古墳』2005 愛知県

愛知県史編さん委員会『愛知県史 資料編4 考古4 飛鳥～平安』2010 愛知県

愛知県史編さん委員会『愛知県史 資料編5 考古5 鎌倉～江戸』2017 愛知県

- 鈴木正貴・城ヶ谷和広他『清洲城下町遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第17集 1990 愛知県埋蔵文化財センター

#### 富田荘関係

富田のあゆみ編集委員会『富田のあゆみ』1985 富田地区名古屋市合併三十周年記念事業実行委員会

新修名古屋市史編集委員会『新修名古屋市史 第2巻』1998 名古屋市

- 愛知県埋蔵文化財センター中・近世研究部会「尾張国富田荘の考古学的研究-成願寺を中心として-」『研究紀要第5号』2004 愛知県埋蔵文化財センター

- 蔭山誠一・鬼頭剛「尾張国富田荘絵図に描かれた建物と海～中世富田荘周辺の古地理と遺跡～」『研究紀要第23号』2022 愛知県埋蔵文化財センター

金田章裕『地形と日本人 私たちはどこに暮らしてきたか』日経プレミアシリーズ438 2020 日経BP・日本経済新聞出版

金田章裕『なぜ、日本には基盤目の土地が多いのか』日経プレミアシリーズ489 2023 日経BP・日本経済新聞出版

## 千音寺遺跡関係

- 山田鉦一・野口泰子『千音寺遺跡発掘概要報告書』1999 名古屋市見晴台考古資料館
- 山田鉦一・野口泰子・新山雅広・鈴木茂「千音寺遺跡(第1・2次)」『埋蔵文化財発掘調査報告書35』名古屋市文化財調査報告47 2000 名古屋市見晴台考古資料館
- 野澤則幸「千音寺遺跡第3次発掘調査」『埋蔵文化財発掘調査報告書36』名古屋市文化財調査報告49 2001 名古屋市見晴台考古資料館  
伊藤雅乃『千音寺遺跡(北宮田団地)発掘報告書』2001 株式会社パスコ  
東園千輝男『下水道工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書千音寺遺跡』2001 国際航業株式会社
- 村木誠「千音寺遺跡第4次発掘調査報告」『埋蔵文化財発掘調査報告書41』名古屋市文化財調査報告54 2002 名古屋市見晴台考古資料館  
近藤真人・新山雅広・山形秀樹『千音寺遺跡発掘調査報告書 ー第4次中川区富田町千音寺付近下水道築造工事に伴う調査ー』2004 株式会社イビソク
- 田原和美『千音寺遺跡第5次発掘調査報告書』名古屋市見晴台考古資料館 2005  
大浜良介『千音寺遺跡発掘調査報告書 ー第6次中川区富田町千音寺付近下水道築造工事に伴う調査ー』2004 株式会社二友組  
木村有作「千音寺遺跡(第6次・第7次)」『埋蔵文化財発掘調査報告書73』名古屋市文化財調査報告90 2015 名古屋市教育委員会文化財保護室  
佐野貴紀・田中夕佳・竹原弘展『千音寺遺跡第8次発掘調査報告書 ー宮田用水排水路移設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書ー』2018 株式会社イビソク  
長崎千秋【研究ノート】千音寺遺跡(北部地域)範囲確認調査への予察』『名古屋市見晴台考古資料館研究紀要』第15号 2016 名古屋市見晴台考古資料館

## 中世墓・祭祀遺跡・墨書土器関係

- 坂井秀弥・寺崎裕助ほか『一之口遺跡西地区2』新潟県埋蔵文化財調査報告書40 1986 新潟県教育委員会  
服部哲也『高蔵遺跡第20次発掘調査報告書』1999 名古屋市見晴台考古資料館
- 早野浩二・鶴飼雅弘ほか『権現山遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第110集 2003 愛知県埋蔵文化財センター
- 伊藤厚史・木村有作ほか『埋蔵文化財調査報告書50 古沢町遺跡(第3次・第4次)』名古屋市文化財調査報告64 2004 名古屋市教育委員会  
岡本直久「第3章 特論 第3節 中世墓」『愛知県史 資料編4 考古4 飛鳥～平安』2010 愛知県
- 近藤正枝『興福地遺跡』岐阜県文化財保護センター調査報告書132 2015 岐阜県文化財保護センター
- 近藤正枝「扇出土遺跡の性格と扇を使用する祭祀について」『岐阜県文化財保護センター研究紀要1』2015 岐阜県文化財保護センター  
吉村武彦・加藤友康『墨書土器と文字瓦 -出土文字史料の研究-』2023 八木書店

## 井戸納め関係

- 伊藤秋男・原久仁子ほか『正木町遺跡発掘調査報告書』南山大学大学院考古学研究報告第7冊 1997 南山大学大学院考古学研究室  
平井美典『中畑遺跡II』草津川改修事業ならびに草津川放水路建設事業に伴う発掘調査報告書8 2005 滋賀県教育委員会事務局文化財保護課・財団法人滋賀県文化財保護協会
- 小林義彦・谷直子『高畑遺跡2 -高畑遺跡第20次調査報告-』福岡市埋蔵文化財調査報告書1150 2012 福岡市教育委員会
- 『岐阜県文化財保護センター調査報告書132:興福地遺跡』2015 岐阜県文化財保護センター  
井関弘太郎『沖積平野』1983 東京大学出版  
加藤安信編『遺跡からのメッセージ 発掘調査が語る愛知の歴史』2000 中日新聞社
- 愛知県埋蔵文化財センター中・近世研究部会「尾張国富田荘の考古学的研究 -成願寺を中心として-」『研究紀要第5号』2004 愛知県埋蔵文化財センター
- 蔭山誠一・鬼頭剛「尾張国富田荘絵図に描かれた建物と海～中世富田荘周辺の古地理と遺跡～」『研究紀要第23号』2022 愛知県埋蔵文化財センター

## 暗文土師器・東海道関係

- 赤塚次郎・バリノ・サーヴェイ株式会社『廻間遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第10集 1990 愛知県埋蔵文化財センター  
梶山勝「第6章 律令国家の確立 第4節 地方豪族と仏教」『新修名古屋市史 第1巻』1997 名古屋市  
服部哲也【資料紹介】東古渡町遺跡出土の古代土器』『名古屋市見晴台考古資料館研究紀要』第3号 2001 名古屋市見晴台考古資料館  
樋上昇「県内遺構・遺物集成 No.20 畿内産(系)土師器」『まいぶん愛知 No.64』2001 愛知県埋蔵文化財センター
- 樋上昇「八王子遺跡の古代をめぐる諸問題」『八王子遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第92集 2002 愛知県埋蔵文化財センター
- 木川正夫・蔭山誠一ほか『川田遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第103集 2002 愛知県埋蔵文化財センター  
伊藤敬太郎・鈴木恵介ほか『金山北遺跡-金山北地区開発事業に伴う第2次発掘調査報告書-』2004 国際航業株式会社  
服部哲也「正木町遺跡(第21次)」『埋蔵文化財調査報告書58』名古屋市文化財調査報告74 2008 名古屋市教育委員会  
天野暢保「第4章 特論 第4節 交通路・駅家」『愛知県史 資料編4 考古4 飛鳥～平安』2010 愛知県  
新修名古屋市史資料編編集委員会『新修名古屋市史 資料編 考古2』2013 名古屋市  
木村有作「千音寺遺跡(第6・7次)」『埋蔵文化財調査報告書73』名古屋市文化財調査報告90 2015 名古屋市教育委員会  
森暢郎「暗文土師器の編年と規範」『纏向学研究センター研究紀要 纏向学研究 第4号』2016 桜井市纏向学研究センター  
樋田泰之『尾張元興寺跡第16次発掘調査報告書』2017 ナカシャクリエイテブ株式会社  
近江俊秀「古代の東海地方の流通と交通」『令和4年度考古学セミナー あいちの考古学2022 発表資料集』2022 愛知県埋蔵文化財センター  
永井邦仁「東海道駅路の成立と古代境川流域の動向」『古代猿投寨における井ヶ谷古窯跡群を考える 資料集』2022 考古学フォーラム

- 印は全国遺跡報告総覧(奈良文化財研究所)のホームページからダウンロード可能なものです。url=<http://sitereports.nabunken.go.jp/ja>

# 千音寺遺跡で確認される崖地形について

鬼頭剛 (愛知県埋蔵文化財センター)

## 1 はじめに

千音寺遺跡にて地下層序を観察する機会を得た。その層相観察の結果を報告する。

## 2 試料および分析方法

調査区で遺構検出面からバックホウにより掘削し層序断面を露出させ、層序断面図の作成と試料採取を行なった。層序断面図の作成にあたり、層相・粒度・色調・堆積構造・化石の有無などの特徴を詳細に記載した。また、層序断面からは放射性炭素年代測定や微化石分析といった今後の自然科学分析に供するための試料を採取した。

## 3 層相の観察

千音寺遺跡の調査区1区では北から南へ4地点でバックホウによる深掘を実施した(第1図)。調査区1区の区画は東西方向の長さ約10mに対し南北方向の長さ257mと南北方向に細長い調査区(9-1区)である。調査区内でひときわ目についたのが北側で検出された崖状の遺構である。南端の遺構検出面の標高が約-0.4m前後であるのに対し、北へ向かうに従って-0.5m、-0.6m、-0.7mと標高を減じていく。調査区の南端から標高-0.7m～-0.4mの範囲をもって肉眼観察ではほぼ同じ高さで水平に続いてみえる遺構検出面が、調査区の北部になると遺構検出面の標高は0.2mとなり、標高に1m近い差異がみられた。また、標高差がみられる境界付近では水平約1mの距離のあいだに標高約1mの差が認められ、その正接( $\tan \theta$ )をとれば $\theta = 45$ 度で南傾斜をもつ地形の急変点が認められた。現地では地形の傾斜角度以上に急峻に感じられ「崖」と形容できるほどであった。南への傾斜面は東西方向の走向をもって連続した。この崖面に対して直交する方向(南北方向)にバックホウを用いて深掘を行った。これは崖を形成する地形断面の地層を確認するためである。

現れた地層断面には下位層より(第2図のP1)、標高-1.09m～-1.05mは黄褐色を呈する中粒砂の混じる粘土質シルト層からなる。塊状・均質で堆積構造はみられない。含まれる砂粒子の淘汰は良好である。本層の標高-1.07mの層準より試料1を採取した。標高-1.05m～-0.97mは黄褐色を呈する中粒砂の混じる粘土質シルト層である。塊状・均質で堆積構造はみられない。本層も含まれる砂粒子の淘汰は良好である。本層の標高-1.03mの層準より試料2を採取した。標高-0.97m～-0.95mは褐灰色を呈するシルト質粘土層である。塊状・均質で堆積構造はみられない。標高-0.95m～-0.87mは褐灰色の中粒砂の混じる粘土質シルト層である。塊状・均質で堆積構造はみられない。標高-0.87m～-0.49mは褐色を呈するシルト質粘土層である。塊状・均質で堆積構造はみられない。標高-0.49m～-0.41mは褐色のシルト質粘土層である。本層も塊状・均質で堆積構造はみられない。標高-0.41m～-0.19mは褐色の砂混じり粘土質シルト層である。本層より砂粒子が混ざるようになり、それは標高0.25mの遺構検出面をつくる地層までつづく。塊状で堆積構造はみられない。植物の根に鉄が沈着した根跡が水平な層理面に対して鉛直方向に多くみられ、それらが斑状構造を示している。標高-0.19m～-0.11mは褐色の砂粒子の混じる粘土質シル

ト層である。本層も砂粒子が混じる。塊状で堆積構造はみられない。植物の根跡に由来する鉄の斑状構造がみられる。標高 -0.11m ~ 0.03m も褐色の砂粒子の混じる粘土質シルト層となる。堆積構造はみられない。植物の根跡に由来する鉄の斑状構造がみられる。標高 0.03m ~ 0.09m は褐色の砂粒子の混じる粘土質シルト層である。堆積構造はみられない。植物の根跡に由来する鉄の斑状構造がみられる。標高 0.09m ~ 0.25m は褐色の砂粒子の混じる粘土質シルト層である。堆積構造はみられない。植物の根跡に由来する鉄の斑状構造がみられる。本層の頂部 (0.25m) が遺構検出面となる。

調査区の北部でバックホウによる掘削を行った P1 地点から南へ約 10m 隔たった場所で、同じくバックホウによる掘削を行った (第 2 図の P2)。下位層より、標高 -1.58m ~ -1.30m は灰色の中粒砂層である。淘汰は良好である。本層掘削時に瞬時に湧水したため堆積構造は確認できていない。本層の下部、標高 -1.56m で試料 1 を採取した。標高 -1.30m ~ -1.02m は灰色を呈するシルト質粘土の混じる中粒砂層となる。砂に比べてシルトや粘土の細粒な堆積粒子を含むことで下位層と区分できる。堆積構造はみられない。本層の下部、標高 -1.28m で試料 2 を採取した。標高 -1.02m ~ -0.91m は灰褐色の粘土層である。塊状で堆積構造はみられない。本層の下部標高 -1.00m で試料 3 を採取した。標高 -0.91m ~ -0.83m は黒褐色を呈する粘土層である。塊状で堆積構造はみられない。本層にも鉄の沈着した根跡が多くみられる。本層の標高 -0.88m の層準で試料 4 を採取した。標高 -0.83m ~ -0.80m は灰色の粘土層である。塊状で堆積構造はみられない。鉄の沈着した根跡が多くみられる。本層の頂部、標高 -0.80m が遺構検出面となる。本層の標高 -0.82m の層準で試料 5 を採取した。

P2 の最下位で確認された中粒砂層について調査区の地下での連続性を確認するため、井戸遺構 (070SE) が確認された場所 (第 1 図) で掘削を行った。最下位層として青灰色を呈する淘汰良好な中粒砂が認められた。中粒砂層が露出してすぐに湧水したためそれ以深の掘削を断念した。

#### 4 千音寺遺跡の地層からわかる堆積環境の変遷

調査区 1 区の北には標高差約 1m で南方向へ約 45 度傾いた勾配をなし、傾斜面が東西方向に連続する崖面が認められた。崖面を直交方向に掘削し地層断面を観察したところ、最下位層として標高 -1.09m ~ -1.05m に中粒砂の混じる粘土質シルト層が認められた。粘土質シルト層は標高 -0.87m まで累重する。標高 -0.87m から標高 -0.41m までは砂粒子を含まないシルト質粘土層が累重した。堆積物を構成する粒度から標高 -1.09m から標高 -0.41m までは地層が上位層ほど細かい堆積粒子から構成されるようになる上方細粒化傾向を示す。いっぽう、標高 -0.41m から遺構検出面を形成した標高 0.25m までは砂粒子の混じる粘土質シルト層から構成されている。それまでの下位層が砂粒子を含まない粘土層がみられたのとは一転し、標高 -0.41m までは砂粒子を含むようになるのが特徴である。崖面を形成する地層は、地層の厚さ約 1.3m の中に地層の層相の変化が認められた。

さて、今回の千音寺遺跡の調査区の西約 0.20km には現在、福田川が北から南へ流下する。調査地点は名古屋市を流下する庄内川、福田川、戸田川のつくる完新統の低地となっている。治水地形分類図によれば調査地周辺には自然堤防や後背湿地が散在する場所にあたる。とくに調査区 1 区の北側は治水地形分類図で自然堤防に分類された場所にあたっており、調査区 1 区内に自然堤防と後背湿地との境界が存在する。

千音寺遺跡にて深掘により観察された地層について、地点 1 では粘土質シルト層やシルト質粘土層が認められた。堆積地質学者マイアルの堆積相分類 (Miall(1978)) では FI に分類でき、自然堤防堆積物であると考えられる。いっぽう、P2 で確認された標高 -1.02m ~ -0.80m までの灰褐色、黒褐色、灰色を呈する粘土層は上記のマイアルの堆積相分類では Fsc に該当し、後背湿地の堆積物であると解釈される。調査区 1 区の深掘により観察された地層から推定される古環境は、P1 では自然堤防、P2 では後背湿地が推定され、治水地形分類図による自然堤防と後背湿地の地形分類とも矛盾しない。

ところで、調査区 1 区の深掘 P1 地点では自然堤防の地層であると解釈された。千音寺遺跡は完新統の地層よりなる低地にある。低地の地形要素には自然堤防や後背湿地、放棄河道に滞水した池や沼、三角州などがある。P1 の堆積相解析から自然堤防と解釈されたこととも矛盾しない。P1 で標高 -0.41m ~ 0.25m (遺構検出面) までに認められた砂粒子の混じる粘土質シルト層には植物の根跡に鉄が沈着した斑状構造がみられた。これなどは自然堤防上に植物が繁茂していた事実を示すものである。斑状構造をもつ粘土質シルト層の層理面はほぼ水平な面を形成しており、どちらの方向にも傾斜していなかった。低地の地層を上方へ累重させる水の営力のひとつは洪水である。洪水の度にバウムクーヘンの薄皮が作られていくように、地形の上を堆積物が覆うのである。P1 ではみかけの傾斜 45 度で南へ傾く崖が検出された。南へ傾斜した崖が認められるということは、その上を覆う地層も南へ傾斜してそれまでの地形を覆っていくのが普通である。ところが、崖の地層断面で観察された層理面はほぼ水平であった。観察される地形とその内部の地層とが整合しないのである。加えて、乾燥した砂をイメージするとわかりやすいが、堆積物粒子のひとつひとつを上から連続して落下させると、その下には円錐形の小山ができる。この小山の斜面と水平面とがつくる角度を安息角あんそくかくと言う。堆積粒子に生じる摩擦が重力に抵抗できる傾斜角を示し、乾いたゆる詰めゆる詰めの砂ではおよそ 20 度から 30 度の角度をもつ。P1 の崖を形成した地層は砂粒子の混じる粘土質シルト層であった。砂に比べて細粒なため凝集力をもつものの、降雨などによる侵食や地滑りなどが生じると、45 度の角度をもった崖の傾斜地形を長いあいだ保存することは難しいと思われる。

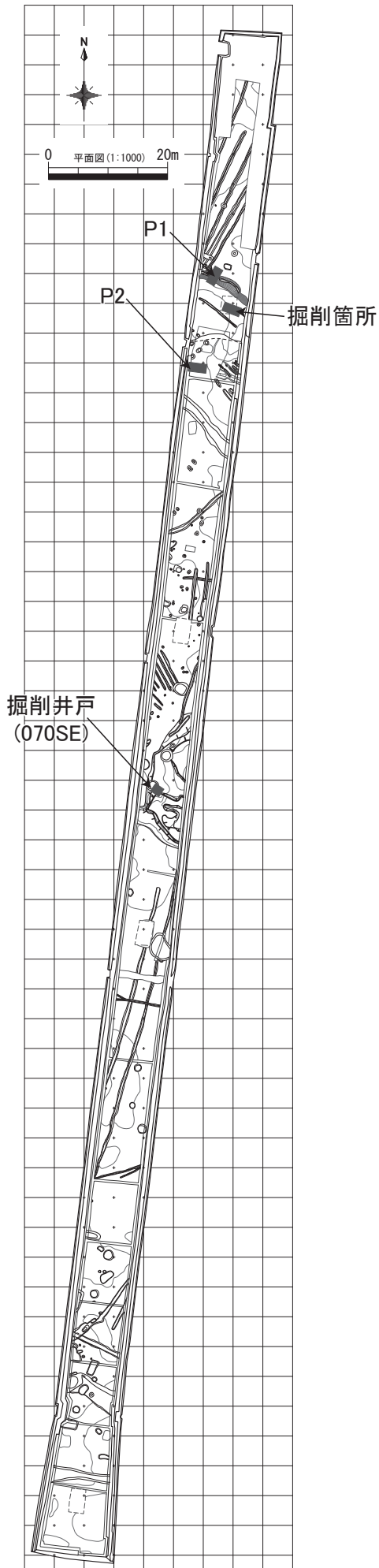
以上のことから、調査区 1 区でみられた特徴的な崖は、崖の傾斜方向と地層断面で確認される層理面の傾斜とが矛盾すること、また、堆積物粒子の安息角を超えた 45 度の角度のままに崖地形を長期間保存させることは難しく、地質学的にみると極めて不自然な地形であると言える。自然堤防を形成していた地層が人工的に改変を受けた結果を観察している可能性が指摘できる。崖地形の観察された P1 および P2 では地層から科学分析用の試料を採取している。今後これら試料の放射性炭素年代測定や微化石分析を進めれば、千音寺遺跡における自然堤防や後背湿地などの古地形や古環境の形成史が明らかになるであろう。

#### 謝辞

本論を作成するにあたり、株式会社四門の樋田泰之氏、坂野俊哉氏には発表の機会を与えていただいた。また、調査地での試料採取および図表の作成もお手伝いいただいた。記して厚くお礼申し上げます。

#### 《参考文献》

Miall, A. D., 1978, Facies types and vertical profile models in braided river deposits: a summary, in Miall, A.D., ed., Fluvial sedimentology: Canadian Society of Petroleum Geologists, Memoir 5, 597-604.



P1 断面状況 東から



P2 断面状況 東から

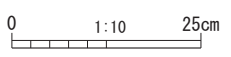
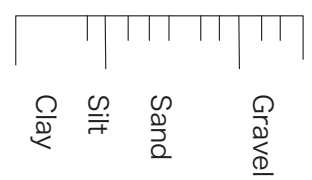
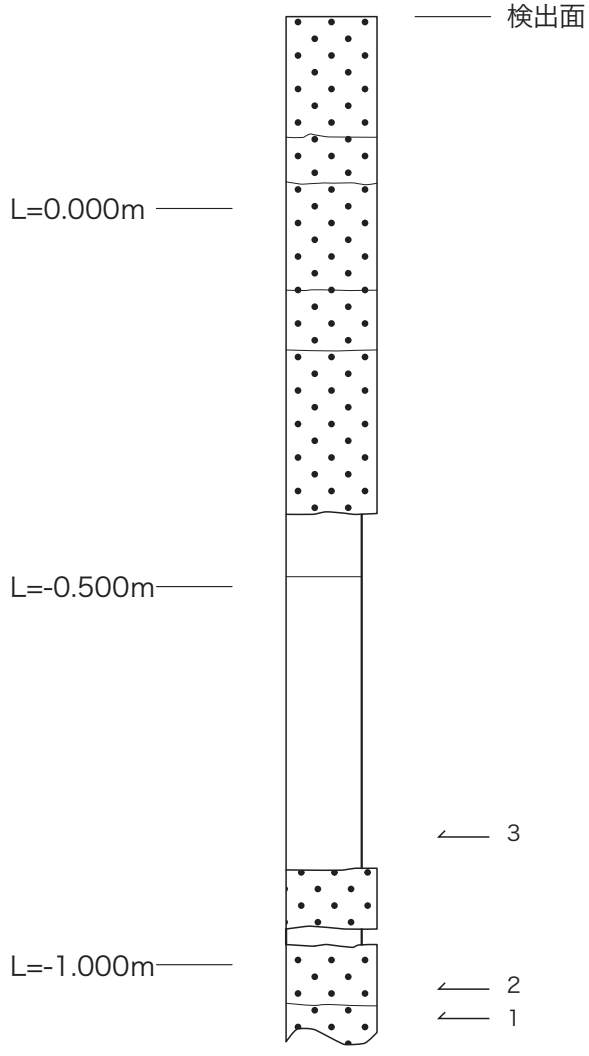


070SE 南西から

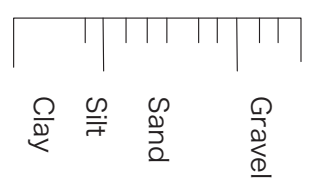
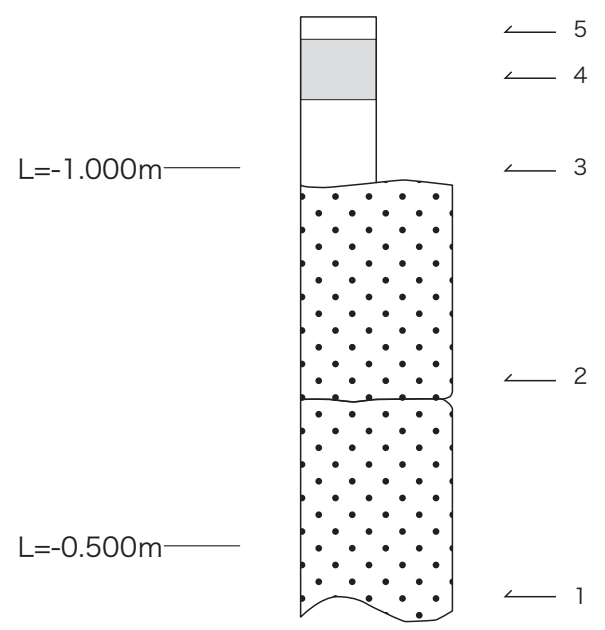
第1図 1区深掘実施地点



付載  
標高  
(m)  
P1  
L=0.500m



標高  
(m)  
P2  
L=-0.500m



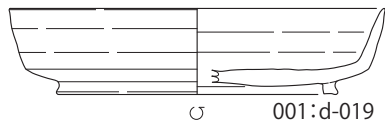
第 2 図 P1・P2 柱状図

# 圖 版

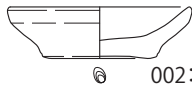


1区

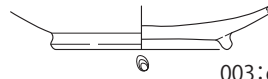
001SD



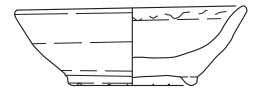
001:d-019  
須恵器坏



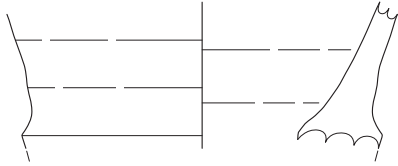
002:d-058  
土師皿



003:d-060  
灰釉皿



004:d-061  
小碗



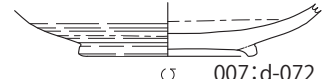
005:d-066  
須恵器鉢



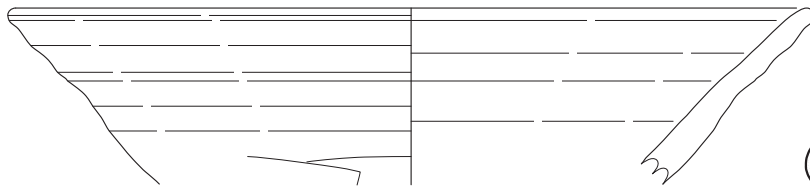
006:d-068  
灰釉皿



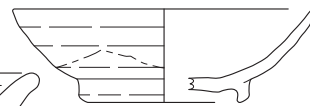
(赤色顔料)



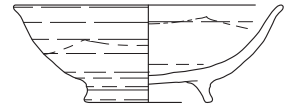
007:d-072  
灰釉皿



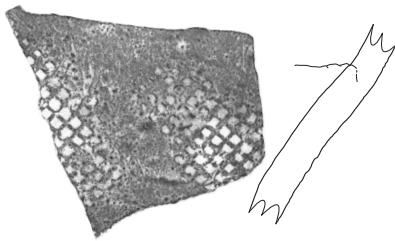
008:d-069  
常滑片口鉢



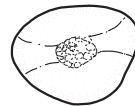
009  
灰釉碗



010  
灰釉碗



011  
常滑大甕

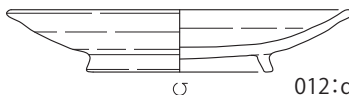


石1:d-017  
叩石

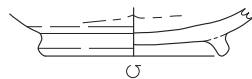


石3  
叩石

003SD

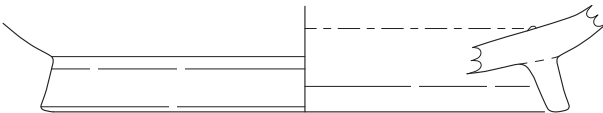


012:d-002  
緑釉素地皿



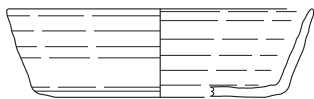
013:d-002  
灰釉碗

004SD



014:d-025  
灰釉鉢

010SK

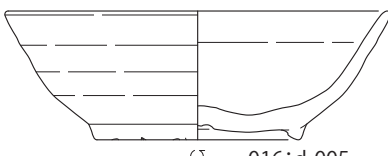


015  
須恵器坏身

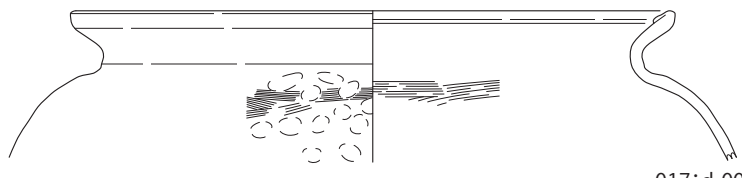
0 石 (1/5) 10cm

0 土器 (1/3) 10cm

008SD



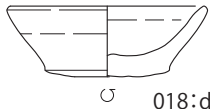
016:d-005  
山茶碗



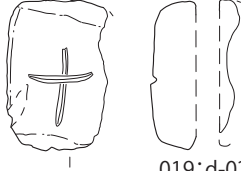
017:d-006  
伊勢型鍋

実測図 (1)

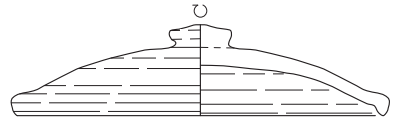
008SD



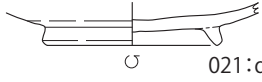
018:d-009  
小皿



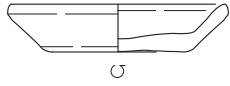
019:d-020  
陶錘



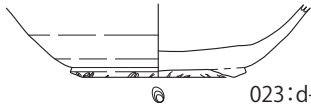
020:d-037  
須恵器蓋



021:d-039  
灰釉皿



022:d-045  
小皿



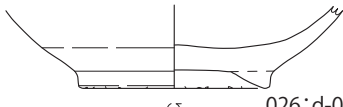
023:d-047  
山茶碗



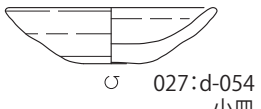
024:d-048  
伊勢型甕



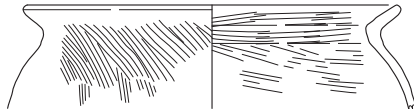
025:d-049  
白磁碗



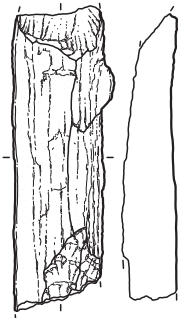
026:d-052  
山茶碗



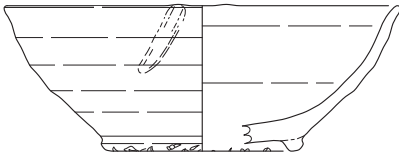
027:d-054  
小皿



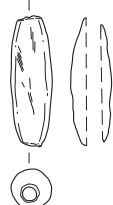
028:d-056  
濃尾型甕



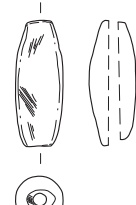
033:d-095  
須恵器坏



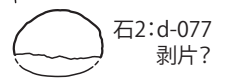
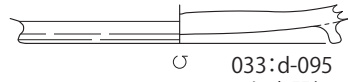
029:d-057  
山茶碗



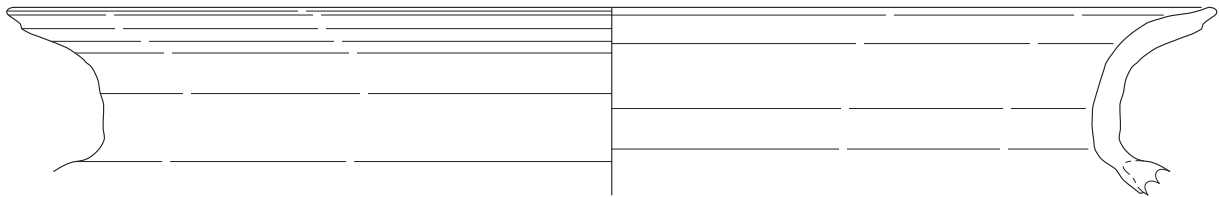
030:d-062  
土錘



031:d-063  
陶錘



石2:d-077  
剥片?



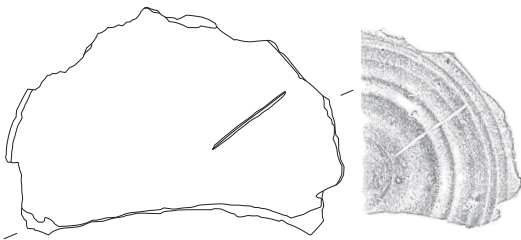
032:d-070  
常滑大甕

012SP

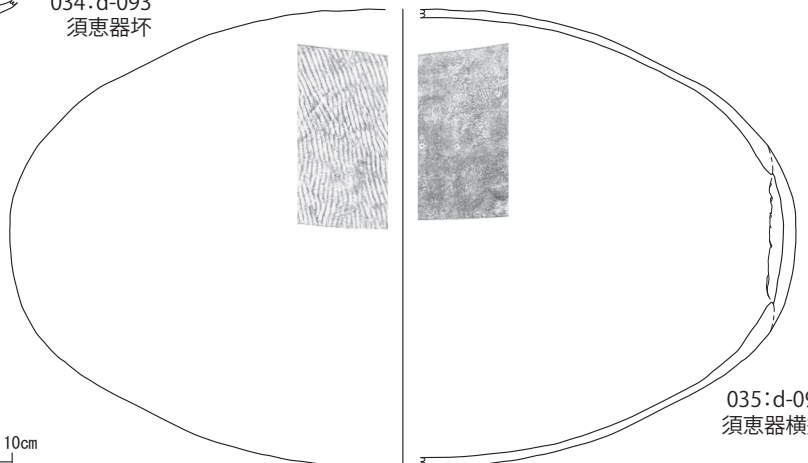
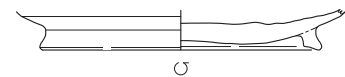


木28:d-088  
柱根

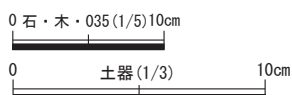
017SD



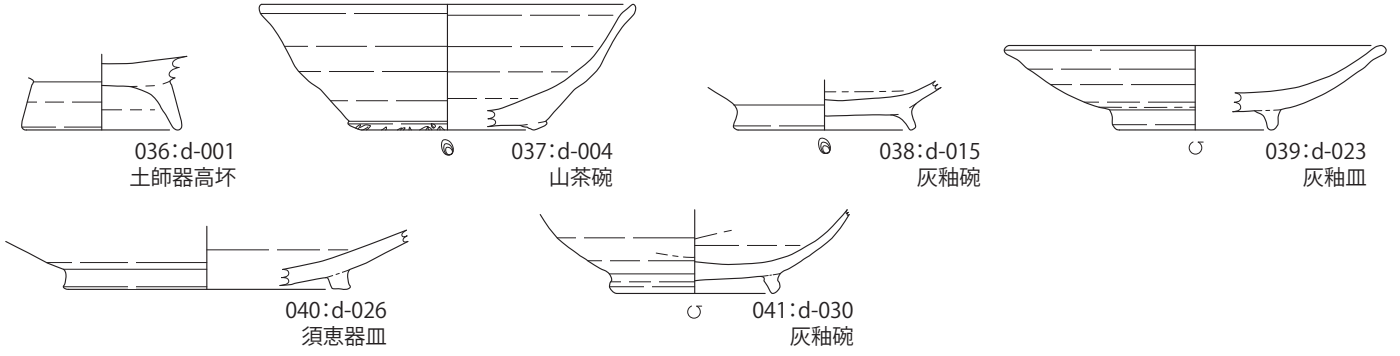
034:d-093  
須恵器坏



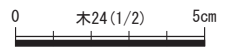
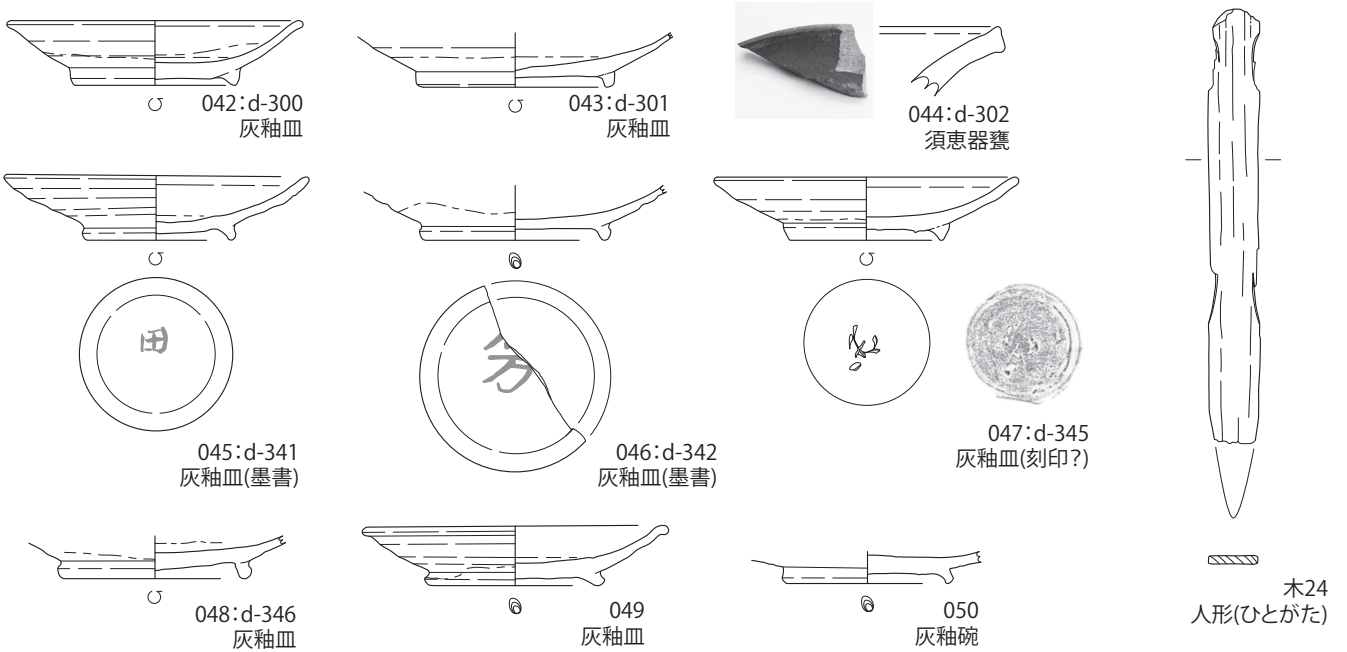
035:d-094  
須恵器横瓶



遺物包含層出土の遺物(北部)

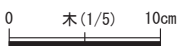
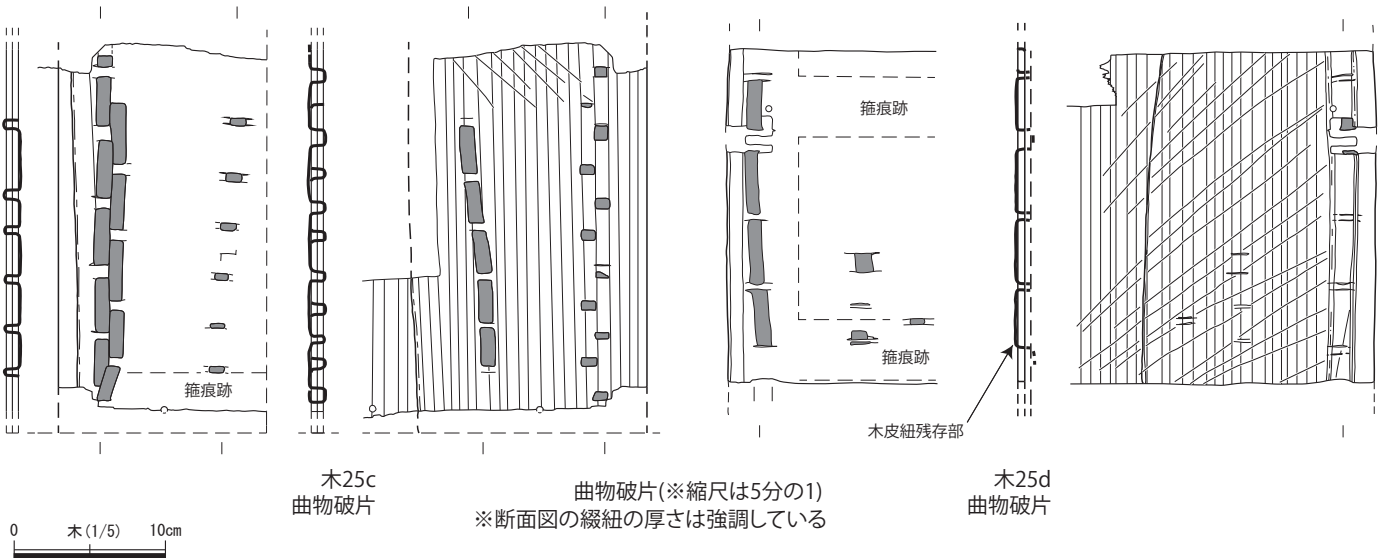


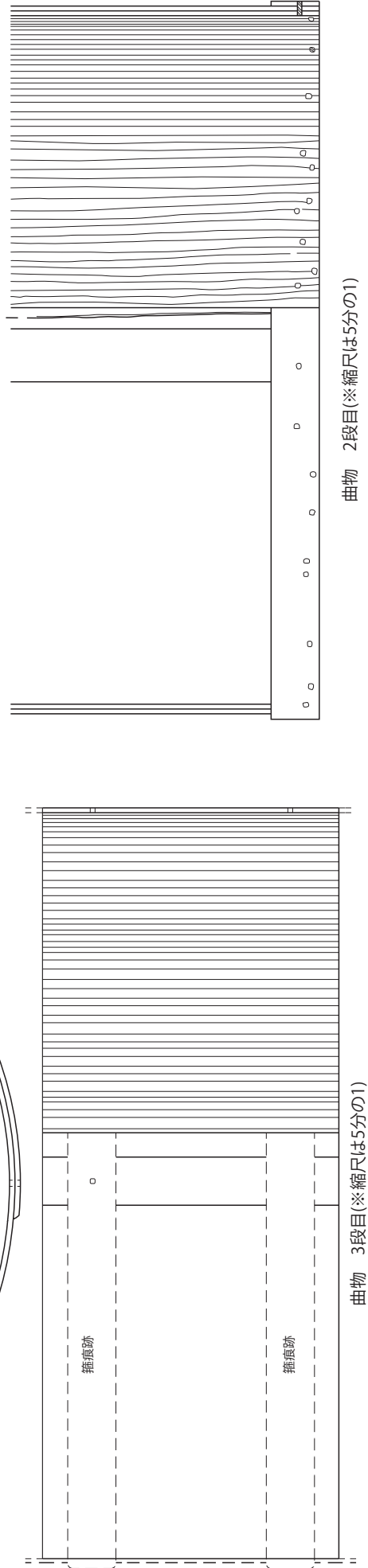
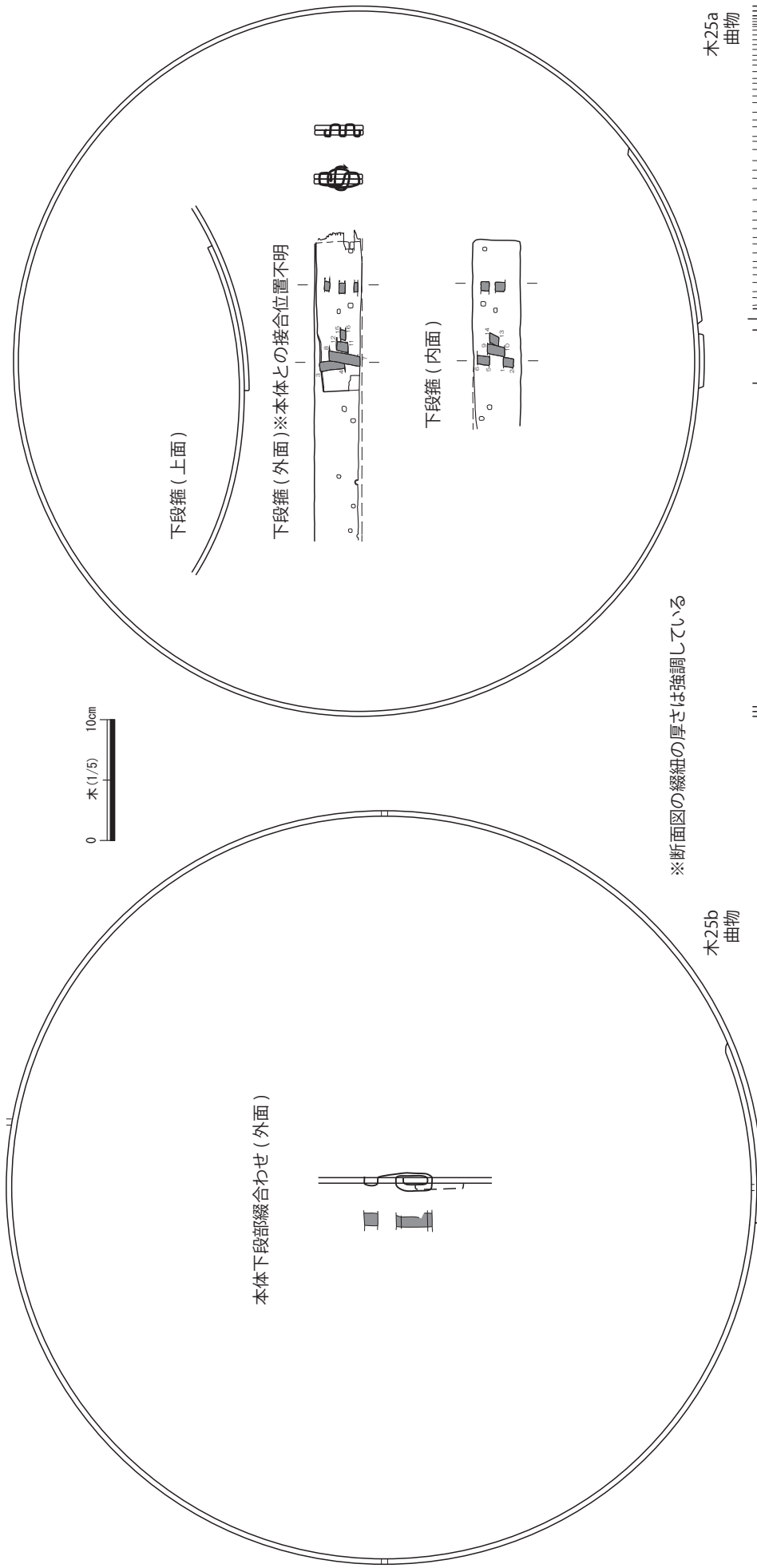
030SE



縦合わせ破片 (1 段目か)  
縦合わせ破片 (外面)      縦合わせ破片 (内面)

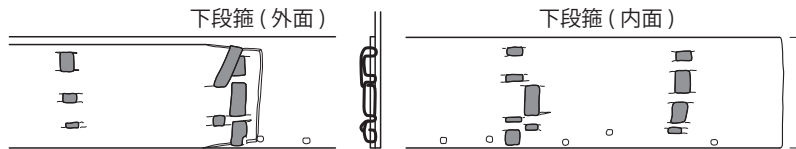
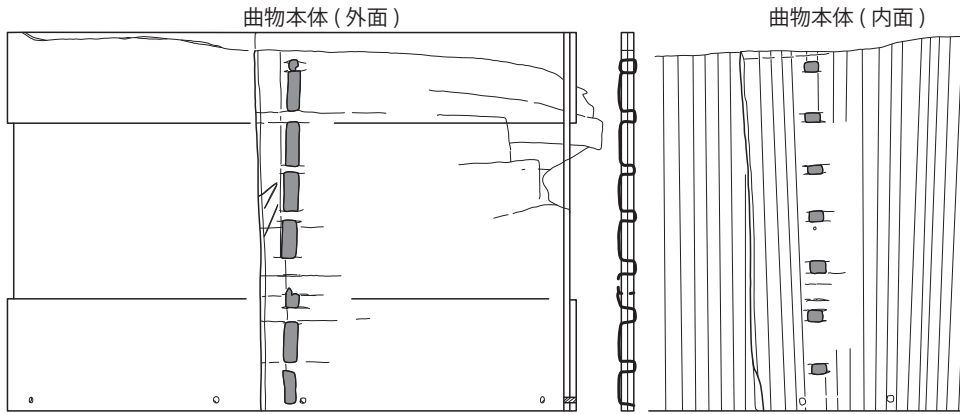
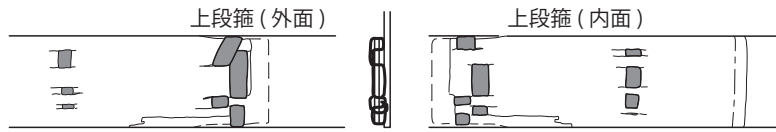
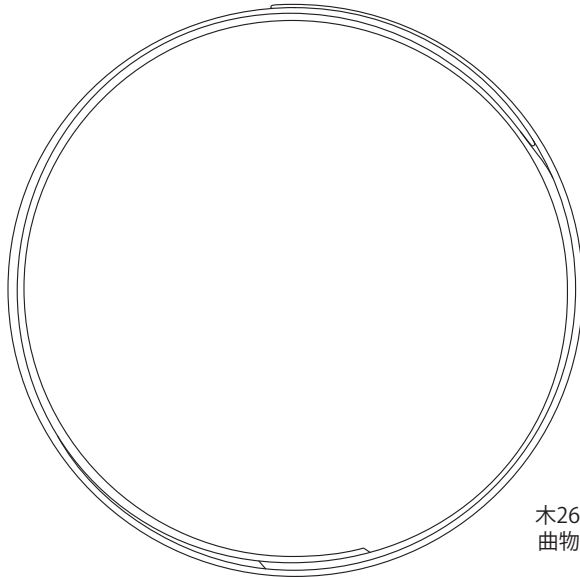
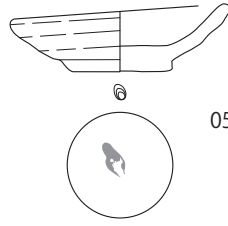
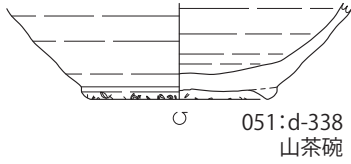
縦合わせ破片 (2 段目か)  
縦合わせ破片 (外面)      縦合わせ破片 (内面)





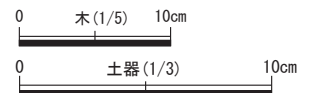
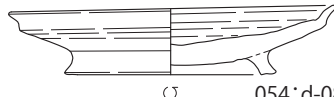
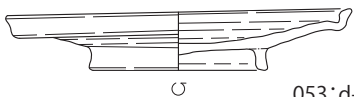
実測図 (4)

040SE

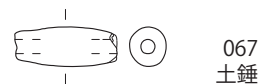
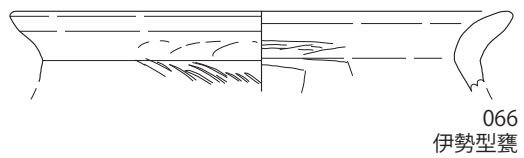
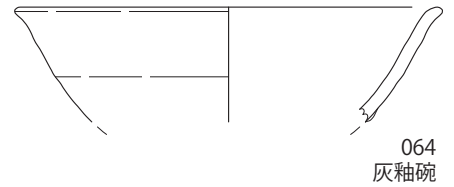
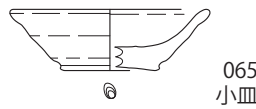
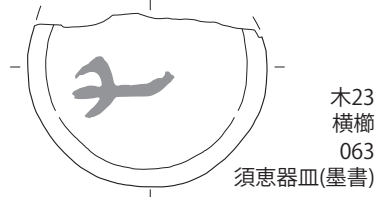
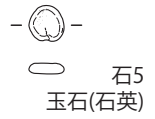
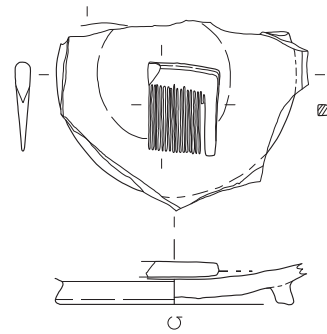
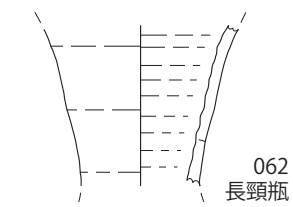
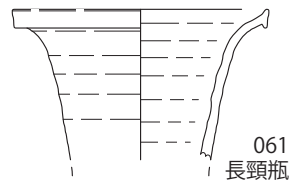
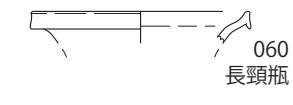
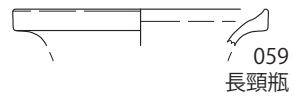
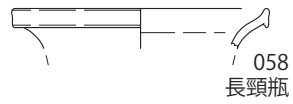
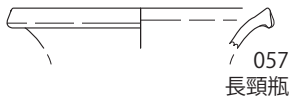
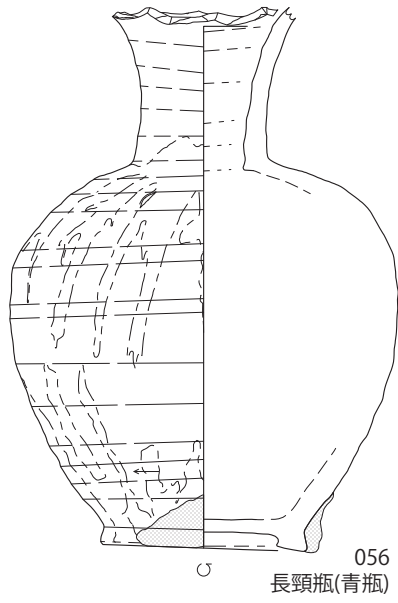
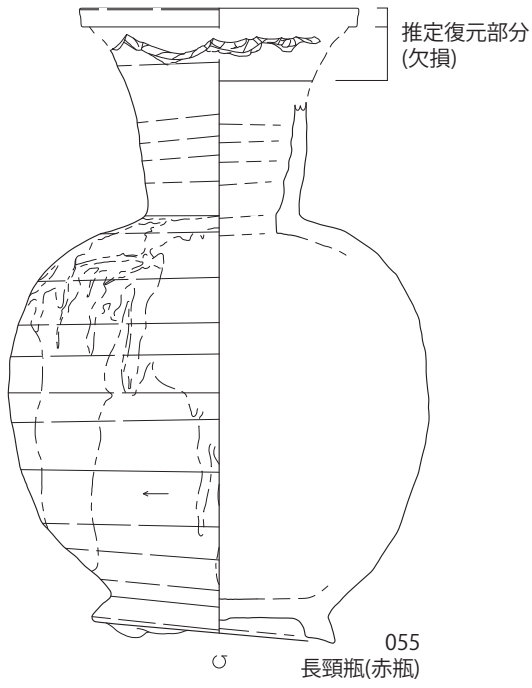


曲物 3段目(※縮尺は5分の1)  
※断面図の綴紐の厚さは強調している

遺物包含層出土の遺物(中部・089SD東側)

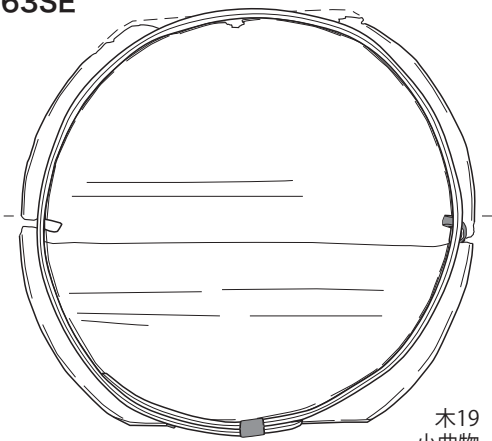




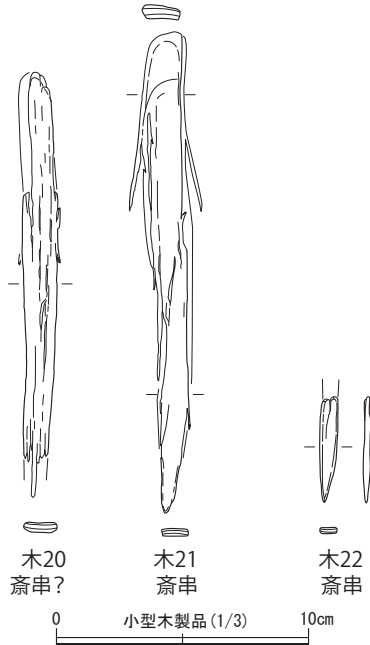
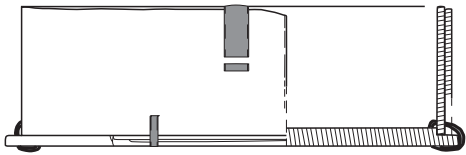


実測図(6)

063SE



木19  
小曲物

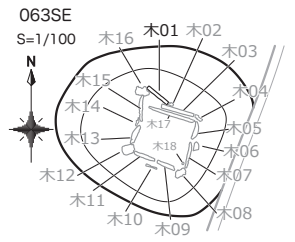


木20  
齋串?

木21  
齋串

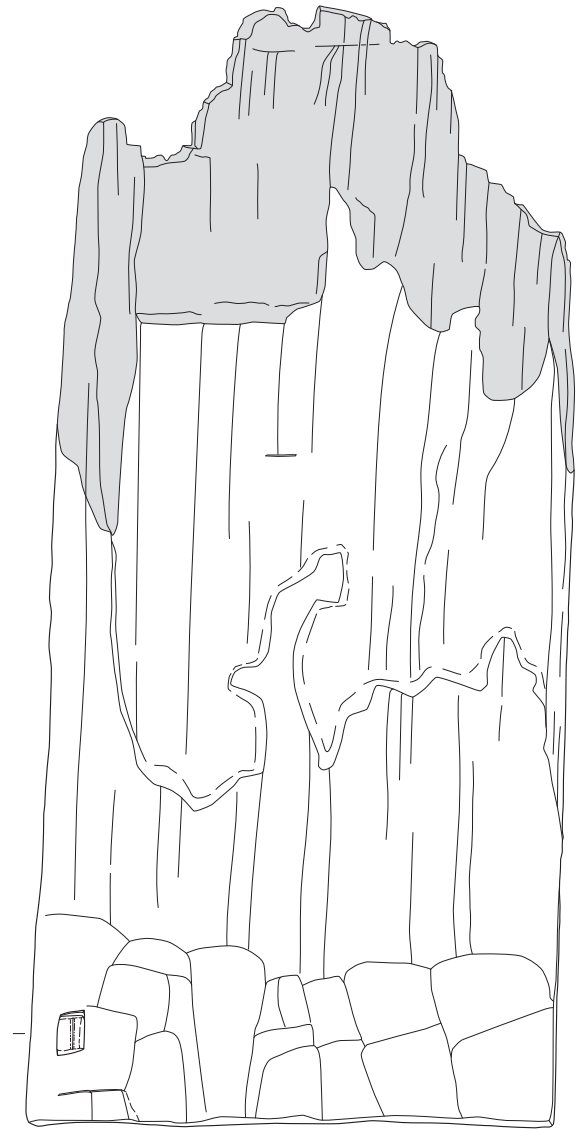
木22  
齋串

0 小型木製品 (1/3) 10cm



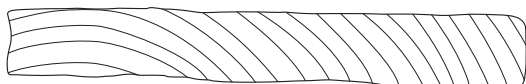
外側

内側



穿孔部分

溶解して滅した部分



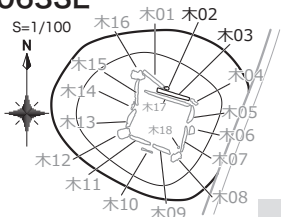
木01:板1  
井戸側板



0 大型木製品 (1/5) 25cm

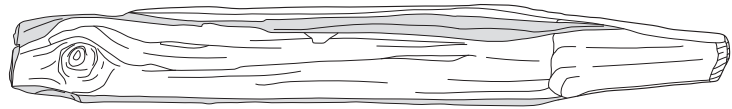
実測図 (7)

063SE



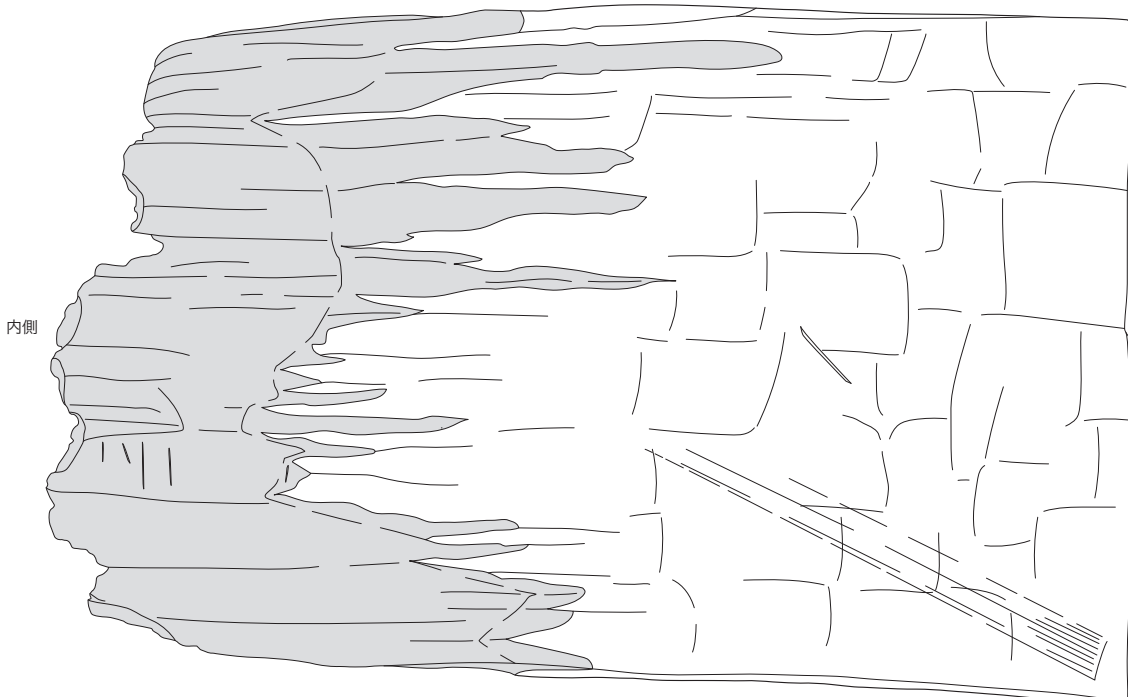
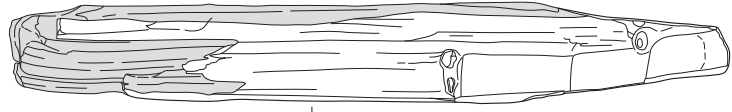
0 25cm  
大型木製品 (1/5)

溶解して消失した部分



採集時方向不明

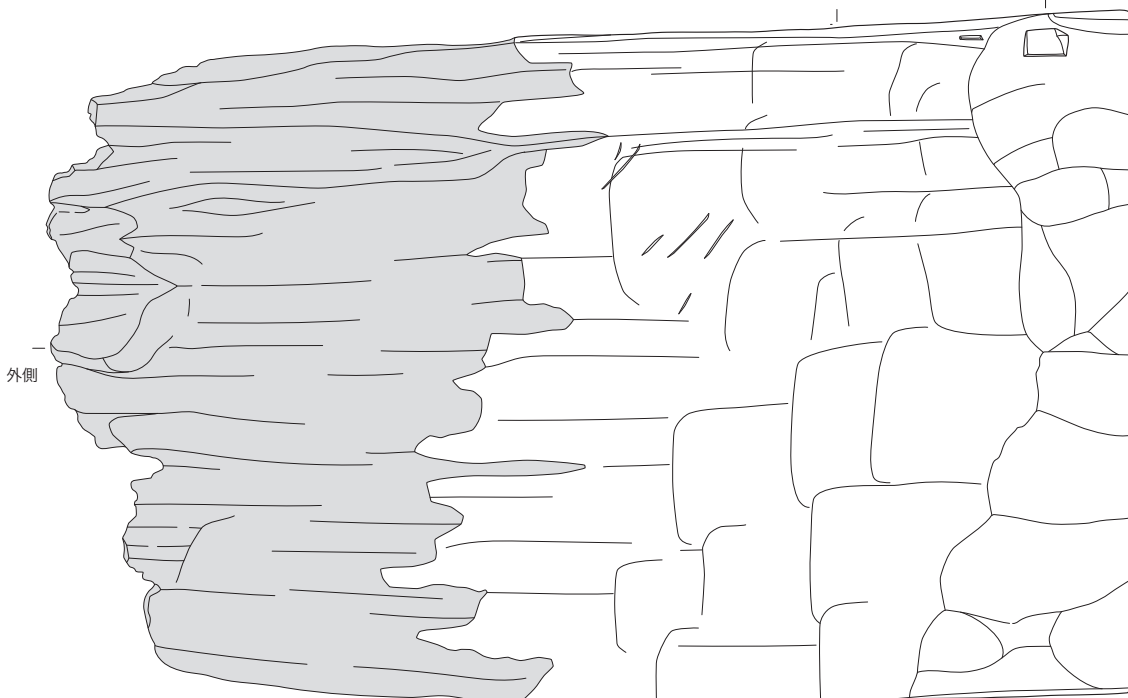
木02: 杭8  
井戸杭材



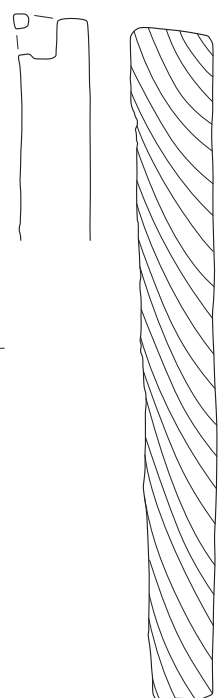
内側



木03: 板8  
井戸側板



外側

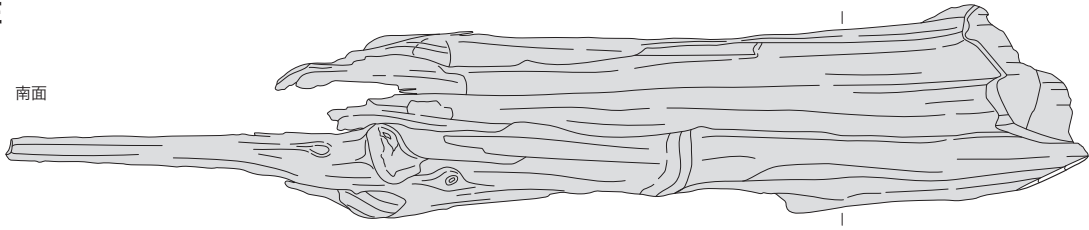


穿孔部分

実測図 (8)

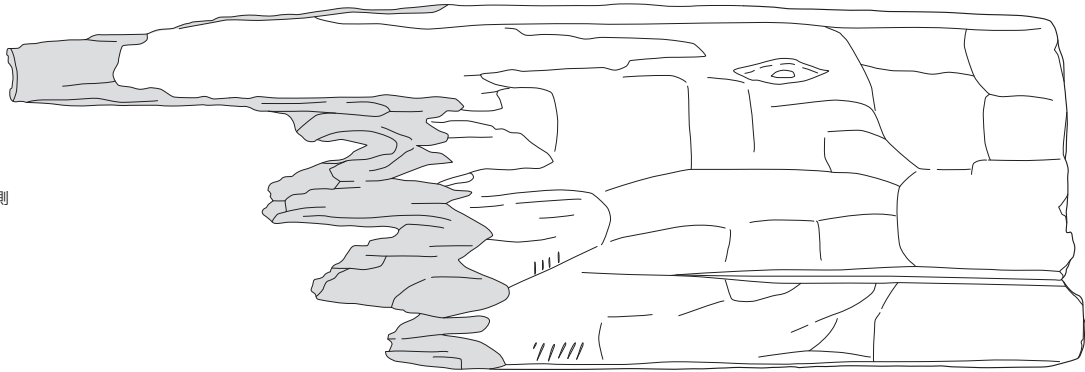
063SE

南面



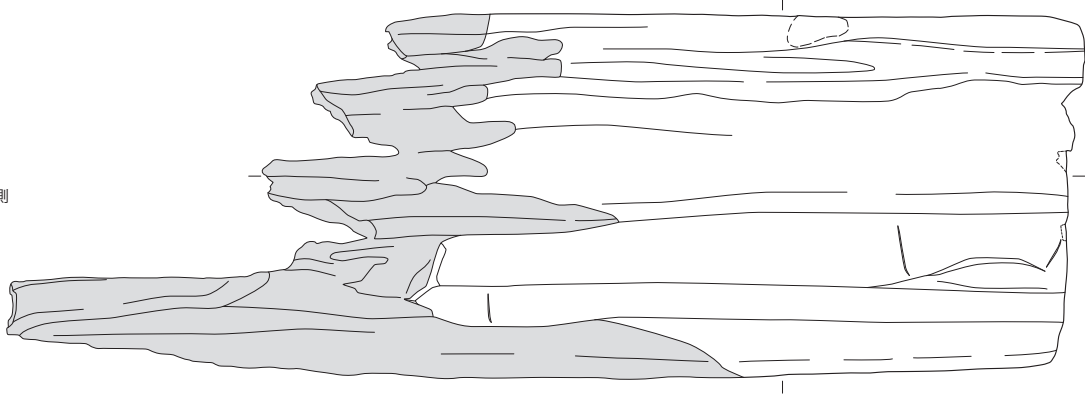
木04:杭7  
井戸杭材

内側

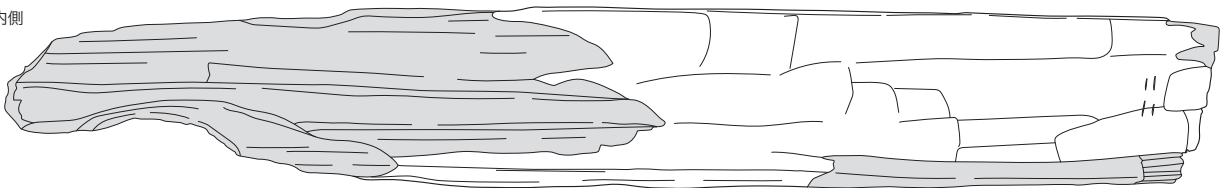


木05:板7  
井戸側板

外側

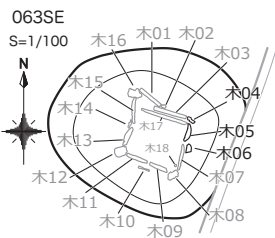
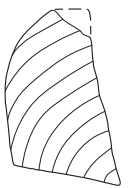


内側



木06:杭6  
井戸杭材

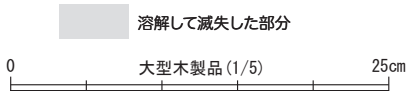
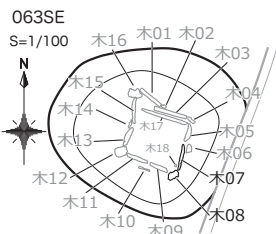
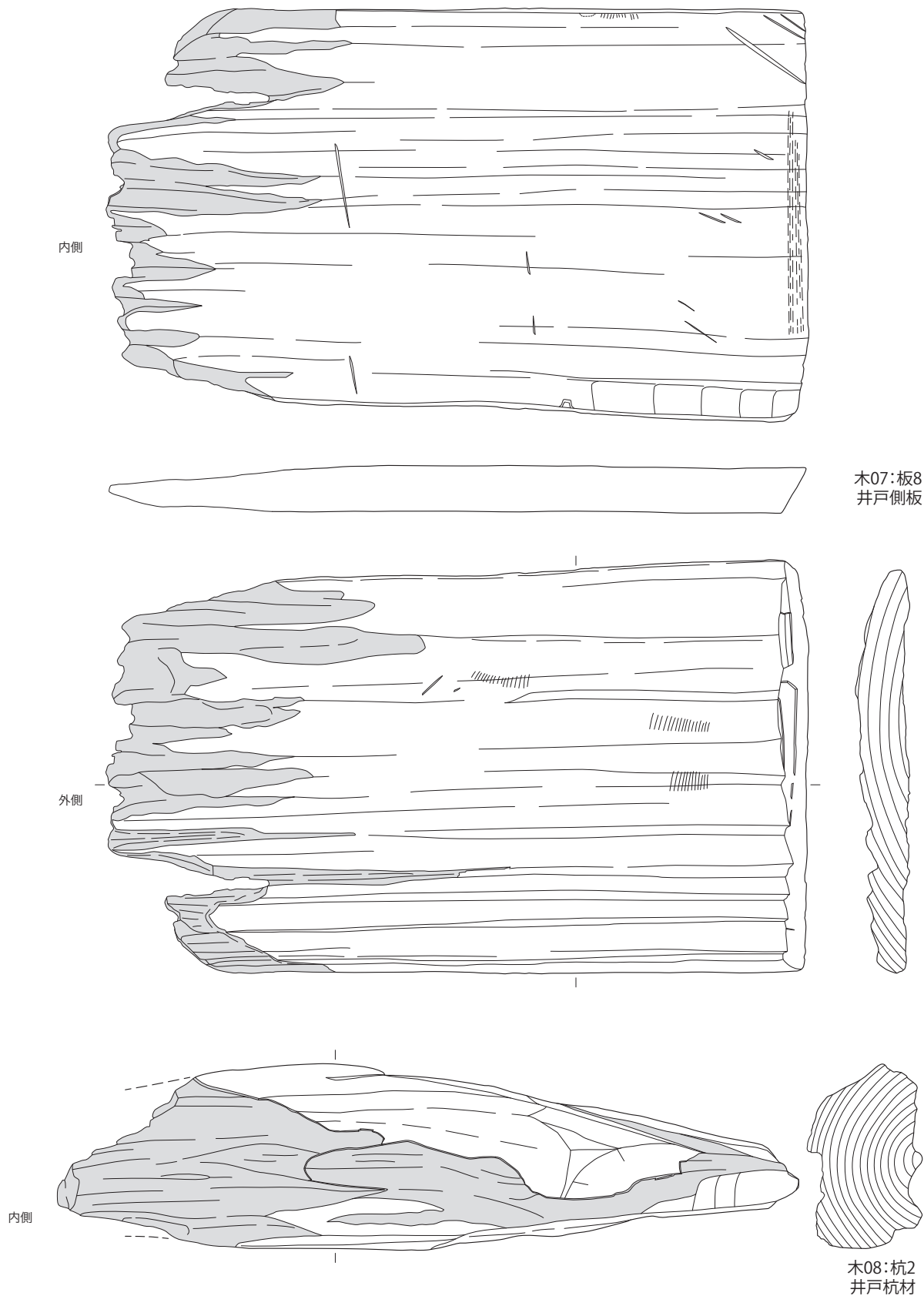
外側



溶解して滅失した部分

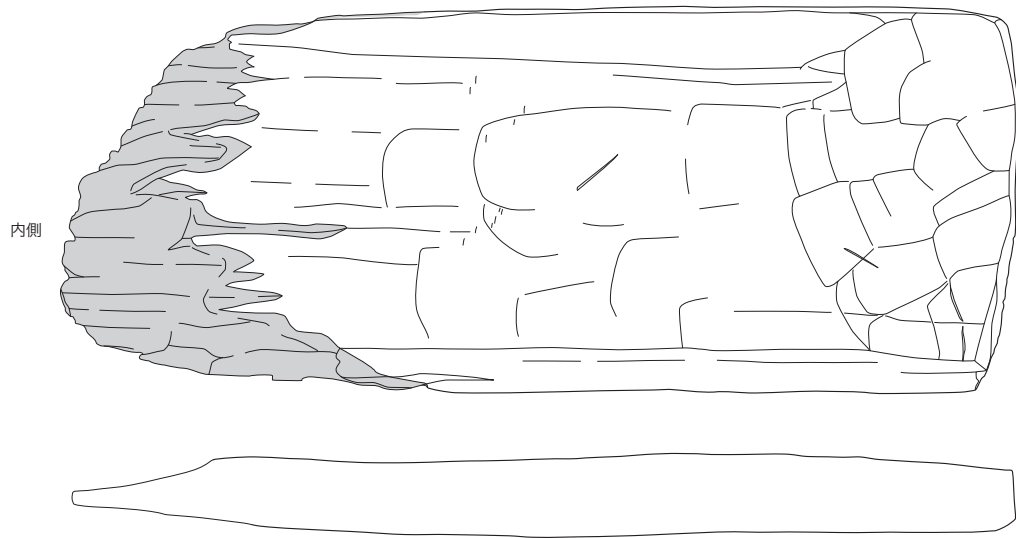
0 25cm  
大型木製品 (1/5)

実測図 (9)

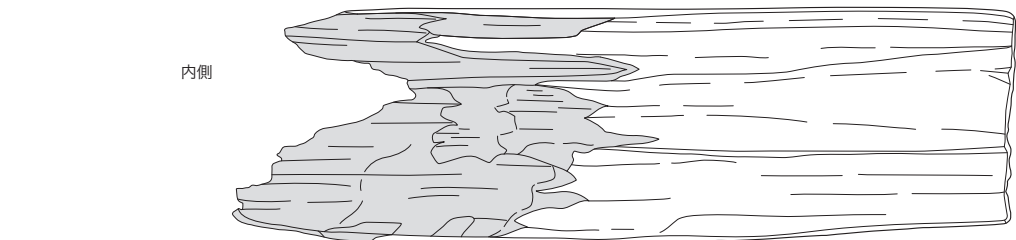
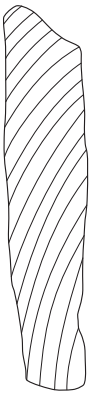
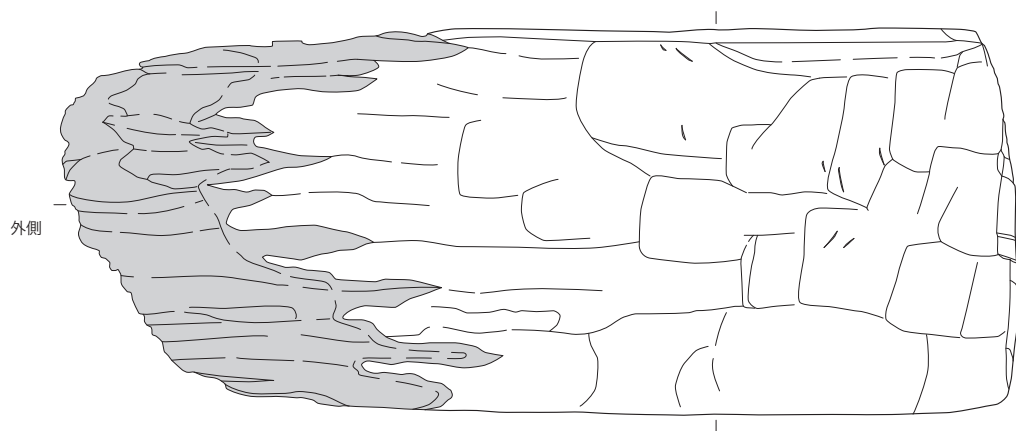


実測図 (10)

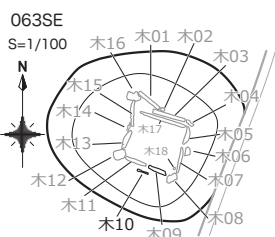
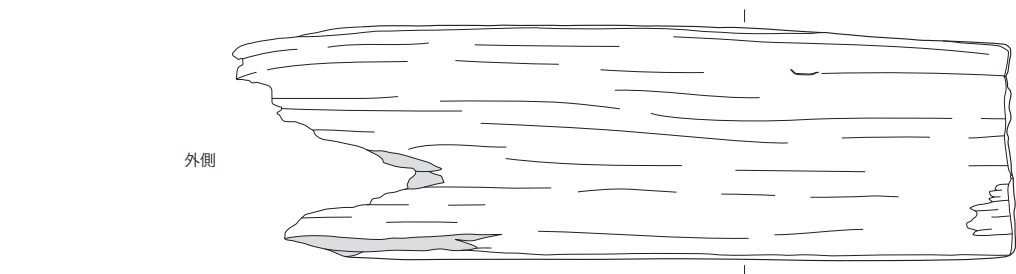
063SE



木09:板3  
井戸側板



木10:杭1  
井戸杭材

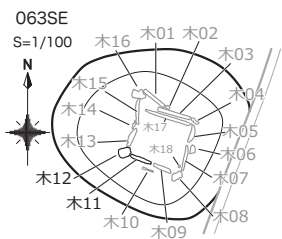


溶解して滅失した部分

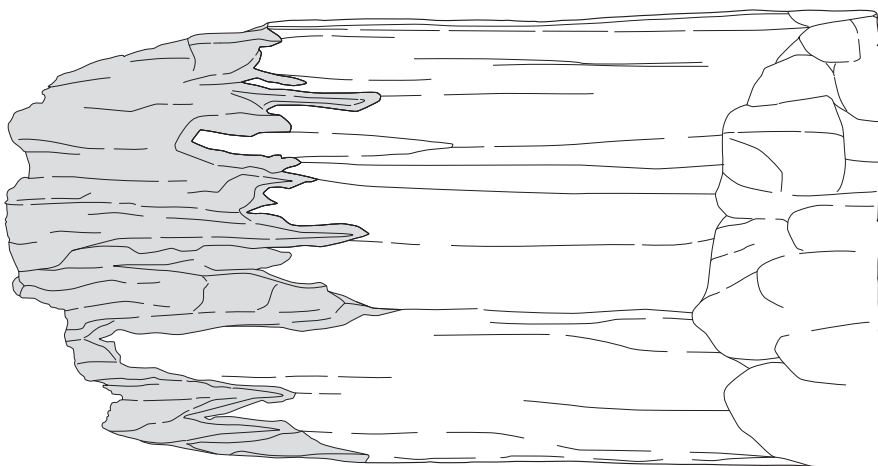
0 大型木製品 (1/5) 25cm

実測図 (11)

063SE

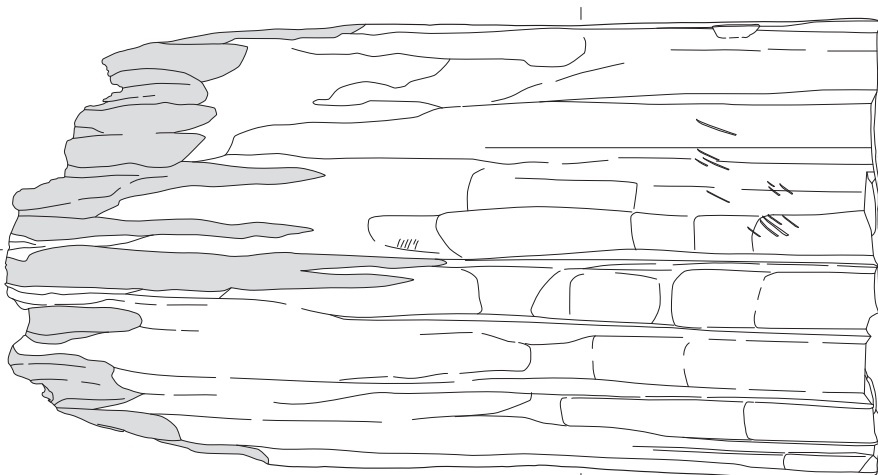


内側



木11:板2  
井戸側板

外側

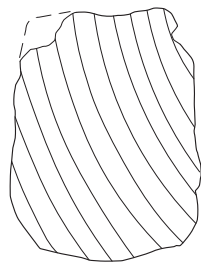
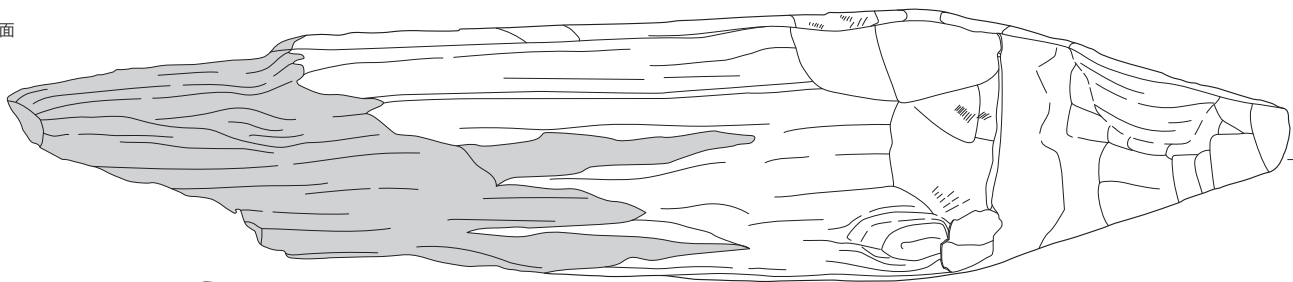


木12:杭3  
井戸杭材

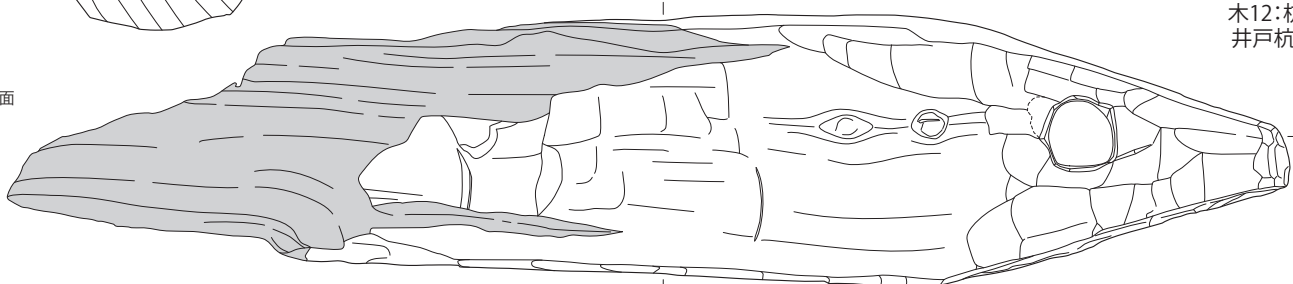
溶解して滅失した部分



北面

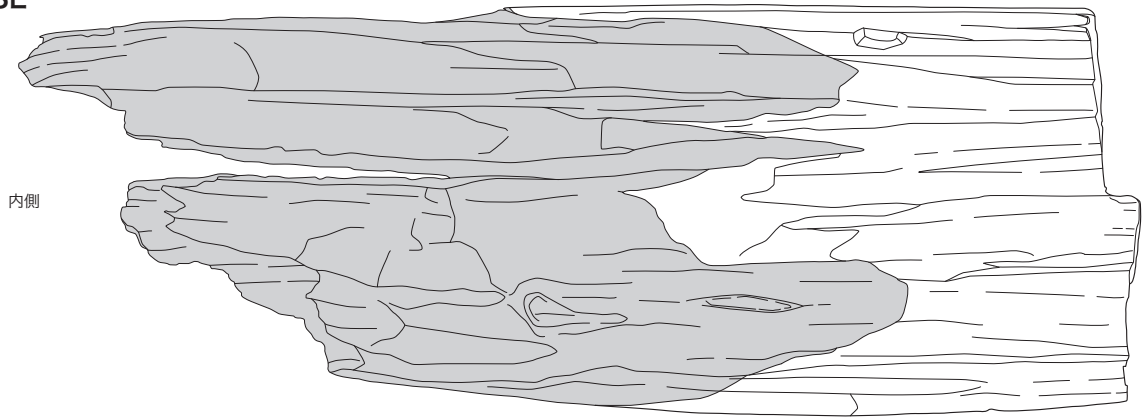


南面

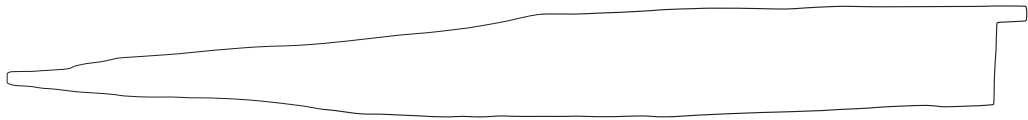


実測図 (12)

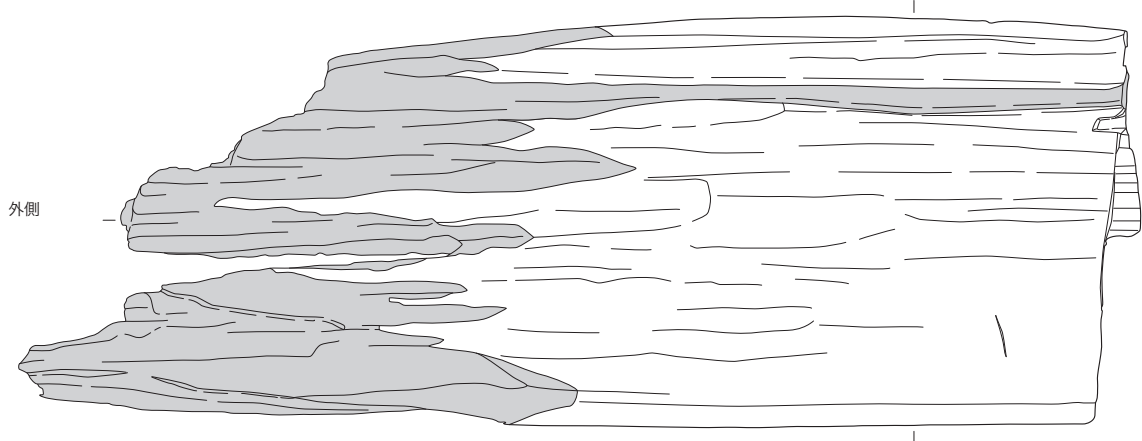
063SE



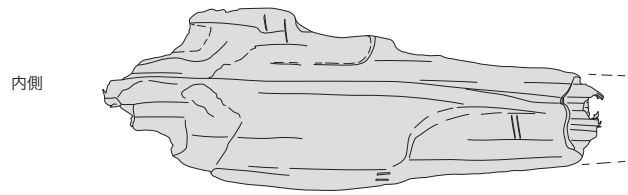
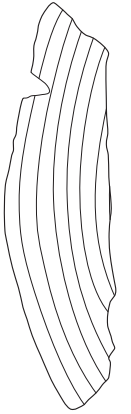
内側



木13:板4  
井戸側板

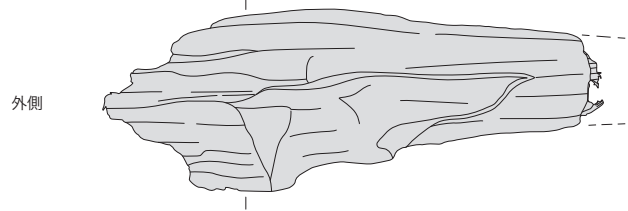


外側

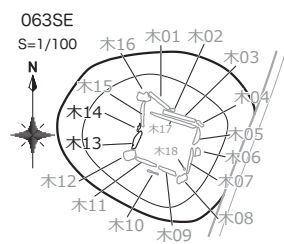


内側

木14:杭4  
井戸杭材



外側



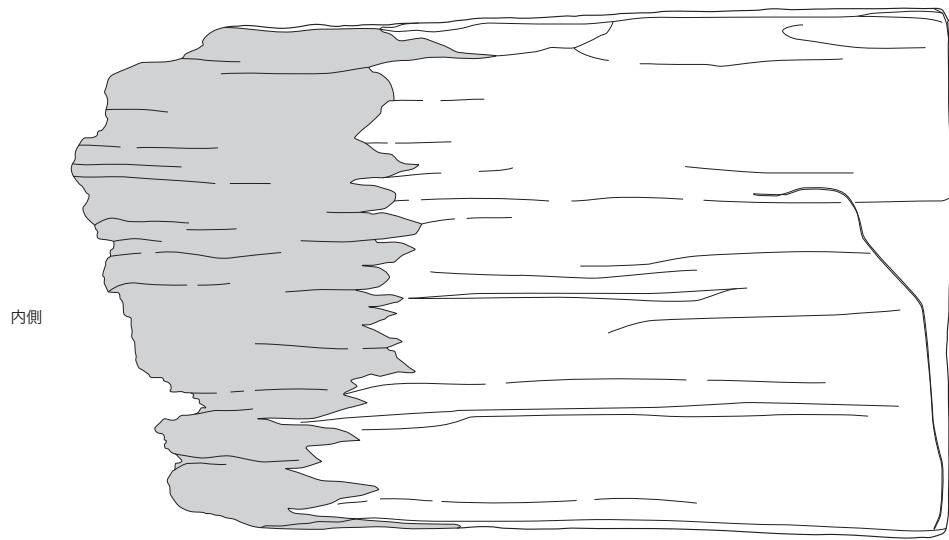
溶解して滅した部分

0 大型木製品 (1/5) 25cm

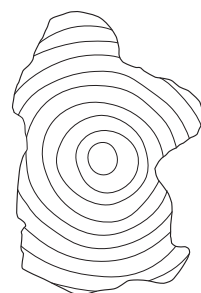
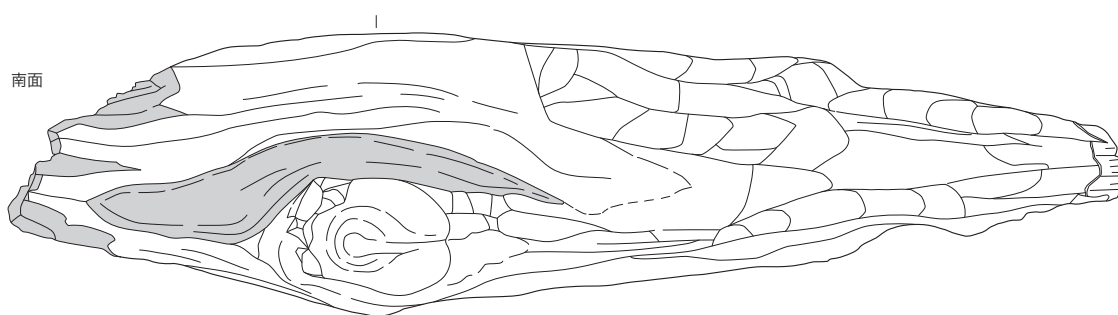
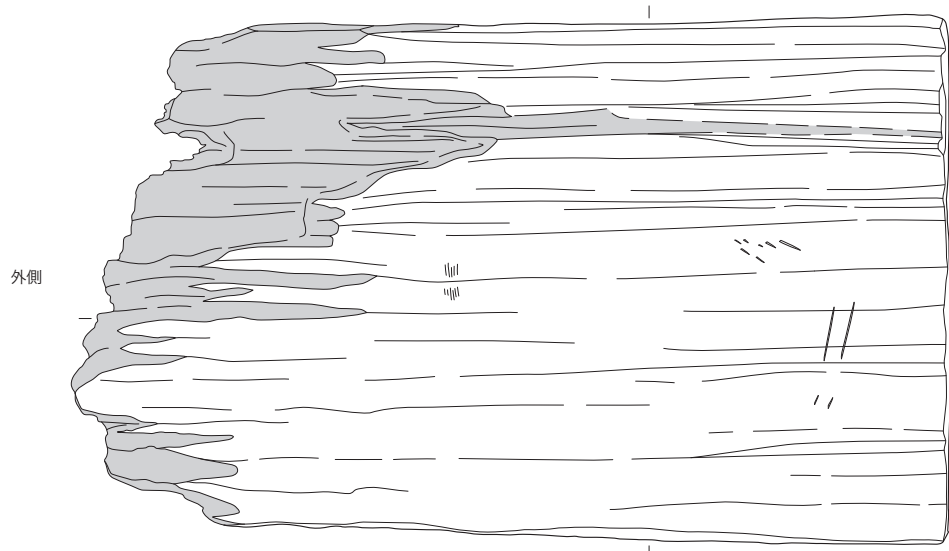
実測図 (13)



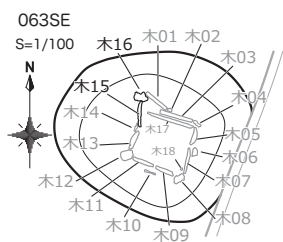
063SE



木15:板5  
井戸側板



木16:杭5  
井戸杭材

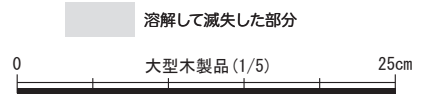
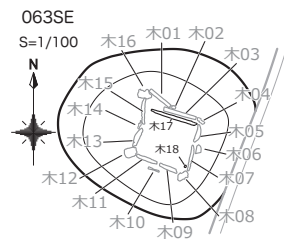
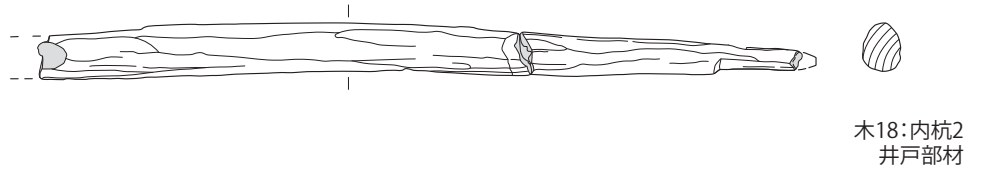
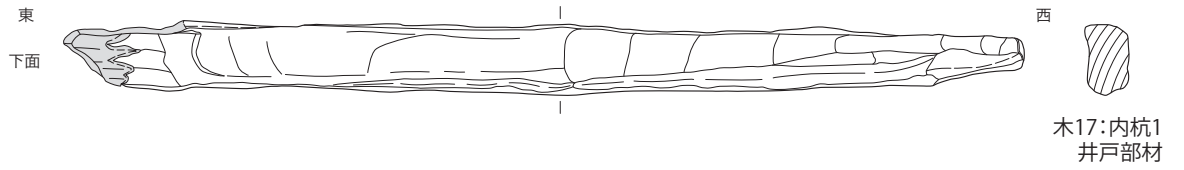


溶解して消失した部分

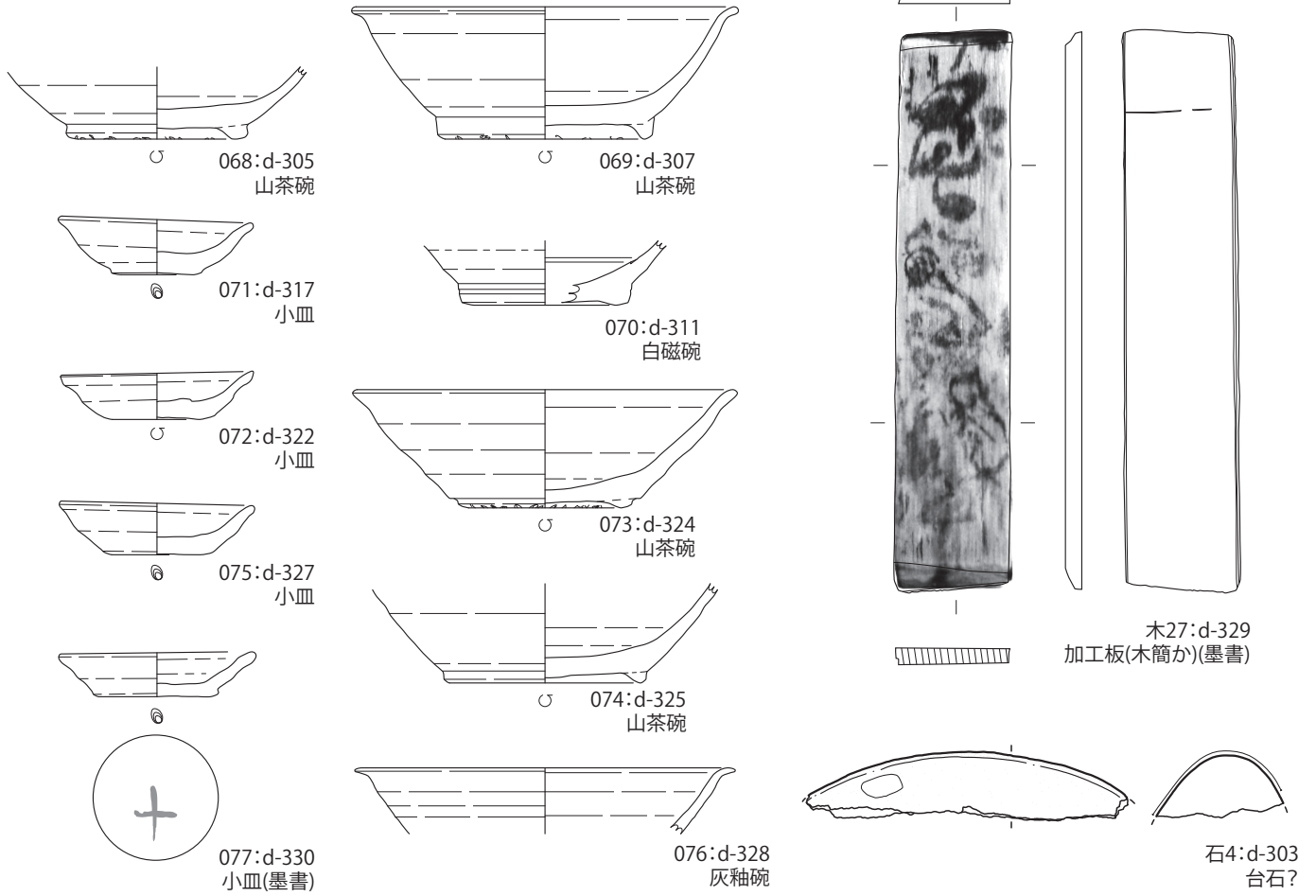
0 大型木製品 (1/5) 25cm

実測図 (14)

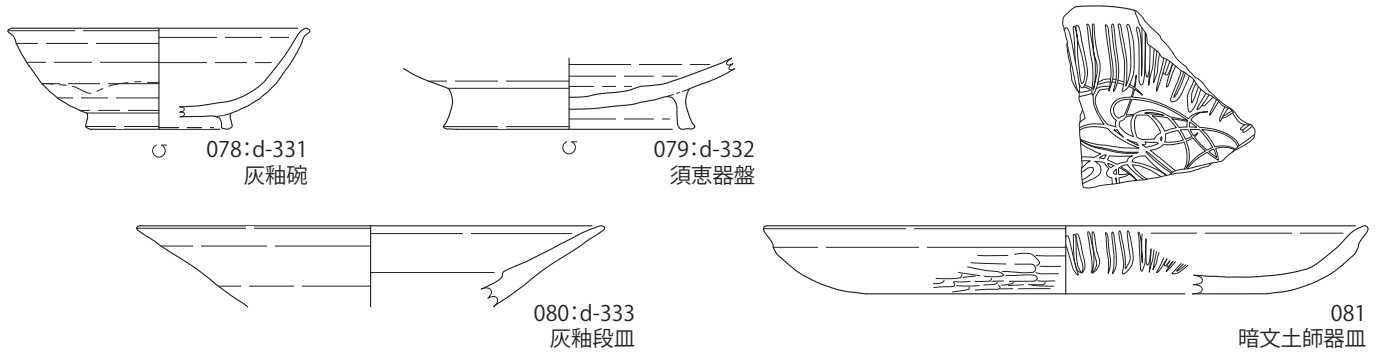
063SE



064SE



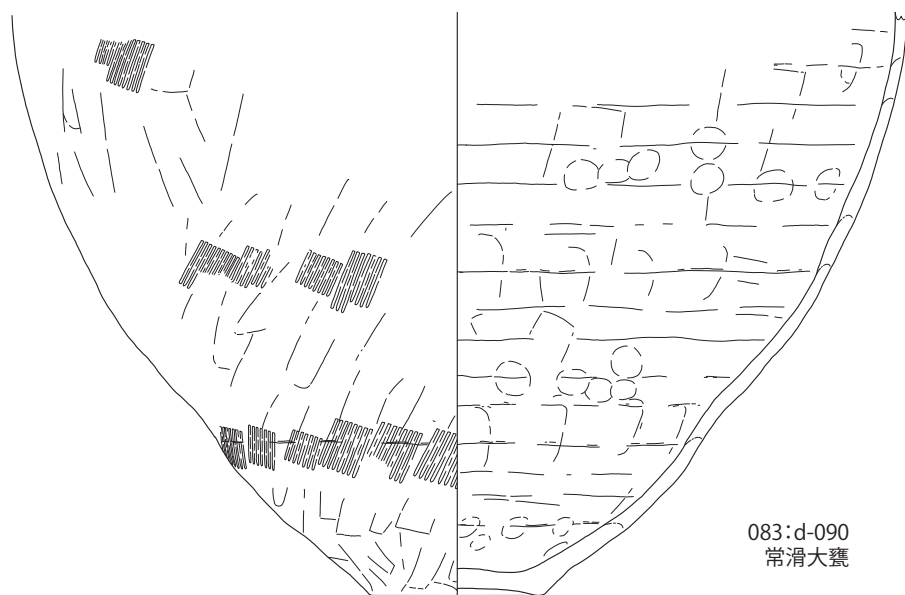
070SE



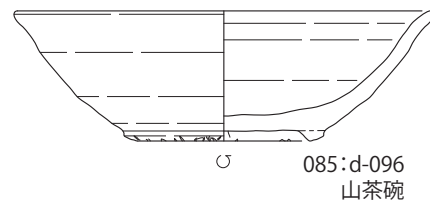
遺物包含層出土の遺物(中部・070SE周辺)



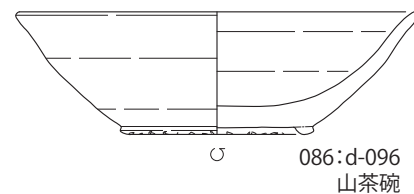
074SE



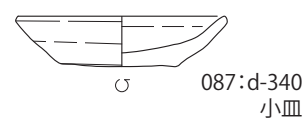
083:d-090  
常滑大甕



085:d-096  
山茶碗



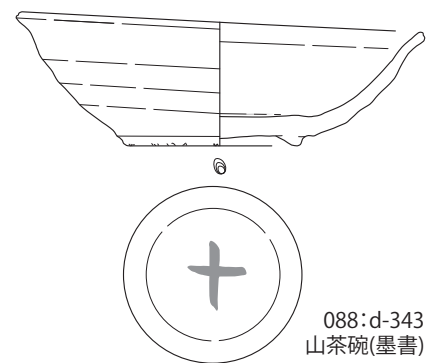
086:d-096  
山茶碗



087:d-340  
小皿

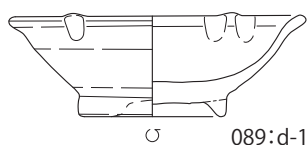


084:d-090  
常滑大甕

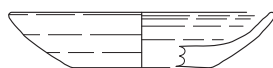


088:d-343  
山茶碗(墨書)

127SE



089:d-106  
灰釉輪花碗

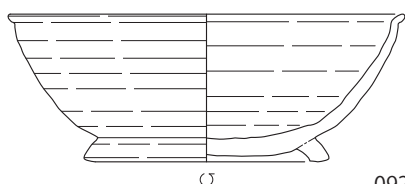


090:d-107  
土師皿

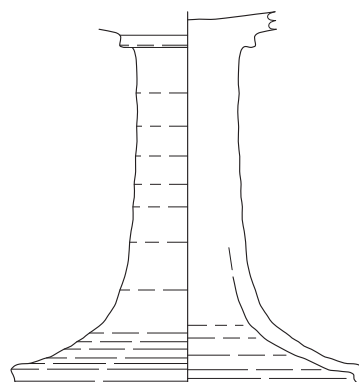


091:d-109  
土師皿

106SD



092  
須恵器坏

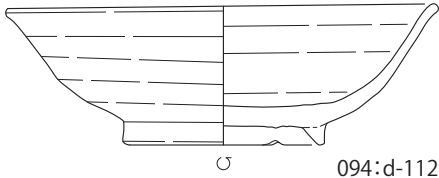


093  
須恵器高盤

0 083・084(1/5) 10cm

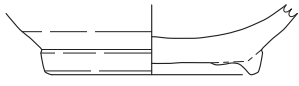
0 土器(1/3) 10cm

117SE

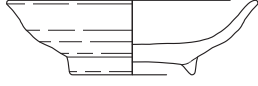


094:d-112  
山茶碗

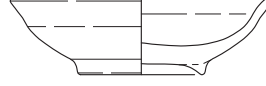
122SE



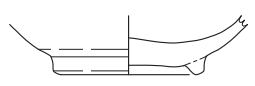
095:d-100  
山茶碗



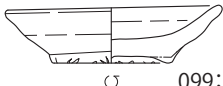
096  
小碗



097  
灰釉小碗



137SK

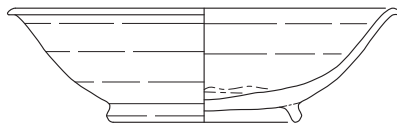
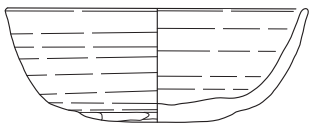


099:d-111  
小皿

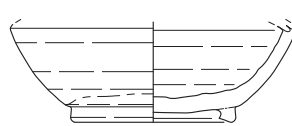


098  
山茶碗(墨書)

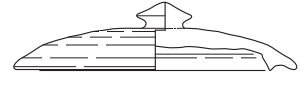
遺物包含層出土の遺物(南部)



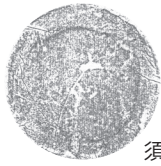
101  
灰釉碗



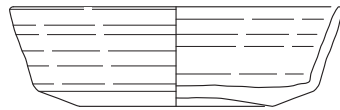
102  
灰釉瓶



103  
須恵器蓋



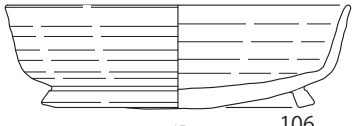
100  
須恵器坏



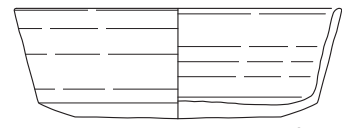
105  
須恵器坏



104  
須恵器蓋



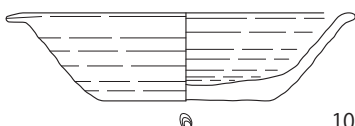
106  
須恵器坏



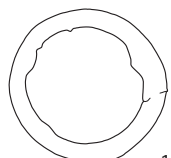
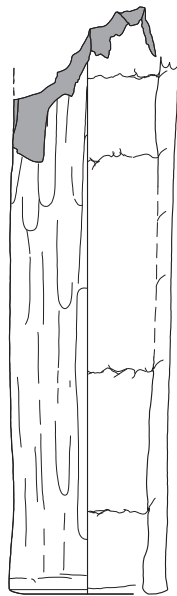
107  
須恵器坏



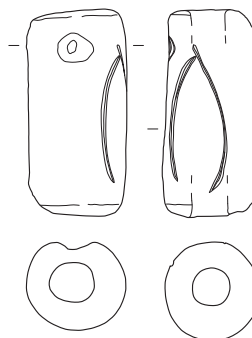
108  
須恵器盤



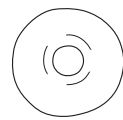
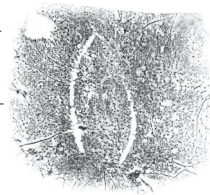
109  
須恵器碗



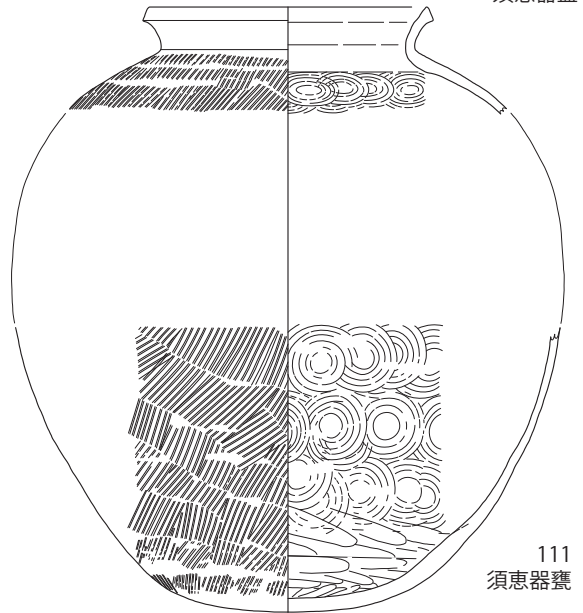
110  
須恵器広口壺



112  
陶錘(線刻)



113  
ガラス玉

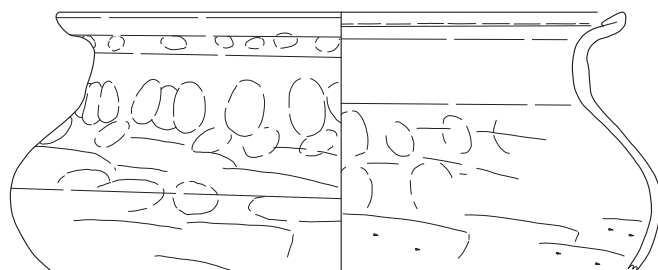


111  
須恵器甕

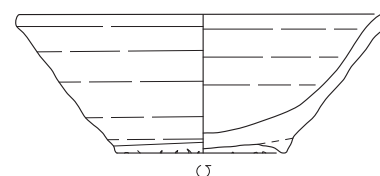


2区

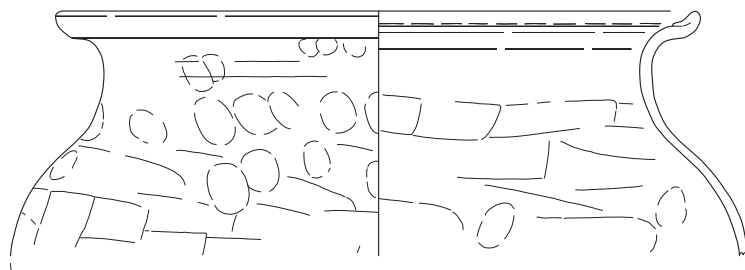
001SK



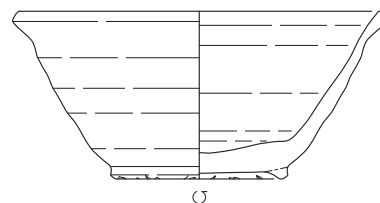
115:d-002  
伊勢型鍋



117:d-001  
山茶碗



116:d-007  
伊勢型鍋



118:d-004  
山茶碗

表採

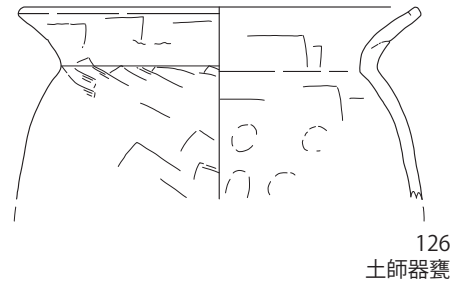
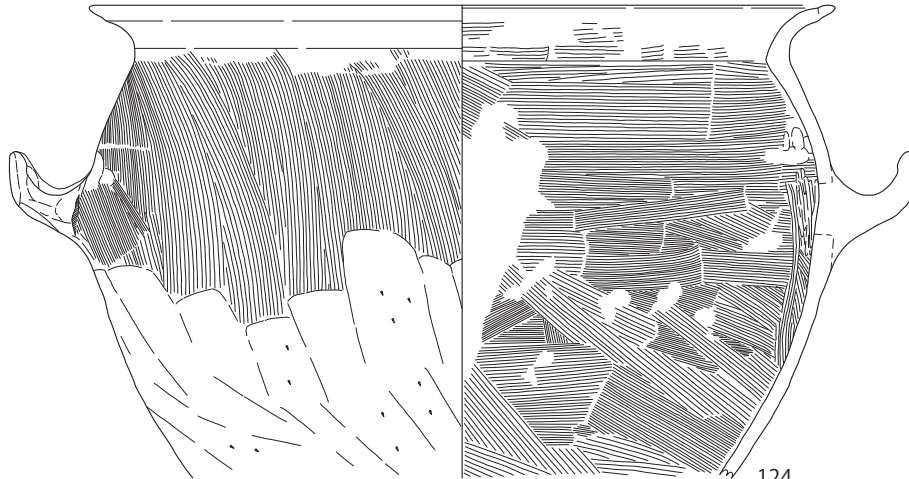
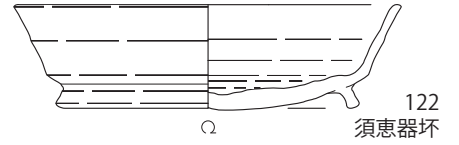
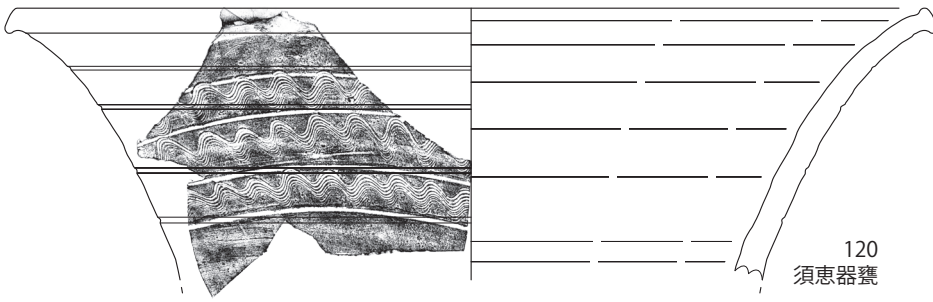


119  
加工円盤(搦鉢)

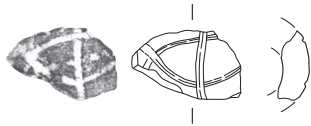


3区

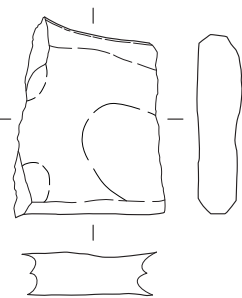
020SK



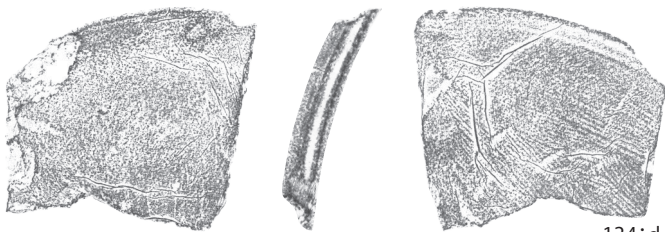
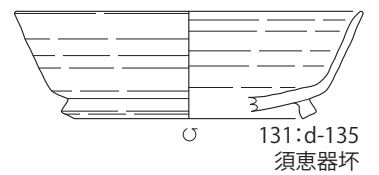
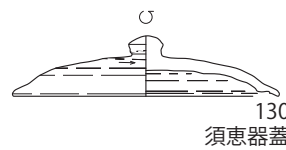
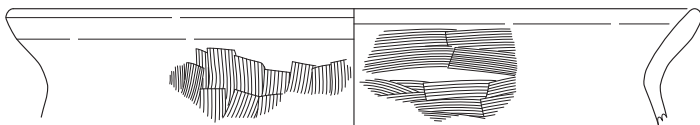
022SK



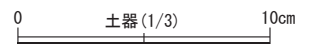
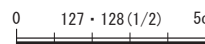
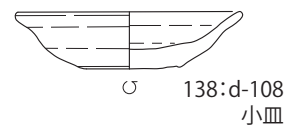
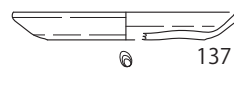
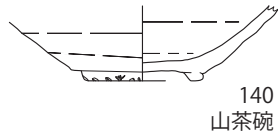
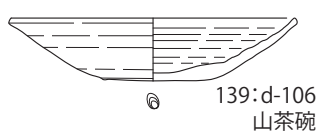
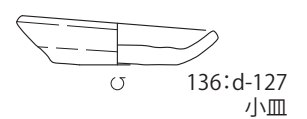
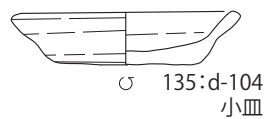
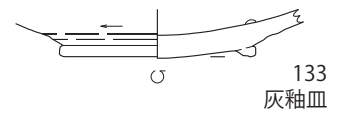
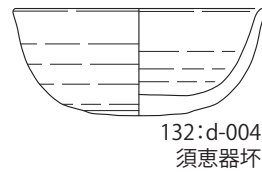
033SD



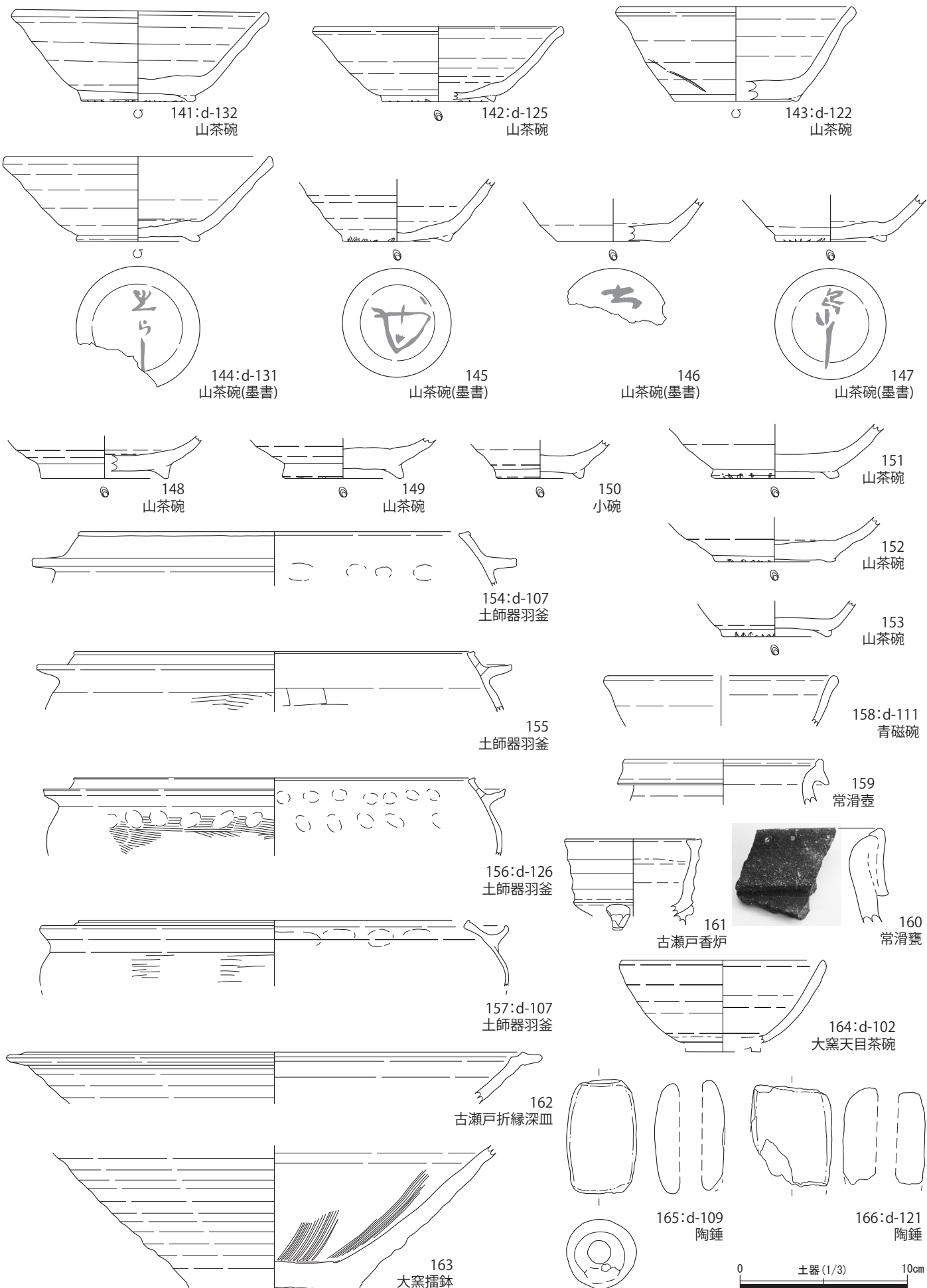
111SD



134:d-124  
移動式竈?



111SD

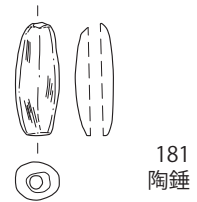
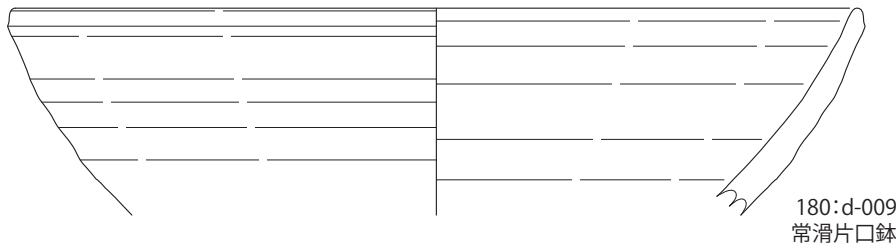
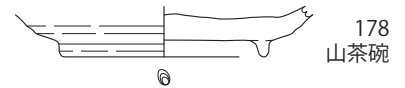
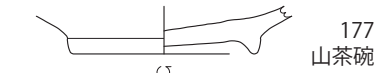
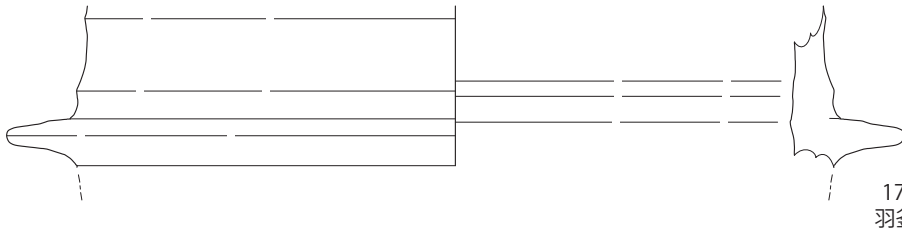
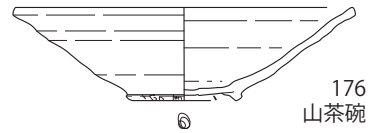
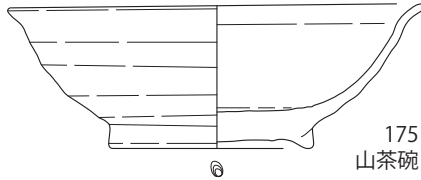
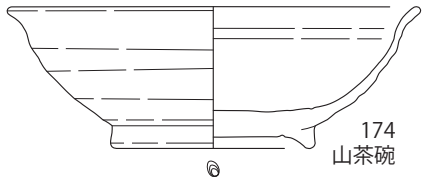
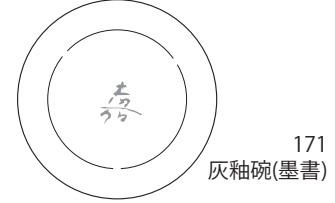
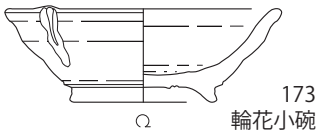
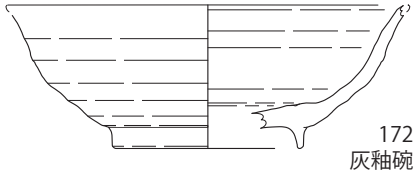
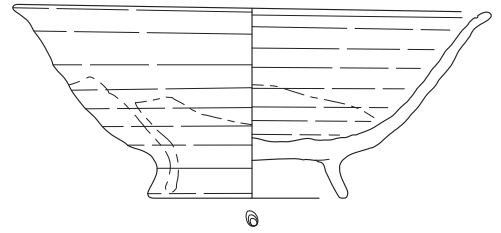
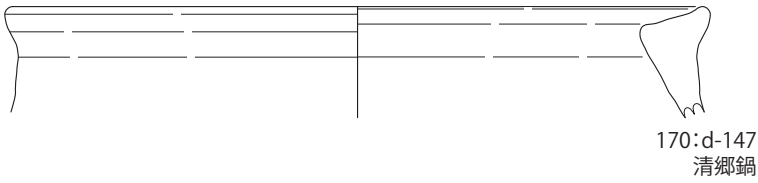
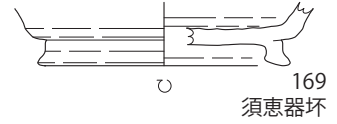
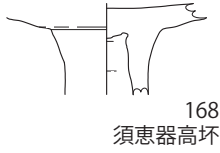
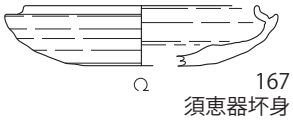


0 土器 (1/3) 10cm

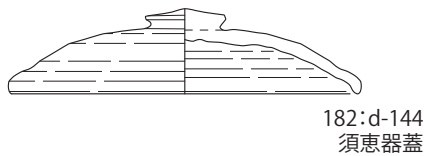
実測図 (21)



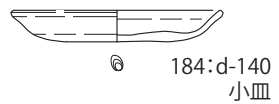
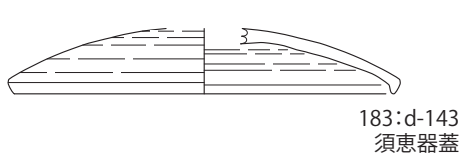
141SE



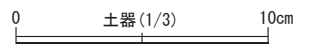
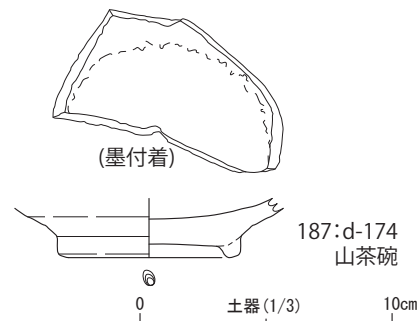
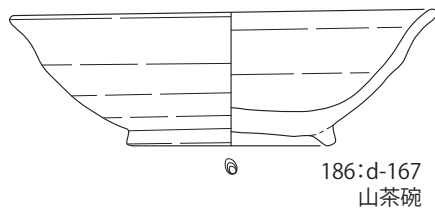
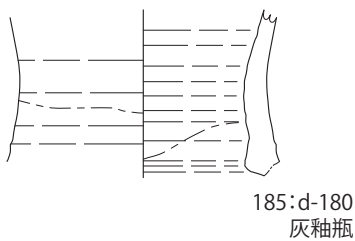
150SD



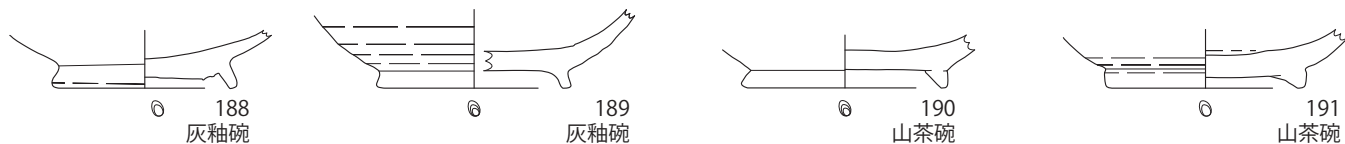
137SK



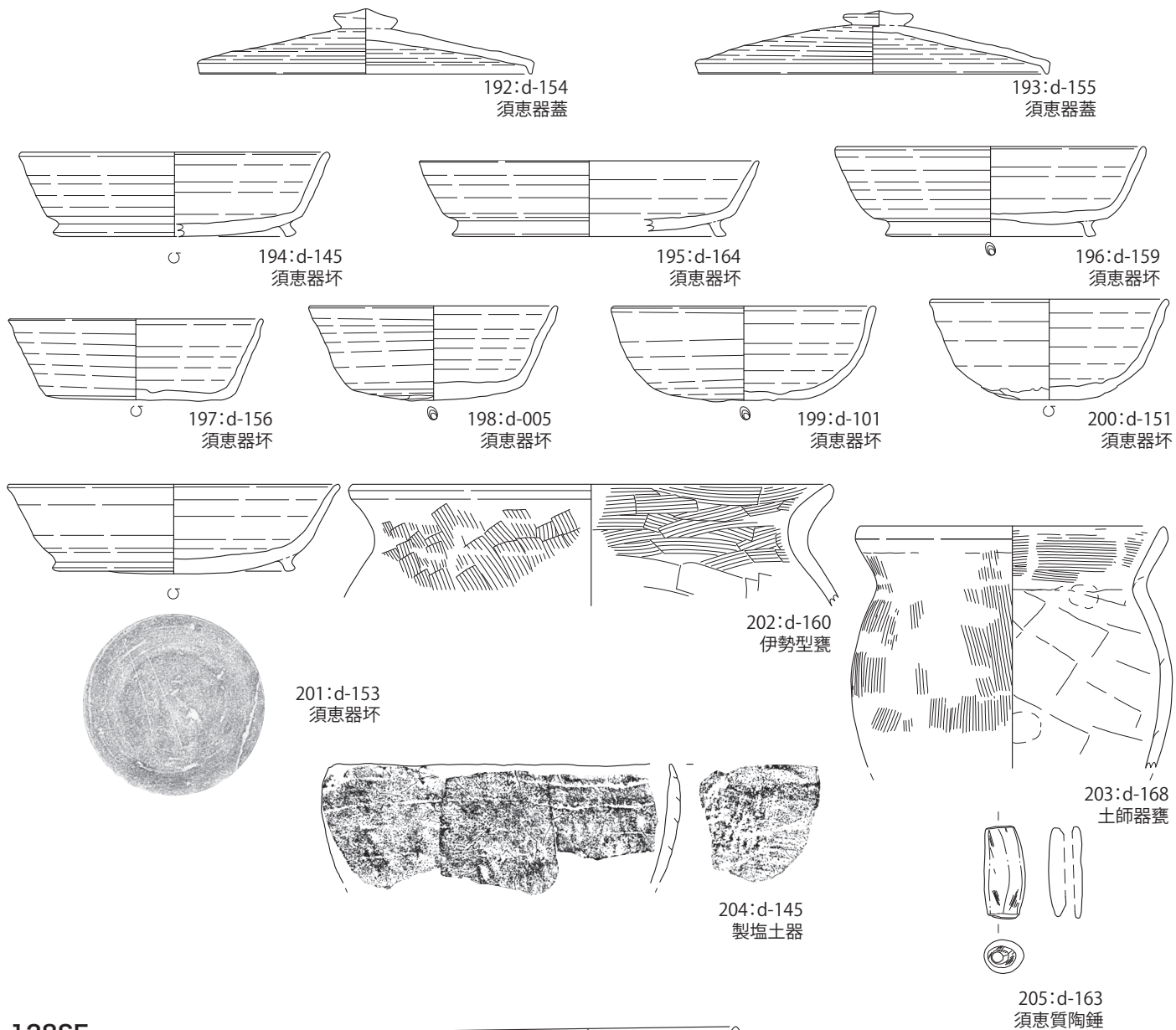
138SE



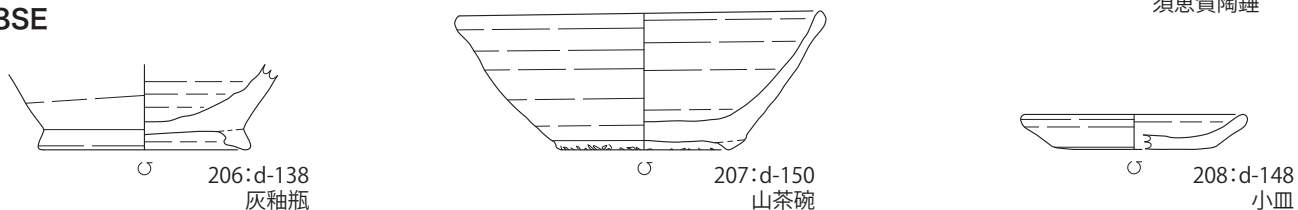
138SE



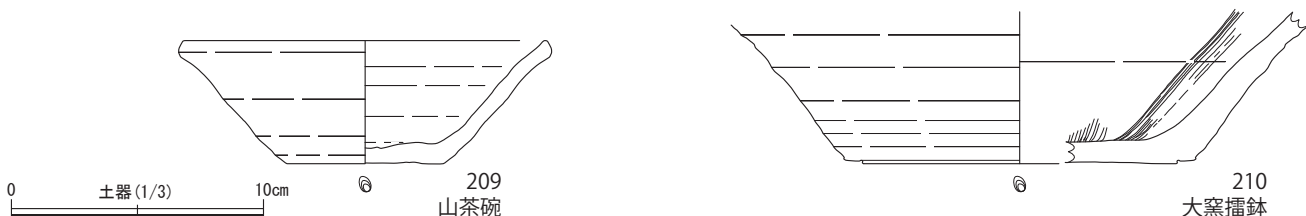
139SD



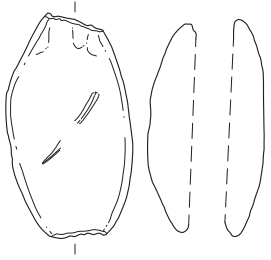
128SE



153SD

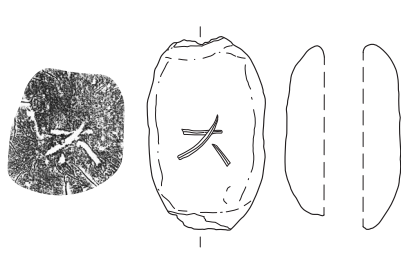


127SD



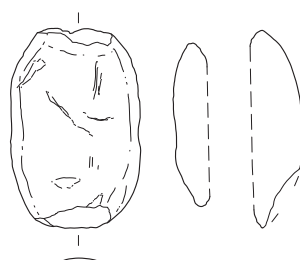
211:d-008  
土錘(線刻?)

112SD

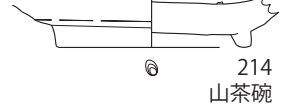


212:d-118  
土錘(線刻)

121SD

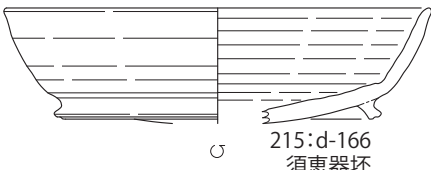


213:d-001  
陶錘



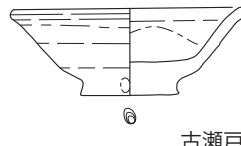
214  
山茶碗

160SK



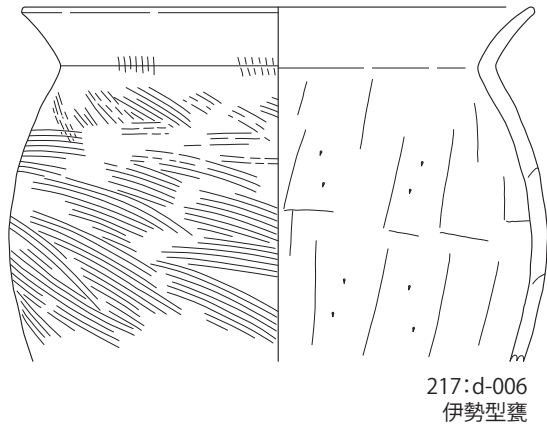
215:d-166  
須恵器杯

152SD

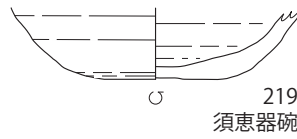


216  
古瀬戸仏供

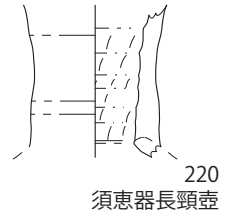
遺物包含層出土の遺物



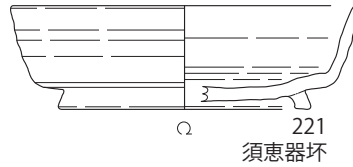
217:d-006  
伊勢型甕



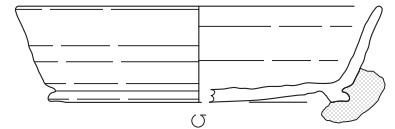
219  
須恵器碗



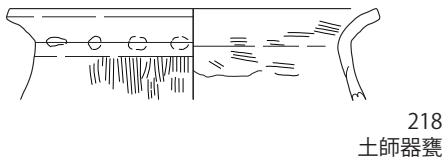
220  
須恵器長頸壺



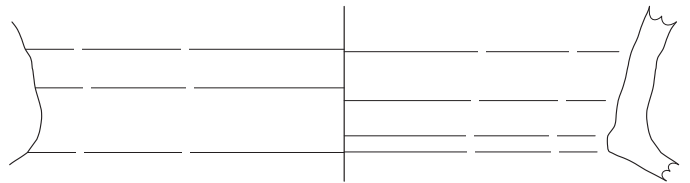
221  
須恵器杯



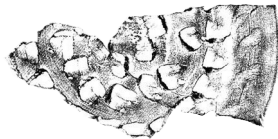
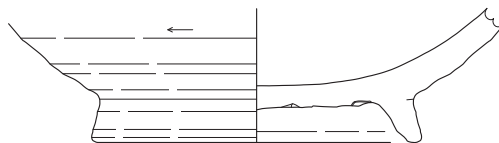
222  
須恵器杯



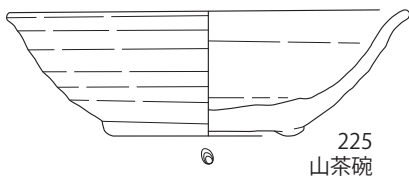
218  
土師器甕



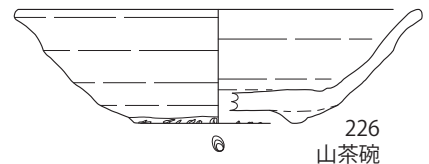
223  
須恵器大甕



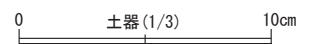
224  
山茶碗片口鉢



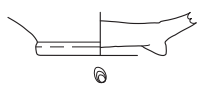
225  
山茶碗



226  
山茶碗



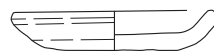
遺物包含層出土の遺物



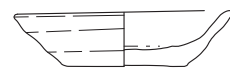
227  
小碗



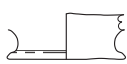
228  
小皿(墨書)



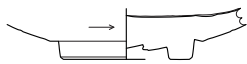
229  
小皿



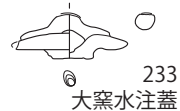
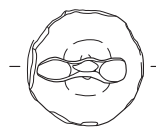
230  
小皿



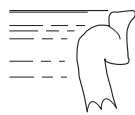
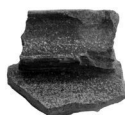
231  
古瀬戸台付皿



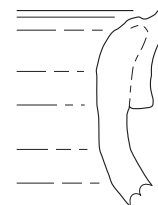
232  
青磁碗



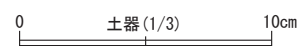
233  
大窯水注蓋



234  
常滑甕



235  
常滑大甕



土器観察表

※時期については編年がわかるものについては、目次の後ろに記した編年表の窯式名を用いた。なお、尾張型山茶碗・常滑窯・古瀬戸・大窯については紙幅の都合上、窯名と数字のみの表記に略している。

実測番号	区	取上番号	遺構名	層位	種別	器種	産地材質	残存率(1/12)	口径長 (cm)	器高幅 (cm)	底径厚 (cm)	重量 (g)	内面成形調整	外面成形調整	底部成形調整	胎土	焼成	色調外面	色調記号外面	色調内面	色調記号内面	時期	備考
001	1	d-019	001SD		須恵器	坏	-	口2底2	(14.9)	3.4	(11.0)	-	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切、回転ヘラケズリ、貼付高台	密	良	灰褐	7.5YR5/2	灰褐	7.5YR5/2	K-14	高台内面の色調=7.5YR7/6 橙色(赤焼か)
002	1	d-058	001SD	上層?	土師器	小皿	-	口4底12	(7.2)	2.1	(3.8)	-	ロクロナデ、ナデ	ロクロナデ	回転糸切	粗1-3mm砂礫	良	褐灰	5YR4/1	明褐灰	5YR7/1		内外面スス付着
003	1	d-060	001SD		灰釉陶器	皿	-	口0底7	-	(1.7)	(6.8)	-	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切、貼付高台	密	良	灰白	2.5Y7/1	灰白	2.5Y7/1	K-90	高台内赤色顔料
004	1	d-061	001SD		山茶碗	小碗	-	口12底12	9.0	3.2	4.7	-	ロクロナデ、指頭圧痕	ロクロナデ	回転糸切、ナデ、貼付高台	粗1-3mm砂礫	良	にぶい黄橙	10YR7/2	にぶい黄橙	10YR7/2	尾張4	内面自然釉、垂れ+降灰
005	1	d-066	001SD		須恵器	鉢?	-	口0底0	-	(5.8)	-	-	ロクロナデ、ナデ	ロクロナデ	-	密	良	黄灰	2.5Y6/1	黄灰	2.5Y6/1	8C後半	濡鉢底部剥離、降灰
006	1	d-068	001SD		灰釉陶器	皿	-	口1底12	(12.2)	2.3	(6.0)	-	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切、ナデ、貼付高台	密	良	黄灰	2.5Y6/1	黄灰	2.5Y6/1	O-53	
007	1	d-072	001SD		灰釉陶器	皿	-	口0底12	-	(2.1)	(6.4)	-	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラケズリ	回転糸切、ナデ、貼付高台	密	良	灰白	2.5Y7/1	灰白	2.5Y7/1	O-53	内面使用痕著しい(平滑)
008	1	d-069	001SD		常滑	片口鉢	-	口1底0	(31.4)	(7.0)	-	-	ロクロナデ、板ナデ	ロクロナデ	-	粗1-5mm砂礫	良	にぶい赤褐	5YR5/3	褐灰	5YR5/1	常滑4	片口鉢1類
009	1	-	001SD		灰釉陶器	碗	-	口4底4	(12.0)	3.7	(6.0)	-	回転ナデ	回転ナデ	糸切、回転ナデ	密	良	灰白	7.5Y8/1	灰白	7.5Y8/1		漬掛施釉、自然釉、焼差あり
010	1	-	001SD		灰釉陶器	碗	-	口5底3	(10.7)	3.9	(4.7)	-	回転ナデ	回転ナデ	糸切、回転ナデ	密	良	灰白	2.5Y8/1	灰白	2.5Y8/1		漬掛施釉、自然釉
011	1	-	001SD		常滑	甕	-	-	-	-	厚さ1.3	-	ナデ	印架	-	-	良	褐灰	10YR6/1	褐灰	10YR6/1	12C後半	細かい格子目の印架
012	1	d-002	003SD		緑釉素地	皿	-	口1底4	(13.4)	2.5	(7.3)	-	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラケズリ	回転糸切、貼付高台	密	良	灰白	2.5Y7/1	灰白	2.5Y7/1		内外面ヘラミガキ、口縁直下ユビナデ
013	1	d-002	003SD		灰釉陶器	碗	-	口0底8	-	(1.9)	(7.0)	-	ロクロナデ、ナデ	ロクロナデ、回転ヘラケズリ	回転糸切、貼付高台	密	良	黄灰	2.5Y7/2	灰白	2.5Y7/1		高台内被熱、スス付着
014	1	d-025	004SD		灰釉陶器	鉢	-	口0底1	-	(4.2)	(20.0)	-	ロクロナデ、回転ヘラケズリ	ロクロナデ、回転ヘラケズリ	ロクロナデ、回転ヘラケズリ、貼付高台	密	良	灰白	2.5Y7/1	灰白	2.5Y7/1		高台内面に灰釉垂れ
015	1	-	010SK		須恵器	坏身(無台)	猿投	口2底4	(12.2)	3.5	(8.3)	-	回転ナデ	回転ナデ	回転ヘラケズリ	密	良	浅黄橙	10YR8/3	浅黄橙	10YR8/3	8C後半	スス付着
016	1	d-005	008SD	上層	山茶碗	碗	-	口1底6	(15.1)	5.1	(8.0)	-	ロクロナデ、指頭圧痕	ロクロナデ	回転糸切、ナデ、貼付高台	粗1-3mm白色粒	良	灰白	2.5Y7/1	灰白	2.5Y7/1	尾張5	口縁内被熱、スス付着(口縁内、高台内)
017	1	d-006	008SD	上層	土師器	伊勢型鍋	-	口1底0	(23.6)	(5.8)	-	-	ヨコナデ、ハケ後ナデ	ヨコナデ、ハケ後指頭圧痕	-	粗1-5mm砂礫	良	浅黄橙	7.5YR8/4	にぶい橙	7.5YR7/4	12C後半	頸部外面にスス
018	1	d-009	008SD	上層	山茶碗	小皿	-	口2底6	(7.7)	2.8	(5.0)	-	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切、ナデ	粗	良	灰白	2.5Y7/1	灰白	2.5Y7/1	尾張5	
019	1	d-020	008SD	上層	土製品	陶鍾	-	-	長さ5.9	幅4.1	厚さ3.2	73.3	-	ナデ	-	やや粗、砂含む	良	灰白	10YR8/2	灰白	10YR8/2		ヘラ記号「十」焼成はやや不良だが、陶鍾の機能は満たしている。胎土には微細な雲母が軽く含まれる。
020	1	d-037	008SD	上層	須恵器	蓋	-	口2底6	(14.5)	3.6	摘み径2.5	-	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラケズリ	-	粗1-2mm砂粒	良	褐灰	5YR5/1	褐灰	5YR5/1		ヘラ記号か?
021	1	d-039	008SD		灰釉陶器	皿	-	口0底9	-	(1.7)	(6.7)	-	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切、ナデ、貼付高台	密	良	灰白	2.5Y7/1	灰白	2.5Y7/1		
022	1	d-045	008SD		山茶碗	小皿	-	口3底6	(8.5)	1.9	(5.2)	-	ロクロナデ、指頭圧痕	ロクロナデ	回転糸切、ナデ、板状圧痕	粗2-5mm砂礫	良	灰白	2.5Y8/1	灰白	2.5Y8/1	尾張7	内面使用痕著しい(平滑)
023	1	d-047	008SD		山茶碗	碗	-	口0底3	-	(2.9)	(6.0)	-	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切、貼付高台	粗1-3mm砂粒	良	灰白	2.5Y7/1	灰白	2.5Y7/1	尾張5	内面使用痕著しい(平滑)
024	1	d-048	008SD		土師器	伊勢型甕	-	口1底0	(17.7)	(3.7)	-	-	ヨコナデ、ハケ	ヨコナデ、ナデ、指頭圧痕、ハケ	-	粗	良	にぶい橙	7.5YR7/4	明赤褐	5YR5/6		
025	1	d-049	008SD		白磁	碗	中国福建	口1底0	(15.6)	(4.2)	-	-	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラケズリ	-	密	良	灰白	5Y7/2	灰白	5Y7/2	11C末-12C	
026	1	d-052	008SD		山茶碗	碗	-	口0底12	-	(3.3)	(7.2)	-	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切、ナデ、貼付高台	粗	良	灰白	2.5Y7/1	灰白	2.5Y7/1	尾張4	
027	1	d-054	008SD		山茶碗	小皿	-	口1底12	(8.1)	2.3	(2.2)	-	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切、ナデ	粗	良	灰白	2.5Y7/1	灰白	2.5Y7/1	尾張6	内面使用痕著しい
028	1	d-056	008SD		土師器	濃尾型甕	-	口1底0	(14.7)	(4.2)	-	-	ヨコナデ、ハケ	ヨコナデ、ハケ	-	粗砂粒、雲母	良	にぶい黄橙	10YR7/2	にぶい黄橙	10YR7/2		内外面スス付着
029	1	d-057	008SD		山茶碗	碗	-	口3底4	(15.5)	5.8	(7.0)	-	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切、ナデ、貼付高台	粗	良	黄灰	2.5Y6/1	黄灰	2.5Y6/1	尾張4	内外面スス付着
030	1	d-062	008SD		土製品	土鍾	-	-	長さ5.2	幅1.6	厚さ1.6	10.6	-	ナデ	-	密	良	にぶい橙	7.5YR7/4	にぶい橙	7.5YR7/4		外面は細かいナデ以外に使用痕? 摩耗? がみられる。明赤灰色を呈する陶鍾、焼成温度が低いためか使用痕によるものか摩耗によるものか判断できない
031	1	d-063	008SD		土製品	陶鍾	-	-	長さ5.0	幅1.9	厚さ2.0	19.9	-	ナデ	-	密	良	灰白	5Y7/1	灰白	5Y8/1		青灰色、全面的に摩耗が顕著。端部に欠け2箇所、打撃(加撃?)による欠け。大きな欠けは少し古い。
032	1	d-070	008SD		常滑	甕	-	口1底0	(47.4)	(7.4)	-	-	ヨコナデ、ナデ、指頭圧痕	ヨコナデ、ナデ	-	粗	良	黄灰	2.5Y6/1	黄灰	2.5Y6/1	常滑2	













図版第 32

実測番号	区	取上番号	遺構名	層位	種別	器種	産地材質	残存率(1/12)	口径長(cm)	器高幅(cm)	底径厚(cm)	重量(g)	内面成形調整	外面成形調整	底部成形調整	胎土	焼成	色調外面	色調記号外面	色調内面	色調記号内面	時期	備考
213	3	d-001	121SD		土製品	陶鍾	-	-	長さ 7.9	幅 5.2	厚さ 5.0	184.8	-	ナデ、指頭圧痕	-	やや粗、砂・長石含む	やや不良	浅黄橙	7.5YR8/4	浅黄橙	10YR8/3		端部に細かい欠け(使用痕か)長軸方向に線条痕も認められるが焼成温度が低いので洗浄による新しい痕跡の可能性もある。
214	3	-	121SD		山茶碗	碗	-	口 0 底 12	-	-	7.7	-	回転ナデ	回転ナデ	糸切、回転ナデ	密	良	灰白	2.5Y8/1	灰白	2.5Y8/1	尾張 4	自然釉、スス付着(萎痕少し)、重ね焼痕
215	3	d-166	160SK		須恵器	坏	-	口 4 底 5	(16.8)	(4.6)	(12.4)	-	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切、回転ヘラケズリ、貼付高台	密、1-5mm 砂襪	不良	浅黄橙	10YR8/4	浅黄橙	10YR8/4	C-2	
216	3	-	152SD		古瀬戸	仏供	-	口 7 底 12	9.0	3.5	3.9	-	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切	粗	やや不良	にぶい橙	7.5YR7/4	にぶい橙	7.5YR7/4	古瀬戸後 IV 期	
217	3	d-006	遺物包含層		土師器	伊勢型甕	-	口 1 以下 底 0	20.4	-	-	-	ケズリ、マメツ	ハゲ、ヨコナデ?	-	粗、4mm 小石含む	やや不良	灰白	10YR8/2	灰白	10YR8/2		
218	3	-	遺物包含層		土師器	甕	-	口 2 底 0	(14.8)	-	-	-	ヨコナデ、ハゲ、マメツ	ヨコナデ、ハゲ、オサエ	-	やや粗、砂含む	やや不良	灰白	10YR8/2	灰白	10YR8/2		
219	3	-	遺物包含層		須恵器	碗(無台)	-	口 0 底 12	-	-	6.0	-	回転ナデ	回転ナデ、回転ヘラケズリ	回転ヘラケズリ	やや粗	良	褐灰	10YR4/1	褐灰	10YR5/1		重ね焼痕
220	3	-	遺物包含層		須恵器	長頸壺	-	-	-	-	-	-	回転ナデ、しぼり	回転ナデ	-	やや粗、砂含む	良	灰白	10YR7/1	灰白	10YR7/1		
221	3	-	遺物包含層		須恵器	坏身(有台)	-	口 3 底 4	(13.3)	4.1	(10.0)	-	回転ナデ	回転ナデ、回転ヘラケズリ	回転ヘラケズリ	密	良	灰白	7.5Y7/1	灰白	7.5Y7/1	8C 後半	
222	3	-	遺物包含層		須恵器	坏身(有台)	猿投	口 3 底 5	(14.5)	3.8	(11.9)	-	回転ナデ	回転ナデ	回転ヘラケズリ	やや粗、砂含む	良	灰褐	10YR4/2	灰黄褐	10YR5/2	O-10	窯壁付着ヘラ記号「J」
223	3	-	遺物包含層		須恵器	大甕	-	-	-	-	-	-	回転ナデ	回転ナデ	-	密	良	褐灰	10YR6/1	灰白	7.5Y7/1		黄土塗か
224	3	-	遺物包含層		山茶碗	片口	-	口 0 底 1	-	-	(13.0)	-	回転ナデ	回転ヘラケズリ	刺突多数	密	良	灰白	10YR8/1	灰白	10YR8/1	瀬戸 3-4	スス付着
225	3	-	遺物包含層		山茶碗	碗	-	口 7 底 12	15.7	5.0	6.9	-	回転ナデ	回転ナデ	糸切、回転ナデ	やや粗	良	褐灰	10YR6/1	褐灰	10YR6/1	尾張 6	スス付着、砂底、灯明皿に転用?
226	3	-	遺物包含層		山茶碗	碗	-	口 2 底 5	(16.2)	4.5	(7.0)	-	回転ナデ	回転ナデ	糸切、回転ナデ	やや粗	良	にぶい黄橙	10YR7/2	にぶい黄橙	10YR7/2	尾張 6	初痕あり
227	3	-	遺物包含層		山茶碗	小碗	-	口 0 底 12	-	-	4.9	-	回転ナデ	回転ナデ	糸切、回転ナデ	密	良	灰白	10YR7/1	灰白	10YR7/1	瀬戸 3-4	自然釉、重ね焼痕、内面使用痕
228	3	-	遺物包含層		山茶碗	小皿	-	口 1 底 0	-	-	(4.6)	-	-	-	糸切?	やや粗	良	灰白	2.5Y8/1	灰白	2.5Y8/1	尾張 5・6	墨書「石」
229	3	-	遺物包含層		山茶碗	小皿	-	口 9 底 12	8.2	1.5	5.3	-	回転ナデ、底部静止ナデ	回転ナデ	糸切、板目	やや粗、砂含む	良	灰白	10YR8/1	灰白	10YR8/1	尾張 5	
230	3	-	遺物包含層		山茶碗	小皿	-	口 12 底 12	8.7	2.2	4.6	-	回転ナデ	回転ナデ	糸切	やや粗、小石含む	良	にぶい黄橙	10YR7/2	にぶい黄橙	10YR7/2	尾張 11	自然釉少し、内面摩耗著しい
231	3	-	遺物包含層		古瀬戸?	台付皿	-	口 0 底 1	-	-	(4.7)	-	回転ナデ	回転ナデ	糸切	密	良	灰白	10YR7/1	灰白	10YR7/1		器台?
232	3	-	遺物包含層		磁器	碗(青磁)	中国	口 0 底 3	-	-	(5.2)	-	施釉により調整不明	回転ヘラケズリ	回転ヘラケズリ	密	良	灰白	2.5Y8/1	灰白	N8/	中世	ケズリ出し高台
233	3	-	遺物包含層		陶器	蓋	-	口 0 底 0	-	-	-	-	回転ナデ	回転ナデ、オサエ	糸切	やや粗、小石含む	良	褐	7.5YR4/3	褐	7.5YR4/3	大塚 3-4	鉄釉
234	3	-	遺物包含層		陶器	甕(N字)	常滑	-	-	-	-	-	回転ナデ	回転ナデ	-	やや粗、小石含む	良	灰黄褐	10YR5/2	褐灰	10YR5/1	常滑 6b	
235	3	-	遺物包含層		陶器	甕(N字)	常滑	口 1 底 0	-	-	-	-	回転ナデ	回転ナデ	-	やや粗、砂含む	良	褐灰	10YR6/1	暗褐	10YR3/3	常滑 9	自然釉

石器観察表

実測番号	区	取上番号	遺構名	層位	種別	種類	産地材質	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	備考
石 1	1	d-017	001SD		石	叩石	砂岩	161.5	79.6	60.00	1225.5	硬質の砂岩製の叩石、全体的にやや赤みがあるものの被熱ではない。上下端に敲打痕が認められる。表面の平坦部に光沢がみられるが使用痕とすべきか難しい。
石 2	1	d-077	008SD		石	礫片(持込礫)	緑色片岩	201.5	65.2	(31.08)	638.0	石斧や石棒類に使用されることの多い石材である緑色片岩。前面に敲打痕などがみられないことから上記の石器でないことが考えられる。全体的にやや赤みがかった感じはあるものの被熱といった雰囲気は少ない。巾、厚みは現状から推測でき、20cm 以上の棒状礫であったと想像できる。可能性としては、石斧や石棒などのキャッシュとみるべきか。
石 3	1		001SD		石	叩石?	花崗岩	163.5	67.1	56.88	789.0	花崗岩を素材とするもの。風化が激しく、使用痕などは判別が困難である。全体的に赤みを帯びているか被熱によるものか判断はつかない。下端部及び上面中央部に使用痕と思われる痕跡が残されるものの積極的に認められるものではない。仮に上面部を使用痕とするならばアバター状の凹みとなっていることから叩石としての利用が想像される。
石 4	1	d-303	064SE		石	台石?	安山岩	22.4	41.1	90.07	905.0	安山岩を素材とする台石。中央部分が凹む台石、または石皿の可能性もある。完形であれば円形、あるいは円形の素材を用いていると考えられる。台石の破片であるためか、アバタ状の痕跡は確認できない。側面部を中心に、前面に黒色に変色しており被熱の痕跡と考えられる。石を用いた炉などへの二次利用による可能性もある。
石 5	1		063SE			玉石	石英	1.37	1.41	0.42	1.4	白色、河原石

木製品観察表

実測番号	区	取上番号	遺構名	層位	種別	材	用途(旧用途)	木取	材	長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	備考
木 01	1	板 1	063SE		井戸枠材	板材	建築部材を転用	板目	ヒノキ	73.3	36.2	4.5	・下端の左隣には 2.8cm x 1.8cm の方形の小穴が、正面と側面からあけられている (さぐり穴) ・表面 (木裏) 一平らであるが、加工痕は残っていない ・表面下端一縦方向に手斧で削られ、下に向けて幾分うすくなる ・裏面 (木表) 一全体が平らで手斧掛けのあとがうすく残っている ・裏面下端一多少の凹凸があり、平らで手斧掛けされている ・表裏ともに上は腐朽し痩せている ・木 03 と同じ作りの板で、ともに建築部材であったと考えられる
木 02	1	杭 8	063SE		井戸枠材	角材	角杭	板目	スギ?	47.6	6.7	4.4	・スギ? の割材を加工したきれいな角材 ・先端加工は両側面から行い、上下面は少しだけ削って加工している ・上下端部ともは残存
木 03	1	板 8	063SE		井戸枠材	板材	建築部材を転用	板目	ヒノキ	72.3	46.0	5.7	・表面一中位はやや摩滅しているが、かろうじて手斧掛け痕が観察される ・表面下端一手斧掛けにより少し薄くされている ・右隣には正面と側面の 2 方向から方形の孔が穿たれている (さぐり穴) ・裏面下半一手斧掛け痕が残る ・表裏ともに上半は腐朽し痩せている ・木 01 と同じ作りの板材で、ともに建築部材であったと考えられる
木 04	1	杭 7	063SE		井戸枠材	板材	矢板	芯持材	スギ	71.6	14.1	5.1	・割材を先端加工 ・左側の一面のみ加工痕が残る
木 05	1	板 7	063SE		井戸枠材	板材	舟材を転用?	板目	ヒノキ	71.2	24.2	6.4	・表面 (木表) 一樹皮を剥いたまま 甲丸となっている ・下面一割った後に手斧掛けがされている ・下端一平に削られている 斧の痕が少し残る ・上部のみ腐朽し痩せている ・木 12 と同一材
木 06	1	杭 6	063SE		井戸枠材	角材	用途不明	板目か	スギ	80.3	12.0	7.6	・柱材をみかん割にしてから四角に加工して杭としたもの ・先端は加工せず平なまま ・上端は摩滅している ・表面に手斧掛け加工が施されている ・他はきれいな断面である
木 07	1	板 6	063SE		井戸枠材	板材	建築部材を転用?	板目	ヒノキ	60.3	35.6	4.6	・表面 (木表) 一粗割のまま ・裏面 (木裏) 一割に伴う凹凸が残る 一部に手斧掛け痕が認められる ・表面下端一斜位に切断されている 手斧掛け痕が残り、平滑 ・全体的に摩滅が進んでいる ・上半は腐朽し痩せている ・木 15 と同一材
木 08	1	杭 2	063SE		井戸枠材	角材	角杭	芯持材	スギ	64.0	16.0	9.9	・粗割材 (角材) ・先端は四面から加工して杭とする
木 09	1	板 3	063SE		井戸枠材	板材	建築部材を転用?	板目	ヒノキ	63.2	25.6	5.6	・ヒノキの板目材で厚い板材を用いた井戸枠 ・両面ともに手斧掛け痕を残している ・上半部一摩滅や腐朽により痩せている ・下端一平らにカットされている 浅い凹凸があることから手斧掛けが行われていると考えられる ・両側面一加工されていたようであるが、風化により丸味を帯びている
木 10	1	杭 1	063SE		井戸枠材?	板材	建築部材を転用?	板目	ヒノキ	51.8	15.6	2.8	・板材を用いたもの ・下端一平らなままで特に加工を加えていない (先端加工をしていない)
木 11	1	板 2	063SE		井戸枠材	板材	建築部材を転用?	板目	ヒノキ	57.7	30.3	5.2	・表面 (木表) 一全面手斧掛けされていたと思われる (中位では表面が少し摩滅してみえない) ・裏面 (木裏) 一粗割の痕跡を留めるが、もともとは手斧掛けを軽くしていた可能性がある ・上部一腐朽し痩せている ・表面上部少し挟られているが、腐朽が進んでいる ・下端一手斧掛けが明瞭に残り、少し薄くなっている ・下端一粗い切断痕が少しある
木 12	1	杭 3	063SE		井戸枠材	角材	角杭	板目	ヒノキ	84.8	18.0	12.6	・ヒノキ材のミカン割材を加工して板目材としたもの ・角材を四面から削り先端加工した杭 ・上端は摩滅している ・下端近くに未貫通の円孔 (直径 4.3cm 深さ 5.7cm) があり、裏面には段差がある ・もともとは何らかの建築部材であったと考えられる ・円孔がある面を正面とし、その右側面は全面手斧掛け
木 13	1	板 4	063SE		井戸枠材	板材	舟材を転用?	板目	ヒノキ	74.1	27.2	7.4	・木 05 と同一材であるが接点はない ・表面は木裏で芯側である 裏面は樹皮側 (傍) で甲丸となっている ・表面一上から削られている部分があることから、舟材を転用している可能性がある。(断定はできない) ・表面上部少し挟られているが、腐朽が進んでいる ・表面下部一粗割状態 ・裏面一樹皮をはがした後の加工痕は不明 ・裏面下端一斧で比較的丁寧に削られているが、切断時の残欠を留める ・上部は表裏ともに腐朽し痩せている
木 14	1	杭 4	063SE		井戸枠材	板材	矢板?	板目か	不明	33.1	12.0	3.6	・材不明 (ヒノキ?) 放射組織が目立つ ・割材 ・全面摩滅 ・加工痕不明
木 15	1	板 5	063SE		井戸枠材	板材	建築部材を転用?	板目	ヒノキ	58.2	35.0	5.5	・木 07 と同一材 同一の板材を 2 枚に切断して井戸枠としたもの ・表面 (木表) 一樹皮側は少し甲丸となっていて、図の右側は木目の凹凸が顕著 ・裏面一平らである ・全体に手斧掛け痕は残っていない ・下半は残りが良いが、中位は表面が摩滅している ・上部は腐朽し痩せている ・下端は平らにきれいに切断されているが、手斧掛け痕は残っていない
木 16	1	杭 5	063SE		井戸枠材	丸太材?	丸太杭	芯持材	ヒノキ	73.7	18.7	12.6	・ヒノキの節を残す丸太材 ・4-5 方向から削ることで先端加工した大型杭 ・上端部は腐朽し中心が大きく凹んでいる ・表面一樹皮面に近い ・裏面一割り面 節部が挟れている (断面位置の節部分はかなり削り込んでいます) ・上半部の手斧掛け跡は残っておらず摩滅している
木 17	1	内杭 1	063SE		井戸枠材	角材	角杭	板目か	ヒノキ	63.5	4.9	2.9	・割材 (概ね四角形) ・両側面から先端加工
木 18	1	内杭 2	063SE		井戸枠材	加工材 (丸材)	用途不明	板目か	不明 (広葉樹?)	50.6	3.7	2.5	・割材を加工 (加工痕ははっきりしない) ・先端を尖らせているが、加工痕は不明
木 19	1		063SE		曲物	-			不明	18.0	16.9	5.6	・曲物底板 (径 18.0、厚さ 0.7) の上に曲物 (径 16.9、厚さ 0.3) が載っており、桜の皮とみられる綴じ紐で綴じあわされている。底板の前方は途中で削られており、欠損している後方も同様の状態と推定される。
木 20	1		063SE		齋串	木片		板目	ヒノキ?	16.9	1.3	0.4	・曲物へぎ板の転用か
木 21	1		063SE		齋串	木片		板目	ヒノキ?	19.1	1.5	0.53	・先端加工、全体的に縁は摩滅
木 22	1		063SE		齋串	木片		板目?	不明	4.2	0.6	0.25	・先端加工?、全体的に摩滅
木 23	1		063SE		横櫛	-			不明	3.5		0.6	
木 24	1		030SE		人形	-		板目	不明	11.5	1.4	0.2	
木 25	1		030SE		曲物	-		板目	ヒノキ				a: 曲物 2 段目 (径 57.2) + 籜、b: 曲物 3 段目 (径 62.6)、 c: 綴じ合わせ破片 1 段目、d: 綴じ合わせ破片 2 段目
木 26	1		040SE		曲物	-		板目	ヒノキ	径 36.8			・曲物 3 段目、籜 2 種類
木 27	1	d-329	064SE		木簡	加工板	折敷	板目	不明	15.7	3.2	0.5	・折敷の転用の可能性あり、呪術木簡か? 表面だけでなく裏面にも墨書あり。
木 28	1	d-088	012SP		柱材	丸太材	建築部材	芯持材	ヒノキ	65.8	16.0	14.6	・ヒノキの芯持材 (丸太材) ・樹皮を剥いただけで、表面の加工は不明である ・上部は腐朽し立ち腐れの柱と思われる ・下端は粗割のままで斧痕が残る (切断時のままか?)

















045



045(裏面)



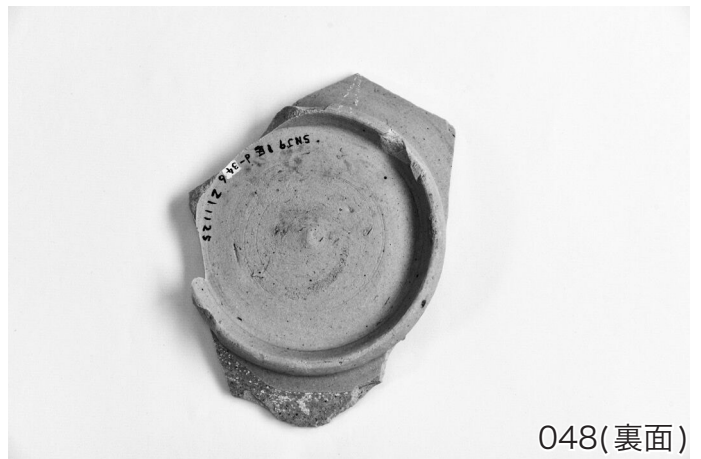
046



046(裏面)



048



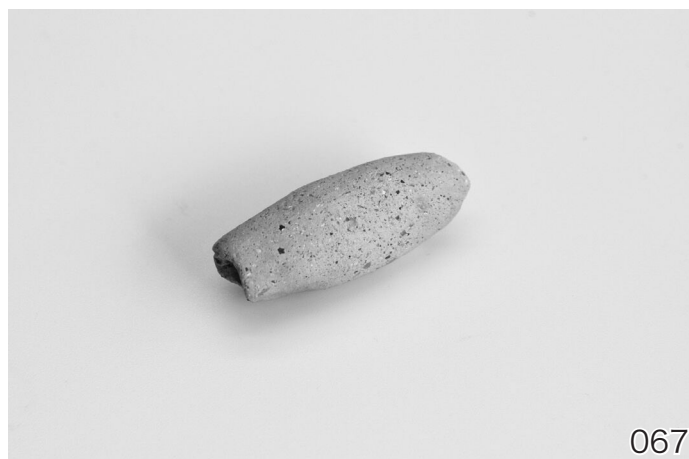
048(裏面)



049



050













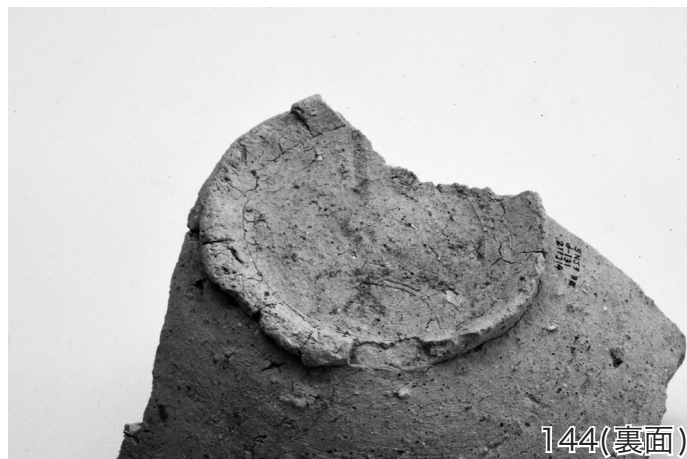


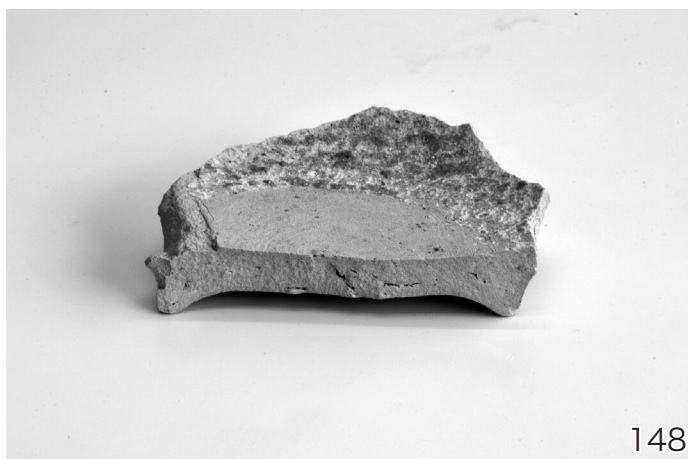














151



152



153



154



155



156

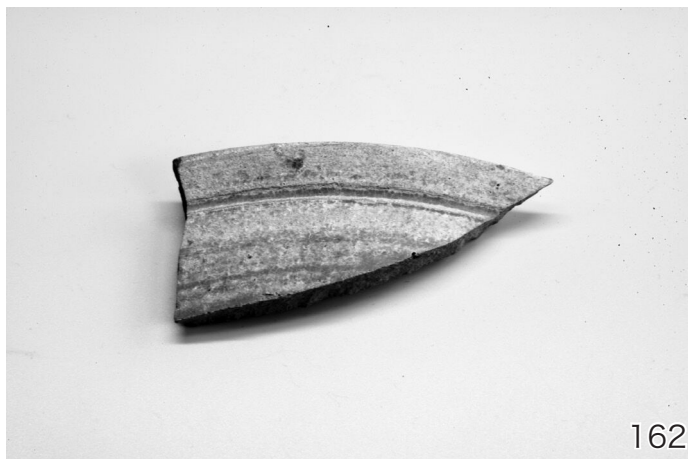
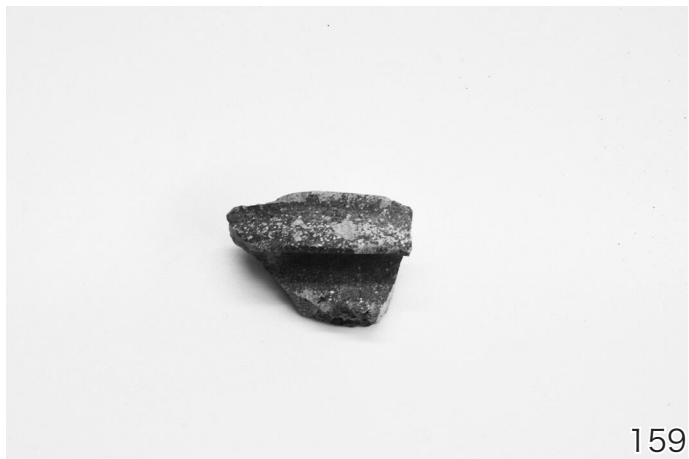


157



158







167



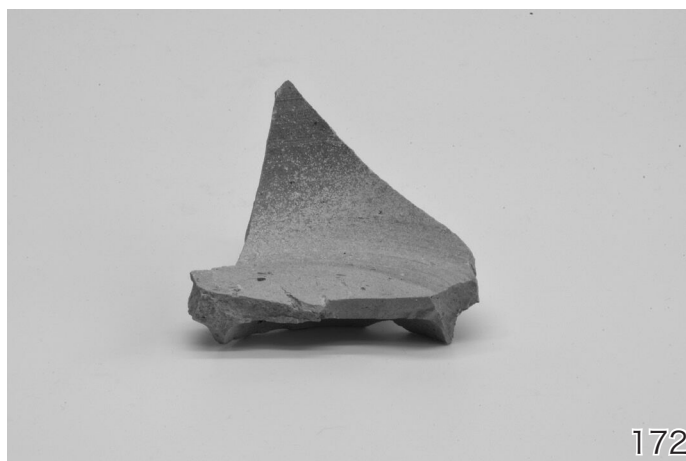
168



169



170



172



175



176



177



171



171(裏面)



173



173(裏面)



174



174(裏面)



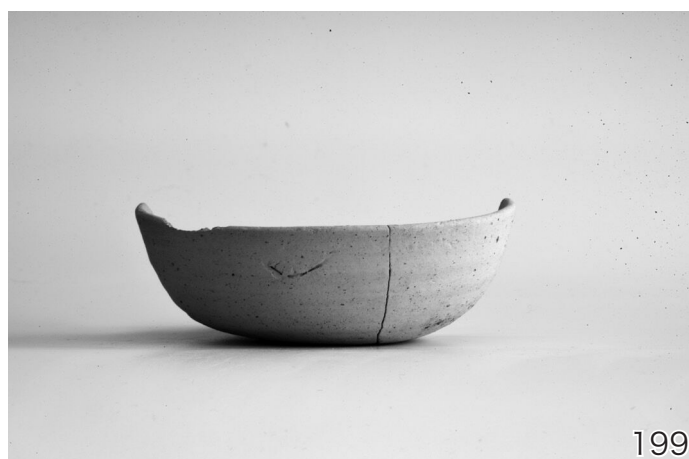
178



179



















報告書抄録

ふりがな	せんのもんじいせきだいくじはくつちようさほうこくしょ							
書名	千音寺遺跡第9次発掘調査報告書							
副書名								
編著者名	樋田泰之(編著)・林順・坂野俊哉・鬼頭剛 (以下パレオ・ラボ)伊藤茂・竹原弘展							
編集機関	株式会社四門名古屋支店							
所在地	〒453-0014 愛知県名古屋市中村区則武1丁目19番地13 KSビル Tel:052-451-5531							
発行機関	名古屋市緑政土木局道路建設部道路建設課 名古屋市教育委員会事務局生涯学習部文化財保護室							
所在地	〒460-8508 愛知県名古屋市中区三の丸三丁目1-1 Tel:052-972-3269(文化財保護室)							
発行年月日	2023年(令和5年)3月17日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °'"	東経 °'"	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
せんのもんじいせき 千音寺遺跡	1区 愛知県名古屋市 中川区富田町千音寺 平毛	23100	市:13-15 県:013015	35°09'58"	136°48'32"	2021年9月10日 ～11月30日	2,340	市道建設 工事
	2区 愛知県名古屋市 中川区富田町千音寺 無田居			35°09'51"	136°48'39"	2021年9月6日 ～9月28日	450	市道建設 工事
	3区 愛知県名古屋市 中川区富田町千音寺 上前田畔・猪ノ木			35°09'49"	136°48'22"	2021年10月21日 ～12月28日	1,390	市道建設 工事
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物	特記事項	
千音寺遺跡	散布地	古代～近世		道路跡、井戸、溝、 掘立柱建物		須恵器、土師器、 木製品、灰釉陶器、 中世陶器・土師器、 近世陶磁器	遺跡北部での広 範囲での調査。 古代～中世の集 落の縁辺が各地 区で確認された。	
要約	<p>千音寺遺跡の過去の調査は、包蔵地南部の調査が大半であり、主として①12世紀後半～13世紀の屋敷地②近世以降の水田及び鳥畑状遺構が確認されている。本調査1区南部の8次調査でも中近世の鳥畑状遺構が検出されていた。</p> <p>1区では古代から中世、一部においては近世にかけての遺構が確認された。調査区北部では7世紀前後の掘立柱建物の一部が検出された。9世紀までには自然堤防周辺の低地部でも耕作が開始されており、原始灰釉陶器の長頸瓶などが埋納された大井戸が1基営まれていた。10世紀頃には低地部に単独の曲物井戸1基のほか、自然堤防上にも側溝を備えた幅一間の道路が設けられた。12世紀から13世紀までには調査区南部でも大小の溝や素掘りの井戸が営まれており、耕作地が展開していた。自然堤防末端を大規模に掘削し築かれた土堤・溝や、単独の曲物井戸もみられた。近世以降は現代に至るまで調査区の大部分は水田として利用され続け、同時に南部では埋葬地としての利用もされていた。</p> <p>2区では13世紀の墓壇が確認され、伊勢鍋や山茶碗が副葬されていた。基本的には中世以降現代に至るまで、集落に隣接した耕作地や埋葬地であった。</p> <p>3区では8世紀代の須恵器が発見されたが遺構は見つかっていない。11世紀代には調査区西部～中部での活動の痕跡がみられ、井戸や溝、土坑などを検出した。13世紀～15世紀を通じて使われた溝からは中世～近世の多様な遺物が出土した。東部は中・近世から現代に至るまで耕作地として使われていた。</p>							

---

名古屋市中川区  
千音寺遺跡  
第9次発掘調査報告書

2023年(令和5年)3月1日 印刷

2023年(令和5年)3月17日 発行

編集 株式会社 四門 名古屋支店  
〒453-0014 名古屋市中村区則武1丁目19-13 KSビル  
Tel: 052-451-5531

発行 名古屋市緑政土木局道路建設部道路建設課  
名古屋市教育委員会事務局生涯学習部文化財保護室  
〒460-8508 愛知県名古屋市中区三の丸三丁目1-1  
Tel: 052-972-3269(文化財保護室)

印刷 西濃印刷 株式会社  
〒500-8074 岐阜県岐阜市七軒町15番地  
Tel: 058-263-4101

---